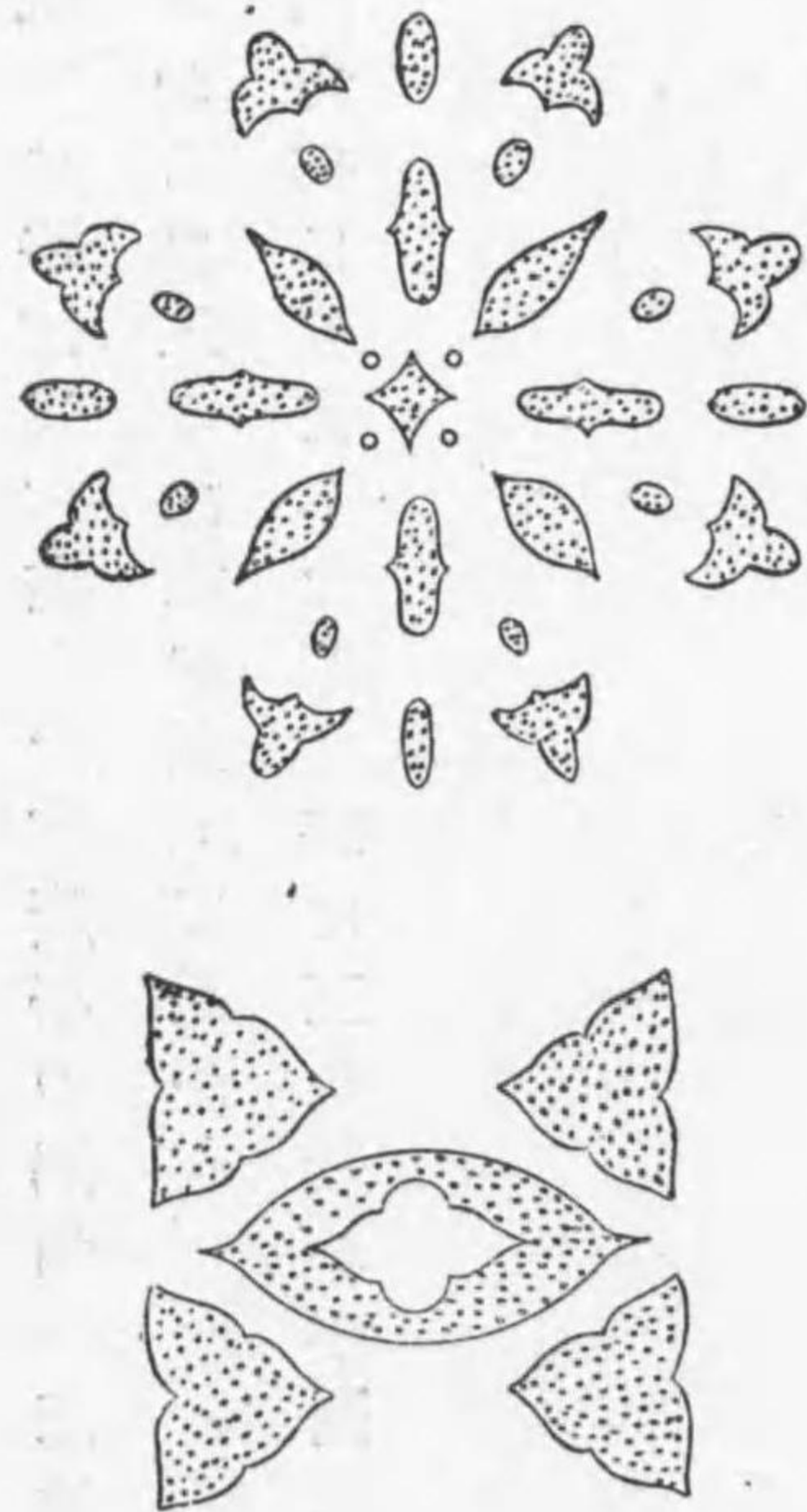


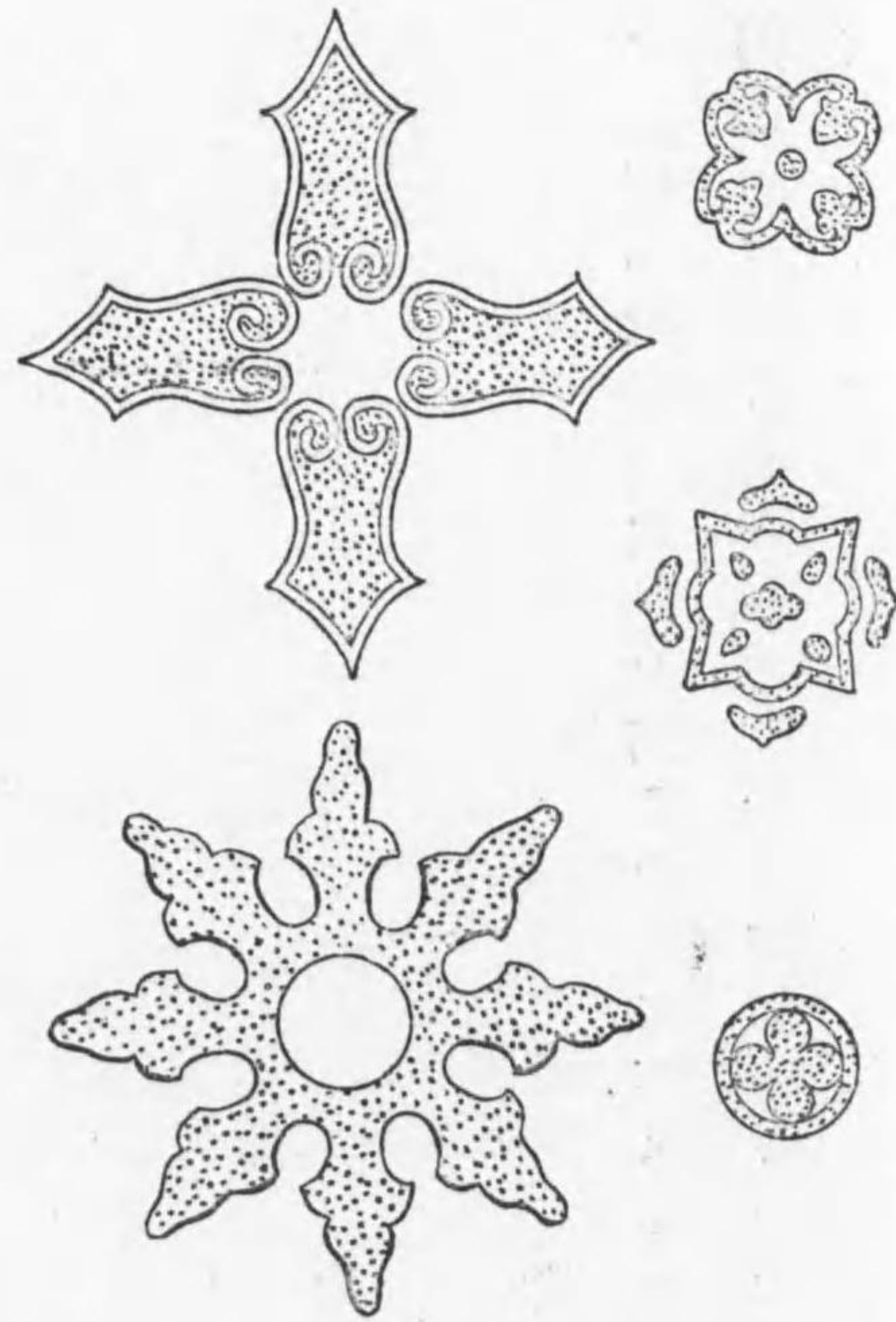
圖四十百第

の も の 式 植 點



圖三十百第

の も の 式 稱 對 射 放

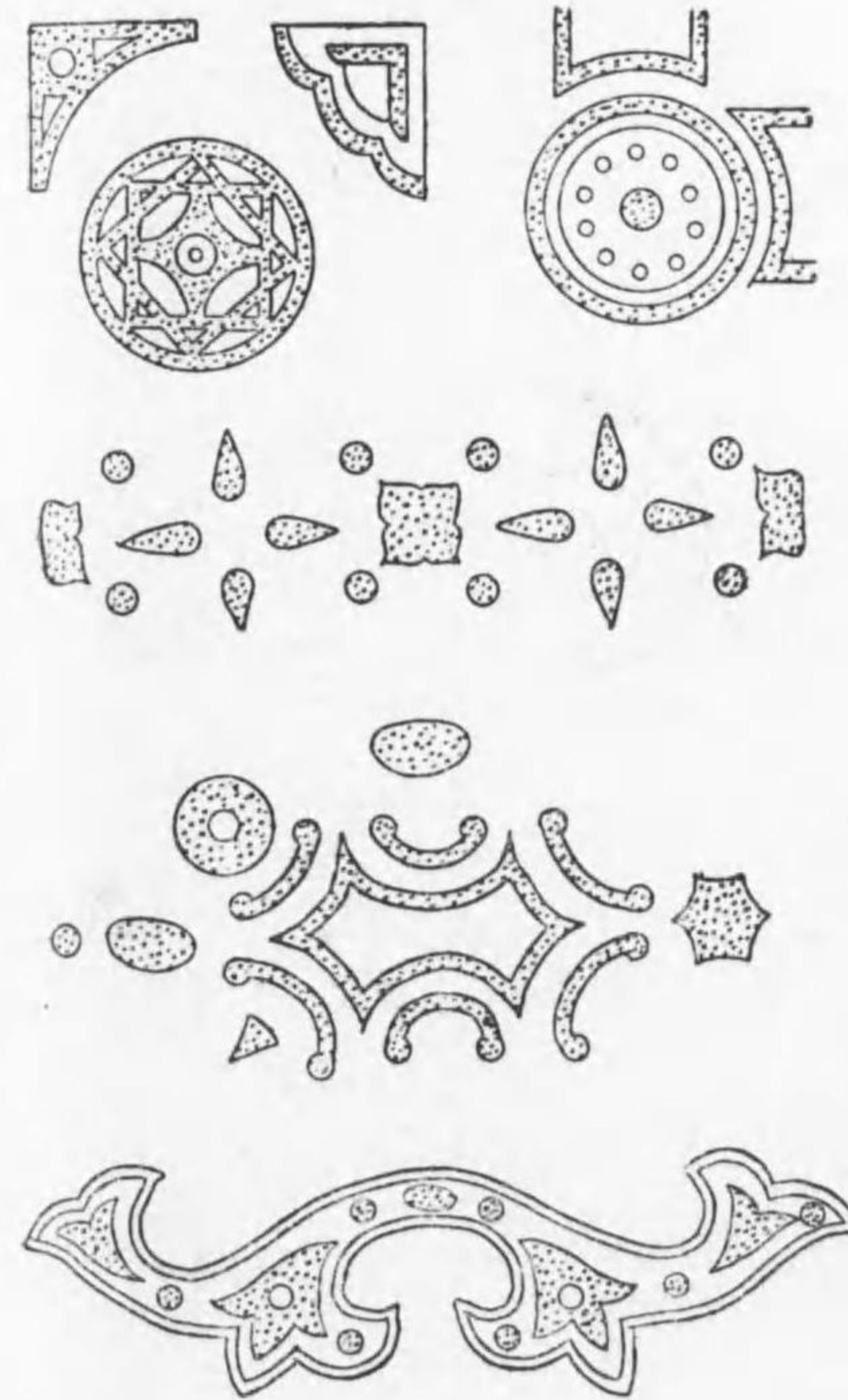


迷道が時々塞がつて行き詰りと爲つて居る爲め、又別の迷道を迎つて漸く目的を達する處に面白味のあるものである。而して之れが設置は可なりの面積を要するもので、最小三百坪から普通は一千坪位の土地が無ければ充分なる設備は爲し難く、形式には圓形と角形とがあつて、且つ周圍との調和を能く考へて拵ふ可きである。園地の中央に花壇を主眼として拵へらるる形式

圖一十百第
樣 模 草 唐

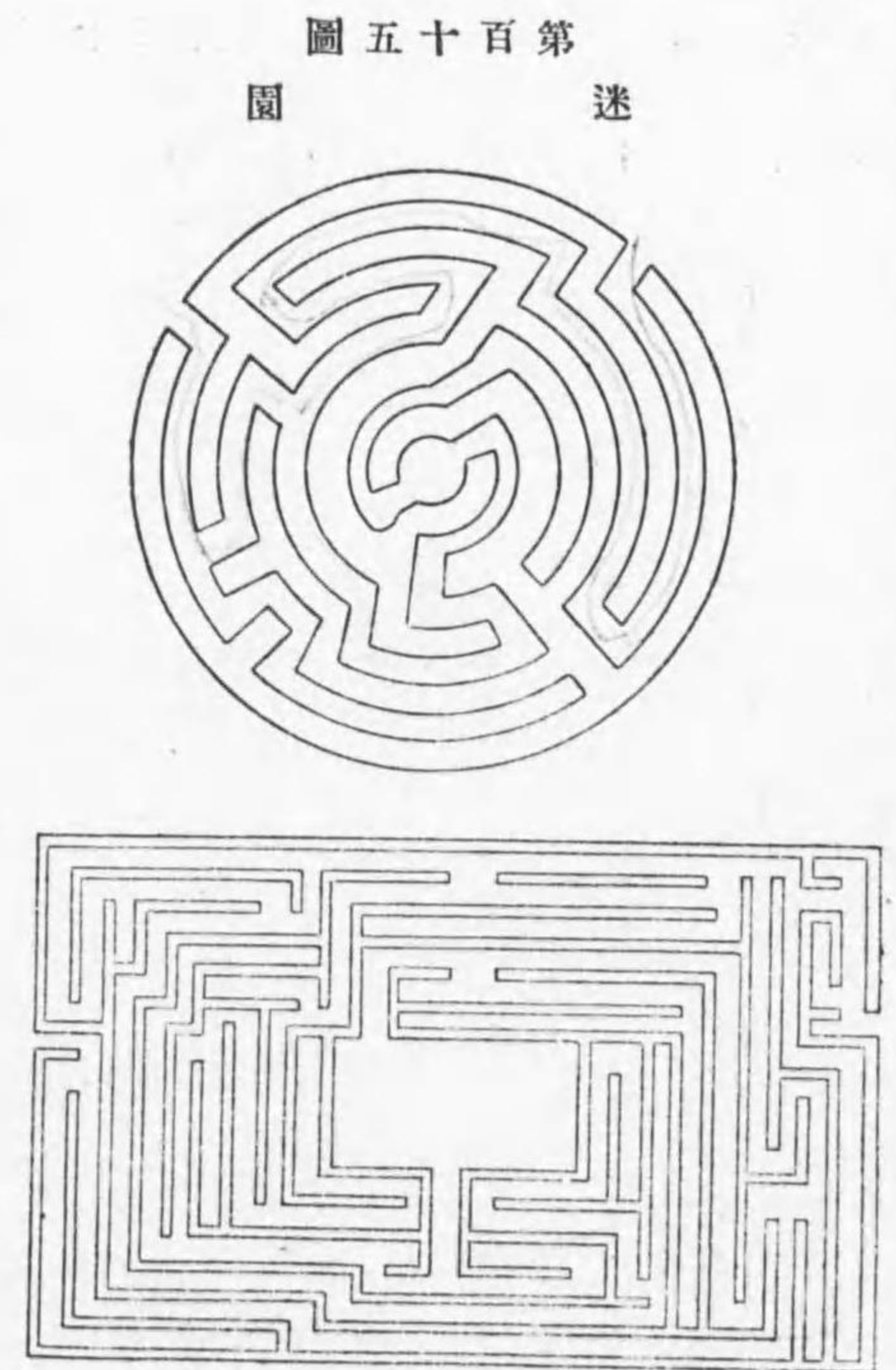


圖二十百第
案 圖 角 隅 び 及 樣 模 草 唐



等が拵へらるるものである。第百十五圖之れは迷園(Maze)と稱して西洋では十三世紀の頃から模様式花壇の一部分として設けられたものである。普通は高さ五尺位で幅二三尺位に正しく刈り込んだ生垣に依つて迷道が圍まれ、通路の幅は一間が普通で、一方の入口から迷道を旋廻して中央點に達し、夫れから再び他方の出口に赴くのであるが、其の途中で

の各様に就ては略ぼ述べ盡したが、廣場の隅角や芝地の邊域等は兎角等閑に附される事が多いから二三の注意を記して置かう。



一般に隅角部に適當した形は略ぼ三角状か半圓状を爲したものが宜敷く、斯様な場所に花床を設けて花卉を栽植する事は庭園美觀を整へる一助となるものである。而して其の取扱ひに簡單で容易なものは形の整つた灌木や喬木を植ゑ込む事で、草花ならば叢生と爲し、或は大鉢物を置き、小さい築山を設くる事等もある。然し之れを花壇を以て修飾しやうとするならば、心臟形の尖りを隅に向けて拵へるのが一番宜からう。次ぎは菱形の一角を隅に向けたものや扇形とか三角形のものである。而して楕形・橢圓・卵形等は餘り調和するもので無く、圓形は割合に悪くはない。

尙ほ數多の花床を一つの園地にて統一しやうとする場合には、案外調和が六ヶ敷くて、到底一つの法則で之れを律する事は出来兼ねるが、若し芝地の一隅に三つの花床を拵へやうとする場合には、中央のものを比較的大きく拵へて、他は何れも小さくすると調和を保ち、且つ其の兩側のものは長形にして、廣い縁を残す様にすると餘程宜敷いものである。

其の他草丈の高いものを中央及び稍々後方に用ひる様にし、左右の兩側と前方には矮性の草花を配植し、更に花壇の縁邊には低い灌木類か匍匐性の草本類を用ひて、境域の見極めを付け、花壇が廣い場合には其の間に適當な通路を設けるが宜敷からう。

若し栽植する材料が何れも低いもの許りである場合には、餘り單調になり易いので、之が調和を保ちて且つ變化を示す爲めに、強調材料として彫像や日時計を置き、さては花臺を設けて夫れに美花を植ゑ込むなどの手法を試みる事も亦面白いものである。

要するに餘り突飛な事柄を避けて、花壇の廣さや環境に相應して考ふる事が最も大切である。

第三編 育苗論

花卉の繁殖を圖り、之れを育成して花壇に其の材料の不足を生じない様に努め、常に花壇をして花卉を以て充填する事が出来、且つ如何なる花壇にも美觀を現出せしむるのには是れ育苗の良否に依るもので、更に進んでは花壇に於ける時々の手入れや種子の採收、さては夫等の貯藏法を攻究する事も亦花壇取扱者の必らず心得て置かねばならない事である。

第一章 花卉の繁殖

花卉の繁殖を行ふ方法としては、普通次の七方法がある。

- (一) 播種法 (Seedage)..... 種子を播くもの。
- (二) 球根法 (Bulbing)..... 球根を埋むるもの。
- (三) 挿木法 (Cuttage)..... 枝や葉を挿すもの。

- (四) 壓條法 (Layerage)..... 樹上又は地上にて枝から發根せしむるもの。
 - (五) 根分法 (Rootage)..... 根を分つもの。
 - (六) 株分法 (Stockage)..... 株を分つもの。
 - (七) 接木法 (Graftage)..... 砧木に接穂を接合するもの。
- 元來植物が子孫を繁殖せしむるには種子を以てするのが原則であるが、園藝植物殊に花卉類にありては種子に依りて繁殖する時は惡變を來たすものが尠くない。又、種子に依る時は開花に至る迄に多くの日數を要するものがある。此等のものは種子以外の球根とか葉枝或は根株等を用ひて無性的に營養繁殖法を行へば能く母本の性質を保有し、且つ比較的早く開花年期に達し得るもので、實際栽培の上に多大の便利を受くる事となるのである。尙ほ花の器官が極端に變化をなした八重咲等にありては、決して結實をしないものであるから、已むを得ず無性的の繁殖法に依らなければならぬ。以下各方法に就いて少しく述べて置かう。

第一節 播種法

種子を播下して苗を得る方法は之れを實生法とも稱へ、花卉類中では一二年生の

草本類は殆んど此の方法に依るもので、庭園用の樹木類にありては老樹的の風趣を具へしむる爲めのものか、或は挿木や接木等で容易に繁殖せしめ難いものに行はれて居る。

花卉の實生繁殖に於て第一に注意を要する事は種子の良いものを選び事が最も必要なる事で、品種の系統が正しく、土砂其の他不良の夾雑物の混入が無く、發芽が迅速に且つ一齊に行はるる様なもので、完熟して重く且つ大きい粒が一般から云つて望ましいものである。

而して其の精選を行ふ方法や種子の大小を選別するには篩を用ひ、更に種子の輕重を選別するには箕や颯扇等を用ひて風選を行ひ、或は淡水又は食鹽水に依る水選法を用ふる事もある。

愈々完全なりと思はるる種子を選別せられ、之れを播下するに當つて其の發芽を一層完全に爲さしめんが爲に、播種前に一晝夜若くは二晝夜冷水、微温湯或は稀アルカリ液等に浸漬する事があり、近來は又、ウスブルン(Uspulun)或はチランチン(Tilantin)等の種子消毒促成液に浸して播種する事も行はれ始めて來た。之れは主として種皮に蠟質や油分を含む事の多いものの油蠟分を鹼化せしめ、種皮の堅いものをして

水分の吸收作用を容易ならしめるのに効果が有り、又、播種期の遅れたものを用ひて便利なるものである。其の他種子の發芽を促進するには、胚を損傷しない様に注意して種皮の一部分を剥ぎ去る事がある。例へば牽牛花の種皮の硬厚なものに此の方法を行ふのである。然し此等の浸漬法を行つて播下するものは、養分の損失せらるる事多く、且つ播下後に於て乾燥が續くと却つて水分を奪はれて生育が遅れる事があるから注意を要するのである。

播種地は普通花壇以外の苗床に播下する事が多く、苗の相當の大きさになつてから花壇に移植を爲すのが本體である。夫れで床地は豫め深く耕起して能く土を碎き、瓦や礫等の混在しない様に篩で篩分け、整地して相當の基肥を與へ、表面は成る可く平坦に爲し、普通發生後の手入に便利の爲め、幅三四尺、長さ二間内外で、地面よりも五寸計り高く盛り上げた床地を作るが宜敷い。然し移植を壓ふものによりては(罌粟・虞美人草、ルビナス、花菱草、スウィートピー)等花園又は鉢に直接播付けと爲し、發芽後に適宜間引いて培養しなければならぬ。尤も苗の幼少の時に丁寧に移植を行へば相當に生育するものもある。

播鉢としては淺い方が宜敷く、方形或は圓形で、底に數多の排水孔のあるものを用ふ

るのである。播種の様式には撒播 (Broad Casting)・條播 (Drilling) 及び點播 (Dibbling) の

(イ) (ロ) (ハ)

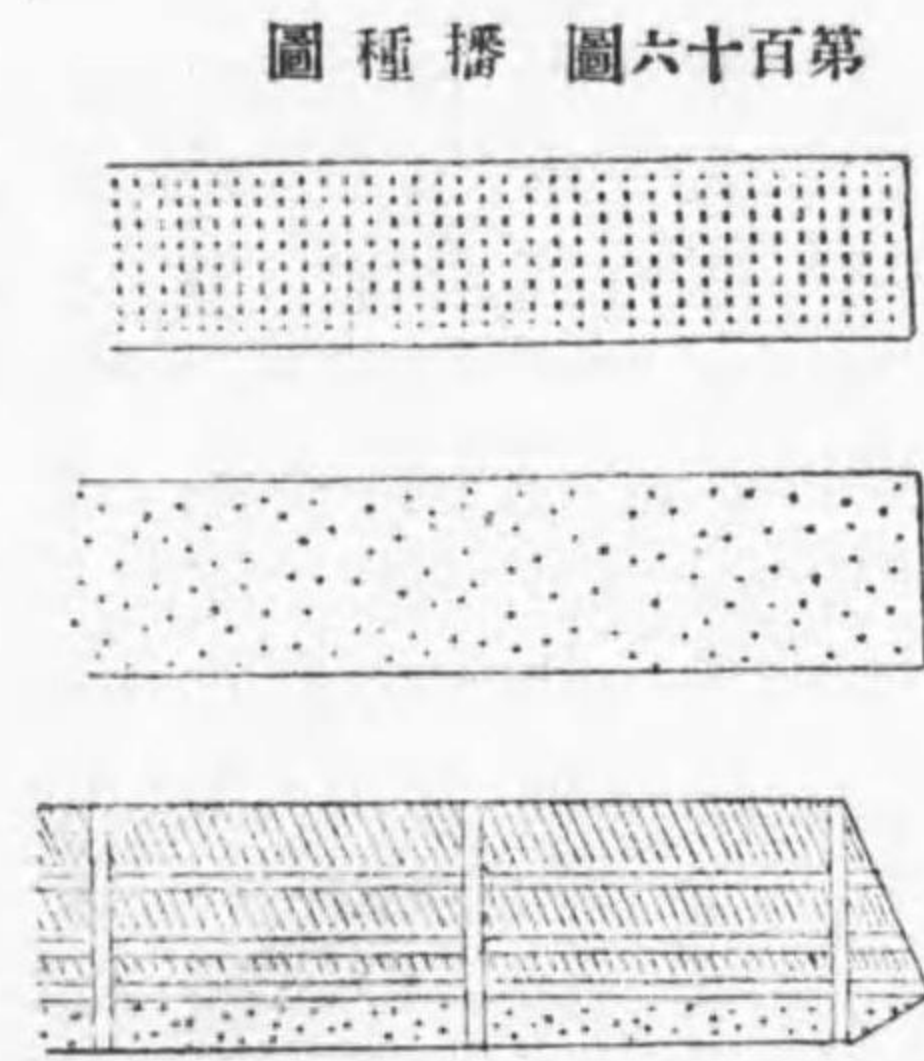


圖 種 播 圖 六 十 百 第
(ハ) 日覆 (ロ) 撒播 (イ) 條播

三方法がある。

(イ)撒播……床地一面に種子を撒布して、之れに覆土鎮壓灌水を行ふもので、小粒の種子にありては土を覆ふ事なく灌水を爲し、單に藁を覆ふて種子の乾燥を防ぐ事が多い。

(ロ)條播……平坦にした床面に一定の距離を置いて浅い溝を拵へ、之れに種子を直線に播

下し、薄く覆土して鎮壓を加へ、灌水を行ふて置くものである。而して微小なる種子にありては覆土せずに藁を以て覆ふて置く事、前同様である。

(ハ)點播……床面に一定の距離を置いて作條を拵へ、夫れに點々と更に一定の間隔を以て播下するもので、多くは粒の大きいものに行はるるのである。

尙ほ種子の播下すべき深さは土質氣候種子の大小に依つて異なるものであるが、大抵は種子の直径の二倍位で宜敷いと云はれ、種子の分量にありては移植期頃に於ける地面を覆ふ花卉の約三倍位にして置けば宜敷からうと思ふのである。

次に播種の時期に就て云へば、大抵は春又は秋で、何れも彼岸前後が其の適期である。而して一般に耐寒性の強い一二年生草は春又は秋でも宜敷いが、耐寒性の弱い一二年生草は春のみでなければ不可能である。尙ほ同一のものでも温度の異つた地方に於ては其の播種期の異なる事は承知して居て貰ひたい。

(一)春蒔種……

- 松葉牡丹・牽牛花・鳳仙花・ロベリア・サルピヤ・レセダ・雞冠花・白粉花・百日草・コスモス・ルカウサウ・向日葵・千日草・風船葛・クラキヤ・松蟲草・狸々草・ベチユニヤ・冬珊瑚・パイペナ・句菫・トレニヤ・ノウゼンハレン・金雞菊・天人菊・ハルシヤ菊・萬壽菊・霍香・薊・蛇の目菊・アロンソア・リナリヤ・千日紅・雁來紅・コリウス・日々草・トロア・フヒ花・亞麻花・煙草・大毛蕘・醉蝶花等
- (以上草本)、城・百日紅・安石榴・千兩萬兩・南天・正木・青木・石南花・梔子・合歡木・金雀花・梧桐・梅・檀・濱木斛・木瓜・海棠・紫陽花・紅萼・金絲梅・金絲桃・七變化・萩・櫻桃・梅・芙蓉・眞弓・衛矛等(以上木本)。

(二)秋蒔種……

- 金盞花・ホモフィラ・フロックス・ケシ・ヒナゲシ・デジール・ルピナス・小判草・パンシ
- 一・麥撫子・ストク・シレン・スワイート・ピー・反魂草・櫻草・立葵・カミツレ・貝細工・矢車草・小町草・ビスカリヤ・ニゲラ・千鳥草・ミムラス・花菱草・勿忘草・レセダ・ロベリア・金雞菊・ハルシヤ菊・天人菊等(以上草本)、山茱萸・泰山木・紫木蘭・白木蘭・辛夷・黃心樹・花蘇方・藤・梅・擬山茶・茶梅・茶・白雲木・棕櫚等(以上木本)。

播種後に於ける手入れとしては灌水除草及び間引であるが、尙ほ夏季に日光の直射して土地の乾燥の甚だしい場合には日覆を施す必要があつて、材料としては藁を

編んだもの、竹枝で編んだ筥状のもの、葎割竹、篠竹等で造つた籠を苗床の上に高さ二



第 百 七 十 七 号 採 種 圖

し苗の完全なる發育を圖るのである。

尺位の棚を作つて用ふるのである。是等のものは一般に薄い方が宜敷く、幾分光線の透過した方が植物の生育には効果のあるものである。次に降霜期にありては霜覆の必要があつて、大抵十一月から翌年の三月迄の間行ふのである。之れには先づ高さ五寸乃至一尺五寸の所に丈夫な木竹で棚を作り其の上に刈取つた茅の類を並べ、更に其の上に壓への木竹を結び付けて置くが宜敷い。或は葎、葎で編んだものを以て、北を低く南を高くした傾斜の支柱に覆ふて置く事もある。斯様にして越年せしめた霜覆は翌春三月初めには取除くもので、草花類は漸次花壇に植ゑ出す事となり、苗木類にありては床替へを行つて根の整理を爲

苗床温床、冷床又は鉢箱で仕立てられた苗は適當の大きさになつたらば園地に植ゑ出す必要がある。移植は出來得る丈け丁寧に行ふ可きで、苗の根を傷めない様に移植鋤等を用ひて廣く取り、充分に土を附けて置くが安全である。

之れを行ふ時期は無風の降雨前とか曇天とかが宜敷く、風の吹く日や雨の降つて居る間は適當で無い。又、一日の中では朝よりも夕方が宜敷い。

植ゑ付けも成る可く丁寧にし、花壇の配置を能く考へ、根元の土を適當に壓し付け置き、作業が終つたらば直ちに灌水を爲し置く可きである。尙ほ日光の直射と水分の發散量を減する爲めに葎簣で日覆を暫く行ふ事があり、甚だしく照り付くる場合には根元に葎や刈草等を敷く事もある。

第二節 球根法

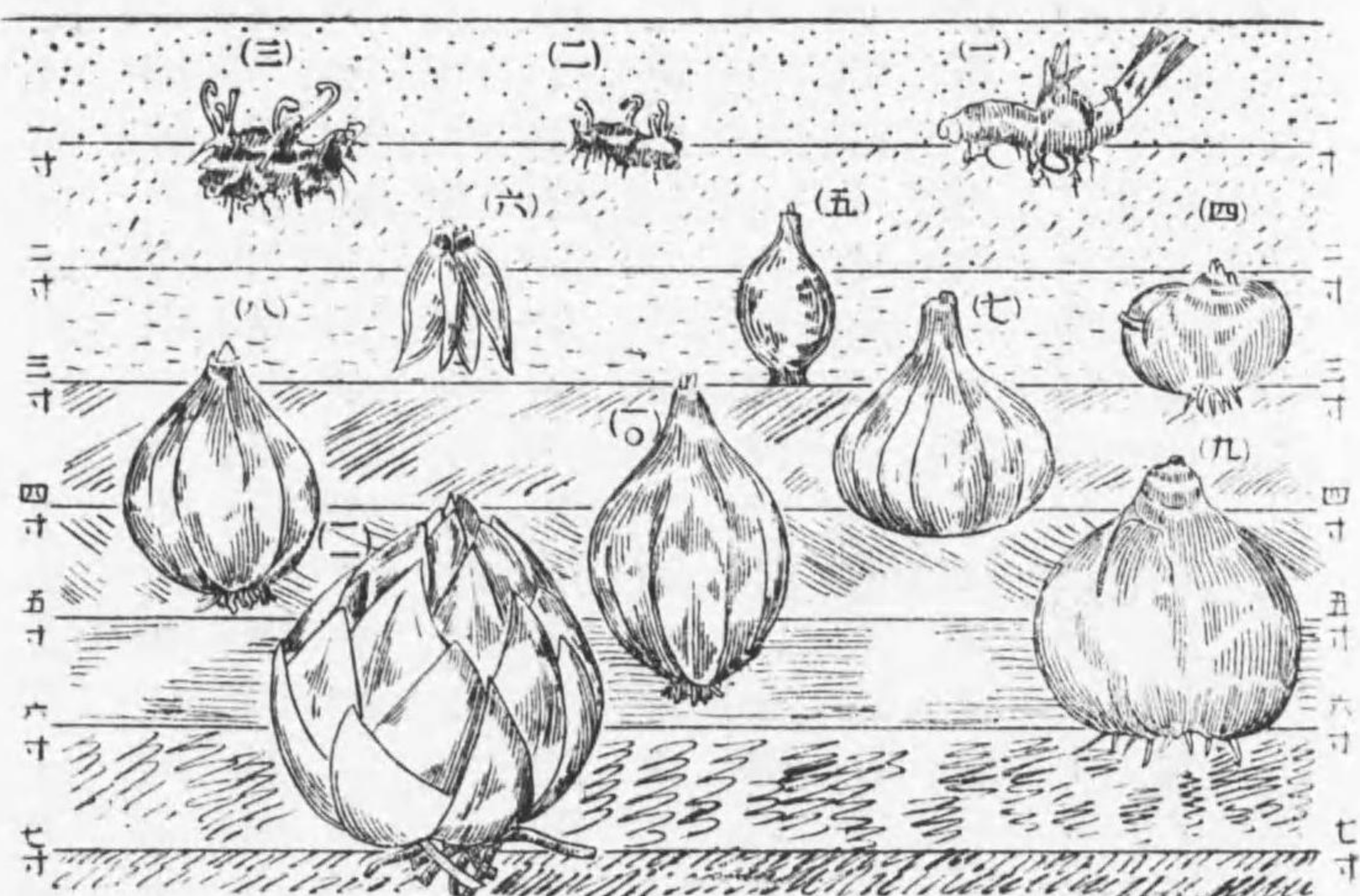
球根と此處で稱するものは、何れも多肉の地下莖或は地下根を有するものの總稱で、種子に依つて繁殖するよりも球根に依る方が簡便であり品種の系統を能く保ちて、開花に至る年限も亦早い爲め、大抵は球根を埋め込んで其の生育を圖るもののみである。嚴密な意味から云へば一種の分株法とも云へるが、一般の分株法とは其の

取扱ひが多少異なるので特別に球根を形成するもの丈け纏めて述ぶる事としたのである。

- (イ)鱗莖 (Bulb)..... 水仙・ヒヤシンス・チューリップ・アマリリス・タマスダン・ギボウシ・スノードロップ・百合・トリテリヤム・スカリシラー等
- (ロ)球莖 (Corm)..... サフラン・グラデヲラス・フリージヤ・イキシヤ・バビアナ・モントブレチャトトリトニヤ等
- (ハ)塊莖 (Tuber)..... 球根ベゴニヤ・シクラメン・アネモネ・ラナンキュラス・カラチュエム等
- (ニ)根莖 (Rhizome)..... イリス・スズラン等
- (ホ)塊莖 (Tuberous Root)..... ダーリヤ・カンナ等

球根類は花壇に直接に埋め込むのが普通で、土質は通例肥沃で排水の良好な砂質壤土又は壤土が宜敷く、植穴は種類に依つて異なるが、小球にありては六寸、大球に於ては一尺位の深さに掘り、之れに堆肥か厩肥を入れ、更に少量一球に付一匁位の割合の過燐酸石灰骨粉灰等を交へて置くと莖や花梗が丈夫である。其の上に少しく土を置き、健全なる球根を叮嚀に其の上に置いて、更に土を覆ふて置き、寒い場合には其の

さ 深 の 込 植 類 根 球 圖 八 十 百 第



- 一、イリス
- 二、ウインターアコナイト
- 三、アネモネ
- 四、クロカス
- 五、スノードロップ
- 六、ラナンキュラス
- 七、グラヂナラス
- 八、チユーリップ
- 九、ヒヤシンス
- 一〇、水仙
- 一一、百合

上に落葉や藁等を覆ふことがある。而して少しく芽が出初めたらば、油粕や魚肥等を能く腐熟せしめ、稀薄にしたものを補肥として時々與へるのである。球根植付けの深さは發育に大いに關係するもので、深過ぎれば容易に地上に抽出することが出來難く、又淺過ぎると水分が不足し、或は秋植のもので寒害を被むる事が往々ある。大體から云ふと球根の種類、大小、土質等にも依るが、球根植付けの深さは球の頂から地面迄の距離を球の高さの約二倍とし

たらば宜敷からう。而して粘重土では淺く、砂壤土では稍々深い位に加減すれば尙ほ宜敷いのである。

次に植付の時期であるが、春に開花を爲すものは大抵前年の秋十月頃に植付け、夏秋の候に開花を見るものは春四月頃植付くのが普通である。然し寒地では秋植のものを翌春に行ふ事が往々ある。

又鉢に球根類を植ゑ込んで、夫れを花壇の美觀を呈せしむる爲めに用ふる事があ
るが、鉢は素焼のものが水分の滲透作用を爲して宜敷く、之れに培養土を入れて球根
類を埋め込むのである。鉢の大きさと球根との關係は小球にありては五寸鉢に三個、
普通の中球であれば四寸鉢に一個、六寸鉢に三個位の程度で宜敷く、百合の様な大球
にありては八寸鉢に一個植ゑ込むのが適當である。

尙ほ廣い芝生の木蔭等に球根類を單獨に植ゑ込む事があるが、之れには單に棒で
芝生の中に穴を明け、夫れに「クローカス」「水仙」「チューリップ」「イリス」等を植ゑ込めば
宜敷いのである。その他花壇で無くて室内で樂む爲めに水栽法と稱して水盤(水仙
や水瓶「チューリップ」「ヒヤシンス」等)に植ゑ込んで育成する事もある。

次に参考の爲めに主なる球根類の植付時期を示して置かう。

(一)春植球根……………アマリリス・玉簾・モントラゼヤ・トリトマ・ギボウシ・アガパンサス・デー
リヤ・カンナ・ゲロキシニヤ・アキメネス・チューペロース・グラゲナラス・チグリゲヤ・フリージヤ
等

(二)秋植球根……………アネモネ・ラナンキエラス・水仙・玉簾・スノードロップ・オキザリス・クロ
カス・イキシヤ・トリテリヤ・ヒヤシンス・ムスカリ・シラー・チューリップ・百合等

球根類を園地に植付けた後は別に手入れを要せず、發芽して少しく延び初めたら
ば、油粕や魚肥等を能く腐熟せしめ、水で稀薄にしたものを補肥としてときどき與へ
れば宜敷く、漸く開花するに至つたらば最早施肥を行ふ事無く、除草と害蟲に注意す
る位にて、充分に花の美觀を賞讃す可きである。既に開花し終つたらば春開花のも
のは七月頃に至つて、莖葉の枯凋して球根の能く成熟してから掘り上げて、暫く風通
しの良好な場所で二三日蔭干を爲して後貯藏するのが普通で、又夏秋の候に開花す
るものは晩秋降霜前に掘り上げて、前同様に乾燥した後貯藏す可きであるが、ダ
リヤにありては一度霜に遭はした後に掘り上げる方が球根の締りがあつて良好で
ある。

球根を貯藏するには箱に乾燥した砂を入れ、其の中に埋めて屋内に貯へるのが普
通で、其の他縁の下に埋め込み、或は高燥なる地に埋藏して防水、防寒の設備を爲して

置く事もある。球根類中別に掘り上げずとも「チューリップ」・「ヒヤシンス」・水仙等にありては開花を爲すのであるが、順次花形が小さくなる傾向があるので、毎年掘り上げて丁寧なる取扱ひを爲した方が成績良好である。

第三節 挿木法

之れは扞挿法又は遷條法とも稱へ、枝其他の部分を親木から切取つて土中に挿し、發根せしめて苗と爲す方法で、種子の出來難いものや變化し易いものを保存繁殖するに宜敷く、又矮性に形よく育てる爲めに應用せらる。而して草花類にありては宿根草のものに多く行はれ、多くの庭木類に應用せらるる事が甚だ廣く、一般に疵口の快癒力の強いものが宜敷いのである。

花卉類中で挿木繁殖に適當なものとしては

- (イ)球根類……………「グーリヤ」・「ペゴニヤ」
- (ロ)宿根草……………「ハマギク」・「菊」・「カーネーション」・「シヨングレマチス」・「ストツク」・「セラニウム」・「ペチュニヤ」
「バーベナ」・「時計草」・「キウウフエア」・「釣浮草」・「松葉菊」
- (ハ)一二年草……………「白妙菊」・「ミムラス」・「イレシネ」
- (ニ)一年草……………「タゲ」・「テス」・「コスモス」・「アゲラタム」・「アルターナンセラ」・「コリウス」・「サルピヤ」・「松葉

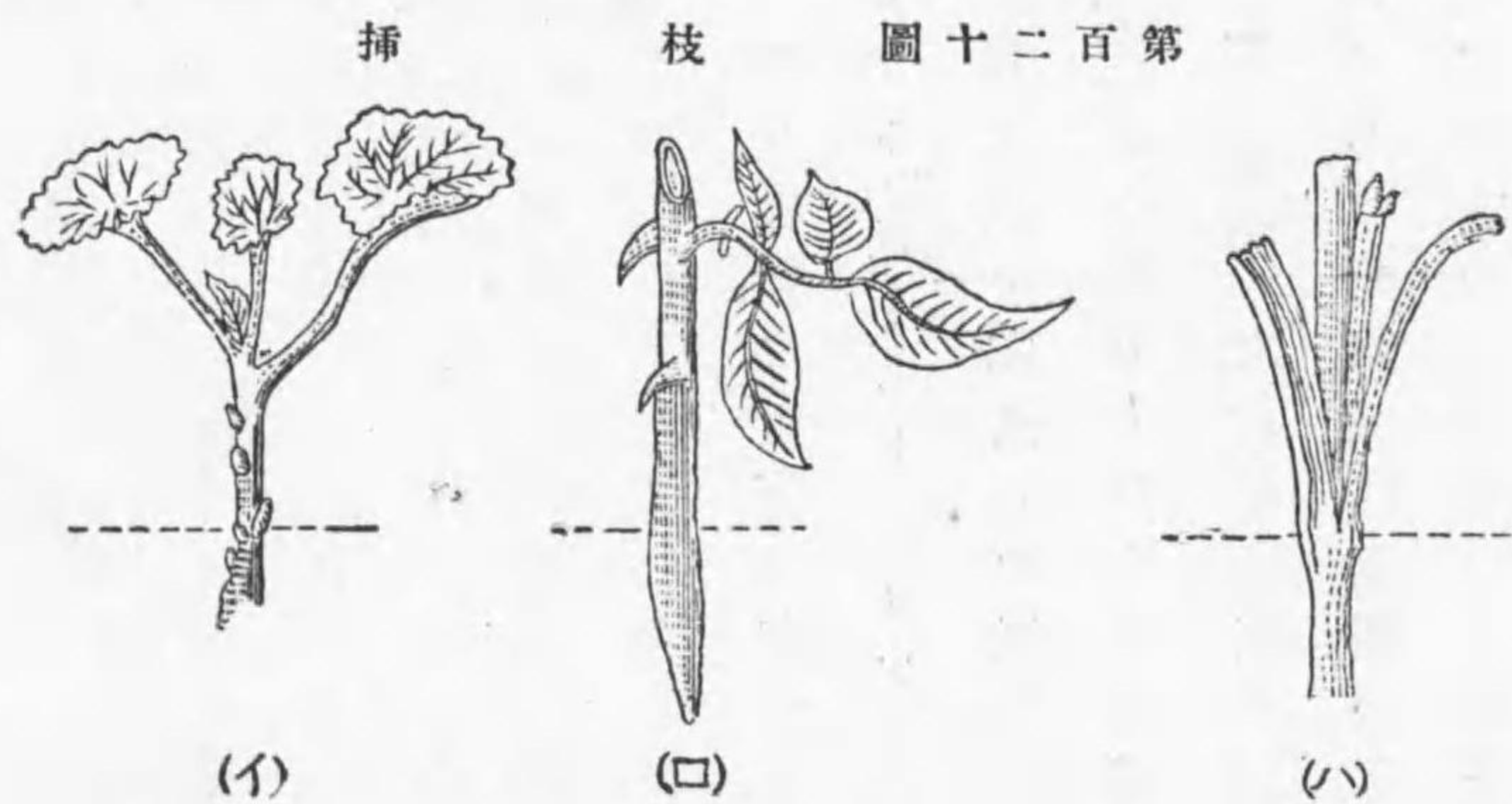
牡丹・カランド・リニヤ

- (ホ)花木類……………「沈丁花」・「山茶」・「茶梅」・「青木」・「躑躅」・「南天」・「木犀」・「梔子」・「柳」・「櫻」・「海棠」・「桃」・「梅」・「雪柳」・「連翹」・「棠」・「檀」・「躑躅」・「薔薇」・「萩」・「栢」・「榴」・「夾竹桃」・「白丁花」・「紫陽花」・「金糸雀」・「葛」・「忍冬」

等である。

挿木の適當な時期は早春發芽前に多く行はるのであるが、新芽の漸く固まつた入梅の頃や、成長の稍々鈍ぶつて來た秋九月頃にも亦之れを行ふことがある。普通松葉菊・菊・美女櫻・「マーガレット」等は早春に行ひ、「グーリヤ」・「コスモス」・「セラニウム」・「アルターナンセラ」等は春から夏にかけて行はれ、落葉の花木は三月中下旬頃が宜敷く、常緑樹にありては梅雨期に多く行はれ、薔薇類は春と秋とに挿して宜敷く、柳や白丁花に於ては殆んど春から秋の間ならば時を選ばないのである。挿穂は施業前に切り採るのが普通で、通例一二寸から一尺位迄の長さで、大抵節の部に於て切るが根の發生良好である。然し落葉樹の或ものにあつては前年の秋に切り採つて束と爲し、濕地に挿して置き、翌春に本挿を行ふ事もある。

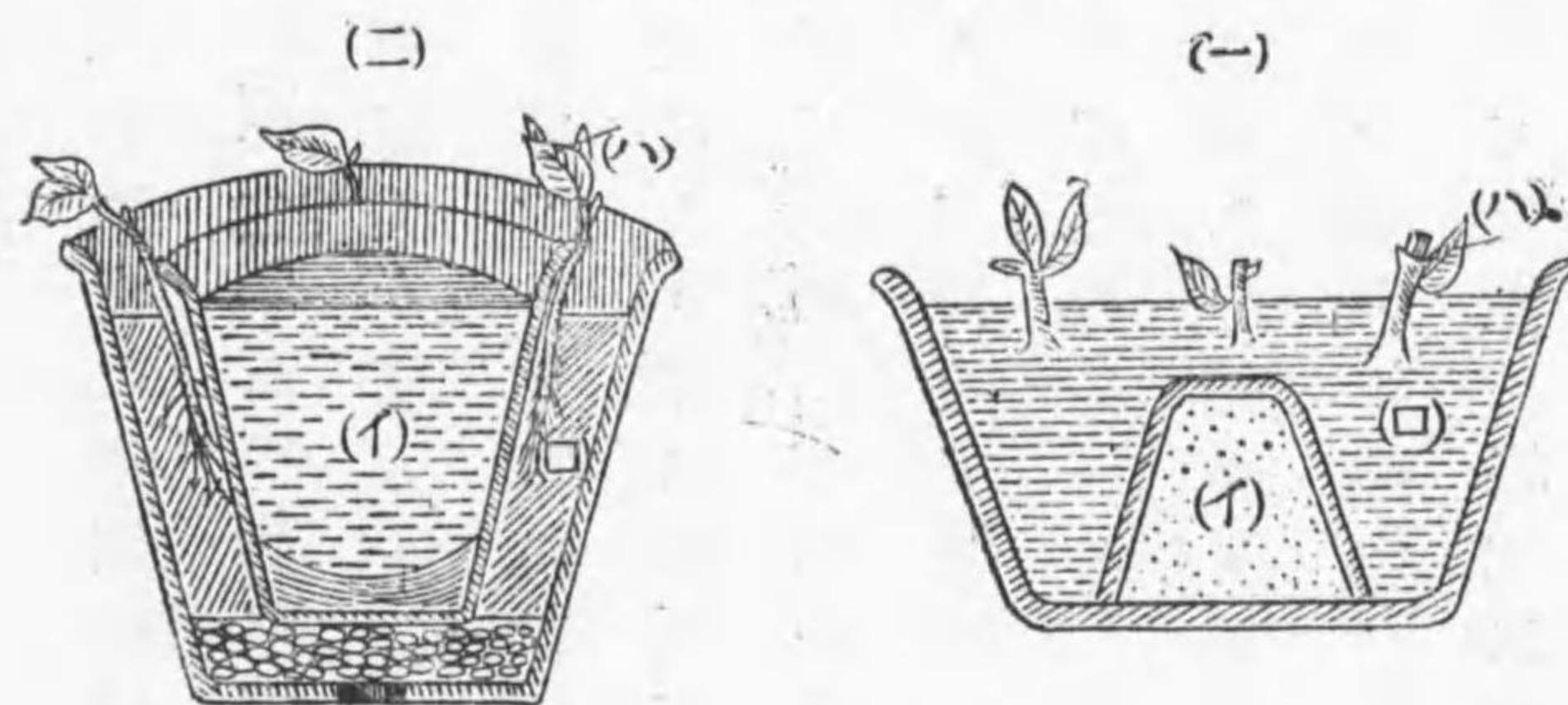
挿穂を地中に挿込むには豫め棒で穴を土中に明け、夫れに挿入する方が樹皮を傷けずして宜敷く、根元は充分に壓へ付け置く可きである。挿木を行ふ場所の上から



圖十二百第
 (イ) ヌヨシーネーカ (ハ)
 (ロ) ラバ (ロ)
 (ハ) ムウニラセ (イ)

一枝挿 之れは最も普通に用ひらるる方法で、通例前年生又は今年生の枝を挿穂として用ひ、之れを一二寸乃至一尺許りの長さに切り、各穂には少くとも二芽を附する様にする。一般には砂質壤土の床地に挿穂の下部を斜に廣く削り、其裏面を少しく切り返して、之れを床地に棒で穴を明けて挿し込み、叮嚀に根元を壓へ付けて置くのである。玉挿(或は箇挿とも云ふ)と稱して發根の困難なるもの、殊に材質の頗る堅いもの、例へば山茶^{ツバキ}、茶梅^{サザンクワ}、矮檜^{ササ}、葉等を挿すのに應用せらるるものがある。其の方法は赤粘土を水で練りて指頭大の塊と爲し、之れに本年生新梢の下に前年生の枝を一寸許り付けた挿枝を挿入して、更に之れを地中に埋むるとき時は、毛細管引力に依りて水分の吸収力が大となり、活着が容易である。時期は梅雨の頃が最も適して居る。又、赤土玉を用

法挿鉢重二 圖九十百第



(一) ニューマン式
 (ハ)(ロ)(イ) 幼挿中間式
 苗床鉢鉢
 (二) フォルシス式
 (ハ)(ロ)(イ) 幼挿中間式
 苗床鉢鉢

て二重鉢の挿木器や加温装置を施した挿木床で、時期を選ばず行ふ事もある。次に挿穂は普通莖枝を用ふるのが常であるが、或種類にありては葉や根を用ふる事も亦尠くない。今夫等の方法に就て少しく述べて見よう。

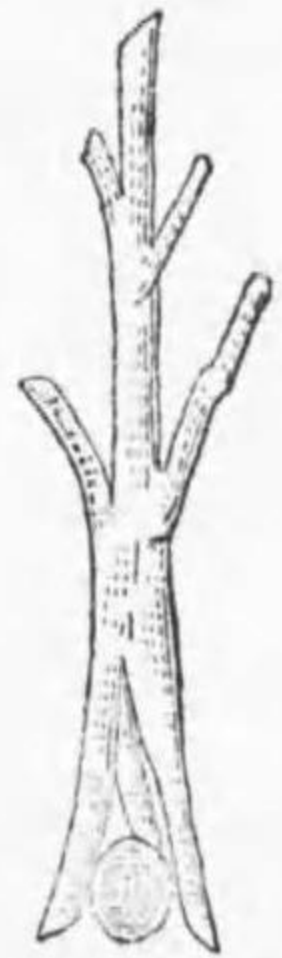
普通に床挿、鉢挿、畑挿、垣挿等があるが、挿木床は少し日蔭の地が宜敷く、尙ほ挿木を行つて後、暫くは日覆を必要とし、土質は砂質の勝つた壤土が最も適して居る。夫れで床地でも鉢土でも砂交りの土を用ふ可きで、殊に鉢は淺くて底に數個の小孔を有するものが宜敷く、又往々淺い箱を用ふる事もある。

其の他簡單なる挿方としては畑地に直ちに挿し、或は垣根に挿して將來生垣に利用する事もある。尙ほ特別なる装置としてはフォルシス式鉢挿法 (Forsyth's Pot-Cutting) 及びニューマン式鉢挿法 (Newman's Pot-Cutting) と

圖一十二百第
插 玉



圖二十二百第
插 割

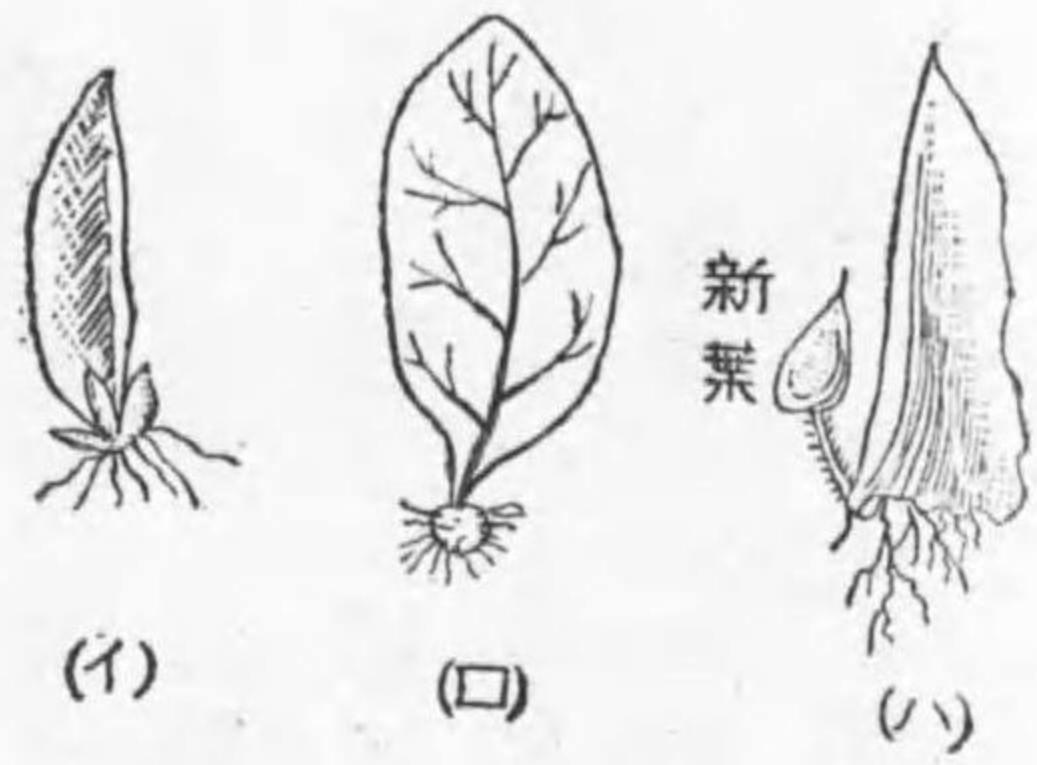


ふる代りに芋^〇挿と稱して芋の中に挿穂の下部を挿し込んで、之れを床地に埋め植ゑるものもある。其の他挾挿(又は割挿)とも云ふと稱して樹脂の多くて發根し難いものに行ふ方法があるが、之れは挿穂の下部を利刀で平滑に削り、基部を長さ五六分許り二つ割、或は四つ割と爲し、其の割目に小さい赤粘土球を挟み床地に植ゑ込むのである。

尙ほ柔軟なる莖を有する花卉類にありては、例へば菊「サルビヤ」紋天竺葵「マーガレット」カーネーション「フクシヤ」アルターナンセラ「ダーリヤ」等の様なものを挿すには、稍々成熟した嫩莖の餘り固くならないものを莖挿と爲す事が多く、挿莖には二三芽を有せしむる様に切る可きである。

二葉挿 之れは挿穂として葉を用ふるもので、概して多肉の葉を有する花卉に應用せられ、葉縁又は葉脈から不定芽を發生せしむる方法である。一般に木質化して居ないものであるから、取扱ひを丁寧にする必要があり、大抵は底に排水孔のある木框か鉢に砂土を入れ、之れに葉を挿し込んで乾かない程度に床地を保つて置けば、葉

插 葉 圖三十二百第



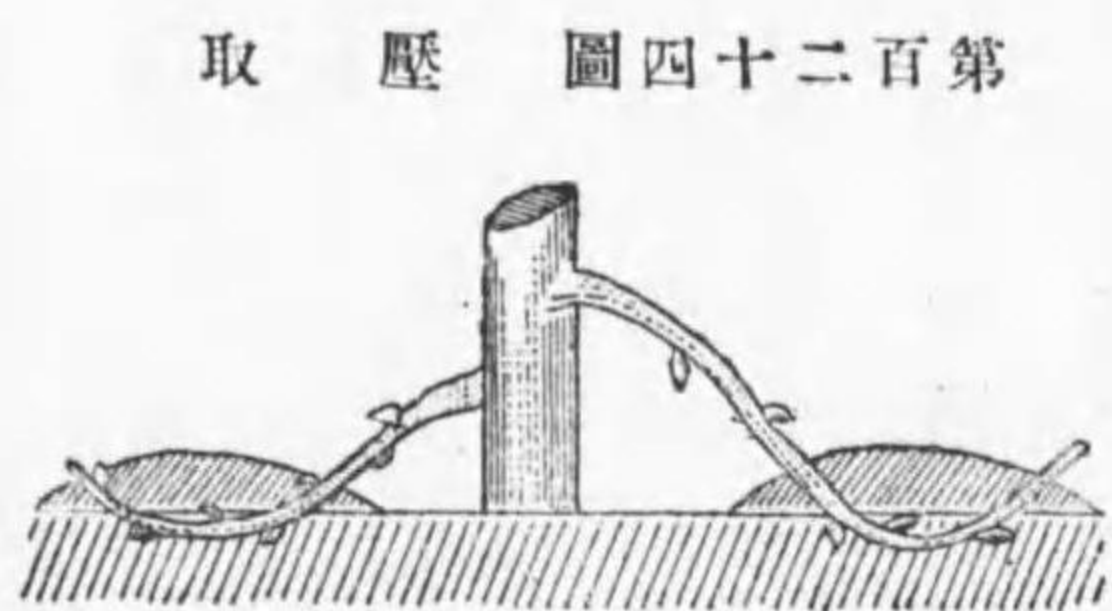
(イ) ベゴニア
(ロ) グロキシニヤ
(ハ) 百合のスケール

脈から不定芽を生ずるものである。菊ベゴニア千歳蘭グロキシニヤ等に多く用ひらるるのである。又、百合にありては地下葉となれるスケールを地中に埋めて、之れから發芽發根を圖る事が多い。
三 根挿 之れは根から盛んに枝梢を生ずる花卉に適用せらるるもので、ロベリヤ、海棠、薔薇等の根を數寸に切り、上部を僅かに地上に顯はして土中に埋め込むのである。

設備をした屋内で挿したものは灌水丈の注意で宜敷いが、露地の床地に挿したものは乾燥を防ぐ爲めに、粗殼、粗藁、木葉等を根元に薄く敷いて置くが宜敷く、夏は日光の透射を防ぐ爲めに、日除けを行ひ、又冬季の防寒は十一月頃から行ふもので、略ぼ播種法の場合と同様で宜敷く、活着したものは床替へを行ふて根と枝との整理を爲すと共に、今迄よりも稍々広い床地に植ゑ付けて相當の保護を加へるか、或は成木したものとて夫々目的の用に供する事もある。

第四節 壓條法

之れは伏條法又は取木法とも稱へ、種子を結ぶ事の尠いものや、挿木の困難なものに行ふ方法で、充分に根を生ずる迄は母體から其の營養を受くるので挿木よりも安



取 壓 圖 四 十 二 百 第

全であり、殆んど總べての潤葉樹に應用が出来、針葉樹でも松以外のものには行はるるものがある。而して壓取、高取、筒取、伏取の四法があつて、何れも中春から初夏の頃に行ふのが普通である。

一 壓取 之れは普通に行はるるもので、根元から發生する枝條を振曲して地上に伏せ、發根せしめんとする部分を利刀で二三個處疵を附け、其の上に肥土を覆ひ、且つ枝の彈上らない様に小石若くは又木等を以て押へて置く。而して其の傷口から發根するのを待つて親木から切離し、獨立の樹木として他に移植を爲すのである。

である。梅、木蘭、木犀、柘榴、金縷梅、槭、夾竹桃等に多く之れを見るのである。

二 高取 之れは又、卷取とも稱へ、容易に變曲し難い枝、又は高處にあつて地中に

導き難い場合に枝幹上に施すもので、初夏の候に前年度に生じた枝幹の適當の部分

圖 五 十 二 百 第
取 高



を一寸乃至一寸五分の幅に周圍の皮と肉(少しく)とを剥ぎ、赤土の塊を着け、其上を水苔で包み、更に繩で能く結束して置くのである。其の後はときどき灌水を行ひ、常に濕氣を保たしめて置くときは、大凡一ヶ月位で白根を生ずるに至る。之れを其の直ぐ下から切離し、

畑地か鉢に植ゑ込んで生育せしむるのである。稍々太いものにあつては一度に切離さず、一週間置位に少し宛切り、二、三回に互つて切離すが宜敷い。柘榴、槭、夾竹桃に多く此の方法が行はれる。

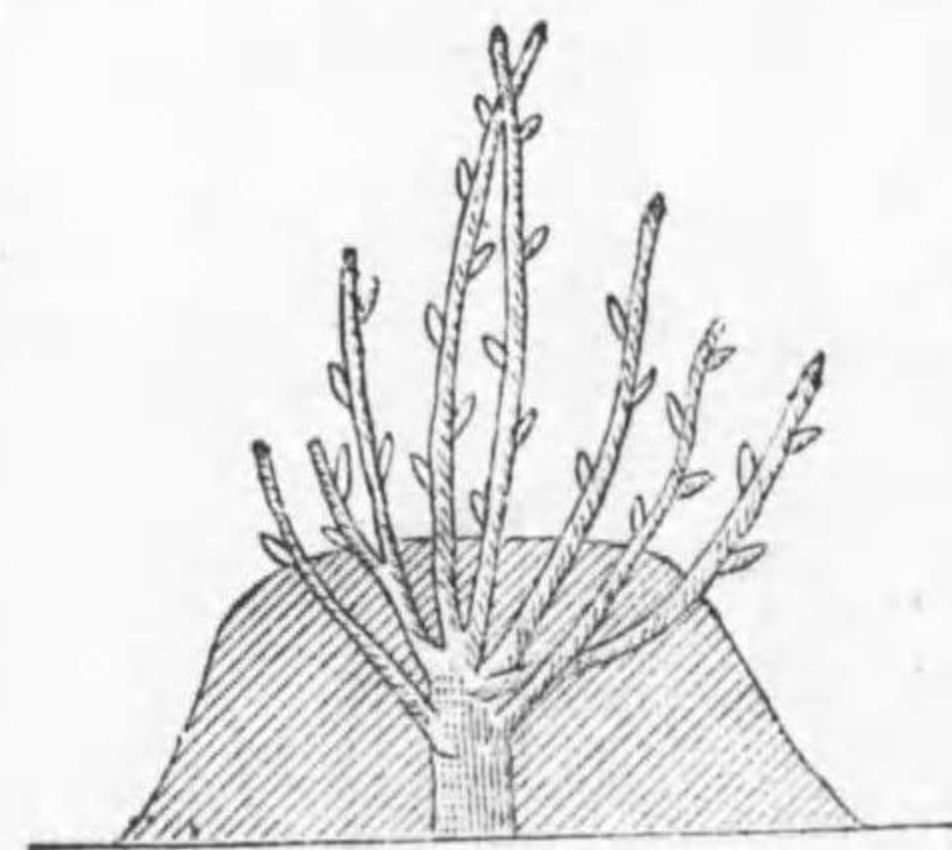
三 筒取 之れは専ら大幹に行はるるもので、諸操作は前者と同様であるが、外部

圖 六 十 二 百 第
取 筒



を覆ふ材料が太い竹筒又は鉢等を用ふる事である。竹の節を一節下部に残して五六寸の長さに切り、更に之れを中央から二つに割り、節の中央に取木しやうとする枝の入る程度の穴を明け、枝幹には疵を少しく附け、之れを竹筒で双方から覆ふのである。筒の中には赤土又は肥土を透間なく詰め込み、筒の外部は繩で巻き、乾燥しない様に時々灌水を行ふが宜敷い。又、竹の

取 伏 圖七十二百第



代りに鉢を兩方から併せるのも同様である。之れを鉢取とも稱へる事がある。

四 伏取 之れは又盛取とも稱へ、枝條の基部に土を蔽ふて發根を促し、分取を爲す方法で、多くは矮性の灌木に行はるるものである。先づ樹木の幹枝から春季に數本の芽を生じ、既に葉が四五寸に延びた頃に新芽の皮を少し削り、株の周圍に肥土を蔽ふて枝條の下部を埋めて置くのである。而して發根後、土を拂ひ、親木から各枝を一本宛切離して數多の苗と爲すのである。普通、躑躅、柳、白楊、榆、桑、紫陽花、芙蓉、木瓜等に行ふて居る。

第五節 根分法

草花類の根分方法は既に第二節球根法に述べたものに準據して行へば宜敷かるべく、庭木に於ては秋の落葉後から翌春二月下旬頃迄に掘取つた一年生の苗木の根又は立木の上根を適當の長さに切りて束と爲し、高燥溫暖な場所に縦に埋め置き、翌春に芽と根とを生ずるに及んで掘出し、適當の距離に埋め込み、上部を少しく地上に出し、根元を固く壓して置くのである。芽の數は二三個に留め置くが宜敷い。普通、山楂、柘、榴、梧桐、神樹、ニセアカシヤ等に行はるる事が多い。

第六節 株分法

之れは又分蘖法とも稱して、一株を數個に分割して植付くるもので、草花類にありては菊櫻草を初めとし、大抵の宿根草を繁殖するには此の方法が多く用ひられて居る。分株の時期は花卉に依つて一様では無いが、普通は落花後に行はるるか、或は春か秋かに行はるる事が多い。而して分株したものは一旦苗床に假植して稍々生氣附いた後に植ゑ出すのが宜敷い。

- (一) 春季株分のもの……… 菊ふらんすぎく紫苑美女撫子石竹秋明菊おだまきチキ
タリスけまんさう桔梗櫻草立葵睡蓮河骨アルメリヤ草夾竹桃泡盛草みぞはぎ
松葉菊女郎花等
- (二) 秋季株分のもの……… 芍薬匂菫花菖蒲千鳥草延命菊おほくるまおだまき福壽
草スズラン等

次に庭木類に在りては株に沿ふた側根から生じた蘖に土を掛けて發根せしめ、適

當に發達した後に之れを親木から分離して苗木と爲すもので、梅、薔薇、木瓜、蠟梅、金縷梅、金絲梅等は早春に行ひ、櫻、百日紅、柘榴、南天、海棠、木蘭、芙蓉、紫陽花、土佐水木、日向水木等は春の彼岸に行ふが宜敷い。又、竹、躑躅、月桂樹、八ッ手等は入梅に行ふが良好である。

第七節 接木法

之れは又嫁接法とも稱へて、植物の枝又は芽を探りて接穂と爲し、之れを砧木に接合せしめて完全なる生育を爲さしむるもので、其の目的とする所は自己の欲する同種のものゝ速かに且つ多數繁殖せしめんとする場合、或は開花結實を速かならしめんとする場合、又は異つた二種又は二種以上の品種を同一の植物に生育せしむる場合、或は又地味氣候に不適當なるものや、病害に罹り易いものを完全に生育せしめんとする場合に行ふものである。而して草物に在りては菊、ダリア等に行はれ、花木にありては薔薇、木瓜、牡丹、櫻、槭、藤、海棠、梅、桃、木蘭、泰山木等に應用さるる事が多い。成る可く砧木と接穂とは互に相類似したもの程活着が容易で、其の方法としては居接(砧木を植ゑたる儘接ぐもの)と掘接(或は揚接(砧木を一旦掘り上げて之れに接ぎ、

然る後、苗場に植ゑるもの)との二つがあり、尙ほ其の種類を述べて見ると次の通りである。

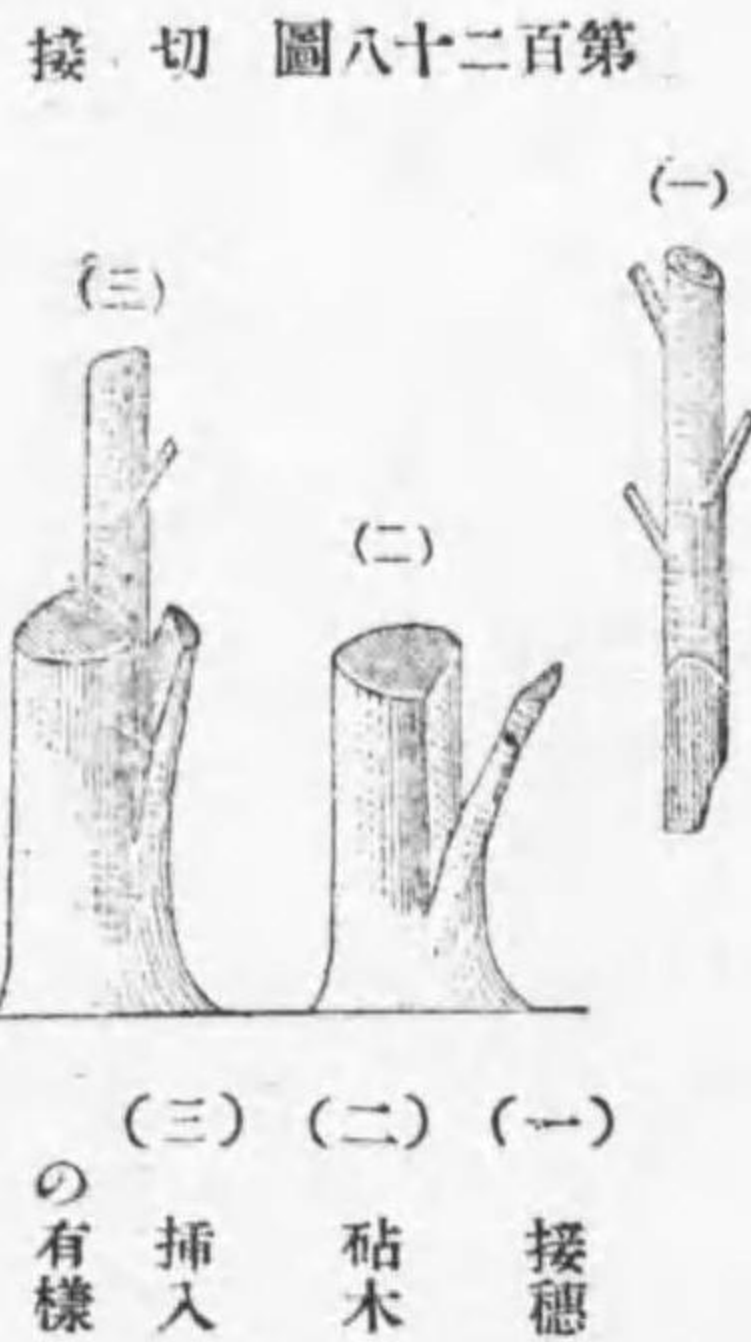
(甲)枝接法 (Grafting).....切接、高接、袋接、割接、塔接、鞍接、舌接、合接、腹接、挿接、根接、水接

(乙)呼接法 (Inarching)

(丙)芽接法 (Budding)

(甲)枝接法 之れは母樹から分離した新生の枝、又は幹の一部分を接穂と爲し、他の幹、枝、根等を砧木として之れに接木を爲す方法である。

一切接 之れは最も普通に行はるるもので、操作も簡單であり、且つ活着歩合が一番良好の様である。春三月頃に一年生の健全な接穂を探りて一寸五分乃至三寸の長さに切り、



夫れに一個乃至三個の芽を付け、上部は直角又は稍々斜に平滑に削り下部は其一側面を七分乃至一寸の長さに稍々厚く削り取り、其裏を少しく切り返して置く。砧木は土際から四五寸の長さに切り、形成層の部分を縦に接穂の削切面と同長に切り下げ、之れに接穂を挿入して其

の上を打藁で巻いて互ひに密着せしむるのである。而して之れを苗木畑に植ゑ込んで育成する。

二 高接 之れは多く老樹大木に行ふもので、高所にある幹枝に行ふ事が多く、切り口には土を盛り、更に藁類で包被し、接合部の乾燥するのを防いで居る。其の他の操作は切接と同様で宜敷い。

圖九十二百第 接 高

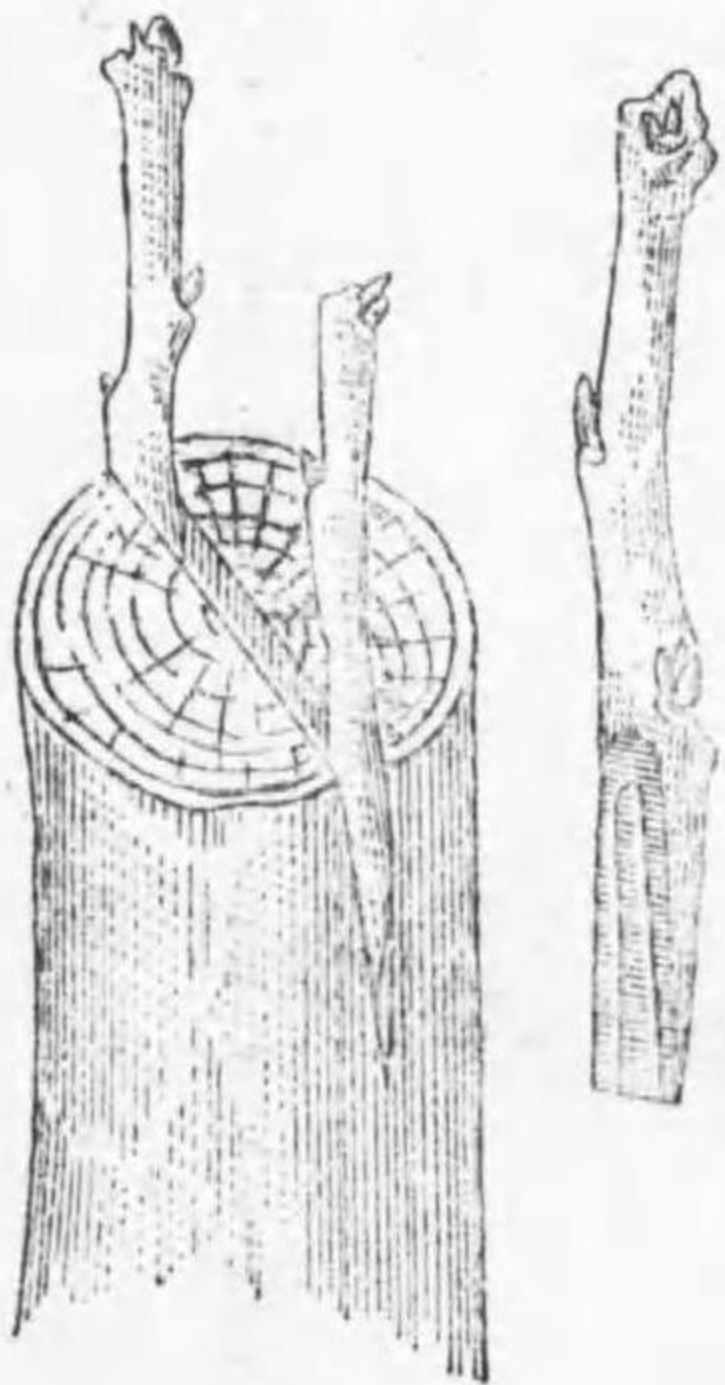


三 袋接 之れは又冠接とも稱へ、高接の一種ではあるが、砧木の一部分を切削する事なく、形成層の軟弱な部分に竹篋の様なものを挿込み、皮部と材部との間に狭い穴を穿ち、之れに薄く削つた接穂を挿入して相接せしむるもので、接穂を挿入した後は打藁の類で外部を覆ひ、接目の乾燥を防ぐものである。

種ではあるが、砧木の一部分を切削する事なく、形成層の軟弱な部分に竹篋の様なものを挿込み、皮部と材部との間に狭い穴を穿ち、之れに薄く削つた接穂を挿入して相接せしむるもので、接穂を挿入した後は打藁の類で外部を覆ひ、接目の乾燥を防ぐものである。

四 割接 砧木の一部分を割つて、夫れに楔形に削つた接穂を挿入するもので、主として針葉樹類に行はるる事が多いのである。

接 割 圖十三百第



五 搭接 砧木の小さい爲めに切接を行ふのに不便な場合に行はるる方法で、砧木と接穂とが略ぼ同一である場合には砧木の接部を約一寸位斜に切り、平滑に能く削り、接穂の下部も亦一寸位削り、互ひに削面を合せて密着せしめ、其上を乾かない様に打藁で巻いて置くのである。

圖一十三百第 接 鞍



六 鞍接及び舌接 何れも砧木と接穂とが殆んど同大の場合に行ふもので、前者は砧木を短い鞍形即ち楔形に削り、接穂は矢筈形に削り、相互の形成層を能く密着せしむる様に爲すもので、後者は砧木を塔接の様に削りて更に中央部に縦に切削を設けて舌状と爲し、接穂も亦同様に斜に削り、更に砧木の切削と略ぼ同長に上方に割れ目を入れ、之れを砧木の切面に嵌め込んで能く密着せしむるもので、何れも其の上を打藁で縛つて置く可きである。尙ほ此の外、合接、腹接、挿接、根接、水接法等があるが、普通一般には餘り用ひないので省いて置く。

(乙) 呼接法 之れは木質の堅實で活着の困難なもの、又は貴重な接穂に行はるるもので、百日紅、楓、木蘭、山茶、茶梅、躑躅、梅擬等に多く行はれ、普通三月から六月頃迄に行はる。接穂は成る可く短小で水分の流動の盛んなものを選び、其の方法としては接穂の傍らに砧木を植ゑ、其の上端を切斷し、次に皮部を削り、接穂に於ても同

様に皮部を削り、双方の削面を合せ、移動しない様に打藁で巻き、其の全く活着を爲した後に切り離すのである。此の方法は豫め鉢又は桶に植ゑて置く時は、必要の高さに双方を接合すのに便利である。



圖 二 三 百 第

(丙) 芽接法

之れは母樹から芽を其の皮の一部と共に削り取り、之れを砧木に接着せしむるもので、普通は七月から九月迄の間に行ふものである。此の法に用ふる芽は其の年に發生した枝梢中で勢力の強盛で枝の中央部にあるものを用ふるが宜敷く、砧木は三四年生のもので、接部は成る可く北向で節の無い平滑な部分を選び、利刀(特別に芽接ナイフがある)を以つて丁字形十字形、又は上狀に淺く切れ目を入れ、更らに其の切り口に篋(角又は竹製)を入れて皮部と材部との間を開き、之れに接目を挿入するのである。次に之れを打藁で下部から丁寧に巻き置けば、大凡二三週を経て活着したものである。



圖 三 十 三 百 第

左側の圖は接芽

(一) 丁形切割

(二) 接芽挿入の圖

(三) 巻縛條

のは膨脹して來るが、藁は決して除く事なく、其の儘翌春迄放置するが宜敷い。以上の諸方法で繁殖を行つた苗物類は床地に暫く植ゑ込んで其の育成を圖るのが普通で、相當のものに仕立上げて始めて花壇や庭園等に植ゑ出すもので、大抵は春秋に行ふのが安全である。

第二章 花卉の管理

第一節 栽植地及び培養土

既に設計論に於て述べた通り、花壇の土質は花卉の生育上に多大の關係を有するもので、其の甚だしいものは客土法を行ひ、さうで無くとも土地の改良には充分注意す可きものである。而して栽植地は時々花卉の間を耕鋤して(中耕)土壤の物理的性質を良好ならしめ、土地を清潔にし、且つ均平膨軟ならしむると共に養分の普及を圖り、併せて除草の效を現はす可きである。

又、土寄せを行ふ時は沃土を根元に與へる事となり、之れに依つて根の生長が充分になり、従つて花卉の生育も良好となり、光線の透過や水分の供給も充分に行はるる

事となるのである。

耕鋤を行ふ時期は晴天の日が最も宜敷く、成る丈け深耕に易め、土塊をして微細にするが宜敷い。又、花卉の栽植前には是非共全部耕鋤する必要がある、開花が終へて之れが更新期に於ても亦跡地を整理して天日に晒曝せしめ、石灰やフオルマリン等で充分なる消毒法など行ふが後に栽植する花卉の爲めに宜敷いのである。耕鋤用具としては鍬、ワレンホー等が普通に多く用ひらるる。

尙ほ栽植地を或一部分に限るとか、花壇に植穴を拵へるとか、鉢栽培の場合には、豫め人工的に調製せられた培養土なるものを用ふる事がある。培養土の調製法には色々あるが、普通に行はるるものを記して見ると、晩秋の頃に厩肥(刈草、落葉、古糞、塵埃等も用ふる事がある)と壤土に少しく川砂を交へたものとを交互に堆積して山形と爲し、其の頂上を少しく凹まして置き、之れに數回人糞尿其他種々の液肥を注ぎ、厩肥などの速かに醗酵腐敗する様にし、其の儘寒晒しと爲して、冬季に能く風化乾變せしむるのである。而して翌春三四月頃に及んで、其の堆積物を小口から切り崩し、之れに油粕、過磷酸石灰、糞灰、糠等を能く混和し、次に篩にかけて細い土粒を得るのである。培養土は一般に有機物を堆積腐敗せしめて拵へたものであるから、往々酸性を呈

する事がある(青色試験紙にて檢する)。斯様な場合には糞灰を餘分に入れて中和する事が必要で、又、石灰を用ひても中和する事が出来、且つ消毒殺菌の效を有して居る。尙ほ拵へ上げたものは成る可く雨の懸らない場所に堆積し置き、適宜必要に應じて花壇や鉢植に用ふるのである。

第二節 施肥及び灌水

第一 施肥

花壇に肥料を施す事は花卉の生育を助長し、完全なる開花結實を爲さしむる爲めのもので、假令地味の良好なる場所に在りても、多少の施肥は必らず行ふのである。次に肥料の種類に就て少しく述べると

(一)動物質肥料……人糞尿、骨肥(骨粉、骨灰、骨炭)、血粉、角、毛、魚肥(生魚、乾魚、搾粕)、蠶渣、鳥糞、海鳥糞等

(二)植物質肥料……綠肥、大豆粕、油粕、糠類、海草、藻、落葉堆肥、灰類等

(三)礦物質肥料……磷礦(過磷酸石灰、重過磷酸石灰)、トーマス磷肥、智利晶石、硫酸安母、尼亞、石灰等

がある。而して人糞、過磷酸、重過磷酸、大豆粕、油粕、搾粕、子鰯等は容易に水に溶解して肥效を呈するので之れを直接肥料と稱へ、直接に花卉の養料となるものである。之れに對して石灰や食鹽等は土中にある他の不溶解性を分解せしめて溶解性に誘導し、依つて始めて施肥の効果を現はさしむるもので、且つ土壤の理學的性質を改良するの働があるもので、之れを間接肥料と稱へて居る。

又、肥料を含有する主要成分から述べて見ると

(一)窒素質肥料……人糞尿、厩肥、骨粉、血粉、肉粉、海鳥糞、魚肥、油粕、硫酸安母尼亞、智利晶石等、

(二)磷酸質肥料……過磷酸石灰、重過磷酸石灰、トーマス燐肥、燐礦粉末、魚肥、海鳥糞、雞糞、骨粉、米糠等、

(三)加里質肥料……草木灰、海草等

となるのであるが、此等のものは完全に窒素、燐酸、加里の三成分を含有して居るのではないから、花卉の性質や土質の如何に依つて其の配合及び分量を考慮しなければならぬ。尙ほ其の效力にも遅速があつて、腐熟した人糞尿、硫酸、安母尼亞、智利晶石等は効果が早く(速效肥料)、其の爲めに追肥として花卉の生育の際に之れを多く施さ

れ、骨粉、魚肥、堆肥、厩肥等は其の肥效を現はすに相當の時日を要するものであるから(遲效肥料)、基肥として整地や植ゑ付けの際に勉めて之れを施すのが普通である。尙ほ葉簇の美觀と病蟲害の抵抗性を望むには加里性のものを多く用ひ、花及び果實の完備を期するには燐酸性のものを選み、樹幹や樹勢の旺盛を欲する場合には窒素性のものを多く與ふるが宜敷く、莖梗の丈夫を期する爲めには過磷酸石灰や灰分の加用が望ましいのである。

次に施用に關して一二の注意を述べれば、人糞尿は本邦に於ては最も手近く得らるる窒素質の肥料で其の施用も亦た甚だ多いのであるが、之れを用ふるには暫く肥溜に貯藏し置き、充分に腐熟した後に、相當に水で稀釋して施用するのが理想的である。厩肥や堆肥等は堆積して充分に醗酵腐熟した後に土地に鋤き込むか、或は植穴に埋め込むのが普通で、叮嚀に行ふ場合には之れに人糞尿や米糠等を混じ、度々切り返して能く混和細裂せしめた後に施用するのである。

油粕は取扱ひが便利で效顯の著大なるものであるから園藝肥料としては最も多く用ひらるるもので、先づ粉碎して粉末と爲し、此の粉末一升に對して水二斗内外の割合に混じて一二週間水桶又は壺に入れ置き、充分に腐熟せしめた後ち用ふるが宜

敷く、尙ほ使用の際には更らに五六倍の水で稀釋して用ふ可きである。奏效は遅緩なるものであるから、少しく早目に施すが宜敷い。過磷酸石灰も亦園藝肥料として多く用ひらるるもので、其の効果が速かで、且つ奏效度も著大なるものであるから、花卉類中でも短期作物に適して居り、施用後は灌水を充分に與ふれば地中で分解する事も甚だしく、植物體の吸收も容易となるのである。其の他硫酸安母尼亞を用ふるには其の一貫匁を水一石に溶し、智利硝石に在りては其の一貫匁を水六斗に溶して用ふるが適當であらう。

尙ほ以上の外、花卉の香氣を増す爲めには満俺や沃度が用ひられ、葉の光澤を増す爲めには鐵分やニガリが適して居り、下水、白水(磨汁)等も園地に施して効果のあるもので、落葉や塵埃等を焼却した灰類も加里肥料として手近かに得易く、近來は又園藝肥料として人工的に三要素を完全に含有した水溶液、粉末、錠劑等が種々出來て居るのである。此等は夫々用法を明記してあるから其の通りに施用したならば差支へはあらず。

而して一般から云ふと施肥は一時に多量に施すよりも、少許宛數回に施用する方が効果が多いと云へるが、花卉の種類や栽培方法等に依つて一概には斷言出來ず、庭

木類にありては普通は寒肥として早春に一回で宜敷いのであるが、殊に花木類に於ては花後に一回の肥培を行ふ事もある。夫れから草花類にありては播種の際に充分に施し、移植の際に與へ、尙ほ開花前十日位に留肥を行ふのが普通で、花期の長きに互るものは開花の途中に一回與へる事もある。終りに肥培は花卉の生育を助長し、適當の開花結實を爲すに必要なものではあるが、度を過ごして行へば徒らに莖葉のみ伸長して、花果の着生を尠くし、又害蟲病菌に犯され易くなるものであるから、能く其の施す可き時期に注意すると共に、其の分量にも亦考慮を怠つてはならない。

草花園藝調合肥料

第一例

過磷酸石灰	一〇〇
硝石	二五
磷酸鐵	五
硫酸苦土	二五

第二例

硫酸安母尼亞	二
綠礬	二
硝酸加里	一

右は何れも粉末と爲して能く混和し、乾燥して置けば取扱ひも便利であり、之れを用ふるに當つては、水に溶かして施しても能く、又其の儘花卉類の根元に埋め込んで

も差支へない。

第二 灌水

土壤中に適度の濕氣を保持せしむる事は、花卉の生育上甚だ必要なる事で、若し地中に濕氣の不足した場合には人工に依つて灌水を爲し、之れを補給しなければ花卉は水分の缺乏に依つて枯死するに至るのである。殊に砂質地に於ける花壇や苗床にありては灌水を要する事多大である。

水の性質としては雨水の溜め置きが最も望ましく、次では川水や池水等が宜敷く、井戸水は汲んで直ぐよりも暫く置いてから用ひる方が軟かになつて、種々の含有鹽物性に依る害が尠いのである。尙ほ水の溫度にも注意を要する事で、成る可く日向水の餘り熱くない程度の暖かいものを用ひる様にし、冬季には殊に冷却した水を避けなければならぬ。

花壇の灌水を行ふには普通は如露を用ふるが普遍的に行き互り、且つ根元の土の散亂を防いで宜敷く、注意としては莖葉に直接水の懸らぬ様に努む可きである。尙ほ灌水の時間は普通一日の中では午前十時頃が宜敷く、夏季にありては早朝に行ふ事があり、又餘り乾き過ぎる場合には午後三時頃に與ふる事もある。而して日中は

成る可く避けた方が宜敷い。

第三節 雑草の除却

花卉の育成中には不必要で且つ有害な雑草も亦生育するもので、苗床の作製や花壇の植ゑ込み前にありては相當の驅除方法を講じられてあつても、種子や根などが幾分は残つて居り、又他方から飛散して來た種子等が發芽生育して來るものである。雑草は野生的のものが多く、従つて其の性質が頑強であり、色々の抵抗にも堪へ得るので、苗床などに在りては其の幼少の時に除却する様に努め、花壇にありても栽植されて居る花卉類の美觀を損せない中に取去る事が肝要である。雑草驅除の方法としては、

- 一、土地が膨軟で容易に引き抜けるものは指先で摘除する。
- 二、簡単な除草器としては篋、ピンセット、ホー、鉤、鎌等があつて根部から掘り取る。
- 三、花卉を栽植しない場所や道路等にありては鋤、ウキードカッター、車輪付除草器等を以て行ふが能率が上る。
- 四、藥劑を使用して雑草を驅除するには、成る可く廉價のものを用ひて、其の效果の

大なる事を理想とするもので、次の諸劑が除草劑として普通に用ひられて居る。但し其の濃度は土質及び雜草の種類に依つて加減せねばならない。

(イ)ニガリ……………三〇パーセント(價最も廉にて效果大)

(ロ)硫酸銅……………五——一〇パーセント(效果大)

(ハ)硫酸鐵……………五——一〇パーセント(前者よりも價廉にて效果大)

(ニ)石炭酸……………三〇パーセント

(ホ)鹽 酸……………三十五パーセント

(ヘ)硫 酸……………三〇パーセント

(ト)食鹽湯……………一ポンドに對して水二升五合熱して撒布する)

本邦に於ける經驗では經濟上から云へば藥劑使用は人爲的に抜き去るのに及ばないが、勞力の尠い處や急場の除去方法としてはニガリ食鹽湯硫酸鐵等が價も低廉で用ふるに適當であらう。

尙ほ智利硝石五百五十匁を水一斗五升に溶かして一坪に撒布したものは經濟的で有效であるこの報告が發表されて居り、又硫酸安母尼亞でも同様の成績が示されて居る。

而して此の藥劑の撒布に依りて雜草を枯死せしむる方法は、成る可く晴天の打ち續く際に行はなければ效果は尠く、若し施用後間も無く降雨のある場合には、折角適當なる濃度を定めて施用した藥效が著るしく滅殺せらるるものであるから、豫め天候に注意して行ふ事が肝要である。又夜露の甚だしいのも藥劑を稀釋するものであるから、此等の事項も考慮して、其の時期、其の場所に應じた方法を講ずる事にすることが宜敷いのである。

第四節 病蟲害の防除

花卉は觀賞が主體となるものであるから、其の一部分でも枯損衰弱等の事があれば全く花卉として完全なる價值を有する事が出来なくなるものである。而して病蟲害は花卉栽培上最も注意すべきもので、其の豫防は安全なる生育を望むの前提であり、健全に發育せしめ置く事はよしや病蟲害に犯さるる事あるも抵抗力を増さしめ、或は直ちに恢復補充せしめ得るの準備となるもので、日光の透射、空氣の流通の良好なる事、さては排水を完全にして置く事は、病菌や蟲類に對して防除の效がある。夫れで枝透しや剪定等を適宜に行ひ、旺盛なる發育と整備せる形姿を現はさしめ病

蟲害の襲來を成る可く未然に防ぐ様な相當の保護的設備が必要であり、或は藥劑撒布を行つて豫防方法を講じて置く事も肝要である。又愈々犯された場合には患部を切斷して其の蔓延を防ぐか、或は外科的手術若くは藥劑撒布、其の他の方法で驅除に努む可きである。今次に病蟲害に對する防除法を少しく述べて見よう。

第一 器械防除法

一 幌掛け 之れは花卉類の新芽や苗を保護するもので、針金を組立てて骨と爲し、夫れに寒冷沙を張つて底無し、四角の箱を爲し、上から被ふて置くもので、主としてぢのみ、ねきりむし、ありまき、甲蟲類等を防ぐのに都合が宜い。

二 溝 之れは苗床に他から害蟲が匍匐して來る恐れのある時に進路を遮る方法で、溝の外方を傾斜と爲し、内方を垂直にすれば上る事が出來ず、其の深さ及び幅は各各一尺位で充分である。

三 タール紙 之れは花卉の莖幹を環つて石炭タールを塗つた紙を帶狀と爲して巻くもので、毛蟲類、尺蠖蟲類等は此の臭氣を嫌つて上昇しないものである。

四 耕鋤 秋末初冬の乾燥した時期に地面を淺く耕鋤して置くこと、害蟲が掻出されて押殺せられ、或は鳥類に啄まれ、又寒風や雨雪等の爲めに凍死する事が多く、病菌

や卵なども亦驅除せらるる事となるのである。

五 灌水 害蟲類の甚だしい時に、其の根元に一時水を溜溜せしめて附近の害蟲類を窒息せしむる方法がある。尙ほ此の中に少量の石油を流すと効果が早い。

此の外、驅除方法としては食物誘殺法、燈火誘殺法、受蟲器法、燒殺法、捕殺法等の策を講ずる事がある。

第二 藥劑防除法

(甲) 殺菌劑

一 石灰ボルドウ液 (調合量硫酸銅百二十匁、生石灰百一十匁、水二斗一三斗) 用意した一個の桶に硫酸銅百二十匁を盛り、之れに熱湯二升を注ぎ込み、徐々に塊を碎き乍ら攪拌して溶解するのである。其の上に冷水一斗三升を加へて全量を一斗五升とする。次に他の桶に生石灰百二十匁を盛り、之れに熱湯(極少量)を靜に注ぎ込めば、生石灰は自然と碎けて粉末となる。夫れに冷水を加へて全量に入れ、充分に攪拌して混合せしめ、全量を三斗と爲すのである。而して能く磨いた小刀を液中に浸して銅鍍金が生じなければ宜敷く、又、リトマス試験紙(青色紙)を液中に浸して赤變しなければ良いのである。以上の方法で若し變化があれば生石灰液の少量宛を液中

に入れて加減するのである。斯様にして出来上つた蒼白色の液が三斗式石灰ボルドー液で、二斗式や二斗五升式では藥劑溶解に用ひる水の分量が二斗或は二斗五升を用ふるものである。之れを撒布するには噴霧器を用ひ、一回の撒布は十日乃至十四日程效力を保つて居る。

二 砂糖ボルドー液 之れは石灰ボルドー液の中に砂糖や糖蜜を加へたもので、粘着力が強いので效力も長く、降雨の多い地方や軟弱な若芽等に撒布するのに適當したものである。

三 曹達ボルドー液 之れは生石灰の代りに炭酸曹達を用ふるもので、液を撒布した時に汚點を留むる事が尠いから、觀賞上又は切花を爲す以前に用ふるも差支へが無い(調合量硫酸銅二十匁、炭酸曹達百六十匁—百八十匁、水三斗—四斗)。

四 硫黃華 之れは主として粉末の儘で用ふるもので、硫黃華が葉面に撒布せられて後、日光に照り付けらるると、有毒な亞硫酸瓦斯を發生して病菌を殺すのである。夫れで硫黃華は乾燥した熱い日に撒布する事が肝要である。

五 銅石鹼液 之れは硫酸銅液に石鹼液を加へて拵へたもので、ボルドー液よりも殺菌力、粘着力、浸潤力が強く、殆ど葉を汚染する事が無く、且つ製造が容易で安價に

出来る處から、最近に盛んに用ひられ初めたものである(調合量、硫酸銅六匁—八匁、石鹼十八匁—二十四匁、水一斗)。先づ硫酸銅六匁を桶に入れ、熱湯一升を注ぎ込み、攪拌して充分に溶解した時に水を加へて全量を二升とするのである。別に石鹼十八匁乃至二十四匁(石鹼の品質に依つて異なるから、豫め使用する石鹼の硫酸銅に對する適量を定めて置く)を鍋に入れ、四五升の水を入れて熱し、攪拌して十分に溶解せしめ、更らに湯を加へて全量を八升とする。之れに前の硫酸銅液を移し込んで能く攪拌すると、少しく粘氣のある淡青色の半ば透明な液を生ずる。若し沈澱物や浮游物や或は青色の粘稠物が出来れば、是れ石鹼の量の不足した證據であるから、更らに適量丈け石鹼を増す可きである。出来上つたものは日を経るも變質する事は無く、使用の際に水を加へて適度の濃さと爲し、噴霧器で撒布を爲すのである。

尙ほフォルマリン液(五十倍—百五十倍)石灰窒素、石灰、木灰等も殺菌用として各方面に用ひらるるものである。

(乙) 殺蟲劑

一 石油乳劑 之れは石油と石鹼とを混合したもので、介殼蟲や羽蟲類を驅除するのに最も有効で、普通に廣く用ひられて居るものである。調合量(石油一升、石鹼十

二匁—十五匁、水五合)。之れを拵へるには石油空罐の上部を切抜いて捕手を附けて取扱に便利な様にしたブリキ罐鍋を用ふる。之れに一定量の水を盛つて薄く削つた石鹼を入れて煮溶かすのである。又別にブリキ罐鍋に石油を入れて注意し乍ら温むる。斯様にして石油の少しく湯氣を發する様になれば鍋を取下して温めた石油の方に石鹼の溶液を移し込み、手早くポンプで液中に空氣を送り、烈しく液を混合せしめ、乳白色の少しく粘氣を帯びた液を送るのである。若し油の粒が浮ぶ様だつたらば再び温めて攪拌し、完全に混合せしむ可きである。之れが原液で調製後一週間位は貯藏に堪ふるものである。使用の際には原液の必要量丈けを取り出し、二、三倍の温湯で稀釋し、更らに水を用ひて稀釋し、原液の五倍乃至二十倍として用ふるが宜敷い。而して二三の例を示せば介殼蟲(六倍—一〇倍)、綿蟲及び蚜蟲類(一五倍—二〇倍)、青蟲類(二〇倍)、甲蟲類(一五倍—二〇倍)等の割合で行つたものは有效結果を現はして居るのである。

二 除蟲菊加用石鹼合劑 之れは石鹼水に除蟲菊粉を加へたもので、蚜蟲や青蟲類の驅除に最も有效なものである。調合量(石鹼十匁—十五匁、除蟲菊十匁—十五匁、水一斗)。

三 煙草粉合劑 之れは煙草粉八割、消石灰一割六分、硫黃華四分の割合に配合したものである。

四 石灰硫黃合劑 從來之は主として介殼蟲の驅除に用ひられて居たが、近來は病害豫防にも効果があるので使用せられて居る。而して濃度の差に依て普通石灰硫黃合劑と濃厚石灰硫黃合劑との二種類があり、尙ほ外に自沸合劑なるものがある。

〔普通石灰硫黃合劑〕 調合量(生石灰百二十匁、硫黃華百二十匁、水一斗) 先づ二個の煮釜を用意して、其の一つを湯釜、他の一つを煮釜とする。始め湯釜に水を盛つて煮立たしめ、別器に生石灰を入れ、少量の湯で溶解した後、煮釜に移すのである。次に湯釜の熱湯三升を石灰水に注ぎ、能く攪拌して硫黃華を加へる。斯くして絶えず攪拌し乍ら大凡一時間煮て、其の後、漸次熱湯を移込み、全量を一斗と爲し、尙ほ二十分間も煮たらば火を除き、粗い布で液を濾過して造り上ぐるのである。此の液は密閉して貯藏する時は可なり永く保てるもので、使用の際には五六倍に水を稀釋して用ひるのである。

〔濃厚石灰硫黃合劑〕 調合量(生石灰六百匁、硫黃華一貫二百匁、水一斗) 最初から全量の水で煮て、硫黃が全く溶ける迄絶えず攪拌するのである。調製液は粗布で漏過

し、水で薄めて使用するのが普通である。

〔自沸石灰硫黄合劑〕 調合量(生石灰百匁、硫黄華百匁、水一斗) 之れは火力を用ふる事なく、單に生石灰の消和熱に依つて混和するもので、植物の葉莖部を燒害する事が無く、夏季に用ふるには最も適當したものである。先づ硫黄華に少量の水を加へて攪拌し糊状と爲し、別に石灰を桶に入れて少量の水を以て消和せしめて糊状と爲し、其の消和の盛んな處に前の糊状と爲した硫黄を加へて攪拌し、能く混和せしめ、其の消和作用の全く止んだ頃に冷水を加へて一斗と爲すのである。而して石灰及び硫黄の分子は水中に浮游するのが主である爲め、使用の際は充分に攪拌する事を忘れてはならない。

五 除蟲菊加用木灰合劑 調合量(除蟲菊粉五勺—一合木灰一升—三升) 之れを混合して後約一晝夜乃至二晝夜密閉し置き、朝早く露のある中に粉を花卉の葉上に撒布するもので、主として枝葉を害するものに適用せらるるものである。

六 デリス劑 之れは熱帶産の蔓性植物たるデリス、エリブチカ(Derris elliptica)の根から得たもので、粉末と液體との二劑があつて、前者は粉の儘撒布するか、或は水に溶解して用ひ、後者は百倍乃至二百倍に稀釋して用ふるのである。尙ほ之れに石鹼水

を少しく加へると粘着性を増し、比較的永く葉上に止りて有效である。

七 亞砒酸液 調合量(亞砒酸十匁、石灰十匁、水三斗) 亞砒酸は多量の砒素を含むもので、之れを水に混じ、石灰及び澱粉(粘着力を増す爲め)を混合したものは害蟲毒殺劑として効果がある。使用の方法は噴霧器で注射撒布が最も宜敷い。尙ほ之れをボルドー液に加へて用ふれば殺蟲と殺菌との兩方に効果がある。

其の他、殺蟲劑としてはファーム、インセクタサイド(Farm Insecticide)(液狀、固形)、パリスグリーン(Paris Green)、ウォーム、デストロイヤ(Worm Destroyer)、蟻除け等の特殊藥劑も調製せられ、使用者の便利を考慮せられて居るものが尠くない。

(丙) 燻蒸劑

一 二硫化炭素 之れは硫黄と炭素との化合物で、主として木框内又は溫室内の驅蟲劑に用ひらるるもので、金盞又は皿に盛り、直ちに室内を密閉して置けば、二十四時間乃至三十時間位で瓦斯が空中に充滿し、害蟲を殺すに至るものである。普通空間一千立方尺に對して藥劑三—五封度位の割合で使用する。

二 青酸加里 之れは青酸加里に硫酸を注加して瓦斯を發生せしめ、害蟲綿蟲介殼蟲等を殺すものである。先づ皿に一定量の稀硫酸を入れ、之れに青酸加里を投入

するのが便利で、其の用量は一千立方尺に對して青酸加里二百瓦硫酸三百瓦、水五百瓦の割合で、大抵一時間前後放置するのである。苗木の燻蒸には箱又は特別の燻蒸室を用ひ、立木の儘のものは燻蒸袋を覆ふて瓦斯の漏れない様にして行ふのが普通である。

三 エキスルチール(Exsul) 之れは英國リチャード會社に於て製造せる燻蒸劑で、液状のものゝ固形のものゝ二様ある。而して専ら温室や温床等にありて燻蒸器に藥品を盛り、アルコールランプに依りて加熱し、瓦斯を發生せしむるのが普通である。主として綿蟲、スリツプ、介殼蟲等の驅除に多く用ひられて居る。

尙ほ近來は毒瓦斯の利用も大分講じられんとして居るが、倉庫保險や公衆衛生等の爲めに未だ一般には使用を禁じられて居る。概して藥液劑の撒布には現今噴霧器が盛んに用ひられ、其の様式構造等にも種々のものが出來て居り、粉末劑の使用には撒粉器が多く用ひらるるのである。又、乳劑の濃厚なるものにありては齒磨楊枝か小ブラツシ等に依つて驅除せられて居る。

次に花卉類の被害部に就て少しく述べて置かう。

一 莖幹 此の部を犯す害蟲には皮部を噛む天牛や金龜子の類があり、莖を犯し

て水分を吸収するキクスギがあり、内部に浸入して髓部や樹液の通路等に棲息する穿孔蟲、木蠹蟲、鐵砲蟲の類がある。前者は捕蟲網か直接手等で捕獲して驅除するの外はなく、後者は莖幹の一部から針金等のものを用ひて刺殺すか、或は粘土や漆喰等で孔を塗潰して窒息せしむるか、若し軟弱な莖であれば油蠟の類を塗布するのである。又、藥劑としては多くに硫化炭素を注入して後穴を塞ぐ事が多い。「松」「柳」やまならし、「栗」「シヒ」「無花果」「カヘデ」「スズカケノキ」「桃」「葡萄」等が最も多く被害を受くるものである。

又、松には往々木癭を生ずる事があるが、之れは菌類で、遂には空洞を生ずるに至るものであるから、其の甚だしくならない内に削り除け、石鹼水で洗ひ、ホルタル或はクレソート等を塗布するが宜敷い。又、被害の甚だしくなつたものはアルコールを稀釋して注入し、後ちセメントを以て充填して置くが安全である。

其の他、花木類の樹幹を犯すものには、さるのこしかけやごりぎ等があつて、樹皮を破つて内部に根を下し、害を及ぼすものであるから、此等は成る可く早く取除く様にする可きである。

二 葉簇 此の部は害蟲に犯さるる事が甚だ多く、殊に新芽に於て其の被害の多

くを見るのである。其の主なるものとしては芽切蟲、尺蠖蟲、蛄、蠶、蟻、蜂、蚊、蠅等があり、此等は餘り擴がらない中に捕殺し或は焼殺す可きで、藥劑としては前記の驅蟲劑の外、砒酸鉛、除蟲菊粉、除蟲菊液(酒精水煮沸液)、煙草液(煙草の煮汁)、石鹼水、クロールバリウム(二三百倍液)、トマトー液(トマトーの煮汁)、梅檀汁(センダンの煮汁)、ジキタリス液(ジキタリスの煮汁)等が効果を奏するものである。又病菌類は主として葉の裏面の氣孔から襲來する事が多く、其の主なるものとしては銹病、縮葉病、べと病、うどんこ病、煤病、餅病、天狗巢病等があり、此等の豫防としては播種前に種子の消毒を爲し、例へばウスブルン(usprung)やチランチン(Tillantin)などにて、尙ほ多年草や花木類にありては發芽前に殺菌性の藥劑を撒布して其の來襲を防ぐのが安全である。

又花蕾や果實も等しく病菌や害蟲に犯さるるものであるが、葉簇に對する防除法及び袋被法等を行へば宜敷いのである。

三 根部 排水の不良なる場所では菌類の蔓延が甚しく、根部の發育も不充分で、根腐病や萎縮病に罹り易いものである。又害蟲も棲息するのに好都合で、蟻、蠶、線蟲、根切蟲、蚯蚓等侵入する事が多く、新根を蝕害し、或は根と土との間に空隙を生ぜしめて花卉の生育を不良ならしむる事が多い。されば此等に對しては成る可く排

水の良好を期する事は勿論で、尙ほ石鹼水の稀薄溶液や硫黄華等を根元に少しく注いで置くが防除の效がある。又土龍の害に至つては其の通路に捕獲器を埋めて捕殺するのが良法である。

第五節 其他の管理

花卉類の保護手入法としては既に整地施肥、除草、病蟲害等に關して大體述べたのであるが、尙ほ特種の花弁に在りては夫々特有の管理方法を必要とするものである。即ち莖が弱くて風等の爲めに倒れ易いもの(例へばダリーヤ、コスモス、菊、カーネーション、薔薇等)、或は蔓性の花卉類(例へばスウィートピー、アサガホ、ツルバラ)等には支柱を立てる必要があり、其の材料としては篠竹、割竹、或は丸竹の儘用ふる事があり、時としては垣根様に造る事もある。而して其纏結材料としてはラファイヤー、七島蘭、細棕、柵繩、蕨繩等を使用して居る。又餘り徒長に過ぎるとか、枝を多く出さしむる目的の爲めには、相當に伸びた頃に摘心を爲し、或は摘芽、摘梢を行ふて調節を圖る事がある。尙ほ之れに依つて開花期を遅らし、花壇美觀の永續を企圖する目的にも應用せらるるのである。

其の他栽植後に於て生育が旺盛で繁茂に過ぎた場合には、花壇全體の調和上多少の間引を行ひ、或は剪枝に依つて景觀美をさしむる様にすることがある。

圖 四 十 三 百 第
寒 防

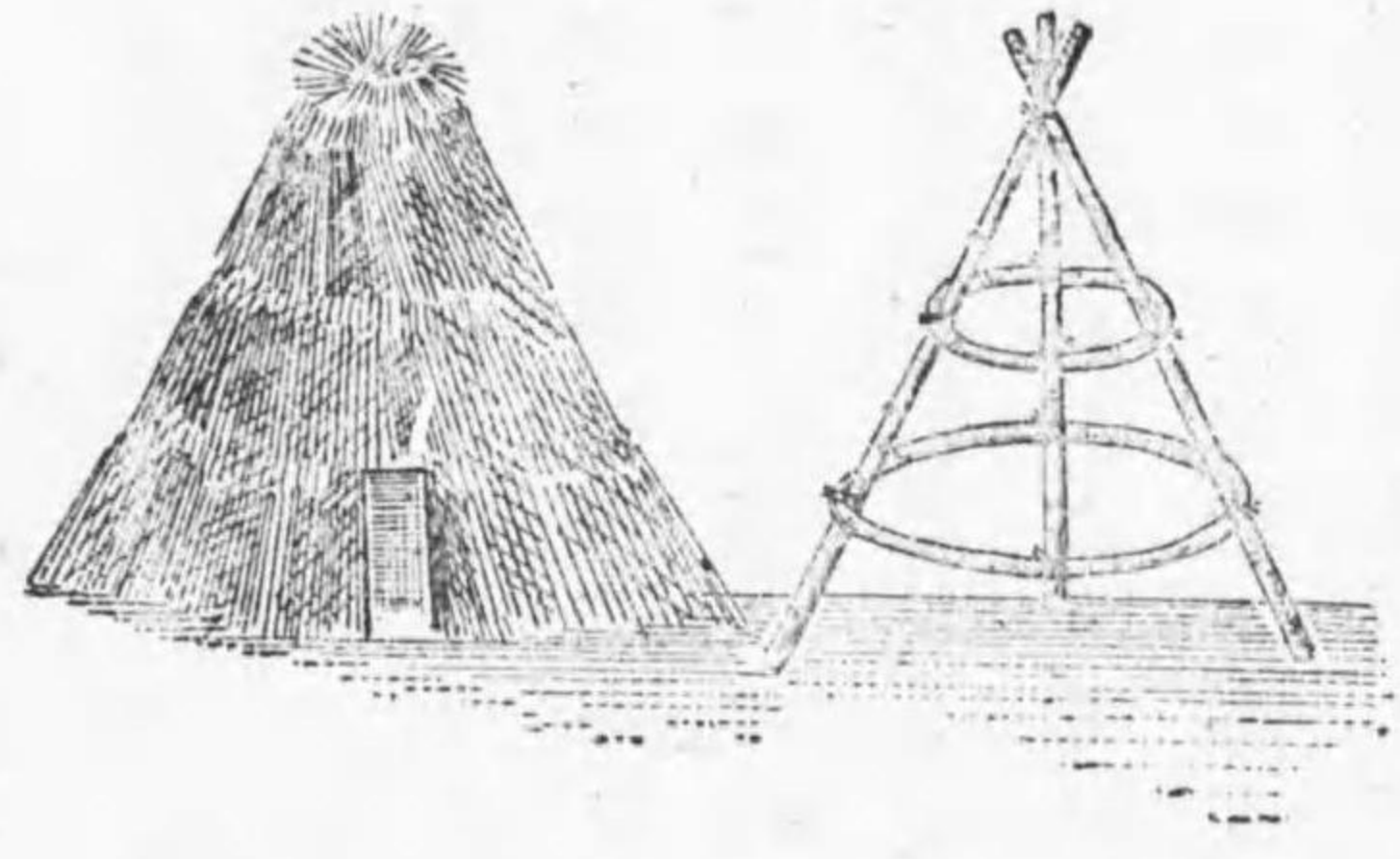
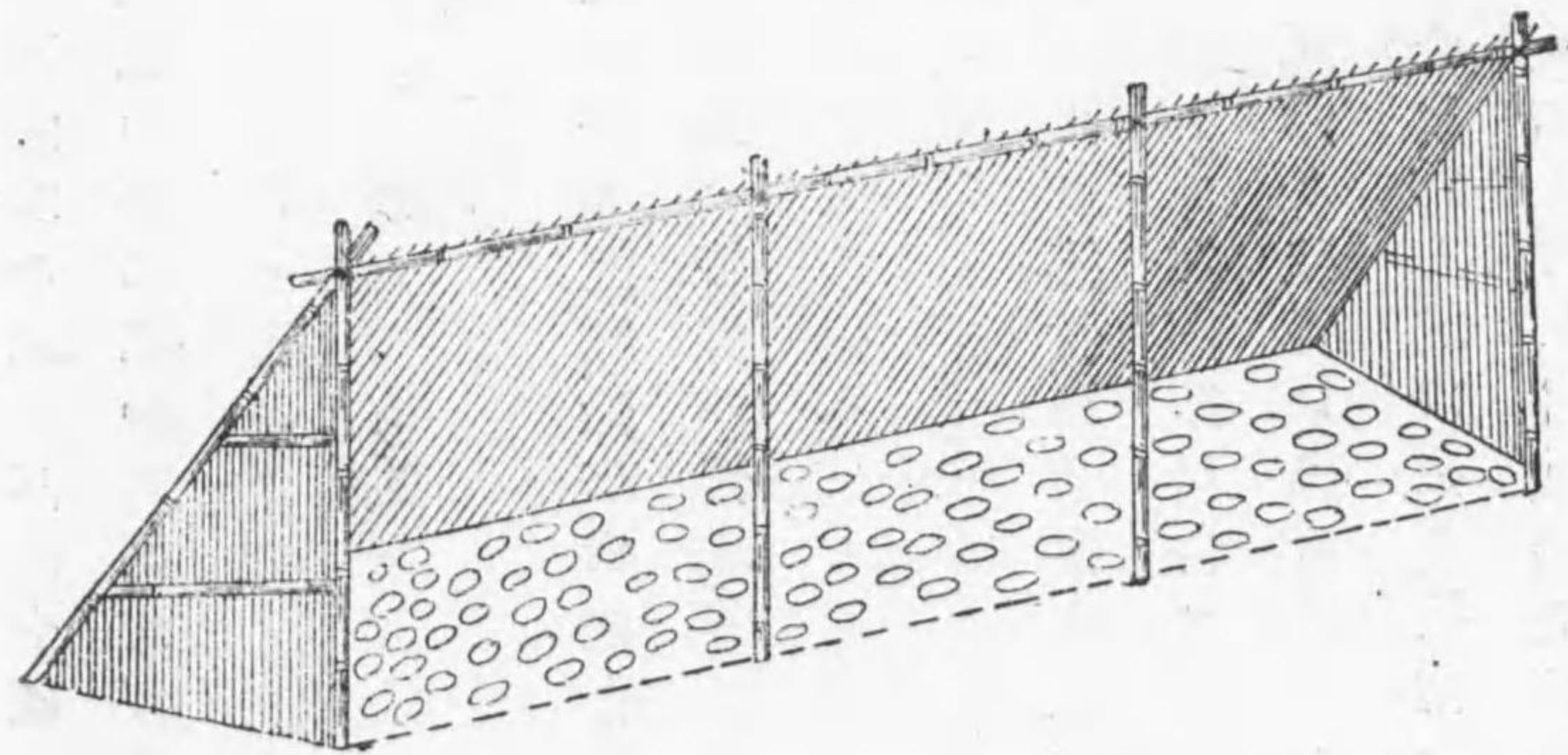


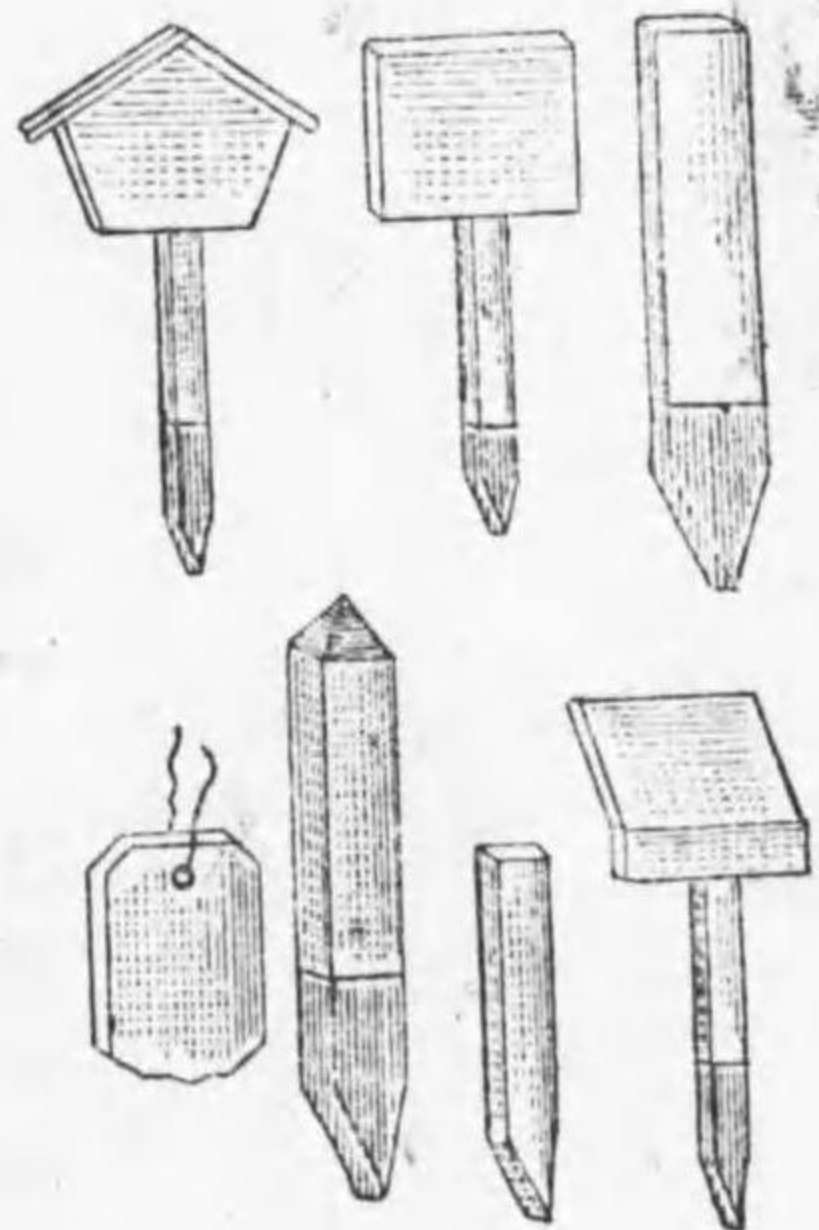
圖 の け 除 霜 圖 五 十 三 百 第



夏季日照の烈しき爲めに堪へ得ない花卉には日覆を施すか或は根元に藁や草類等を置いて乾燥を軽減するに努め、又冬季霜雪の被害を防ぐ爲めには花壇に霜除けを拵へ、小木にありては菘や藁等を以て包

み、單に枝のみを束にして置く事もある。特に開花期の保護を叮嚀にする牡丹芍薬、牽牛花菊等にありては、稍々裝飾をも兼ねた天蓋を設け(葭簣障子)風雨の爲めに花の損傷せらるるを防ぎ併せて日光の強射を避け、加ふるに觀者をして特別の花卉にのみ視線を集注せしむるに都合の良い様に施設する事がある。

圖 六 十 三 百 第
種 各 の 札



あるが、其の詳細な事は次の園藝用具の項で述ぶる事とした。

第六節 園藝用具

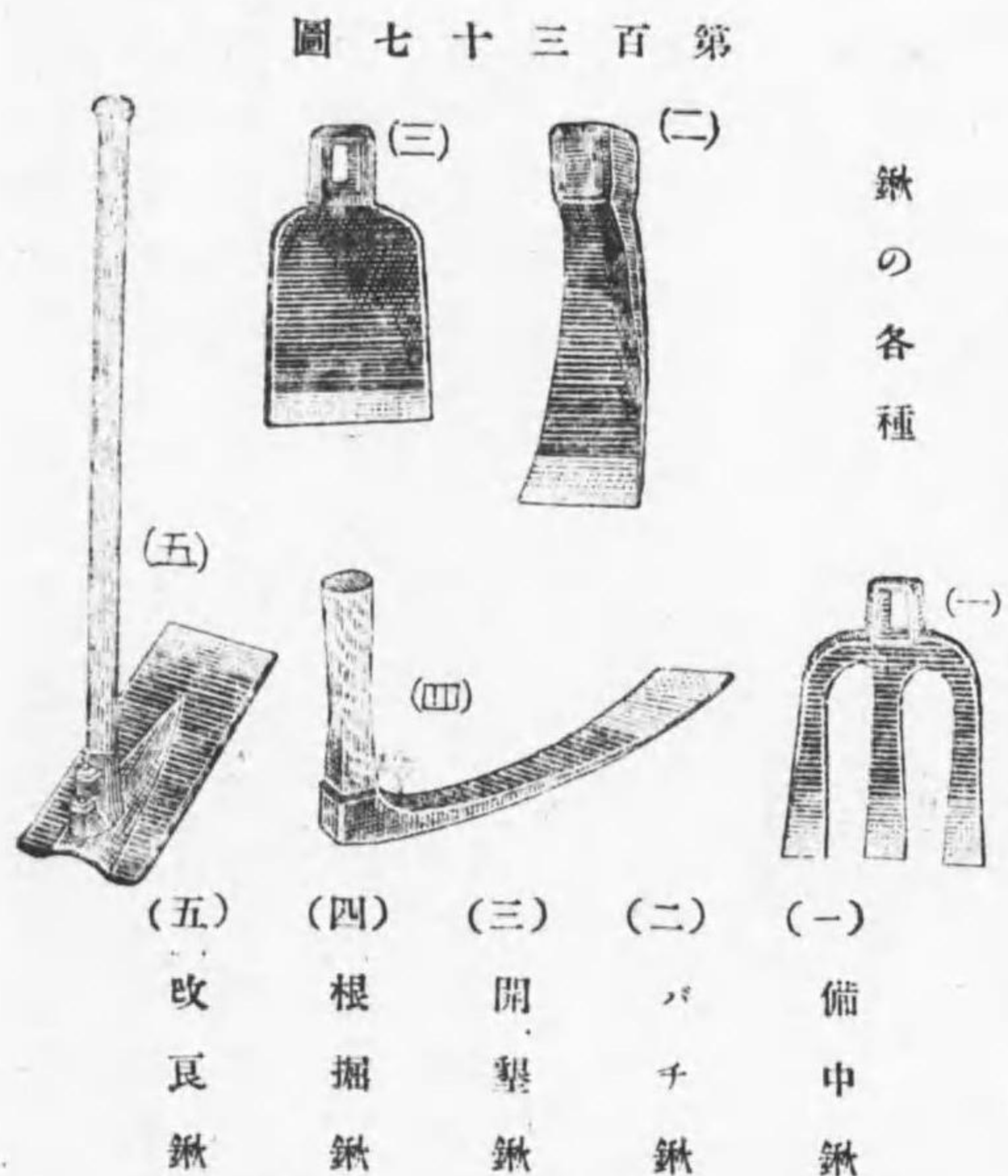
花卉園藝を實際に行ふに當り花壇の築造から花卉類の植る込みに及び、更らに其

要するに花卉の管理なるものは、花園全體をして調和した美觀を保たしめ、見苦しい場所の生ずる事が無く、花卉の美觀期をして少しでも永く續かしむる様に努むるのが主眼であらねばならない。而して若し花卉類の分類區、又は種類名や品種名等を特に指示する必要がある場合、或は採種の爲めに夫れに適當な札を附する事が

の完全なる育成を期する爲めには種々の操作が必要である。夫等の仕事を遂行するのに勞力と時間を軽減し、且つ仕上げの立派ならん事を望む爲めに、現今では各方面に對して其の目的に添ふ様な適當なる器具が持へられて居る。今其の園藝用具中で主なるものに就て少し許り説明を加へて置かう。

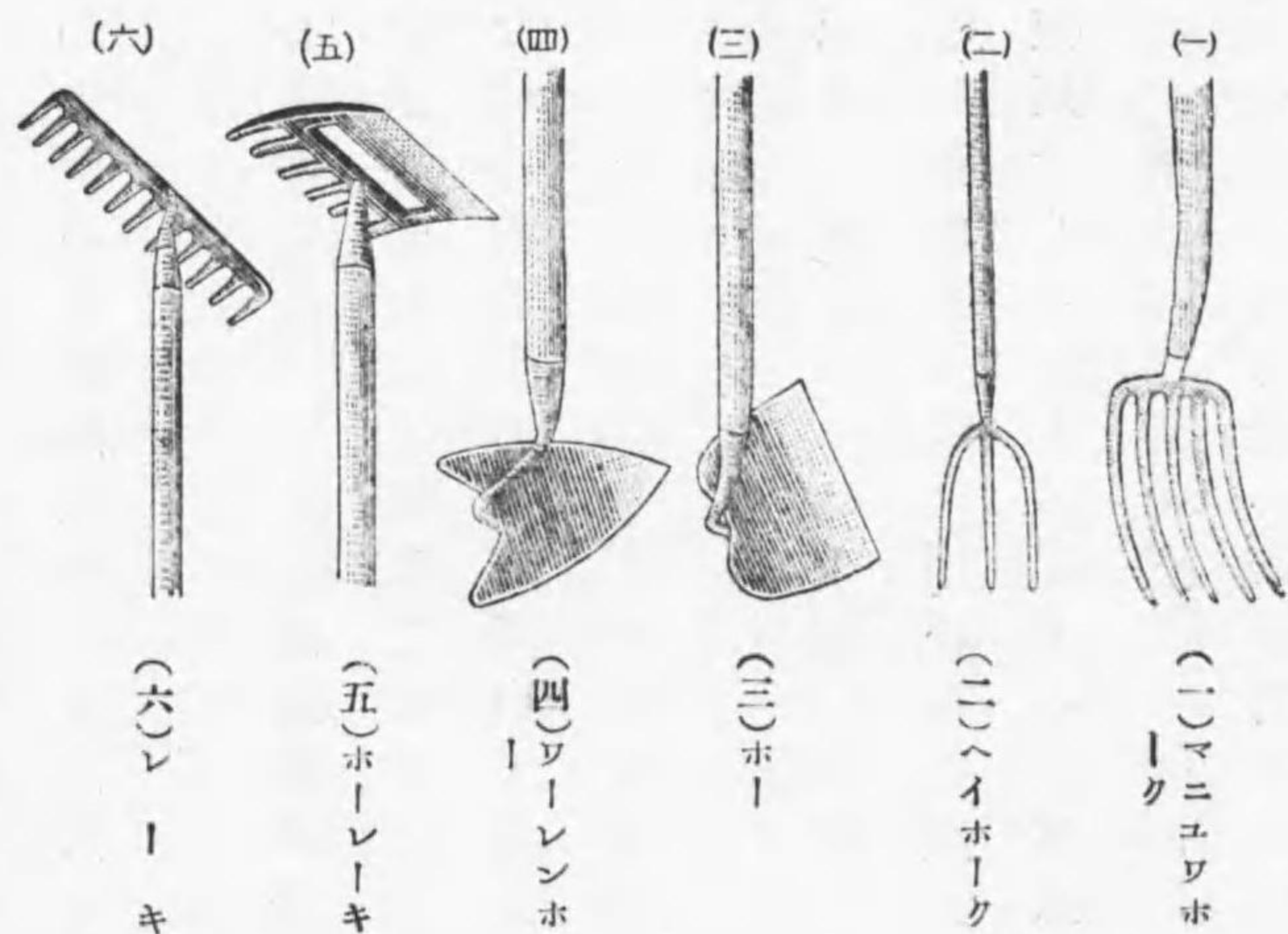
第一 花壇整地用具

鍬の各種



一 鍬 鍬は古來本邦に於て土地の耕鋤整地用として廣く用ひられ來つたもので、器具としては極めて簡單で、且つ堅牢であり、使用にも便利な處から、各種の方面にも利用せらるる事が甚だ多い。而して其の形狀や種類に至つては種々のものが持へられ、各地方に依り、又、其の使用目的に依て其の選みを異にして居る。就中最も多く用ひらるるものは風呂鍬(普通鍬)で

圖 八 十 三 百 第 具 用 地 整



金鍬、備中鍬(窓鍬)、唐鍬、鶴背等があり、先端の平刃のもの、曲刃のもの、さては鋸齒や股金となつて居るものもある。而して柄は樫か山毛櫨の固い材で、長さは三四尺が普通である。更らに地方的に云へば中國鍬、南部鍬、肥後鍬等が普ねく知られ、又、京鍬、尾州鍬、河内鍬、江戸鍬、相馬鍬、秋田鍬などと特別の名稱を附したのものもある。要は土質の如何と各人の力に應じて適當なものを選定するが得策で、概して粘土地では幅狭くて柄の短い角度の小さいものが使ひ易く、輕鬆地では柄が長くて角度の大なるものが適して居り、砂地では幅の廣い鍬が作業に便利である。

二 鋤及びショベル(Shovel) 鋤は専ら

穴掘り、花卉の移植、芝生の縁切り等に用ひらるるもので、鍬を真直にした構造で、直下

に切り卸す押込み作業を爲すものである。シヨベルも亦鋤と略ぼ同様の目的に用ひらるのであるが、前者よりも幾分幅廣く薄手であつて、先端は尖つたものと然らざるものがあり、兩縁は少しく上方に彎曲して土壤や石礫を掬ひ上ぐるのに便利である。

三 レーキ (Rake) 之れは耕起後に於ける花壇の土壤を平坦ならしめ、且つ石礫や雑草等を掻き集むるに便利なもので、鋼鐵製の十本齒、十二本齒が普通で、夫れに操作に便利な様に四五尺の柄が附いて居るのであるが、極めて手輕を要する爲めに造られたものには除草用の熊手があり、大面積の耕地にありては、牛馬に曳かしむる爲めに車輪を附したのものもある。

四 ホー (Hoe) 之れは土壤の膨軟な場所を淺耕し、併せて除草と中耕、さては石礫や雑草等を蒐集するのに用ひられ、鋤よりも簡單で且つ輕快である爲に、園藝用として多く使用せらるるものである。質は鋼鐵製であるから堅牢であり、其の形狀には種々あるが、普通は楕形を爲して平面で、刃の部分は一直線を爲し、脊に曲つた金具を附けて、其の端に四五尺の柄を附する様になつて居る。又、特殊なものとしては幅狭く三角形を爲したワーレンホー (Warren Hoe) があつて、栽植せられた花卉の間を手入

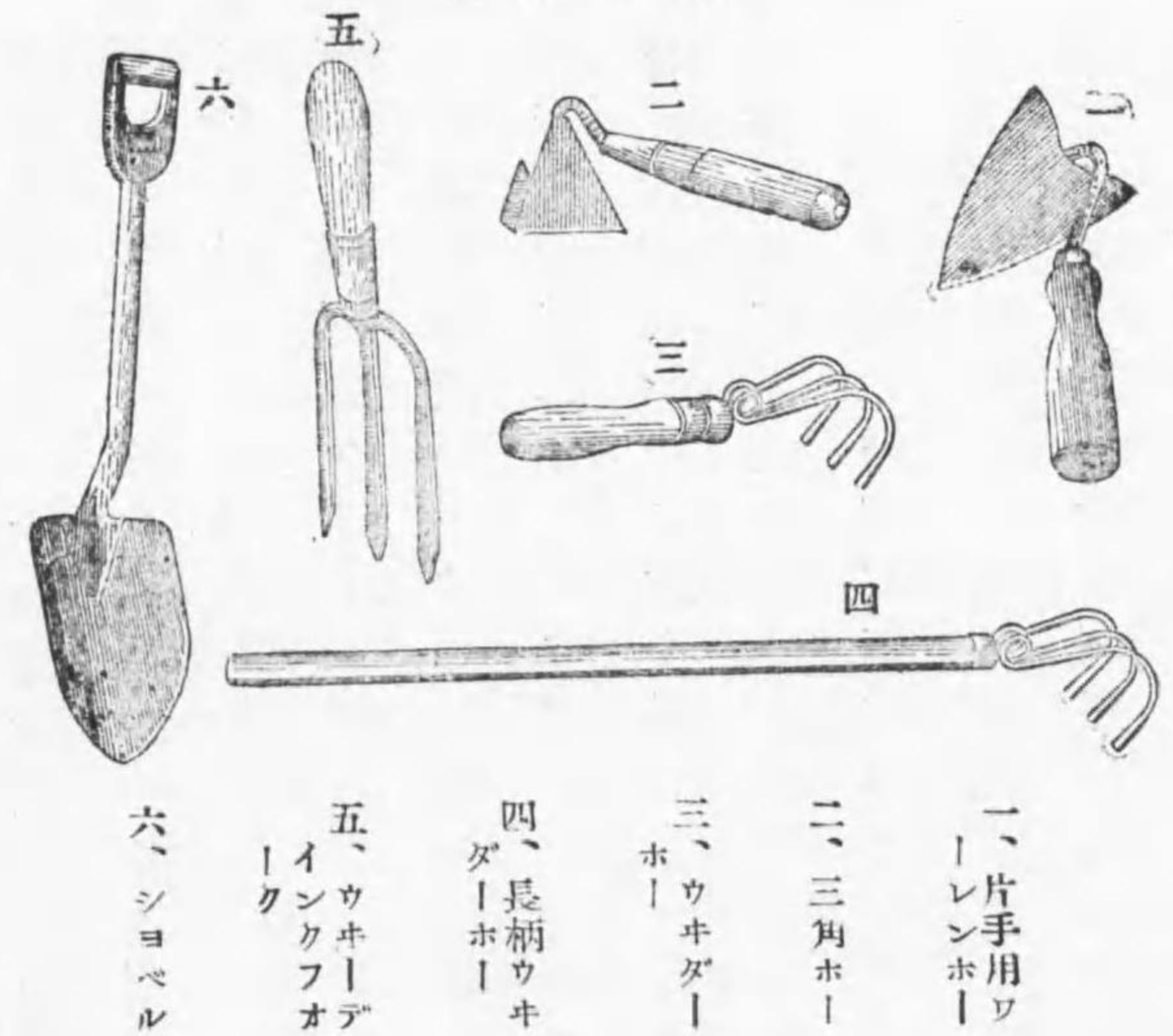
れするのに適して居り、更らに手輕なものとしては三角ホーとか片手用のワーレンホー等があつて小形の除草器として用ひられて居り、前のレーキと組合せになつたホーレーキ (Hoe Raskie) も亦園藝用として可なり廣く使用せられて居るのである。

五 フォーク (Fork) 之れは堆肥や厩肥、さては刈草等を取扱ふのに便利なもので、鋤では挿入に困難な場合に用ひらるる器具である。通常四齒の稍々彎曲した鐵尖棒の脊に柄を附したものである。

尙ほ極めて小形のフォークがあつて、専ら花卉類の手入用具、殊に移植用に供せられて居るが、其の先端の一寸許り曲つたものは特にウキーディング、フォークと稱して片手で行ふ除草器として重寶なものである。

六 鎌 古來、本邦では鋤と鎌とさへあれば大抵の農業は行はれたもので、鋤の耕起整地と鎌の除草、手入收穫とは單純なる簡易農業に於ては最も重寶がられたものである。従つて鎌の使用が廣がつて來ては、其の目的に依て構造も多少異つたものが生じ、地方的にも各種のものが造らるるに至つたのである。其の構造を大別すると刃の殆ど直線を爲した信州鎌と刃の半月形を爲す越前鎌とに分たれ、小鎌にありては刃の長さが四寸以内で、大鎌にありては一尺以上にも及ぶが、普通に用ひらるる

圖 九 十 三 百 第
具 用 地 整

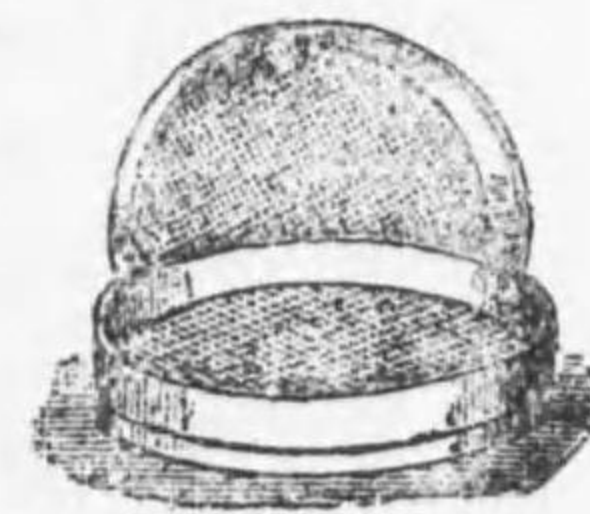


中、小として用ひられ、尚ほ種子の選別には細目のものが種々出来て居るのである。一方の開いたものが使用せらるる。

中鎌は大抵七八寸位である。尚ほ刃の部分に鋸齒と爲つて居るものもある。

七 篩と箕 篩は耕起した土壤中にある石礫や雑草等を選別するのに必要なもので、一般に直径は一尺位で、篩の目には大小種々あるが、栽植する花卉の種類に依て土壤選別の程度を異にするものであるから、豫め各種のものを取り揃へて置けば至極便利である。普通には五分目三分目一分目が大

圖 十 四 百 第
篩 土

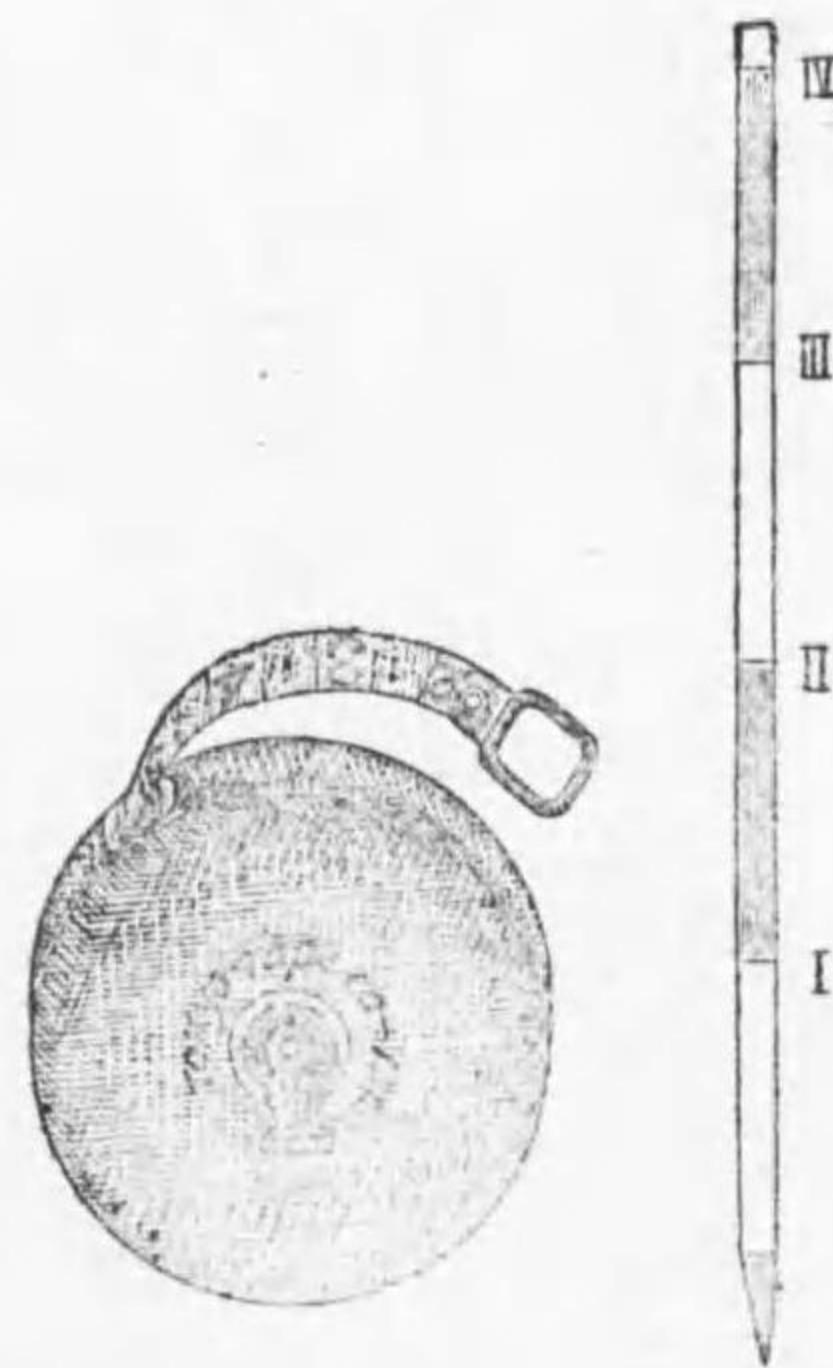


尚ほ此の外、運搬用具として孤輪車や繩製の擔架、さては畚等が開墾、整地には間接に必要なものである。

第二 花壇區劃用具

一 卷尺 卷尺は距離を測るに多く用ひらるるもので、普通は幅五分位の強靱な

ループと尺卷 圖一十四百第

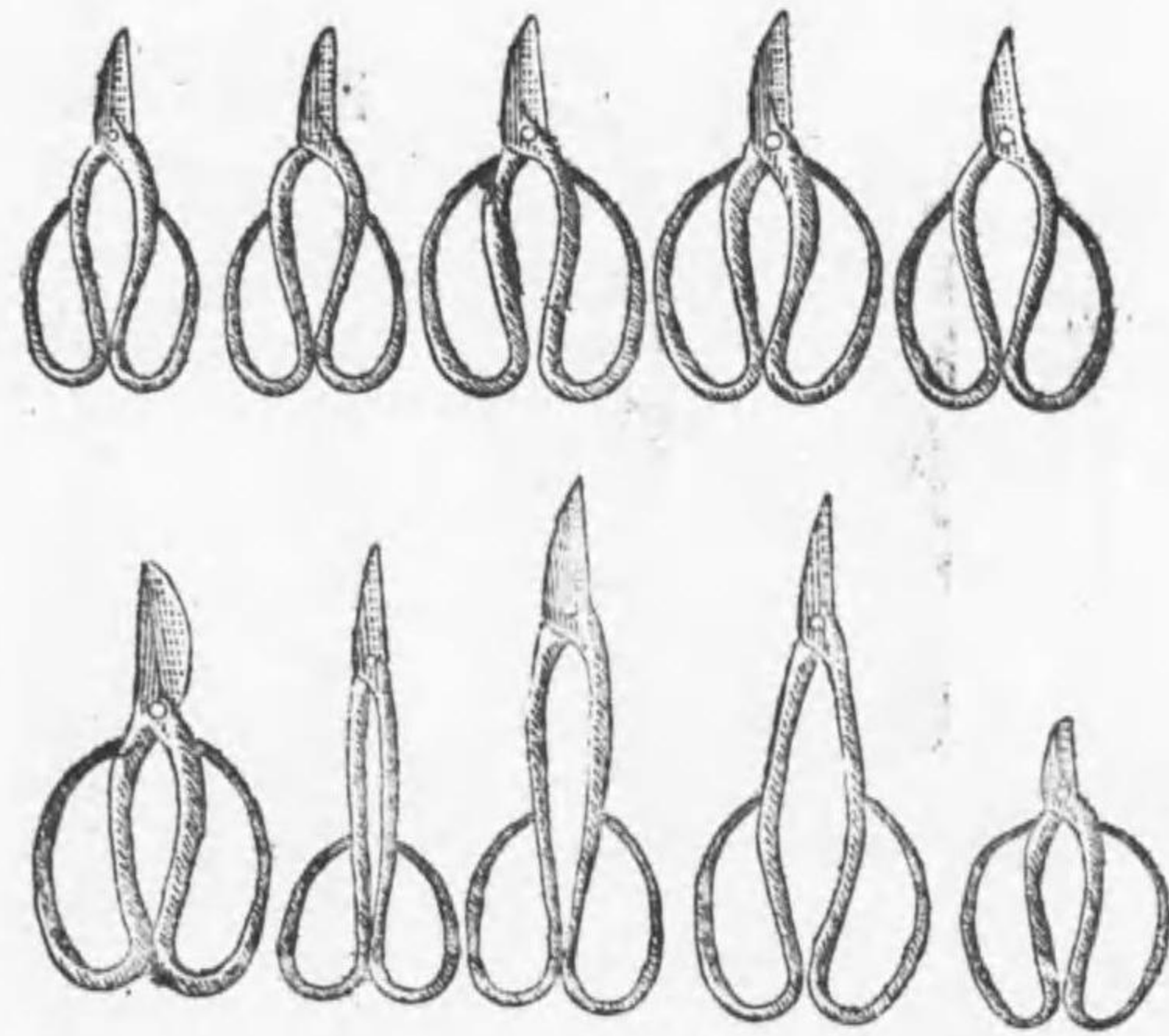


る麻布に防水劑を塗つて紐に尺度を盛り、取扱と携帯とに便ならしめんが爲めに、木製或は革製の框内に巻き込み、卷舒自在に装置せられたもので、其の度盛りには表に間合、裏に尺寸を示したもので、或はメートルを刻んだものがある。又、麻布の外、精確と強固とを要する時には鋼製、或は織込の卷尺を用ふる事がある。

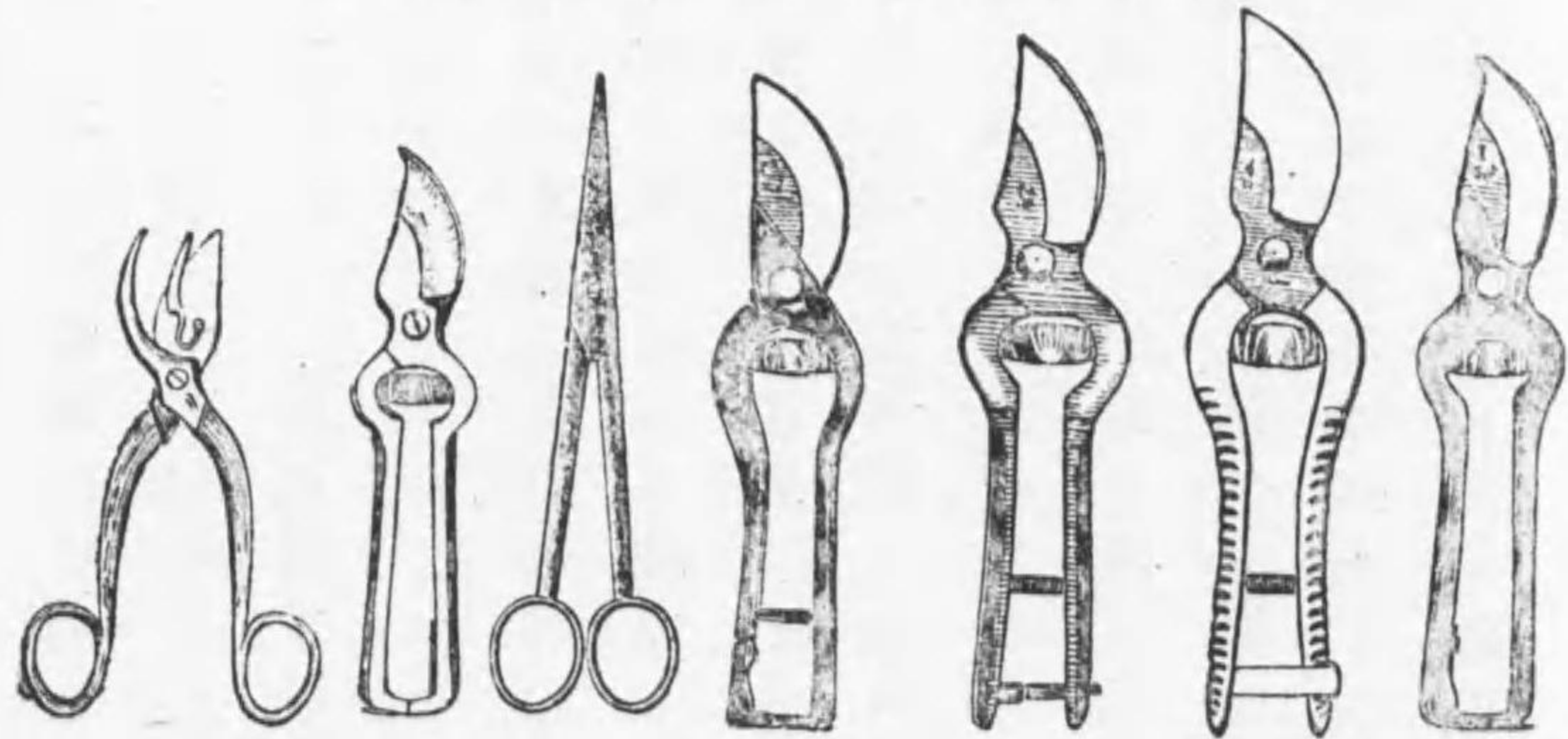
二 繩 一々卷尺を用ひて詳細なる距離を定むる必要の無い場合は、繩に粗略なる尺度の印を附して用ふるが簡單で宜敷く、繩は棕梠繩が丈夫で細いから取扱ひに便利である。又、藁繩の細いものも屢々用ひらるる。

三 ポール 之れは方向を定むるに必要なもので、太さ一寸内外の圓い木桿で、桿

鉄 和 圖二十四百第



種各の鉄洋 圖三十四百第



七、操花鉄

六、剪定鉄

五、幼果間引用鉄

四、同

三、同

二、同

一、剪定鉄

(右より)

一 鉄 之れは主として花卉の枝、葉、莖及び根等を剪除するに用ひらるるもので、本邦では古來花戸の使用して居る植木鉄があるが、近時は洋風の剪定鉄も盛んに用ひられ、又刈込鉄、芝刈鉄、高枝切鉄等の特別の鉄もある。而して芝刈鉄には手押式のものや畜力、動力に依るものなどもあつて、大面積の刈芝用に供せられて居る。

第三 花卉手入用具

四 杭 之れは區劃せられた花壇の隅角部及び中心點に打ち込んで、其の形状の不明にならない様に保存する爲めのもので、普通は直徑五六分位の木又は竹の杭が用ひられ、下方は地面に入り易い様に削り、頂部は平滑にし、長さは四五寸位が適當で、之れを杭頭五分位残して打ち込んで置くが宜敷い。而して大規模の花壇にありては隅角部に裝飾的の石の短柱を用ひ、中心には強調材料として樹木を栽植するか、或は杉丸太の直徑一寸内外のものを目立たない様に打ち込んで、形状の維持を保たしむる事もある。

端には尖つた鐵靴を着け、地上に突き刺すに便利にしてある。長さは鐵靴の上の全長が通例六尺、九尺、十二尺で一尺毎に交々紅白を以て塗り、遠方から能く見得る様にしてある。

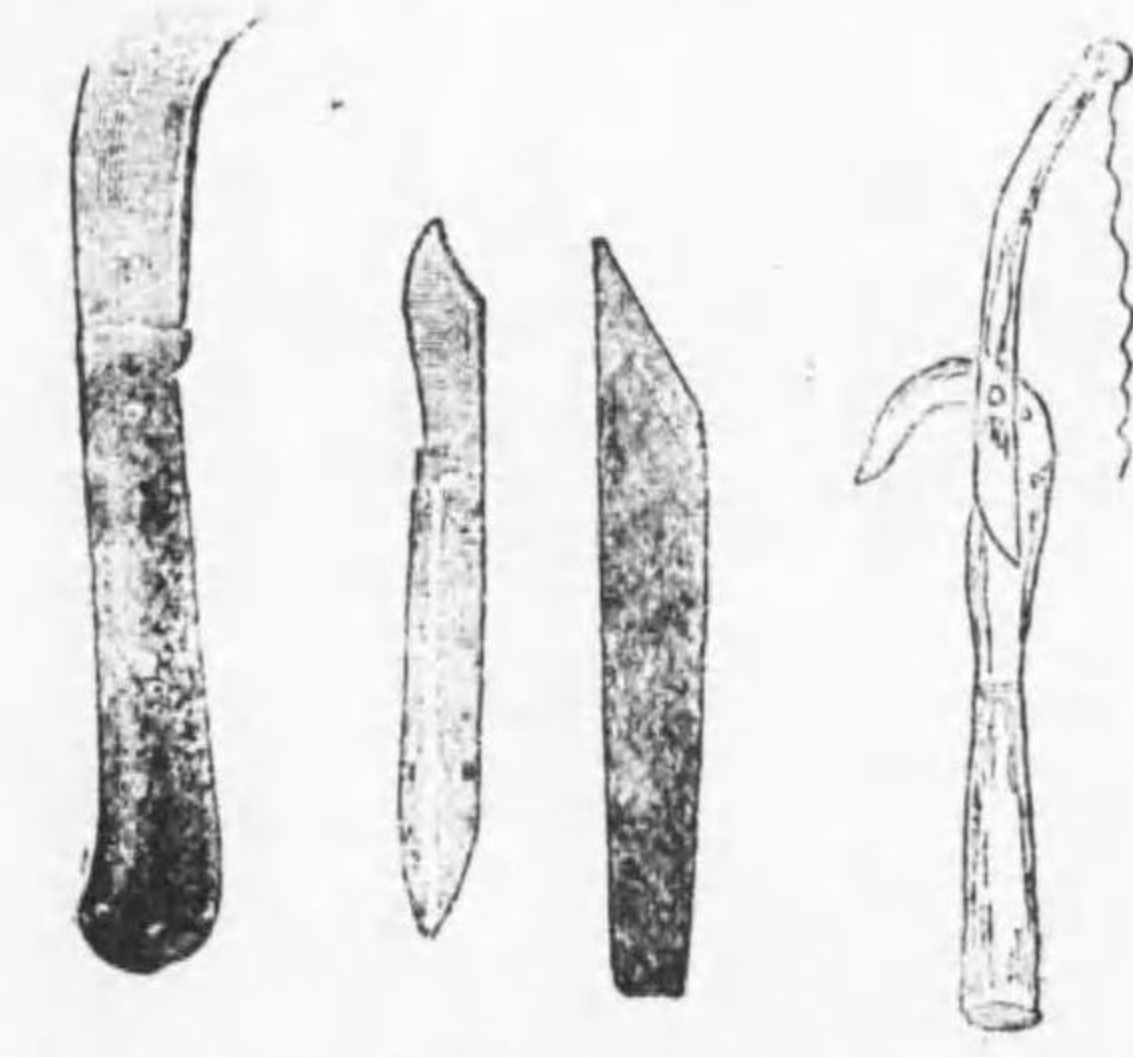
二 小刀 之れは主として接木や挿木を行ふ際に多く用ふるもので、枝、莖の切口を滑らかにする爲めに、成る可く薄刃のものが尙ばれ、普通には切出しを用ふるのであるが、特に芽接を行ふ場合には、芽接ナイフと稱して一端が剝皮に便利な篋状を爲したものが用ひられ、又、剪定刀なるものがあつて、鋏の代用を爲す器具も拵へられて居る。

三 鋸 之れは前記の鋏や小刀を用ひ得ない木質の花弁を剪除する場合に使用

せらるるもので、普通は植木鋸として細形のもので用ひられ、又、弦掛鋸や折込鋸なども夫々使用上に特徴を有して居る、特に竹切用としては齒の餘り兩側に突出せずして細かい目立のものが適して居る。

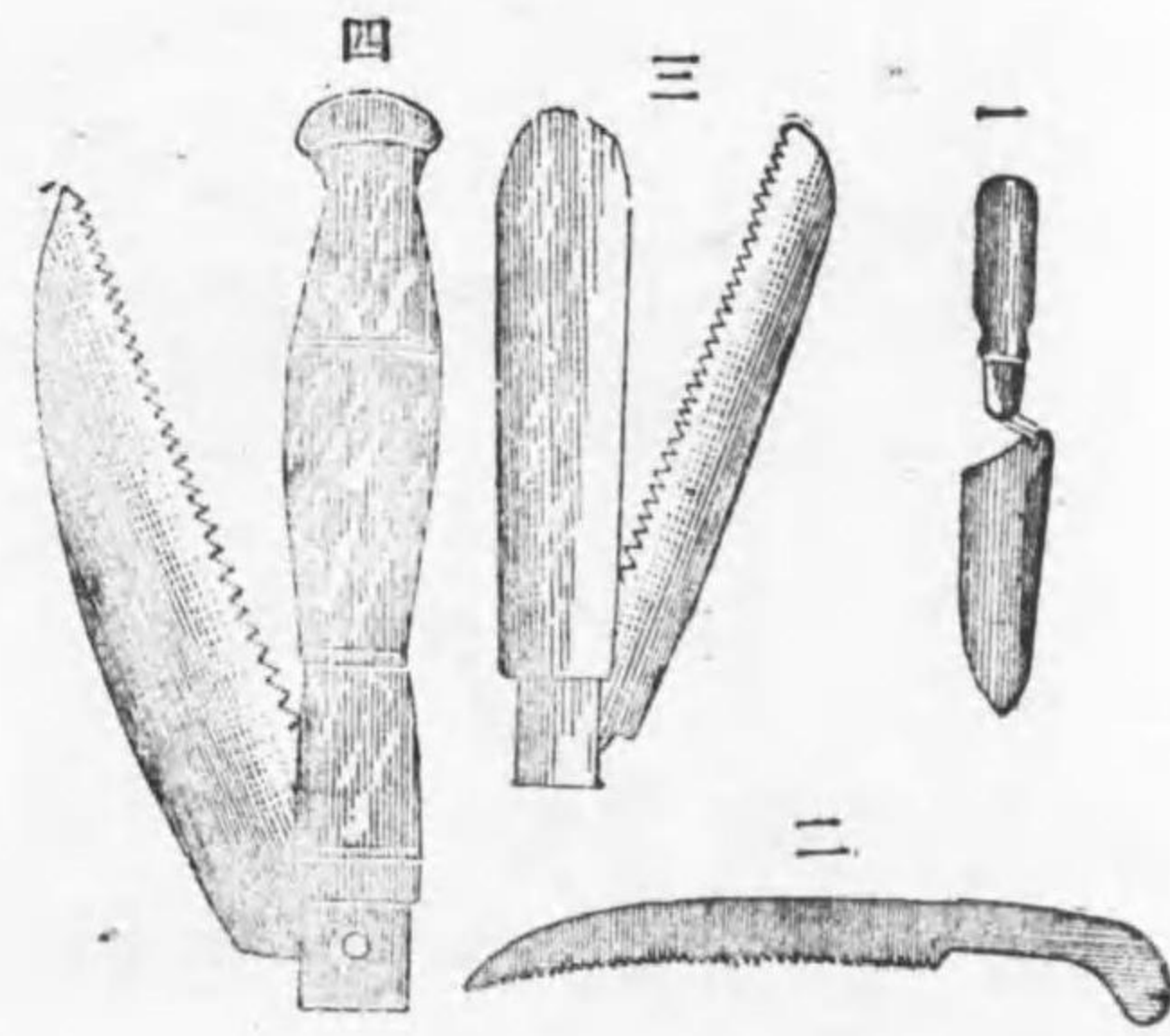
四 移植鏝 之れは其の名の示す様に花卉類を丁寧に移植する場合に、根部を傷むる事が少なくして土粒を附着せしめた儘掘上ぐるに便利なもので、又花壇内の土を膨軟ならしめ、或は小穴を掘るに多く用ひらるるものである。其の形はシヨベルを縮

器 枝 整 圖 四 十 四 百 第



刀定剪 フイナ接芽 シ出切 器剪枝高

圖 五 十 四 百 第



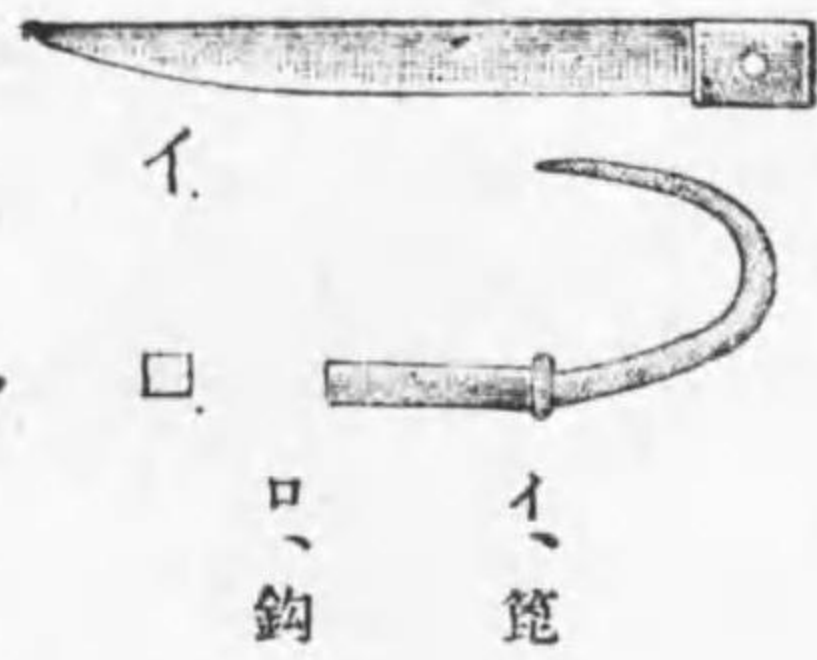
一、移植鏝
二、枝切鋸
三、折込鋸
四、同上

小した有様のもので、片手で使用し得られ、刀身の上縁は少しく上方に彎曲して、花卉や土粒の保持に宜敷く、長さは五六寸が普通で、夫れに柄は四寸位の長さで、能く金物の部分の舌嘴と接着して居るが破損の患を尠くするものである。

五 鈎と篋 鈎は除草用の熊手の齒を一本に爲した形のもので、芝生の中の雑草や深根性のものを驅除するのに宜敷く、附近に栽植せられてある花卉類を損傷する憂が尠なく、且つ鋼鐵で造られたものは頗る堅牢で石礫等の除却も併せ行はれ、至極便利な器具である。篋も亦芝生内の雑草を取り除くに用ふる器具で、普通竹製の可なり厚味のあるもので、先端を尖らして土中に侵入せしむるに容易な様に出て居る。

六 如露 之れは専ら花卉類に灌水を行ふのに用ひらる

圖 六 十 四 百 第



イ、篋
ロ、鈎

器霧噴 圖九十四百第



(左圖)新式自動噴霧器

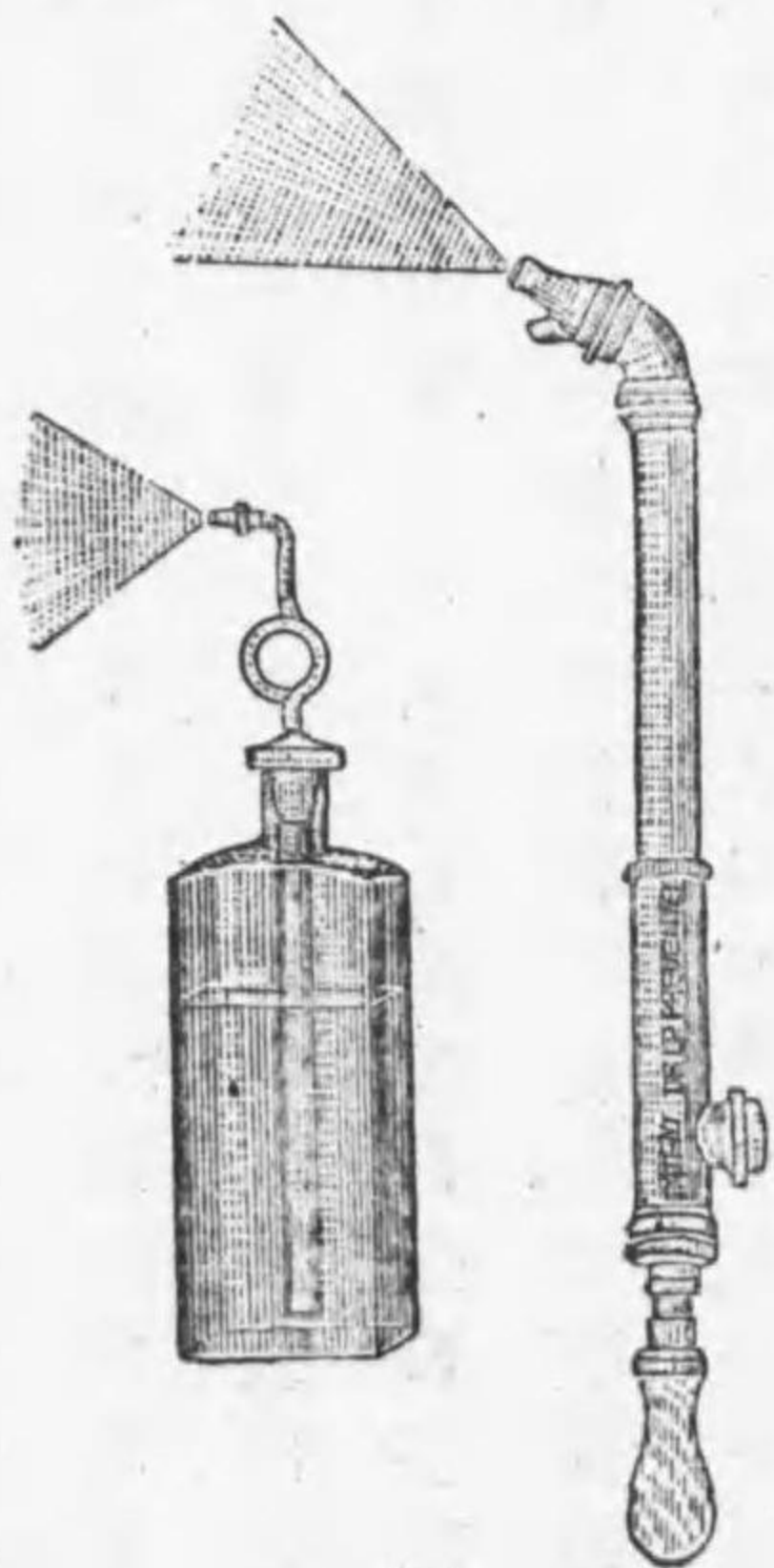
(中圖)新式半自動噴霧器

(右圖)サケセス形噴霧器

第四 病蟲害防除用具

する爲めに張線器や針金切ペンチ等があれば甚だ便利である。

圖十五百第

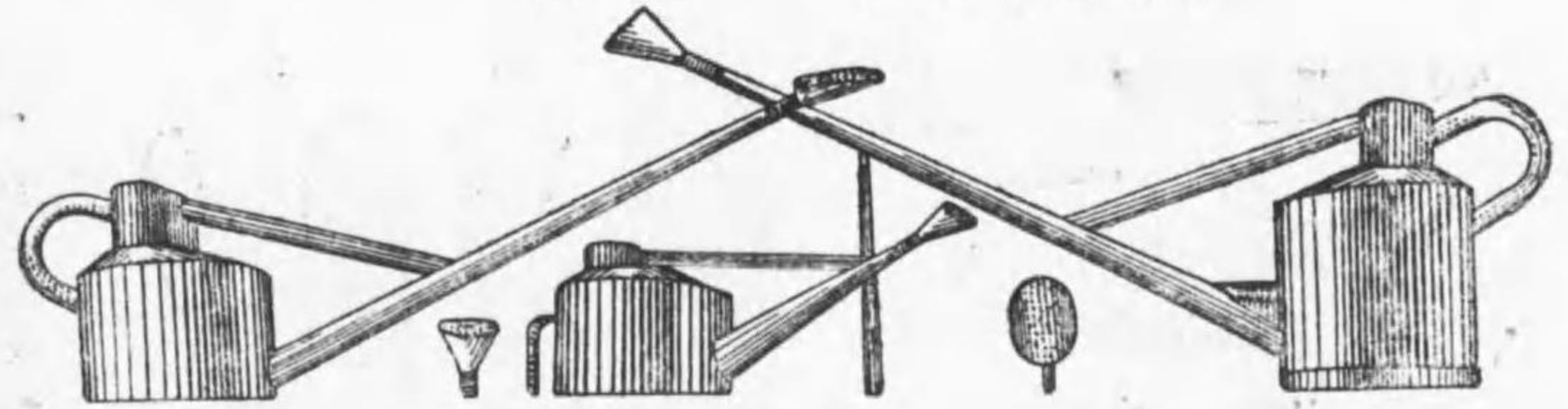


(右圖)アルポール

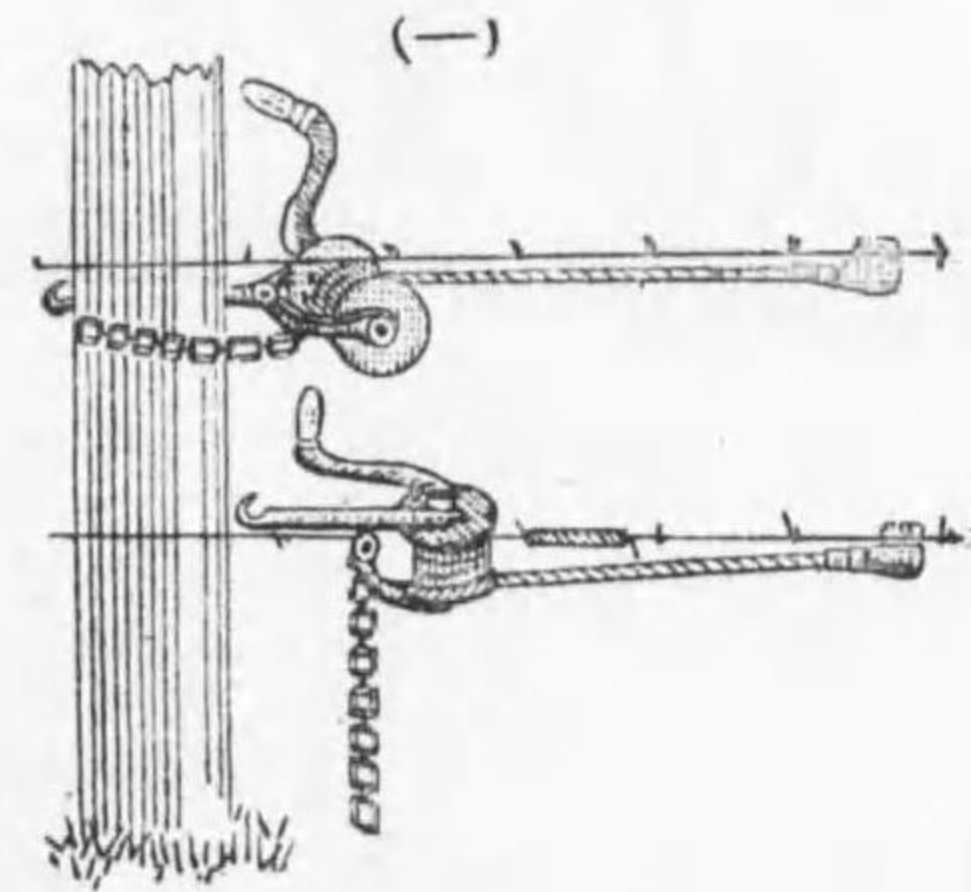
(左圖)スプレーヤー

一 噴霧器 之れは主として殺菌劑や殺蟲劑等の水溶液を花卉に萬遍なく撒布する爲に成る可く面積を廣くする必要から之れを雲霧狀にして撒布せしむる操作が必要である。夫れで水の出口に於て噴霧の狀態に爲さしめんが爲め、一方からポ

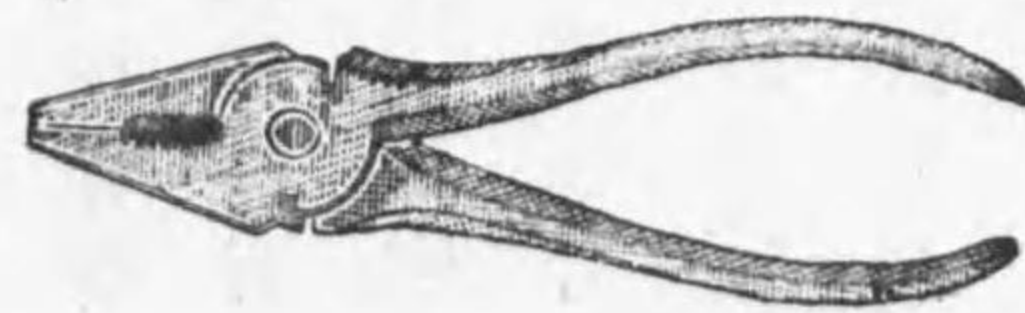
露 如 圖七十四百第



圖八十四百第



(一)



(二)

(二)ペンチ

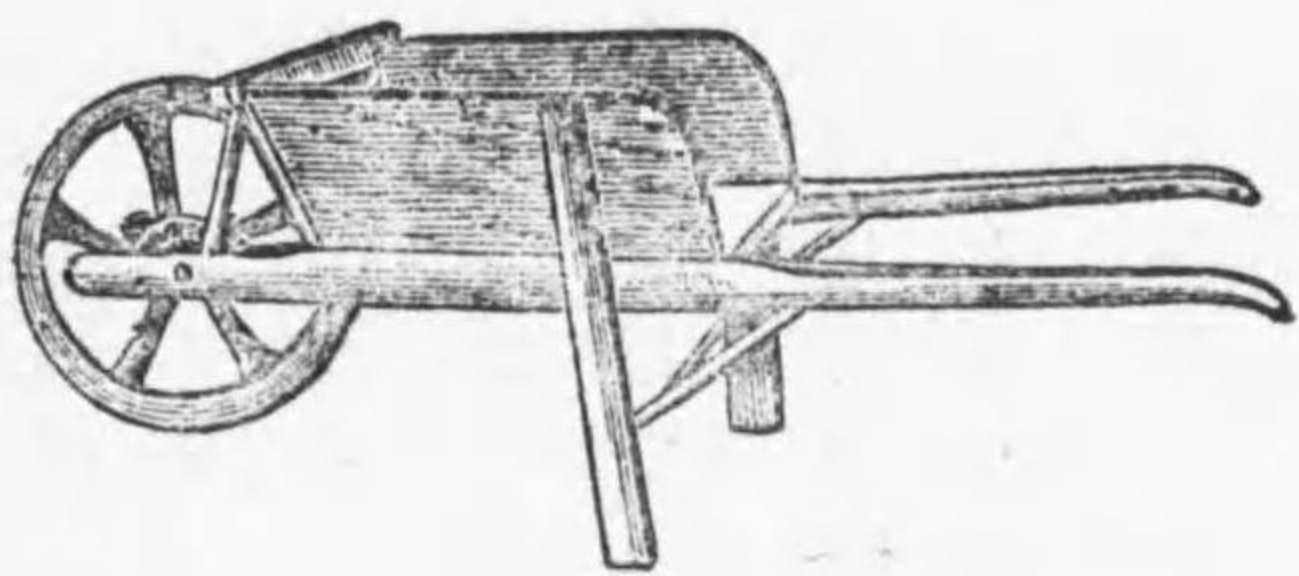
(一)張線器

ふのに針金を用ひ、或は周圍の垣根を針金で境する様な場合には之れを完全に緊張

もので近時は大抵亞鉛製のものが多く、大きさには種々あつて、小は五合入位から、大は四升入位のものがあり、形にも圓形、橢圓形、覆の二段と爲つたもの、等色々あつて一様では無く、水の排出口(蓮の實と俗に稱ふる部分)は取り替へ得る様になつたものも多く、而して之れには少しく先端の傾斜したものと直角のものがある。又、其の膨らみ工合や目の刻み方にも種々異つたものがある。

尚ほ以上の外、花卉の手入用具としては、灌水及び施肥の爲めに擔ひ桶と柄杓とを必要とし、結付用としてラフイヤ、蘭草等が必要であり、又、支柱を行

圖三十五百第：
車輪孤



以上の外、一般園藝用として分區園の表示、種類の解説、品種の區別等に名札(ラベル)を用ふる事があるが、之れには木製にペンキを塗つたものが普通で、其の上にはペンキで記すか、ガリデン、ペンシルで書く事が多く、又アルミニウム製、亜鉛製、セルロイド製等のものがあり、形には種々雑多で、又人々の好みに依つて色々趣向せらるるものである。

圖二十五百第
器蒸燻



入れ、一方に吹子(ふいご)を附着せしめて置けば他方の出口から粉が擴大して撒布せらるる様になつて居る。尚ほ此の他病蟲害の防除用具としては、特に蚜蟲を驅除するに用ふる蚜蟲驅除器や病菌の燻殺に用ふる燻蒸器さては刷毛や筆ブラシ等も亦藥劑使用の防除器として、又は葉掃除用として花卉栽培上に用ひらるるものである。

ンブ式で空氣の壓力を加ふると共に、他方に於て極めて細かい口から一時に多量の水氣を放出せしむる様に拵へられた噴霧器が盛んに用ひらるるに至つたのである。而して其の目的に依りて單に霧狀に擴大せしむるが宜敷いものがあり、或は放出の壓力に依りて植物の被害部に強く當るのを必要とするものがあるので、口金に各種の様式が拵へられ、又全體の構造に於ても一度ポンプを押して置けば暫らく噴霧の状態を續くるものがあり、絶えずポンプで壓力を加へねば放出しないものがある。尚ほ携帶に便利な様に背囊式に出來たものもある。

近來は又丈夫で輕便なポットル、スプレーヤと稱する小型のものが出來て、鉢物や苗物類に灌水とか消毒防除劑を撒布するのに多く用ひられて居るが、之れは管の中途に喇叭の様に一回廻轉せしめてあつて、水を充たした瓶の中に入れて上下に動せば自然的に空氣の壓力に依つて瓶内の水が雲霧狀と爲つて外方に飛散するのである。

圖一十五百第



二 撒粉器 之れは硫黃華の様な粉末の儘で用ふる藥劑を撒布するのに使用せらるるもので、其の構造は中央部の圓筒に粉劑を

第四編 花卉各説

花壇の形式が完全に成立したならば次ぎに来る可きものは内容の完備にある事で、夫れには主材料となる可き花卉を配合よく充實せしめ、其の健全なる育成と管理とが大切なる役目である。既に各種の形式を持つた花壇に植ゑ込まれる可き花卉の配植に付ては、今迄に多少は述べて来たのであるが、更らに普通一般の花壇に用ひらるる主なる花卉の性状、種類、育成法等を記述して、花壇經營上に於ける参考資料として置かう。

第一章 球根類

球根類 (Bulb plants) は何れも多肉の地下莖、若くは肥大した地下根を有し、多年草の一種とも云へるが、花卉栽培上に於て、播種法に依るよりも、球根の分植に依る方が其の操作が簡便であり、且つ開花に至る年限の早いもので、其の範圍は廣狹の意義に依

りて異なるのであるが、之れを廣義に解釋する時は次の各類を包含するものである。

(一) 鱗莖 (Bulb) 之れは地下莖が變形して甚だ短かくなり、殆んど圓盤狀を僅かに呈するに過ぎないで、其の上部に養分を蓄へた多肉の鱗片葉が多數重なり合つて居る。而して花莖は主として鱗片葉中の貯藏養分を攝取して生育し、且つ美花を開くものである。

水仙・ヒヤシンス・チューリップ・アマリリス・タマスダレ・ギボウシ・スノードロップ・トリテリア・百合・ムスカリ・シラー等。

(三) 球莖 (Corm) 之れも亦地下莖の變形して甚だ短かくなつたものであるが、鱗莖と異なる處は盤狀莖に養分を多く貯へて、外部の鱗片葉は單に薄い膜狀を爲して附着するに過ぎないものである。

サフラン・グラデヲラス・フリージア・イキシヤ・トリトニヤ・パピアナ・モンブレチヤ等。

(三) 塊莖 (Tuber) 之れは地下莖の肥厚せる事は前二者よりも一層甚だしく、此の中に多量の貯藏養分を包含し、退化した葉の小さいものが其の外方に點々と附着して居るものである。

球根ベコニヤ・カラヂユーム・シクラメン・アネモネ・ラナンキュラス等。

(四) 根莖 (Rhizome) 之れは養分を貯藏した莖が地下を横に水平的に發育して行くもので、略ぼ圓筒形を爲して節を有するものが多く、先端及び節々から新芽を抽出して花を附け、又、根を地下に發生するものである。

イリス・鈴蘭等

(五) 塊根 (Tuberous root) 之れは地下根の著るしく肥厚して貯藏養分を包含して居るもので、其の上部の舊莖の基部に新芽を發生するものであるから、其の採取の場合には新芽發生の部分を損傷しない様に注意す可きである。

ダーリヤ・カンナ等

而して球根類を植ゑ込む時期には春植のものと秋植のものごとがあり、又、花卉の性質としては耐冬性のものと不耐冬性のものごとがある。夫れで若し不耐冬性のものを冬季に保存して生育せしむる爲めには、木框か温室を必要とするものである。

次に花壇に栽植せられて美觀を呈する主なる球根類の植込時期を示して見ると。

(一) 春植球根

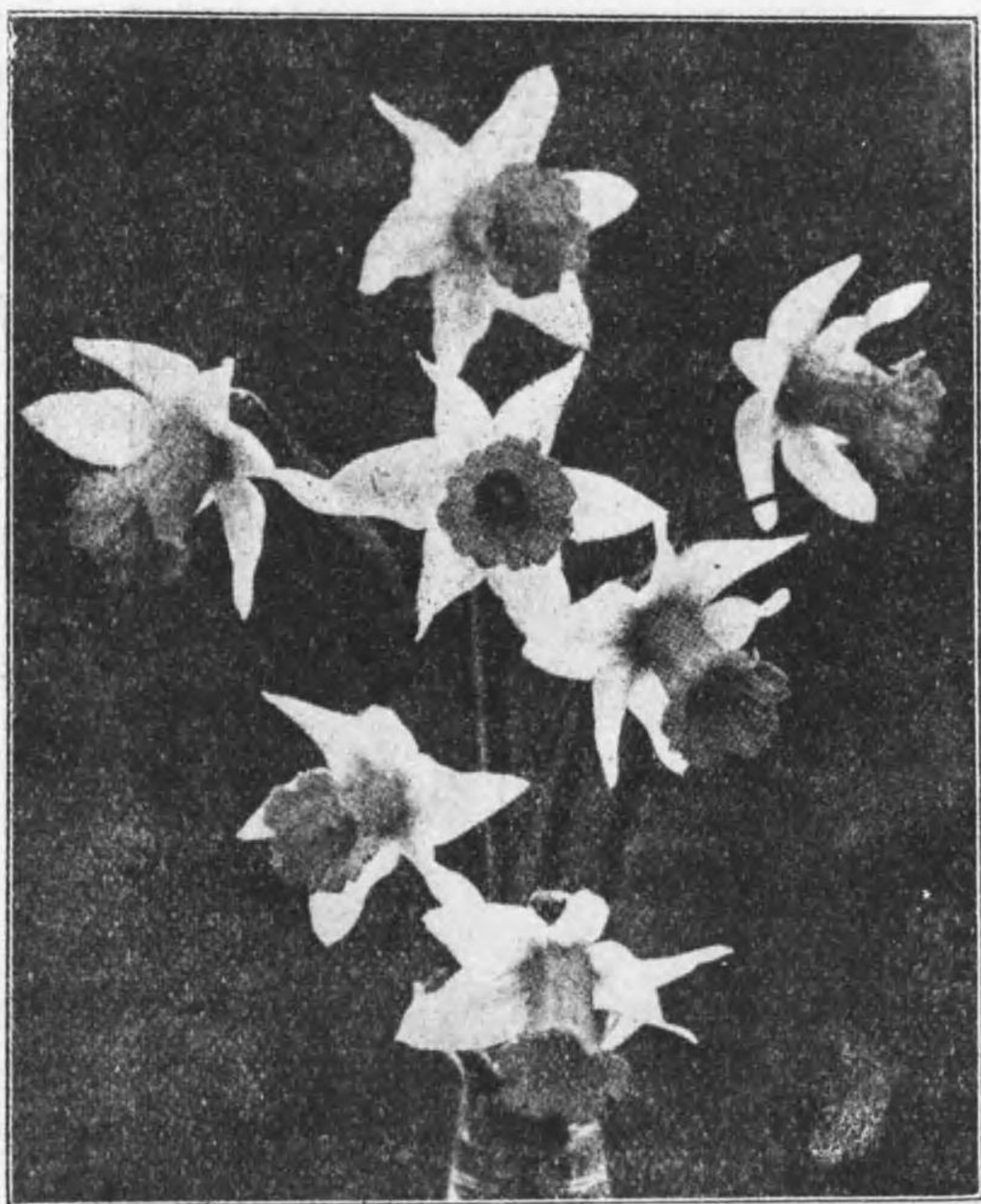
アマリリス・玉簾・セントプレチャ・トリトマ・ギボウシ・アガパンサス・ダーリヤ・カンナ・アロキシニヤ・アキメネス・チューベロース・グラザナラス・チカグリヤ・フリージャ

等

(二) 秋植球根

アネモネ・ラナンキュラス・水仙・玉簾・スノードロツプ・オキザリス・クローカス・イキシヤ・トリテリヤ・ヒヤシンス・ムスカリ・シラー・チューリップ・百合等

仙水咲叭喇 圖四十五百第



尙ほ球根に依りては、春秋何れに於ても植ゑ付けても差支へないものがあり、又同一の球根でも地方に依つては、寒氣や霜雪等の爲めに其の植ゑ付けの時期を異にしなければならぬものがある。

一 すみせん (水仙)

(石蒜科)

(學名) Narcissus sp.

(英名) Narcissus or Daffodils

〔解説〕 耐冬性の球根植物で、高さ一尺乃至二尺に達し、葉は細長くて多肉の筥状を爲し、早春葉叢の間から花莖を抽出して開花する。花の特性としては花冠の中心

に蜜槽即ち顯著な副冠又は喇叭 (Corona or Trumpet) を有し、之れを圍んで六枚の花被が内外二層に排列せられ、色は白か黄色で、口紅のものもある。

〔種類〕 水仙の観賞用に供せらるるものは三十種位で、ベーカー (Baker) 氏は花冠

と副冠との長さに依つて三つに大別して居る。

一 大喇叭咲水仙 (Magnicoronat)

は副冠が長大で花冠以上に及び、頗る雄大なる風姿を現すものである。

(イ) *N. Bulbocodium* L. (英名 Hoop petticoat narcissus) は一莖一花で鮮黄色を帯び副冠が甚だ大きく、殆んど全縁で四月頃に上向して開くのである。變一種に白色花のものがある。



仙水紅口 圖五十五百第

(ロ) *N. pseudo-narcissus*, L. (英名 Common Daffodil or Trumpet Daffodil or Lent Lily) は一莖一花で淡黄色を呈し、副冠は濃黄色で甚だ長く、縁邊には鬚があり、三四月頃に上向して開くのである。

變種には副冠の裂けた八重咲のもの及び、白色矮性なモスチャタマス (*N. P. var. Moschatius*) 俗に白色西班牙水仙と云ふのがある。

二 中喇叭咲水仙 (Mezocoronat) は副冠が花被の半分位の長さを有するもので、恰かもコップ状を呈するものである。

(イ) *N. incomparabilis*, Mill (英名 Pebrase Daffodil) は葉の細い帯白緑色のもので、花は星咲で橙黄色を爲し、日蔭にも能く育ち三四月頃に水平に開花するものである。

(ロ) *N. triandrus*, L. (英名 Cyclamen-flowered narcissus) は葉片極めて細く、花は白色で四月頃に數個を垂下して着け、花瓣のみが折れ返つて上向するので、シクラメンの花に似て居る。

三 淺黄咲水仙 (Parvi Coronat) は副冠が極めて淺く花被の半分以下に過ぎない

で、且つ花も小さくて香氣に富むものが多い。

(イ) *N. tazetta*, L. (英名 Polyanthus narcissus) は本邦在來の水仙で開花が甚だ早く、一花莖に數多の花を着け頗る香氣が高い。此の種に三通りあつて、花冠が白色で副冠が黄色のもの、花冠副冠共に白色のもの及び共に黄色のものがある。而して本邦の南部海岸に自生するのは最初の白と黄とに開くもので、又支那水仙 (Chinese Sacred Lily) と稱して水盤に育成するのは *Var. Orientalis*, Hort. たる名が與へられて居る。

(ロ) *N. Jorguilla*, L. (英名 Jorguilla) は長壽花と稱するもので、葉は深綠色で細長く、一花莖に二乃至六花を着け少しく皺曲して居り、色は鮮黄を呈して芳香に富み、四月頃に開く、變種としては八重及び矮生種がある。

(ハ) *N. Poeticus*, L. (英名 Pheasant's Eye narcissus) は本邦で口紅水仙と稱するので、葉は扁平で白粉を帯び、一花莖に一個の花を着け、白色で副冠の縁邊は波状を爲して紅色を呈するのが特

微である。これには早咲、遅咲があり、尚ほ變種として八重がある。

〔栽培〕 水仙は球根を植ゑ付くるのが簡單で宜敷く、土地は成る可く午後の日を餘り強く受けけない半蔭の處が望ましく、土質は少しく重い壤土が適して居る。植込

（ソオシンアヅ）重八仙水 圖六十五百第



みは九、十月頃が適期で、先づ花壇を能く耕起して土塊を碎き、夫れに堆肥、骨粉、過磷酸石灰、草木灰等を混じ、球根と肥料と直接觸れない様に注意を爲し、深さ三寸、各球の距離は大球で五六寸、小球で三四寸が程度であらう。覆土は浅い方が宜敷く、寒い地方だと稍々厚く覆ふて、更に藁や落葉等で防寒の設備が必要である。水仙に於ては各種の混植は成る可く避けて、一區劃一種類が宜敷いやうである。芽が出初めたらば徐々に土を排し、花前と花後に稀薄な油粕の腐汁を一二回與ふると宜敷い。花は決して結實せしむる事なく、

五月中には大抵葉が枯れ懸るから、全く枯れない中に花壇のものは掘り上げ、其の儘日蔭で乾かして後葉を去り、秋迄冷所に貯藏して置くのである。

然し花壇以外の芝庭や樹間、さては山麓、池畔等に植ゑ込んだものは毎年掘り上げる必要はなく、三四年は其の儘と爲し、唯だ肥料だけは充分與ふれば宜敷く、五年目位に掘り上げて球根の整理を行ふのである。

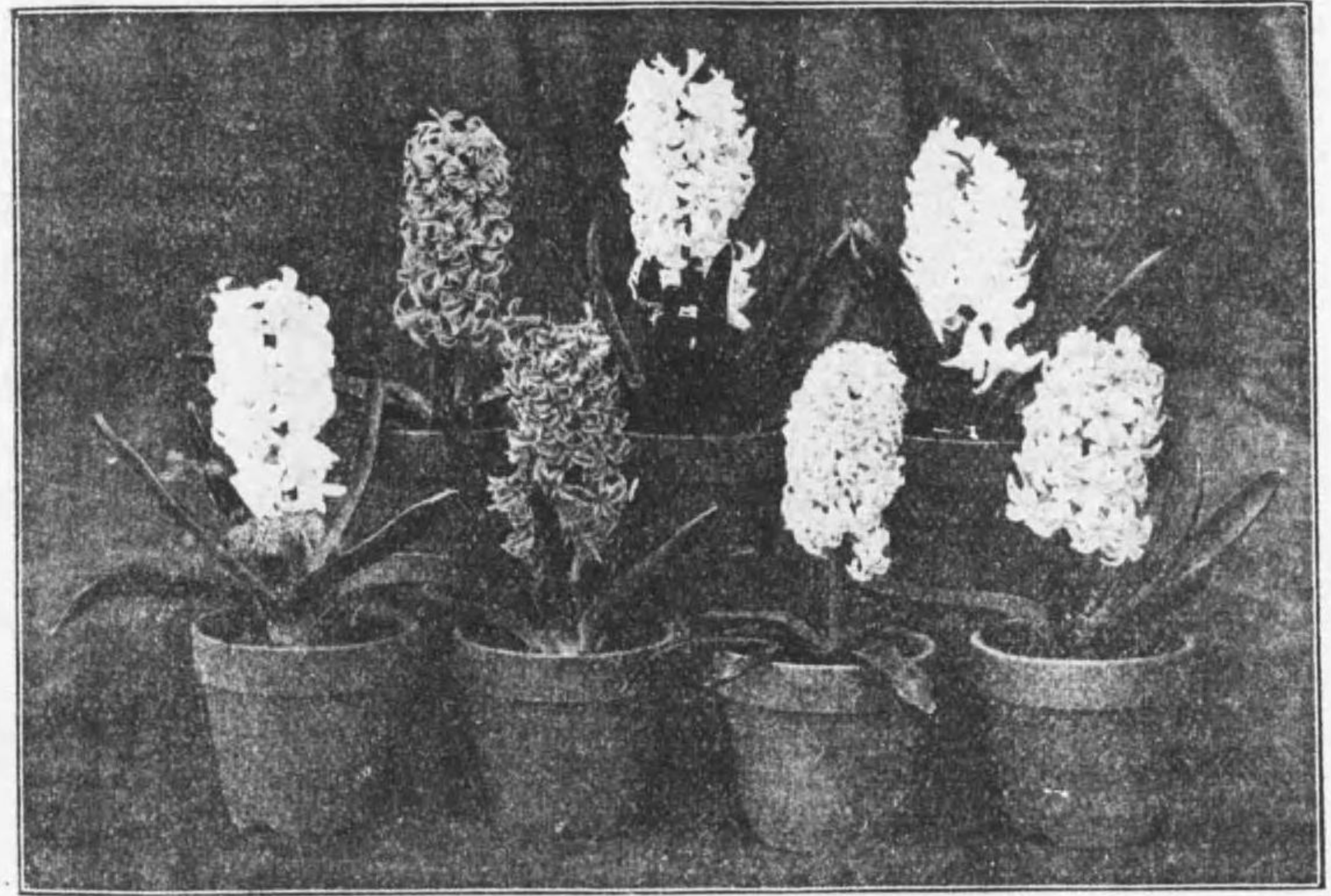
一 ヒヤシンス（風信子）（百合科）

（學名） *Hyacinthus orientalis*, L. （英名） Common Hyacinth.

〔解説〕 耐寒性の球根植物で、高さは一尺内外に過ぎず、早春に葉叢の間から花莖を抽出し、其の周圍に多數の鐘狀の小花を着生し、恰かも一つの圓筒花を開いた様な美觀を呈するものである。花には一重、八重があり、白、紅、紫、綠、黃等の種々の色彩を現出し、強烈なる佳香を放ち、早春の花壇には必ず無くてならないものである。

〔種類〕 「ヒヤシンス」の種類は三十餘あるが、園藝用として普通一般に賞美せられて居るのは東洋種 (*H. orientalis*) の改良せられたもので、現今では和蘭で盛んに栽培して各地に搬出せらるるので、俗に「和蘭ヒヤシンス」(*Dutch Hyacinth*) とも稱へて居る。

圖七十五百第
種各スンシヤヒ



(上段右より)

ピンク、パール

エクシジョン

モレン

ラ、ビクトリヤ

ー

(下段右より)

ビーネーメン

シテイー、オプ、

ハーレム

キング、オプ、セ

アリユー

リンノセンス

尙ほ前者よりも小形で

香氣は薄いが、早咲で花梗

の多く出る「ローマン」ヒヤ

シンス(H. Romanus, L. Ro-

man Hyacinth)があり、又、青色

鐘状の小花を着生し、丈け

の甚だ低い「スバニツシユ、

ヒヤシンス(H. amethystinus,

L. Spanish Hyacinth)等があ

る。

〔栽培〕 露地に植込み

の時期は九月末から十月

初頃が宜敷く、土地は日當

りの充分な排水の良好な

場所で、少し締め気味の壤

土が適して居る。園地は深さ一尺位に耕起して土を軟げ、堆肥、藁灰等を植穴に施す可きである。栽植の距離は五寸位が普通で、深さは球の底迄四寸位とし、被土の厚さは三寸位が適當で、各球が一樣の深さになつて居る事が肝要である。而して同一花壇にありては花色の配合を良くし、又、開花期の早晩に就ても善く注意して、成る可く同時期に開花のものを選んで植ゑ込む可きである。冬季霜雪の甚だしい地方だと藁、落葉等で地面を被ふて置き、春、發芽を始めたならば被ひを除去し、開花前に二三回稀薄な液肥を施すのが宜敷い。

開花後は結實せしむる事なく、花莖を切り去り、液肥を二回程與へて球根の肥大を圖るのである。六月末頃に至りて既に葉が黄變するに及べば掘り上げて日光に晒して能く乾かし、其の後は各品種を混合せぬ様に注意して貯藏す可きである。尙ほ「ヒヤシンス」の鉢栽培、水養法等があるが茲では花壇に於ける取扱ひのみに止めて置く。

三 チューリップ (鬱金香) (百合科)

(學名) Tulip sp. (英名) Tulip.

〔解説〕 チューリップは大抵ヒヤシンスの後に咲き出づる球根植物で、鱗莖は不正形の圓錐状を爲し、外側には赤褐色の膜皮があり、其の裏面には往々毛を有する事がある。葉は稍や廣披針形で厚く、粉緑色を帯びて、根元から數枚生ずる。其の中央から花梗を突き出し、頂端に鐘状の美大なる六瓣花を上向して一個着けるのが普通で、時として二乃至四個の花を生ずる事がある。色彩は種々で何れも燃ゆる様な鮮かさを朝の陽光を背景として咲き出づるもので、夕方になると閉ぢ、雨天や曇天には半開の姿で、大抵半月位は一花の生命を保つて居る。

〔種類〕

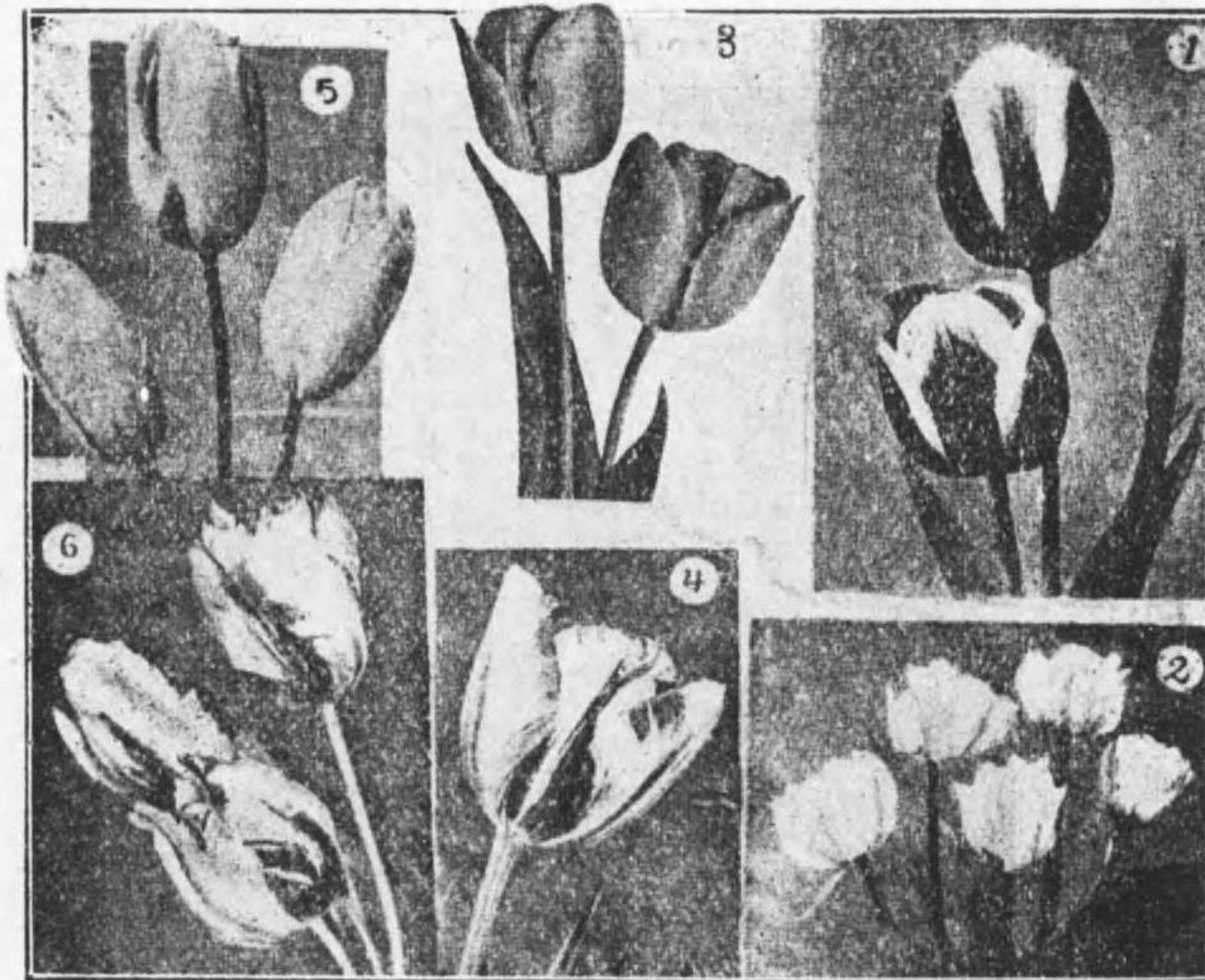
チューリップの種類は現今八十餘種を算し、其の鑑別には鱗莖皮膜内面の毛の有無並に、毛の質及び分布状態、莖に於ける短柔毛の有無、葉に斑點の有無、花絲の基部に於ける鬚の有無、花蓋の基部に於ける斑紋の有無並に其の色彩、其の他莖の長短、葉の形状、大小、色彩、花の大小、形状、色彩、鱗莖の大小等が要件とせられて居る。

現今觀賞用として比較的一般に珍重せられて居るのは次の二種並に其の變種である。

一 早咲種 (T. *Suaevolens*, Roth. *Early tulip* or *Sweet tulip* or *Duc van Thoi*) 之は丈三寸

から六寸位の矮性のもので、莖は短柔毛を以て被はれ、葉は舌状披針形のもものが三四

圖八十五百第
別類プツリユチ



1 早咲一重 2 早咲八重 3 ダーウィン

4 レンブラン 5 メーフラワーキング 6 パーロット

枚莖の基部に密生して着き、花は三四月頃に花被を上向して開き、其形鐘状で、花瓣は橢圓形を爲して先端が尖つて居る。花には芳香があり、色は赤、黄、紫が普通で一重と八重とがある。

二 遅咲種 (T. *Gesneriana*, L. *Late tulip*

or *May flowering*) 之は莖の高さ五六寸から二尺に及び、莖に毛を生ずる事が無い。葉は三四枚で舌状又は廣披針形を爲し、下部のものは波状に皺曲する事が多い。花は鐘状を爲し、上向して開くが、芳香を有しない事と、花瓣の先端が鈍圓である事とが前者と異り、花期が大分遅れて四五月頃に咲くのである。花の色は純白、紅、紫紅、紫黄等

が多く、尙ほ是等の混合したものである。

次に園藝上から普通に栽培せられて居るチューリップを分つて見ると、

(イ)單瓣早咲(Single Early)……一色の最も早咲のもの。

(ロ)八重(Double)……八重の花で色も種々あり、早咲と晩咲とがある。

(ハ)ビザン(Bizarre)……早咲で黄色地に褐、紅、紫色を有するもの。

(ニ)ブリーダー(Breeder)……早咲で瓣の基部以外は一色なるもの。

(ホ)バイプレーメン(Byrloemen) 早咲で白色地にローズ、櫻、紫色を帯ぶるもの。

圖九十五百第
アツリーユチーロエ
(ルート、ンバ、クエツ)



(ハ)コツテース(Cottage)……晩咲で花弁の先が尖つて外方に反捲するもの。

(ト)ダーウイン(Darwin)……晩咲で花梗長く、丈夫で直立し、紅、白、紫等の單色花が多くて半開を常とする。切花として最も佳良である。

(チ)パードロット(Pardot)……花弁に鋸齒狀の鉄刻があつて大きく、色は黄に紅の絞りが多く、晩咲

である。

〔栽培〕花壇に植込むものは十月上旬が適期で、色彩の配置に充分注意を爲し、且

つ早咲と晩咲とは混植する事なく、位置を變へて栽植するが宜敷い。土地は日當りが好くて少々軽い肥沃なるものを好むから、肥料にも堆肥や馬糞等を敷込んで整地を爲し、排水を良好にし、深さ三四寸、株間五六寸に一様の深さに埋め込むが開花を揃はしむるのに都合が宜敷い。冬季は別に霜覆など不必要であるが、凍結の甚だしい地方では寒中丈け藁や落葉で保護してやると無難である。早春葉が二三枚出たらば油粕汁の薄いものを追肥として與へ、又、花後にも一回施して置くと球根の生育に宜敷い。花

圖十六百第
壇花アツリーユチ



は成るべく結實せしめず、に切り去り、六月頃に葉が少しく枯れかかつたのを見て掘り上げ、之れを能く乾燥して後、乾冷な場所に貯藏して置くのである。大抵は雨水の懸らない冷涼な砂地に埋めて貯ふるのが宜敷い。若し花壇を其の後使用しない様であれば、三四年間其の儘放任して置いても開花するものである。

尙ほ、チューリップには鉢栽培、木框栽培等も行はれ、前者は主として鉢の儘觀賞に供し、或は開花頃に鉢の儘花壇に植ゑ込まれるもので、後者は専ら切花用として床植とせらるるもので、多くは暖地でダーウイン種が一般に採用せられて居る。

四 アネモネ (毛茛科)

(學名) Anemone sp. (英名) Wind flower or Pasque flower.

〔解説〕 アネモネ属には凡そ八十五種許りあつて、球根性のものと、普通の絲狀根を有するものとの二つがあり、何れも細く裂けた葉を有し、多年生の草本で、高さは五寸位から三尺位迄のものがある。

〔種類〕 園藝上普通に栽培せらるるものを二三記して見ると、

- 一 罌粟咲種 (A. Coronaria, L. Poppyanemone) 之はアネモネ属中最も普通に園養せ

らるるもので、チューリップやヒヤシンス等と共に早春の花壇を飾る球根植物で、地中海沿岸が其の原産地である。葉は細かく裂けて、胡蘿蔔の葉に似て居り、四五月に高さ一尺位の花梗を抜き、其の頂上に直径一二寸位の罌粟状の花を開くのである。

第百六十一圖
アネモネ



花部は無柄の苞が三四個に深く裂け、萼片が非常に發達して丸味を帯び、恰かも花瓣状を呈して居る。色には白、紅、紫及び是等の中間色も甚だ多く、又、一重、半八重、八重など種々存するのである。此の種の變化したものに、菊咲アネモネ (Chrysanthemiflora) と稱するものがある。

て、其の形が菊花状を爲すものである。

二 星咲種 (A. Hortensis, L. Star anemone or Broad-leaved anemone) 之れは前者よりも葉が廣くて粗剛であり、萼は長くて尖つて居る。球根性の草本で、南歐が原産で、高さ

圖二十六百第
壇花ネモネア



一尺許りに達し、花は細長くて尖り、且つ較や展開して星状を呈するものである。色には白、紅、紫等があり、又一重と八重とがあるが、花形は前者よりも稍や小さい。

三 秋明菊又は秋牡丹 (*A. vitifolia*, v. r. Japonica Fin. et Gagn. Japanese anemone)

之は球根ではないが序だから述べて置くが、本邦の山地に自生する宿根草で株は能く張り、三個の小葉から成る。根生葉は牡丹に類似し、九月頃に花梗を抽いて紫紅色の花を着くるのである。

四 雪割草 (*A. Hepatica*, L.)

之れも宿根性の草本で、球根は爲さないが、冬期葉が枯るる事無く、葉柄には多くの白毛を生じ、早春多数の花梗を抽出して、白、紅、紫、絞り等の美花を着くるので、古へは大いに賞美せられたものである。

ある。尙ほ球根種として栽培せらるるものには

A. apennina. (アペニア)

A. baldensis. (バルデンシス)

A. blanda. (ブランド)

A. fulgens. (フルゲンス)

等があり、又、白頭翁(オキナグサ)、二輪草、三輪草等もアネモネの屬として知られて居るものである。

〔栽培〕 球根の植ゑ込み、及び其の他の手入に就ては略ぼチュウリップと同一の取扱で充分である。

尙ほ之れを種子から育成するには春季に鉢又は箱に砂質壤土を入れ、之れに蒔き下し、其の上に薄く細砂を被ひ、灌水後、硝子板か新聞などで被ひを爲して日蔭地に置いて置く。大凡三週間位で發芽したらば被を除き、徐々に日光に當て、且つ灌水に注意して生育せしむるのである。而して稍や大きくなつたらば大きな鉢か苗床等に移して培養し、秋又は春に花壇に移植すれば大抵一ケ年で開花を見るに至るものである。

五 クローカス (花苜蓿蘭) (鳶尾科)

(學名) *Crocus sp.* (英名) Saffron

〔解説〕 極めて矮性の耐冬性球根植物で、莖を地上に現はす事無く、一個の球根から十數葉を叢り生じ、葉は細くて線状を爲し、其の充分伸びない中に漏斗状の上向した美花を早春の花壇に眺めせしむるものである。花は殆んど地面から咲いた様にして、日中に開き、夜間は閉づるもので、色には紫、橙黄、黄、淡紅、白等があり、一花は五日間位の生命を有し、一球から四五個の花軸が出で、之れに三四花を着くるものであるから、三週間位は美觀を呈して居るものである。

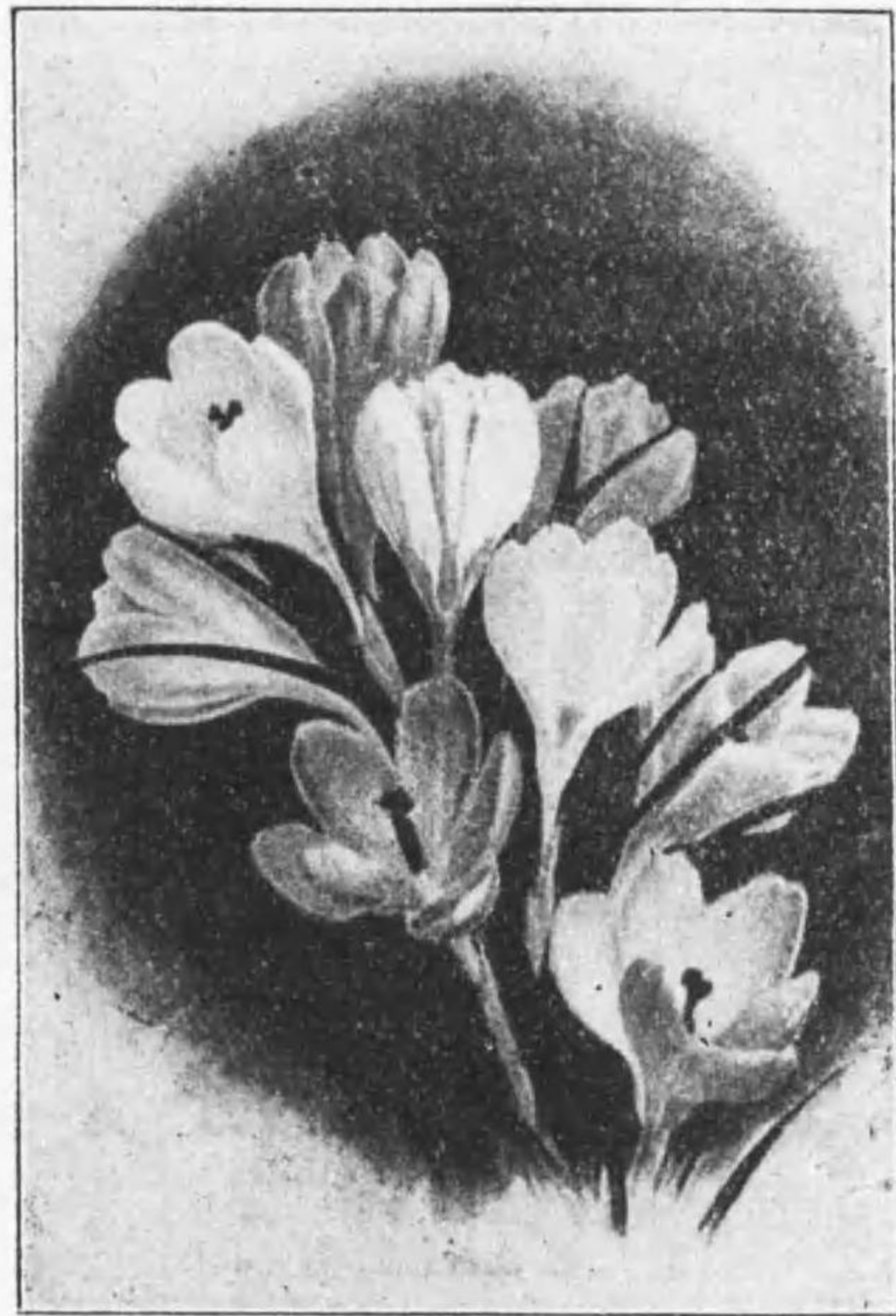
〔種類〕 「クローカス」の種類には春咲種と秋咲種との二つがあり、前者は主として觀賞用として栽培せらるるもので、後者には其の花柱を薬用に供する薬用サフラン (*C. sativus*, L.) がある。今、早春に開花する觀賞用の主なるものを記して見ると、

一 紫苜蓿蘭 (*C. Vernus*, All. Common Crocus.) 之れは最も普通に栽培せらるる春咲のもので、葉は三四枚を生じて苞に包まれ、上面には中央に白線を示す溝があり、裏面には少しく白粉を帯びて居る。花は長さ一寸餘で紫色を主とし、紫、白、絞り等があり、

花筒部には毛を有して居る。

二 黄苜蓿蘭 (*C. moeaiacus*, Ker. Dutch crocus.) 之れは前者よりも葉の数がずつと多くて七八葉を生じ、且つ苞に包まるる事なく、長くなつて花を覆ふ様になるものである。花瓣は鮮黄色を主とする。花瓣は鮮黄色を主とするのであるが、變化したものに淡黄及び乳白色のものを見るのである。

圖三十六百第
スカーロク



〔栽培〕 植込場所としては日當りが良好で、稍々砂交りの軽い土地が適當して居り、成可く乾いた排水の充分な處を選ぶが宜敷い。花壇の形として

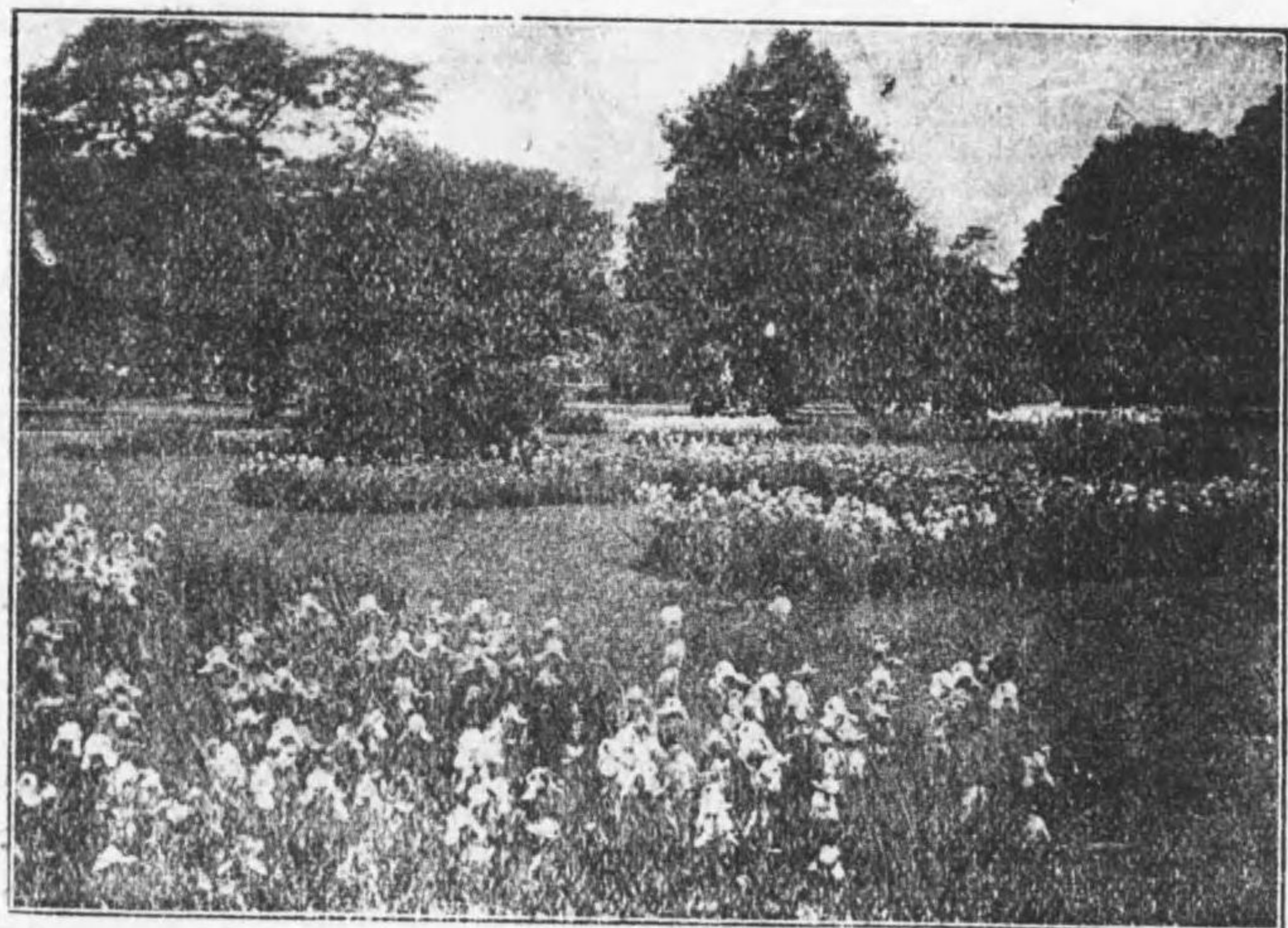
は丸形が最も能く調和し、芝生の中に點植したり、一般の庭園の各處に自然的に植ゑ込むのも亦面白味のあるものである。大抵九月の末から十月初めにかけて球根を植ゑ込むもので、深さ二寸、距離三寸位にするが普通で、植穴には豫め堆肥、過燐酸石灰、

草木灰等を入れて肥沃ならしめて後栽植するが宜敷い。耐寒性の丈夫なものであるから特別に防寒の設備は要しないが、落葉か藁等を少しく覆ふて置けば發芽が樂であらう。開花前に腐熟した稀薄な液肥を一二回與ふると効果がある。五月頃には葉が凋れて來るから掘り上げて能く乾かし、秋の植付迄貯藏するのが普通であるが、又芝地等に植ゑ込んだものは其の儘と爲し、三四年位は放置して置いても能く開花するものである。然し新球根が漸次上方に向つて生ずるものであるから土を順次覆ふてやり、相互に密になつて來たらば根分けを行はなければならぬ。尚ほ種子から育成するには成熟したものを直ちに鉢か箱に蒔き下すもので砂勝ちの肥沃土を用ふるのである。發芽後徐々に日光に當て、灌水、除草を適當に行つて行けば二年目には球根を生じ、三年目には開花するに至るものである。

六 アイリス (Iris) (鳶尾科)

〔解説〕 此の屬は何れも多年生の草本で、約百五十種許りあり、劍狀又は線狀の葉を有し、多數の叢生葉の間から花莖を抽き、内外二層の花蓋からなる種々の色彩を帯びた美大なる花を着けるものが甚だ多い。

圖四十六百第
スリイアクツラアの球壇花



〔種類〕 今、園藝栽培品として觀賞せらるるものを少しく述べて見ると、

一 花菖蒲又は玉蟬花 (Iris laevigata Fisch. var. hortensis, Max. Japanese iris or Water Flag.)

アイリス屬中最も多く愛賞せらるるもので、其の初め奥州の安積沼に自生して居た花勝見(花且美)を江戸に持ち來つて培育に努めた爲めに、其の名風に謠はるる様になり、現今に於ては各地で栽培せられ、數百種の園藝變種が作出せられて居る。葉は劍狀を爲して長く尖り、中肋は太き筋を爲し、長さ大凡二三尺に達する。大抵六月頃に花莖を葉上に抽出し、其の長さ三四尺にも及び、花蓋は内外二層の六瓣中、外方の三片は大にして垂下し、内方の三片は小形鈍頭で上向するのが普通であるが、發達の工合で外方の三

片に劣らない大きさのものがあり、又、八重となるものもある。花瓣の先端は圓味を

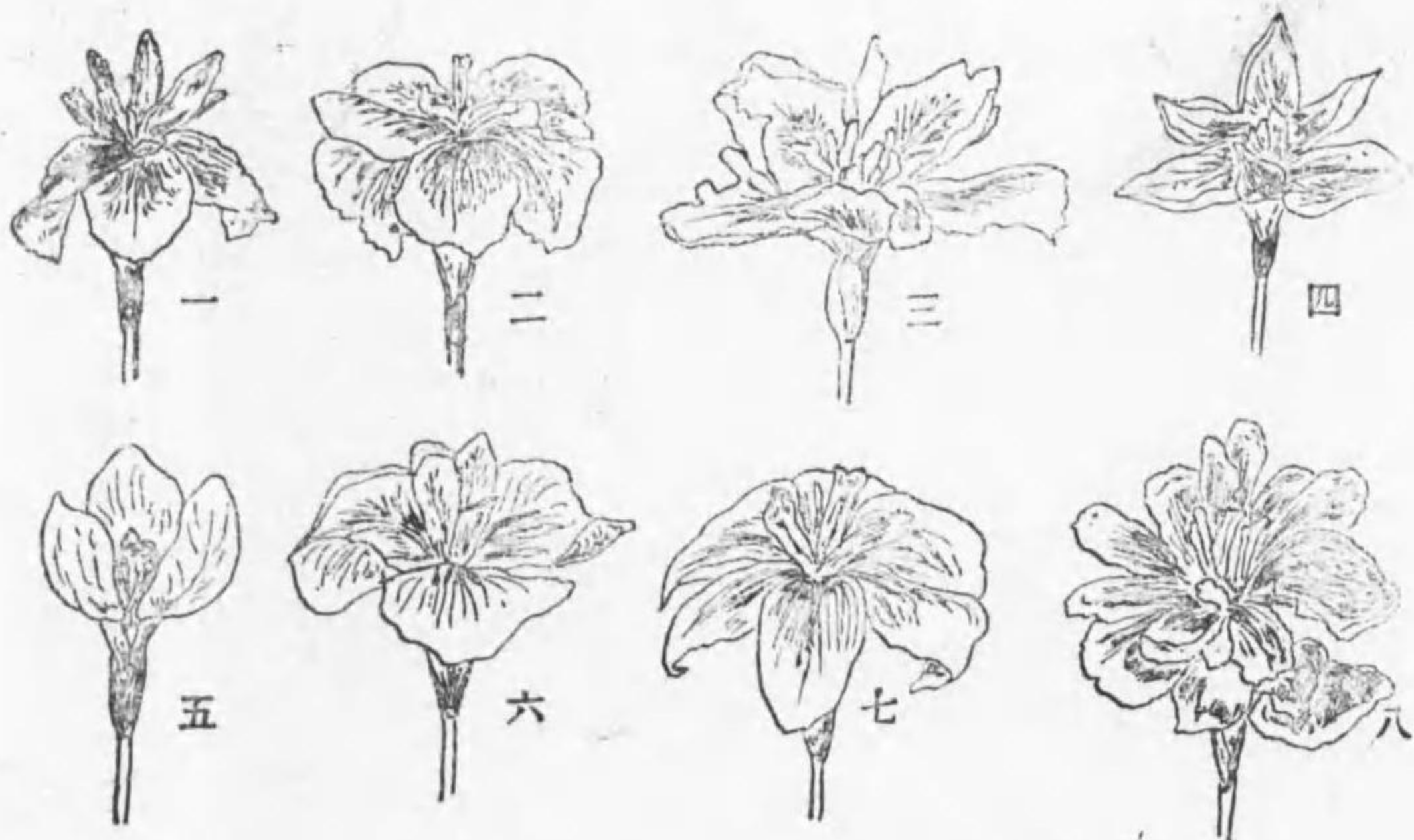
帯ぶるのが常であるが、時として尖つたものもある。色は赤褐色を基とするのであるが、紫紅青紫紅藍等の濃淡種々なるものを生じ、或は絞り、斑入り等も生じて居る。

而して其の咲き方の花姿に依つて分類して見ると、次の各種がある。

(イ)三瓣咲(外側の花蓋が特に大きくなるもの)……醉美人・座間の森・宇治の里・初霜・鳴海絞・大淀胡蝶の舞・蓬萊山・明星若紫等。

(ロ)六瓣咲(内外の花蓋が同大のもの)……篝火・唐織錦・佐野渡・天の羽衣・天の川・黒雲・紅葉の瀧・峯の雪・隅田川・萬代の波等。

圖五十六百第
萎花の蒲菖花



(八)(七)(六)(五)(四)(三)(二)(一)
牡丹咲 車咲 二段咲 玉咲 爪咲 狂咲 六瓣咲 三瓣咲

(ハ)牡丹咲(花瓣が六瓣以上のもの)……佳節の宴・白鶴・連城の壁湖水の色・月下の波・赤寶冠等。
(ニ)玉咲(花が充分に開かず抱へて居るもの)……龍の玉・玉寶蓮・銀玉等。
(ホ)狂咲(花瓣が振られて狂つて居るもの)……酒中花・笑布袋・利勝の玉・狂獅子等。
(ヘ)爪咲(花瓣が細くて屈曲せるもの)……龍の爪・折鶴等。
(ト)二段咲(内外の花蓋が一つ置きに大小となれるもの)……十二一重・八重勝見・松葉・重等。
(チ)車咲(花蓋が整つて四方に垂れたもの)……葵車・田毎の月等。

二 燕子花又は杜若(*Iris albolopurea*, Bak.) 水濕の地を好んで沼澤等に野生するこ

とも多く、葉は廣濶平滑で中央に葉脈の隆起する事が無く、莖は葉より長くなる事は殆んどない。花は六月頃花菖蒲に少しく遅れて開きし紫藍色が主であるが、白色、白色の絞り、等があり、一般に小形で内瓣は小さく、外瓣は橢圓形で先端が尖つて居るので花菖蒲と區別する事が出来る。

三 溪蓀又は蘭蓀(*Iris sibirica* L. var. *orientalis* Max.) 直立した小形の葉を有し、葉面

は粉白色を帯び、中肋は極く僅か高まつて居る。而して基部は紅紫色を呈するのが普通である。花莖は葉と略ぼ等長で一二尺に過ぎず、二三花を着ける。五月頃に花菖蒲や燕子花よりも早く開き、形は小くて垂るる事無く、特徴としては外瓣の基部に黄色地に紫の網状脈を有するのである。花色は紫色を常とするが、白筋入り、絞り等

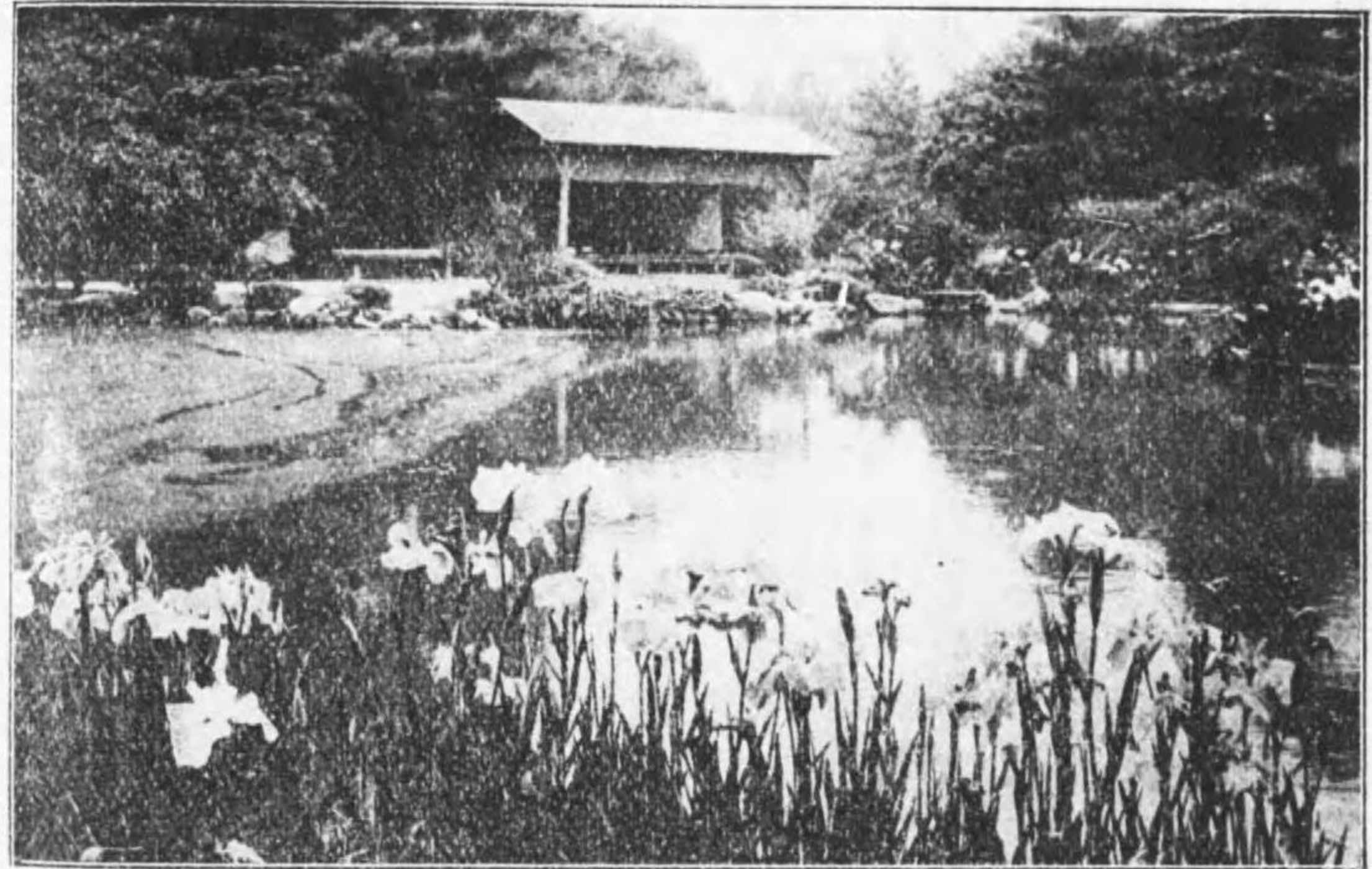
があり、又六瓣、狂ひ等の變化したのものもある。尙ほ葉の色が淡くして殆んど白色を

呈する翁あやめと稱する變種がある。

四 鳶尾 (Iris tectorum, Max.) 之は支那

の原産で高さ一二尺に過ぎない矮性のもので、葉は數枚竝んで生じ、光澤が無く、劍狀を爲して幅が甚だ廣い。花は四五月頃に花莖を抜き、上部にて數枝に分れ、各枝に一花宛着くるのである。外瓣は内瓣よりも大きくて少しく垂れ、波狀の縁邊を有して居る。色は藍紫色が主で、白色のものもある。而して瓣の基部に黄白色毛様の突起物がある。此の種は能く風や火災を防ぐと稱して、茅葺屋根の頂上に栽植せらるる事が多い。尙ほ以上の外アイリスの屬で觀賞に値

圖六十六百第
園 蒲 菖 花



するものには、蔭地で四五月頃に白に淡紫の絞り咲を爲す蝴蝶花や姫蝴蝶花があり、葉の狭くて縦れた馬蘭があり、外國産としては黄菖蒲、紫アイリス、らつきやうあやめ、いざりすあやめ等がある。

〔栽培〕 普通に觀賞用として花壇に栽植するものは株分に依るが簡單で、日當りの良好な場所で肥沃な軽い土地を選び、幅四尺、長さ適宜の花壇を拵へ、豫め深さ一尺許り耕起し、之れに堆肥、過燐酸石灰等を切り混ぜ、人糞尿を少しく注いで花壇の準備をする。植込みは晩秋が宜敷く、大抵株間一尺五寸として前中後の三段に互の目に植ゆるのが普通で、此の際に花色の配合を能く考へて行ふ可きである。若し切花用であれば株間をもつと、近くして、一種類毎に群植する方が得策である。尙ほ花壇の有様に依つて列條に植ゑ、或は圓形に植込む事もある。用ふる株は豊肥な芽を五六個有するものを選んで、何れも外方に向はしめて淺植とするが宜敷い。栽植後は充分に灌水し、落葉や藁などで被ひ、冬季中は其の儘放置するのである。翌春に及んで發芽を初めたらば覆ひを取り去り、根元を中耕して薄い液肥を與へる。開花前に尙ほ一回施肥して置くと花の光澤が良好である。開花中は充分灌水を行ひ、開花後は努めて花莖を切り去り、其の後三回許り施肥するのが宜敷い。而して花壇は三年目

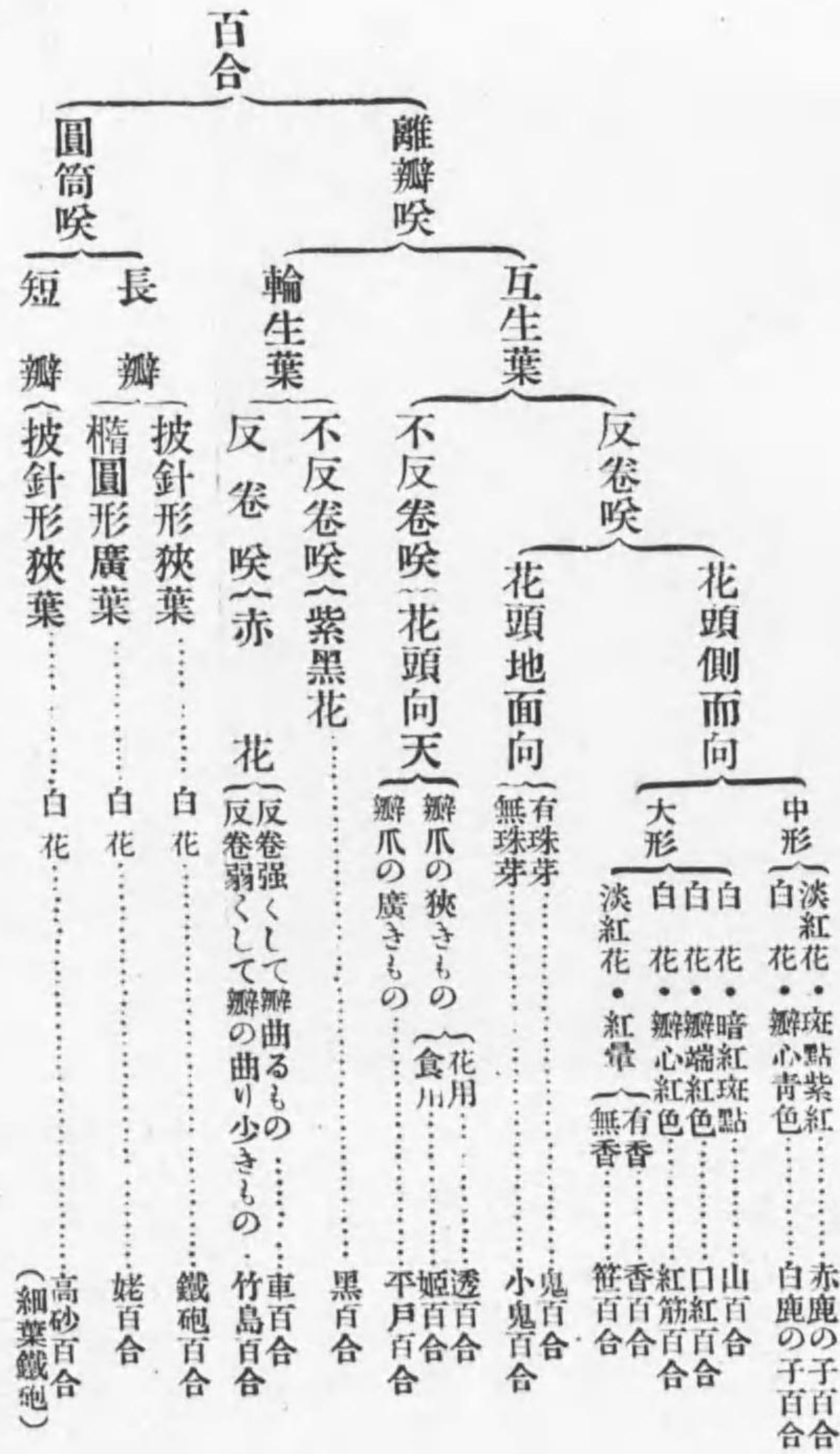
の秋頃に掘り上げて土の更新と株の整理とを行ふ可きである。池に栽植する場合には前と同様に豫め土壤を耕起して施肥し、土地を軟らかにして植ゑ込むもので、花後が宜敷く、幅二尺に株間七八寸位が適當である。冬季は藁等で防寒の設備を爲し、春季發芽を始めたならば施肥を行ひ、三月末頃から時々水を引き入れて濕氣を保たしめ、五月から九月迄は常に水を湛へる様にし、十月以後は全く乾かすが宜敷い。尙ほ花後には芽莖を切り去り、三四年目には掘り上げて株の整理を忘れてはならない。又新種の育成には種子から養成して行くのであるが、普通には行はないので省いて置く。

七 ゆり(百合) (百合科)

(學名) *Lilium, sp.* (英名) Lily

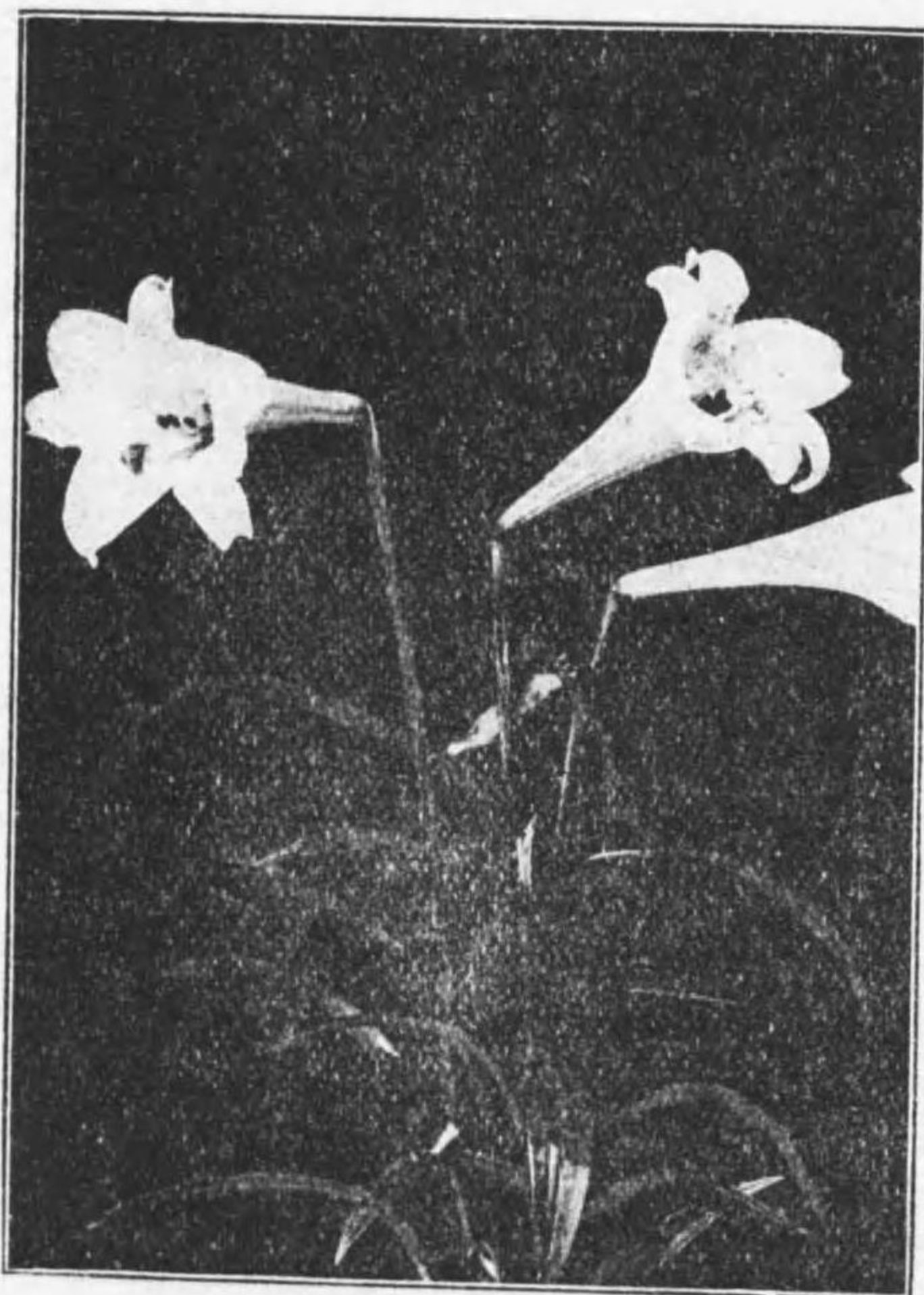
〔解説〕 百合は地下に鱗莖を有する耐冬性の多年草で、莖は直立して數尺に及び、葉は披針形又は線狀で、葉柄を缺ぐものが多い。花は美大なるものを夏日に梢頭に一個乃至數個開き、花蓋は内外二層となつて六瓣である。雄蕊は六本で葯が甚だ大

きく、一本の雌蕊は長くて基部には蜜腺を具へて居る。
〔種類〕 百合には大凡百種位の種類があつて、上を向くもの、横に向ふもの、瓣の先きが反捲するもの、莖に毛のあるもの、分岐するものなど、其の状態には種々あるが、次の検索表は至極便利なるものである。



一 鐵砲百合又は麝香百合(L. longiflorum, Thunb. Easter Lily) 琉球臺灣等に多く自生するもので、本邦では専ら觀賞用として栽培せられ、外國ではイースター祭やクリスマスに使用する爲め、年々本邦から球根を多量に輸出して居る。球は直徑三寸位で扁圓形を爲し、黄白色を帯びて居る。莖は二尺位の高さに延び、丈夫で水平なる披針形葉を二三十枚着ける。花は一莖に二乃至十花を着け、圓筒狀で側方に向つて開き、純白色で香氣が甚だ高い。

圖七十六百第
合百砲鐵



變種としては、黑軸鐵砲(Var. giganteum, Hort.)・柳葉鐵砲(Var. multiflorum, Hort.)・縣鐵砲(Var. agata, Hort)等があり、又早咲ものとして島百合(大島産)(Var. hiukuensis, Hort.)なるものがある。

二 笹百合(L. japonicum, Thunb. Japanese Lily) 本邦中部地方の山地に自生し、六七月

に開花し栽培も多くせらるるもので、鱗莖が卵圓形を爲し、多くは白色を呈して居る。莖は二三尺に達し、葉は披針形で水平か或は少しく立ち、兩端が稍々狹まつて居る。花は離瓣で反卷し、大抵淡紅色で稍々喇叭狀を爲し、側方に向つて開花する。

變種としては、覆輪笹百合(Var. albo-maculata, Mak.)葉縁白色。姫笹百合(Var. rubellum, Mak.)小型で葉は小さく花数が少い。受百合(Var. alexandrea, Bak.)花が上向する。袂百合(Var. alexandrea, Bak. form. nobilissimum, Mak.)葉が廣く、花は白色で上向のもの等がある。

圖八十六百第
合百山



位に達するものがあり、黄白色で、往々紫色を帯びる事がある。莖は大なるものは六

三 山百合又は蓬萊寺百合(Var. auratum, L. Goldband Lily) 本邦中部以東に多く産し、食用竝に輸出用として多く栽培せらるるものである。鱗莖は扁平で直徑五寸

尺位に及び、多くは平滑で白粉を有し、時としては紫色を呈する事もある。葉は廣披針形で水平に着き、花は七八月頃に白色の鐘狀大輪花で、少しく反卷して横を向くのである。瓣の中央には黄色の縦線が通り、紫紅色の星點を撒布し、基部には刺毛突起があり、頗る芳香に富むものである。

變種を擧げると、紅筋百合 (Var. rubro-vitalum, Hort.) は花瓣の中央に紅線及び紅斑點がある。白黄百合 (var. Wittei, Hort.) は葉が廣く、花瓣白色で淡黄條がある。口紅百合 (Var. rubro-Pectum, Mak.) は花瓣の中央が黄色で、其の先端が紅色を呈する。作百合又は爲朝百合 (Var. lamaonum, Mak.) は莖葉共に強剛で大きく、花は大形の白色に黄條と淡黄の斑點を有し、香氣が甚だ高い。白星百合 (Var. albo-dolito, Hort.) は花瓣の白地に黄色の條線と白色の斑點のあるもの等がある。

四 鹿子百合 (L. speciosum, Thunb. Speciosum Lily) 四國、九州地方に多い種類で、七月頃に開花し、觀賞用として多く栽培せらるるものである。鱗莖は圓くして、白地に紫色を帯びて居り、莖は高さ三四尺に達し、綠色平滑であるが、紫斑を處々に現はすことがある。葉は廣披針形で光澤があり、水平又は少しく垂れて着生する。花は頂上に數個を開き、横又は下に向ふ事が多く、花瓣は白色で裏面に著しく反卷し、中央には紫

紅色の條線と斑點とを有する。香氣は餘り有して居ない。

變種としては、赤鹿子百合 (Var. rubrum, Hort.) 葉は濶大で性强健、球亦大きくして黄色から黒紫色に變ずる。花は淡紅地に紫紅色の尖狀斑點がある。白鹿子百合 (Var. album, Hort.) 莖葉は細小で性質弱く、球は黄褐色を呈する。花は白色に僅かに紅色を帯び、葯が紅褐色。峰の雪百合 (var. album novum, Hort.) 白鹿子百合と同じだが、葉が稍長く、葯が黄色である。丸葉鹿子百合又は京鹿子百合 (Var. melponne, Hort.) 葉が圓くて倒卵形を爲し、花瓣は反卷の度が軽く、濃紅色地に紫黒色の星點を散在するものなどがある。

五 卷丹又は天蓋百合 (L. tigrinum, Ker-Gawl. Tiger Lily) 觀賞用にもするが、普通には食用として栽培する事が多く、鱗莖は球狀で灰白色を呈し、莖は紫黒色で白軟毛を有して居る。葉は披針狀で濃緑を呈し、殆んど水平で、基部には黒紫色の子球を抱くのである。八月頃に著るしく反卷した朱紅色の花を開くもので、花瓢には黒紫色の斑點がある。

變種としては、八重天蓋 (var. flore-pleno, Hort.) 花瓣が八重のものがある。

其の他、本邦南部の海邊には矮性で受咲の透百合 (L. elegans, Thunb.) があり、葉の廣

くて車輪狀に着生する竹島百合(L. avenacum, Fisch.)、車百合(L. hansni, Leichl.)、

第百六十九圖
丹 卷



小鬼百合(L. maximowiczii, Regel)、
細葉百合(L. tenuifolium, Fisch.)、姥
百合(L. cordifolium, Thunb.)、菅百
合(L. callosum, S. et Z.)等があり、
尚ほ此等の變種も多數生じて
居る。

前中に日光を充分に受け、午後は直射しない様な場所が適して居り、且つ連作を忌む
ものであるから、成る可く土地を變へて行くが病蟲害の豫防にも宜敷い。而して前
作物としては荳科植物が望まれるものである。普通には球根を植込むもので、秋季
に丁寧な整地を行ひ、之れに堆肥、過磷酸石灰、米糠等を基肥として施し、畦は南北に走
らしむるが宜敷く、畦幅一尺五寸——一尺八寸、深さは球の大きさに準じて三四寸位の

〔栽培〕 主として鐵砲百合
に就て述べれば、排水の良好な
深い壤土質の肥沃地を好み、午

植溝を掘り、之に人糞尿を施し、其の上に株間四五寸に球の形狀正しく、且つ一球一芽
のものを並べ行き球の隠れる程度に覆土する。其の時期は十月中下旬が適期で、遅
くなるに根の發育が不良で寒害に罹る恐れがある。又霜柱の多く立つ地方では冬
間藁を被ふか、落葉等を置いて保護する必要がある。翌年開花に至る迄に追肥を三
回許り(人糞尿、混合肥料、硫酸安母尼亞等)行ひ、尚ほ中耕、除草等の手入れを二三回行ふ
必要があり、球根の肥大を望み、或は大花を開かしむる等の目的には、花蕾の摘除を行
ふ事がある。開花終つたものは直ちに花莖を切去り、球根の發育を促す可きもので
莖葉の黄變して稍や枯れ初めたらば掘上げて良い時期に達した兆で、場所にも依る
が八月下旬から十月上旬近くの間が宜敷く(大島では五六月)早過ぎると貯藏に困難
であり、遅きに失すると球根が緊り過ぎる傾きがある。掘上げたものは土を去り、莖
を切り放ちて木子(周)に附着する小球根を分離し、日蔭で乾かして大きき品質を選
別し、次の植付け迄貯藏して置くのである。而して輸出用としては直径六寸以上で
一芽を有するものが採用せられ、一個宛赤土で粘り固めて乾かしたものを箱詰めと
爲し、間隙も赤土を充たして荷造りを行ふのが普通である。普通に繁殖方法として
行はるるのは母球の周に附着する小さい木子を養成して行くもので、大抵木子から

七八寸球と爲すには三ヶ年を要する。其の他繁殖方法としては種子(春彼岸頃)珠芽(七月頃)等を苗床に播下する事があり、鱗片を貝伏法と稱して九月下旬頃に砂勝ちの苗床に挿入して球根を作出する事もあるが、此等は種子の生じ難いものや、珠芽の發育不良の種類には行ひ難く、鱗片は三年以上の球で良好なものを用ひなければならぬ。

尙ほ百合の栽培には鉢植として温室で促成を爲し、冬季に咲かしむる事が多く、外國では十二月のクリスマスや四月のイースター祭等に間に合はせる様に努むるものであるが、之れには大島産の鐵砲百合が専ら用ひらるるのである。次ぎには房州地方の柳葉鐵砲、埼玉縣下の黒軸鐵砲等が用ひらるる。

八 ダーリア(天竺牡丹) (菊科)

(學名) *Dahlia* sp. (英名) *Dahlia*

〔解説〕「ダーリア」なる名稱は瑞典の植物學者ダール(Dahl)氏を記念せんが爲めに附けたるもので原産はメキシコであるが、現今では最も廣く愛養せらるる半耐冬性球根植物の一である。根は甘藷に似た塊根で、莖の下部に數多着生し、澱粉に富んで

居る。莖は多汁で軟かく、高さ五六尺に及び、葉は對生で羽狀複葉を爲し、其の小葉は卵形又は橢圓形である。花は頭狀花序で、元來は周圍の花は舌狀花で、内部の花は筒狀花を爲すのであるが、栽培に依つて色々變化して居るものである。開花は六月から七月頃迄に第一回の盛時を示し、炎暑の候は花を生ずる事が甚だ尠く、九月から十月頃迄に再び其の盛りを見るもので、降霜に遭ふて莖葉を萎凋するものである。

〔種類〕「ダーリア」の當初歐洲に輸入せられた際には平瓣の單瓣花であつたが、漸次變化したるものも現はるるに至り、重瓣種やカクタス咲等をも生ずるに至つたものである。而して「ダーリア」の原種とも見做す可きものは次ぎの三種である。

(A) ローゼ、ダーリア (*D. rosea*, Cav. Old Garden Dahlia) 此種は頗る變化に富み、葉は一回羽狀に分裂し、裂片は卵形で鋸齒があり、粗大で幅廣く、表面に軟毛を生ずるものが多い。培養品としての Single, Pompon, Show, Fancy 等は之れから生じたものである。

(B) コクシネア、ダーリア (*D. coccinea*, Cav. Fire Dahlia) 莖は平滑で細く、白粉を附けた有様を呈し、丈は三四尺に過ぎない。葉も纖弱で狭く、花は赤色が原色で、筒狀花冠は著しい赤の線を帶し、多くは單瓣である。尙ほ舌狀花は結實しない

特徴を有して居る。

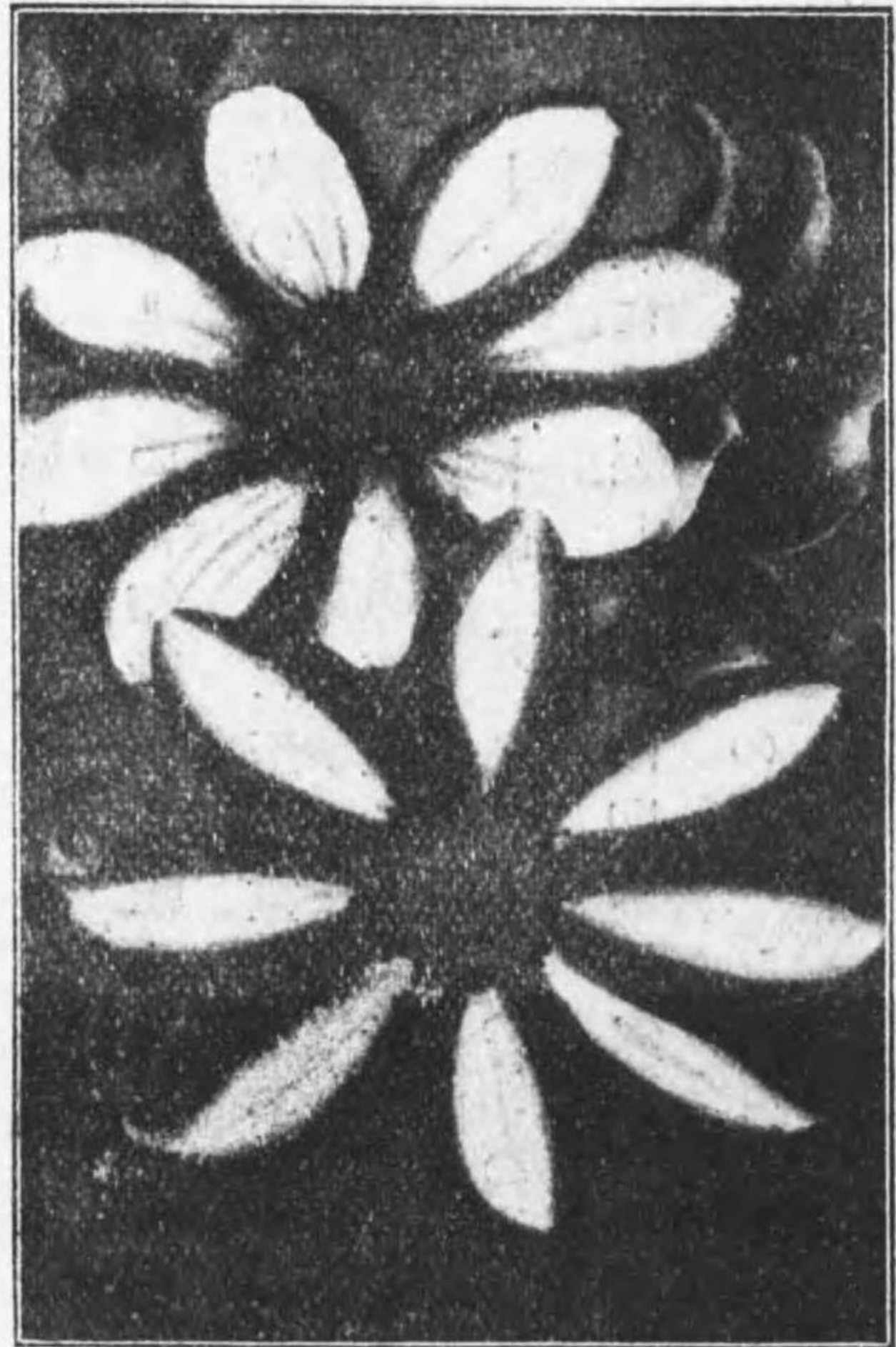
(C) ジュアレヂー、ダーリア (D. Jurezi, Hort. Cactus Dahlia) 之れは現時の
カクタス咲の原種で、高さ三四尺に過ぎず、各舌状の花冠は背面に反轉屈曲して狭く

なり、長さ不同で鮮やかな緋色
を呈するのが普通である。

次に栽培品種としての分
類をして見ると、

一 一重咲 (Single Dahlia) 一

重の平咲で花心を現はし、周囲
に舌状花が一行に平らに開き、
八乃至十瓣を有し、色には種々



圖十七百第
アリーダ咲重一

ありて、大輪型と小輪型とがある。尚ほ種々形の變つた單瓣のものがあるが、之れは
別の名で呼んで居る。

二 カラレット (Collaret Dahlia) 之は外輪の良く發達した平瓣と、中央の盤狀筒瓣

との間に、更に小形の花瓣を有するもので、丁度一重咲の花心の周圍に一種の小花瓣

瓣(恰もカラーに似る)を生じた有様である。

三 アネモネ咲 (Anemone-flowered Dahlia) 大體平瓣の一重咲であるが花心が小さく、

中央の筒狀花瓣が發達して各種の變形を爲し、群生して少しく盛り上つて居る。

四 ビオニー咲 (Paeony-flowered Dahlia) 之れは一重咲とカ

クタス咲との雜交に依つて生
じたもので、花心を現はした半
八重で、平瓣の大輪花である。

内部の花瓣が大抵は縁曲して
不規則に並び、牡丹に似た處が
ある。此の種は花の豊大で艶
麗なる事は實に冠絶して居る

尚ほ之れに花の小形のもの及

が、花梗が弱くて直ぐに首を垂れるのが缺點である。

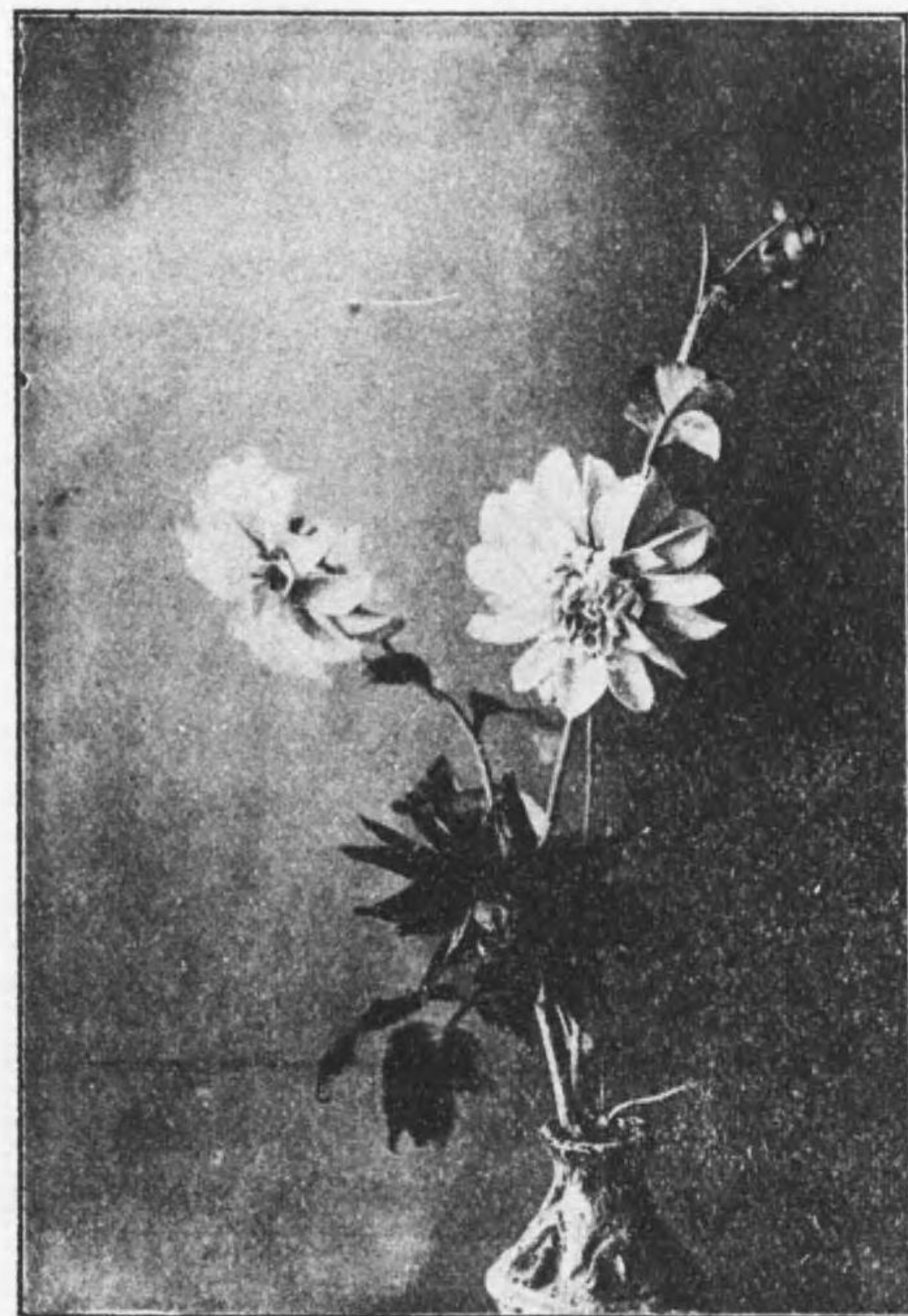
五 デコラチーブ又は菊咲 (Decorative Dahlia) 之れは前者に似て居るが中央の盤

圖一十七百第
咲トツレラカ



狀花を缺き、始んど平瓣のみの八重咲で、中央迄全部舌狀花で充たされて居る。而して徑六七寸の大輪咲の外、小形種や、高さ三尺を超えない矮性種もある。

六 シヨウ咲 (Show Dahlias) 之れは完全なる八重で球形を爲し、花瓣は何れも筒状



圖二十七百第
咲ネモネア

に内卷を爲し、中央に至る程小卷となつて花心が吹詰となつて居る。花色は單色か、又は花冠の先端に濃色の覆輪狀を示すのが普通である。

七 ファンシイ咲 (Fancy

Dahlias) 之れは咲き方に於

ては前者と同形であるが、花色が一定の地色に縞狀、又は斑紋を畫き、或は前者と反對に花冠に至る程淡色となるものである。

八 ポンポン咲又は毬咲 (Pompon Dahlias or Bouquet) 之れは矮性小型の花で、花徑二寸位の球狀に咲く完全なる八重である。花瓣の着生は規則正しく螺旋狀を爲し、同筒

狀に内卷を爲して居る。花付の宜敷いものと水保ちの比較的永きに互り、且つ花梗の丈夫なる事で、切花用として歓迎せられて居る。

九 カクタス咲 (Cactus Dahlias) 花瓣は縦に裏面に向つて卷込み、細長く筒狀を爲し



圖三十七百第
咲一ニオヒ

て不規則に緞曲して居り頗る上品で花持ちも宜敷いので、現今では最も賞美珍重せられて居る。而して普通は

八重の大輪花が代表的のものであるが、數列の瓣が廣がつて盤狀花を現す半八重のものがあり、又一列に殆んど規則正しく廣がつた瓣と盤

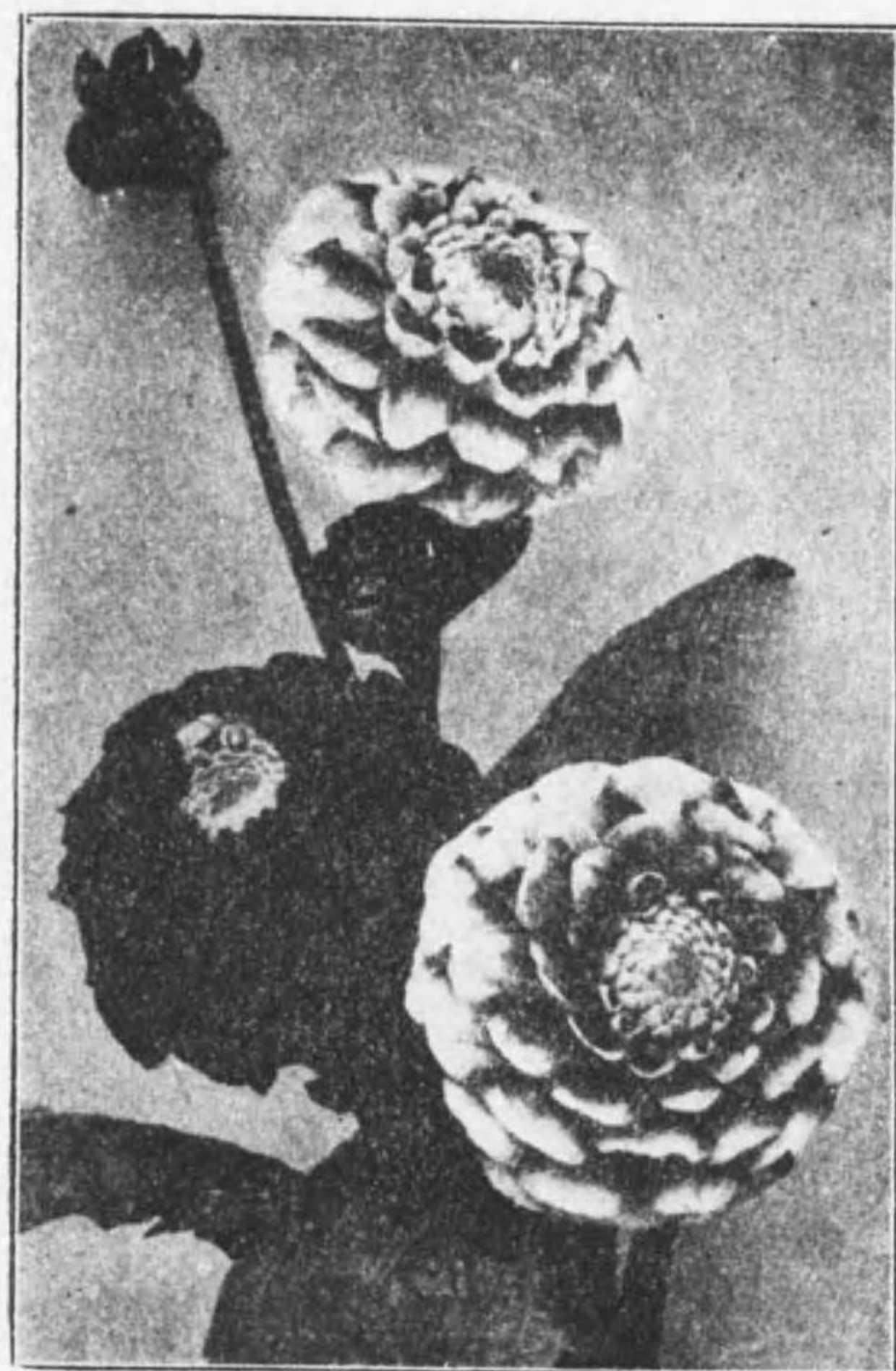
狀花を有する一重のものがあり、さては高さ二尺位の矮性種もある。尚ほ特殊の「ダーリア」としては杯狀小形の「スター」(Star Dahlias)矮性で叢狀單瓣の「トムサム」(Tom Thumb Dahlias or Mignon)緋色單瓣芳香性の強い「コロナタ」(Coronata)等ては

花瓣が綠色を呈して花の終る頃に紅色の花弁を二三枚生ずる小型性の「綠色ダーリア」(Green Dahlia) 等がある。

〔栽培〕 普通は球根を畑地に植ゑ込むのが簡單で、且つ生育も宜敷いので多く行

圖四十七百第

咲ーシンアフ



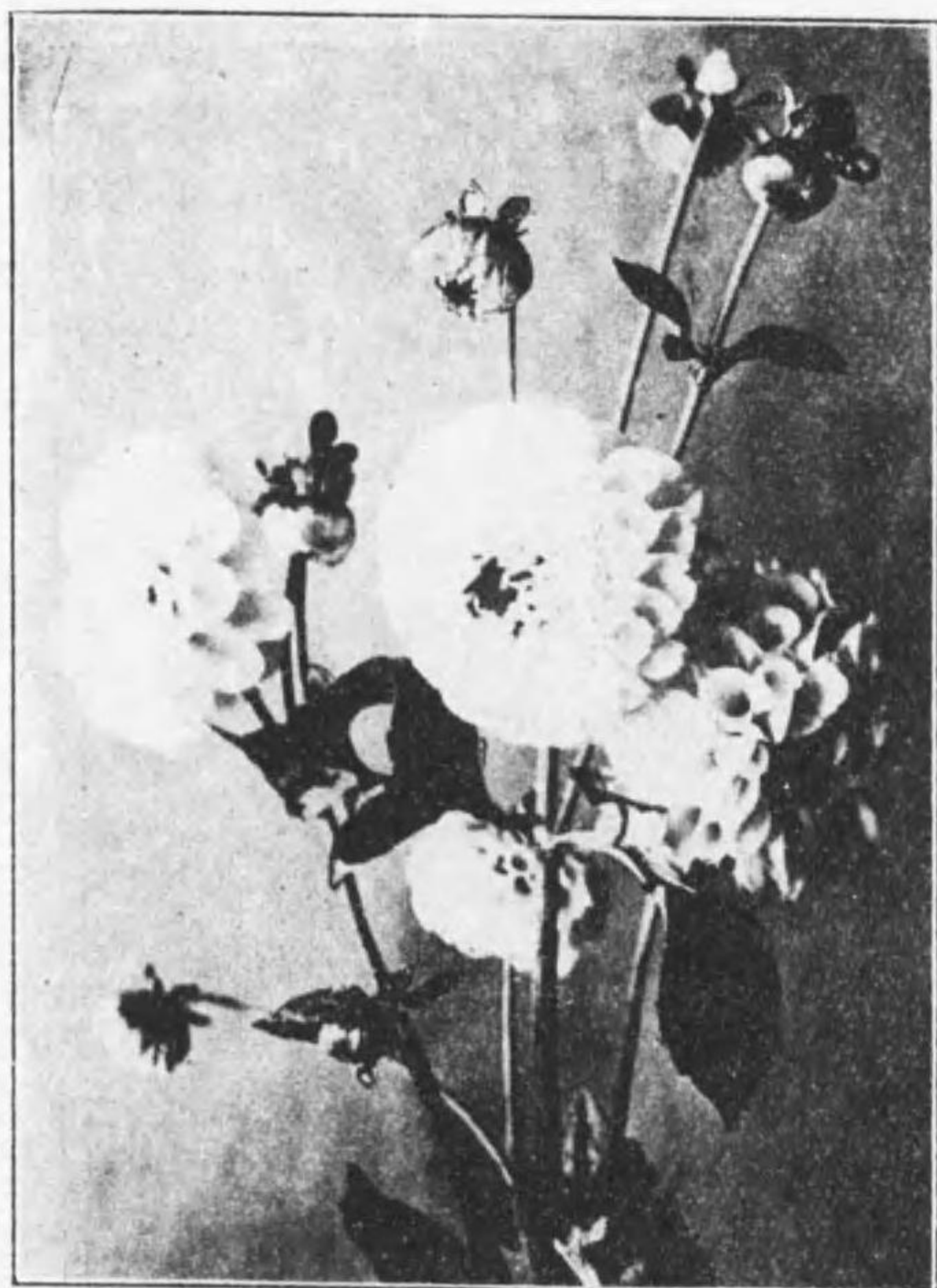
はるるのであるが、時としては新種を得んが爲めに、四、五月頃に播種法を行ひ、或は鉢植用と一品種を急に増加せしめんが爲めに、六七月頃に日覆を施した砂交りの床地に三節位の長さにして挿木を行ふ事があり、又稀には割接を行ひ、不用の塊根に目的の品種の莖を挿入

する場合もある。

育成する場所は日照が充分で排水が良好であり、風の強く當らない場所が宜敷く、球根の植ゑ込みは四月中旬頃に行ふもので、豫め栽植地を深さ七八寸に耕起して畦

圖五十七百第

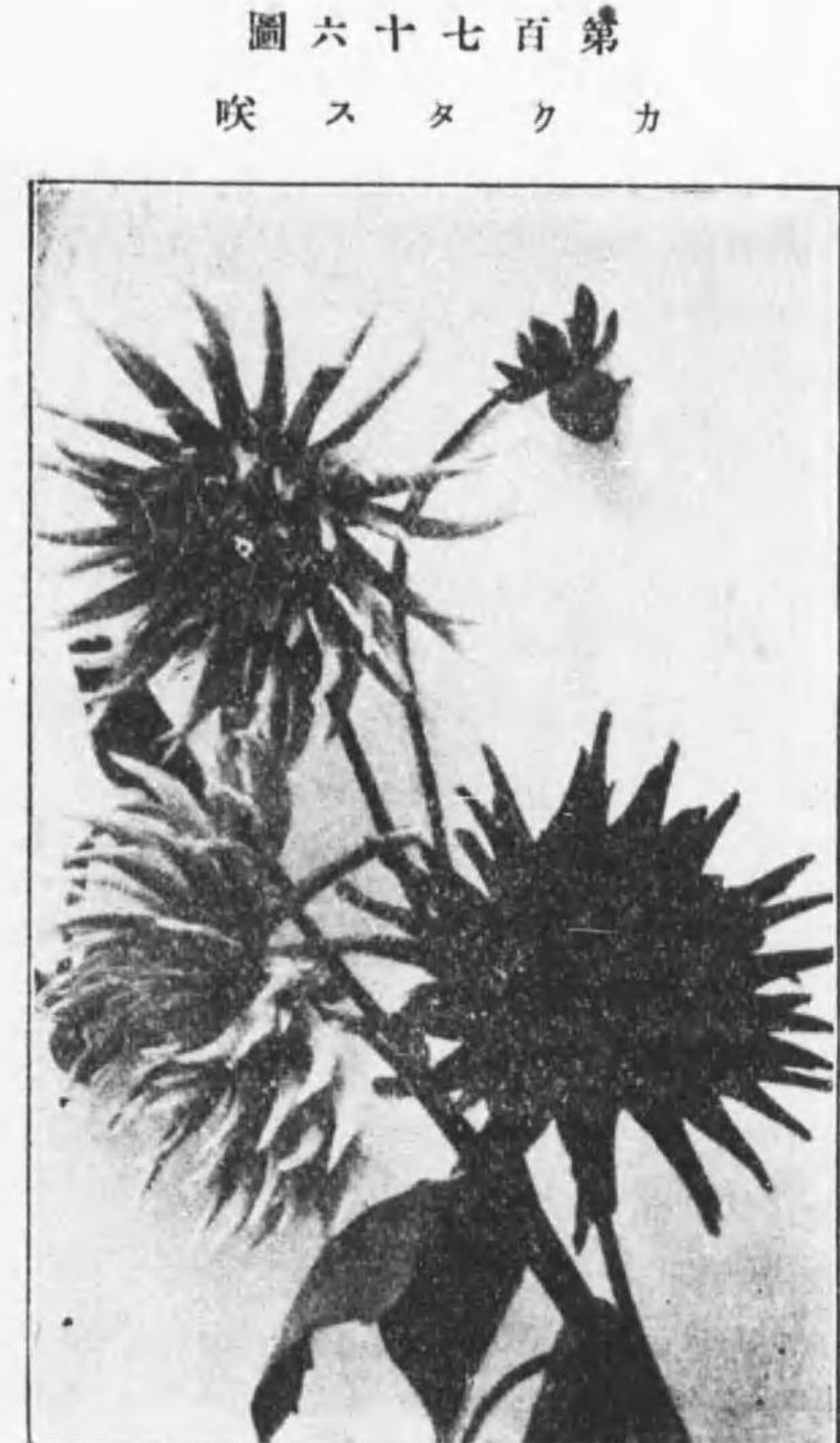
咲ンボンボ



を作り、堆肥、過燐酸石灰、草木灰等を基肥として施し、尙ほ人糞尿を注いで土を肥沃ならしめ、之れに一球宛三尺位の距離を以て植ゑ付くるのである。深さは地表下五寸位の處に芽のある様にする。又、徑一尺五寸、深さ一尺位の植穴を穿ち、之れに肥料を施し、其の上に土を少しく覆ふて植ゑ込む事も屢々ある。塊根の發芽する處は定まつて居るので、分根の際には必ず芽を缺がさない様に叮嚀に行ふ事が肝要で、定植前に暫らく塊根の數多聯結した儘苗床に假植し置き、芽の充分に判明する様になつてから分根して植ゑ込むと樂である。

「ダーリア」は一般に丈高く伸びて倒れ易いものであるから、一株毎に五六尺の支柱を四五本宛立つるか、或は列條に三尺隔てに五六尺の支柱を立て、更に竹か針金を横

に三段位渡して、之れに順次結付して行くのである。注意としては球根を傷けない様に立つる事が肝要で、植ゑ込みの時に豫め印を爲して置くこと便利である。



第百七十六圖
カクタス咲

ると莖葉が伸び過ぎて花蕾の着き方が減ずるものであるから、斯様な場合には過燐酸石灰を加用するが宜敷い。

花は六月上旬から咲き初め、七月下旬迄で第一期の盛時が終るから、七月末に地上三尺位の處から思ひ切つて一齊に切り捨て、中耕と液肥とを施して置けば、新たに萌

五六寸伸びた時に一度摘心を爲して、肥大な側枝を出させるが莖姿が亂れずに能く整ふて宜敷い。開花迄に一二回中耕を行つて根元を膨軟ならしめ、尙ほ追肥として人糞尿か油粕の稀薄な液肥を數回與ふるのが普通であるが、餘り多く與ふ

芽を生じ、九月から十月頃に及んで夏の花よりも一層鮮明で優良なる花を着くるに至るものである。尙ほ切花としても秋咲のものは水揚げが良好で久しきに耐ふるのである。

「ダーリア」の花蕾は大抵三叉状を爲して發生するものであるから、中央のものを殘して兩側のものを早く除却する様にすると花形が大であり、頂に近いもの程大輪を現はす様である。花の萎んだものは結實せしむる事なく、努めて切り去る様にし、後に開く花に餘力を與へ、又球根の衰へない様に努む可きである。

球根は一二度降霜に遭はして莖葉の萎凋してから掘り上げるが充分に休眠を促して宜敷く、先づ地上三四寸の處から莖を刈りて後に掘り上げ、土の附着した儘二三日乾燥し、箱か俵等に入れて貯藏し、或は土藏か穴藏等に入れ、濕氣と凍結とを防ぐ爲めに藁、砂等を被ふて置くのである。寒さの烈しくない地方ならば莖幹を切り去り、其の上に一尺程土を盛り、更に藁、蕙等を以て覆ふて置いても宜敷い。要は凍結せしめない事で、翌春發芽前に掘り上げ、分根して栽植を行ふものである。

九 カンナ(曇華) Cannna (曇華科)

〔解説〕 初夏から秋末に至る迄可なり永い間花壇に美観を添へる球根植物で、根莖は年々不規則に發育して行く性質がある。莖葉は芭蕉に似て小さく、花は圓錐花序又は總狀花序を爲して着生し、萼花瓣何れも三個宛で、種々の彩色を有して居る。

第 七 百 七 十 七 圖
カ ン ナ (金 覆 輪)



〔種類〕 現今園藝上で廣く栽培せらるる者としては、
一 佛蘭西カンナ (French Cannula or Crozy Cannula) 之れは佛蘭西でクロジイ氏が交配に依つて作出した矮性の大輪種で、葉が丈夫で美麗なものである。

二 伊太利カンナ (Italian Cannula or Orchid-Flowering Cannula) 之れは伊太利で作出せられた交雜種で、丈高く、花も大輪で花萼蒲に似た形を爲し、花瓣が軟かい特徴を有して居る。

尙ほ此等に屬するカンナには葉の紫黒色、綠色のもの、花の着生の多いもの、少いもの、大輪もの、小輪もの、鮮黄、深紅、樺色、桃色、黄地に斑點あるもの等色々ある。

〔栽培〕 「カンナ」の栽培は根莖を植ゑ込むが最も宜敷く、大抵春四月頃に一二尺の距離に深さ五六寸の植穴を掘り、之れに堆肥、過燐酸石灰、木灰等を入れ、少しく土を覆ひ、其の上に植ゑ付くるもので、開花に至る迄に二三回稀薄な液肥を施すが宜敷い。

花壇に於ては丈の高いものは境栽花壇の周に配置し、矮性のものは寄植として頗る美観を呈するもので、交互に色の取り合せを能く考へて植ゑ込む可きである。開花が終つたらば之れを切り去つて結實せしめない方が宜敷く、秋末に及んで霜の爲めに莖葉が萎凋して來たらば地上二三寸の處から切り去り、球根を掘り上げ、土の附いた儘乾燥し、穴藏か排水の良好な溫暖な場所に埋めて置くのである。又、餘り寒さの烈しくない地方では、秋末に球根を掘り上げずに、莖丈け刈り取り、藁等で防寒の設備を爲し、其の儘越年せしめ、翌春に掘り採つて根の整理を行ふても宜敷い。

若し「カンナ」を種子に依つて繁殖せしむるには、種皮が堅いので播種前に一二晝夜水に浸すか、或は少しく種皮を削つて後下種するが發芽を良好ならしむるものである。

一〇 グラヂヲラス(唐菖浦) (鳶尾科)

(學名) *Gladiolus* (英名) *Sword Lily*

〔解説〕 球莖は扁圓形を爲し、年々上に向つて新たな球莖が形成せられ、其の下部側面に數個の子球を簇生する特性を有して居る。葉の形態は本邦の菖蒲に一寸似て居るので唐菖浦とも唱へられ、劍狀で葉脈が著るしく隆起し、長さ二三尺に直立し、一球から五六枚を生ずる。草丈は四五尺に達するもので、花は六七月の頃に一二尺の花梗の周に二十有個穗狀に着き、順次下方から上方に咲き上り、花瓣は六個で多少不同形で稍々漏斗狀を爲し、横を向いて多くは開いて居る。初夏に於ける花壇には大抵栽植せらるるもので、又切花としても大いに需要があり、花の保ちも相當に永いものである。

〔種類〕 グラヂヲラスの原産地としては南亞弗利加、地中海沿岸及び西部亞細亞であるが、現今栽培せられて居る大部分のものは南亞弗利加産のもので、其の雜種に依つて改良せられたものである。其の主なる品種を記すと

- 一 ガンダベンシス (*G. Gandavensis* Van Houtte, *Exhibition gladiolii*) 之れは栽培種中

最も普通で、且つ古いものである。性質が丈夫で穂は長い、花が小さくて晩咲種である。花の色は純なる紅色を呈する。近時、此者と雜交に依つて種々の新品種が作出せられて居る。

二 ルモアネイ (*G. Lemoinei*, Hort, *Butterfly gladiolus*) 之れは大輪の晩咲に屬し、花色は黄、紅、紫の三色が主で、乳白のものもあり、何れも鮮美な鐘狀を呈して充分に擴がる事なく、尙ほ下部の花瓣に往々同色の濃厚な縞條、又は刷毛目があるのが特徴である。尙ほ之れから生じた改良種も澤山ある。

圖八十七百第
スラチジラグ
(系スシンペダンガ)



三 チルドシイ (*G. Childsi*, Hort.) 之れは發育が著るしく旺盛で、草丈四五尺に及び一二尺の花穂に美大なる花を廣く開き、色は紫、紅、黄、其の他種々あつて、屢々瓣の内面に美麗なる斑紋や斑點を有することがある。花の着き方の完全なると水揚げが良好なる爲めに、花壇及び切花として大いに歓迎せらるる品種である。

- 四 ナンセイアヌス (*G. Nancaianus*, Hort.) 之れは大々輪の晩咲種で、花は良く開展

して大きく、色には紅と紫紅とが普通で、其の他種々の美色を示し、又、斑點を有するものと穂の一方が空虚になる事が特徴である。

五 コルビレイ (G. Colvillei, Sweet.) 之れは早咲種で花穂が短かく、花瓣は橢圓形を爲して先きが尖り、紅色が普通

で下瓣に縞條を有するものである。

尚ほ以上の外、早咲種で美しい姿を示す。「ブレイロックス」(G. Praecox, Hort.) 一球から二三莖を生ずる「ナムス」(G. nansu, Hort.) 花穂の時々分岐する「ラモーサス」(G. ramsus, Paxt) 等を始

圖九十七百第

(系イレビルコ)スラチヂラケ咲早



めとし、數多の交雜種が作出せられ、其の品種は夥しい數に達して居る。

〔栽培〕 球根を普通露地に植ゑ込むのは三月下旬から四月中旬頃迄で、丈夫な品種は秋植とする事があり、又例外として六月頃まで抑制して置いて、九、十月頃に開花

せしむる事もある。位置は成る可く日當りが好くて砂質壤土の地が適して居り、腐植質の乏しくない肥沃土が望ましいのである。夫れで植込前に豫め耕起して堆肥や大豆粕、さては灰等を施し置き、或は五六寸距りに植穴を設け、之れに肥料を施して少しく土を被ひ、其の上に球根を一球宛並べていつても宜敷い。深さは三寸位が適當である。切花用の畑だと二尺の畦に五六寸の株間が良いとせられ、觀賞本位の花壇だと後方に背景を置いて其の前に植ゑ込むのが調和がとれて宜敷い者である。

開花前に稀薄な液肥を一回施し、若し風に倒れる様であれば篠竹等を立てて支柱と爲し、花は採種以外のものは成る可く花後に切り去る様にし、尚ほ花が終つた頃に一回液肥を施して置く。球根の充實が宜敷く、秋季に及んで葉が黄色となつて來たら球根を掘り上げ、其の儘乾燥して後莖を切り去り、又、球底に萎縮して附着して居る舊球を除去し、尚ほ底部に群生する子球は別に分離して、函又は適宜の容器に入れて濕氣や凍結の恐れのない場所に貯藏し、翌春の植ゑ付け迄置くのである。

繁殖を圖るには實生も行はるるが、多くは子球を床地で二三年間育成するが宜敷い。

更に特別の栽培としては秋季に鉢植として十一月に温室に入るれば十二月には

開花を始め、十二月に植ゑ込んだものは三四月頃に切花として用ふる事が出来るのである。

第二章 宿根草類

之れは又、多年草類とも稱へるもので、地上部の莖葉は開花結實後枯凋しても、地下に在る根や莖は越冬を爲し、翌春に及べば再び地上に新芽を抽出し、花園の美觀を現出する草本で、毎年播種の必要が無く、時々分株する位の事で宜敷く、保護管理上便利なものが多い。而して其の主なる繁殖法は挿木法と分株法とで、稀に播種法に依るものである。而して此の中で球根に依るものは特に第一章に於て述べた通りである。

一 ひなぎく(雛菊・延命菊) (菊科)

(學名) *Pellis perennis* L. (英名) English Daisy.

〔解説〕

普通に「デジー」と稱へて居るもので、極めて矮性の丈夫な宿根草である。

葉は匙形又は倒卵形を爲して根元から多數叢生し、草の高さは四五寸に過ぎない。早春から夏に亘つて花莖を葉叢の間から抽き、頭状花序の白色で、瓣端に紅色を帯びた花を頗る長い間開くのである。

〔種類〕

元來は單瓣の白色で、僅かに紅色を周圍に現はすものであるが、園藝的には大輪種と小輪種とがあり、前者は花は可なり大きい花付きが尠く、後者は花は小さいが澤山開くのである。尙ほ一重、八重、紅色等があり、瓣の卷いて筒状を爲したものと一花の中から數



圖十八百第
(瓣單)一ッテ

本の花梗を生じて、其の上に咲く車咲、二階咲等もある。

〔栽培〕

春花壇には是非必要なもので、丈が甚だ低く、花期が長く、續くので、多くは花壇の縁取りとせられ、又、多數密植して模様を現はすのに宜敷い。土地は冷濕の場

所を好み寒さには可なり堪へ得るのであるが、暑さと乾燥には抵抗性が弱いものであるから、夏の土用前に稍や日蔭の地に移して培育する必要がある。

元來は宿根草であるが、二年草として取扱ふ事が多く、繁殖を圖るには秋九月末頃に播種して(苗床に)苗を育成する事もあるが、普通には花が終つてから株を掘り上げ、分岐した枝を短かく切り離し、之れを床地に適當の株間に植ゑて時々施肥を行つてやると、秋迄には相當の大きさと爲るものである。秋末に及んで之れに霜除けを施し、翌春に一度液肥を與へて後目的とする花壇に植ゑ出すのが普通である。

雛菊を早く花壇に於て見ようとするには、秋末に之れを鉢植と爲し、冷床中に入れて育成して行くと、二月頃から開花を始むるものであるから、之れを鉢の儘か或は鉢から抜いて花壇に植ゑ出す様にすれば宜敷い。又、八重の大輪種等も鉢に植ゑて見ることが適當して居り、充分に肥培すれば花も大きく、且つ莖も延びて來るので、切花とするにも適する様になるものである。

一 アルメリア (Armeria) (磯松科)

〔解説〕 之も、デジーと同じ様に花壇の縁植として多く用ひらるる草丈二三寸に

過ぎない矮性の多年生草本で、細長い常緑の葉は地上に密接して生じ、早春から秋末に及ぶ迄、葉叢の間から花莖を抽出して、頂に紫紅色或は白色の小花を簇生するものである。

〔種類〕 アルメリア屬としては約五十種許りあるが、普通に栽培せらるるのは次の二種である。

一 はなかんざし (A. vulgaris, Willd. Common Thrift) は細長い線形を爲した光澤ある常緑の葉を地元に密生し、多くは縦に外方に曲つて居る。莖は灌木状で分岐すること多く、高さは二三寸を超えない極めて矮性種である。四五月頃には直立した花梗の頂端に多數の花を球狀に着生し、長さ四五寸で短毛がある。花色は紫紅色が最も多く栽培せられ、尚ほ白色、薔薇色、鮮紅色、及び大輪種等が存して居る。

二 おほはなかんざし (A. Plantaginea, Willd. Giant Thrift) は前者よりも大型で莖葉ともに強剛である。而して葉は縦に外方に曲る事なく平滑で線狀披針形を爲し、花梗は高さ一尺以上にも及び、先端に濃紫色の球狀花叢を群生するのである。

〔栽培〕 形姿が矮態であり、且つ常緑のものである爲め、専ら花壇の縁取用として栽培せられ、或は岩石の間に配植するに宜敷く、又、鉢植として愛翫し、丈の高いものは

切花とする事もある。育成の場所は成可く日當りが充分で排水がよく軽い壤土が繁茂に適して居る。主として繁殖は株分けに依るもので、大抵六月頃と秋九月頃とが宜敷く、先づ株を掘り起して丁寧に分株し、苗床に三寸位の間隔に植付け、日覆を施し、又乾燥に陥らない様に灌水を行つて濕氣を保たして置く、晩秋の頃には充分根張りを生じる。冬迄の間に一回液肥を施して勢力を旺盛ならしめ、冬季には簡單な霜除けを爲して置くと、翌春には勿々に花壇に植ゑ出して花を見る事が出来る。若し株分けを早春に行つたものだと秋頃に開花を促がすもので、株が新らしくなると開花を始むるのである。夫れで一定の場所に植付けてから三年目には必らず掘り上げて株の整理を行ふ必要があり、さうでない、と株の中心が蒸され、古株が枯葉等を多く生じて見悪くなり、草勢も衰へ、従つて花付きも漸次減少して來るものである。

三 しやくやく(芍薬) (毛茛科)

(學名) *Paeonia albilora*, Pall. (英名) Herbaceous Peony, or Chinese Peony

〔解説〕 芍薬は牡丹に酷似した宿根性の草本で、牡丹よりも花が小さく、且つ開花が約一ヶ月遅るるものである。根は牛蒡に似て多くは斜に地中に入り込み、莖も地

圖一十八百第
(遊子獅)藥芍



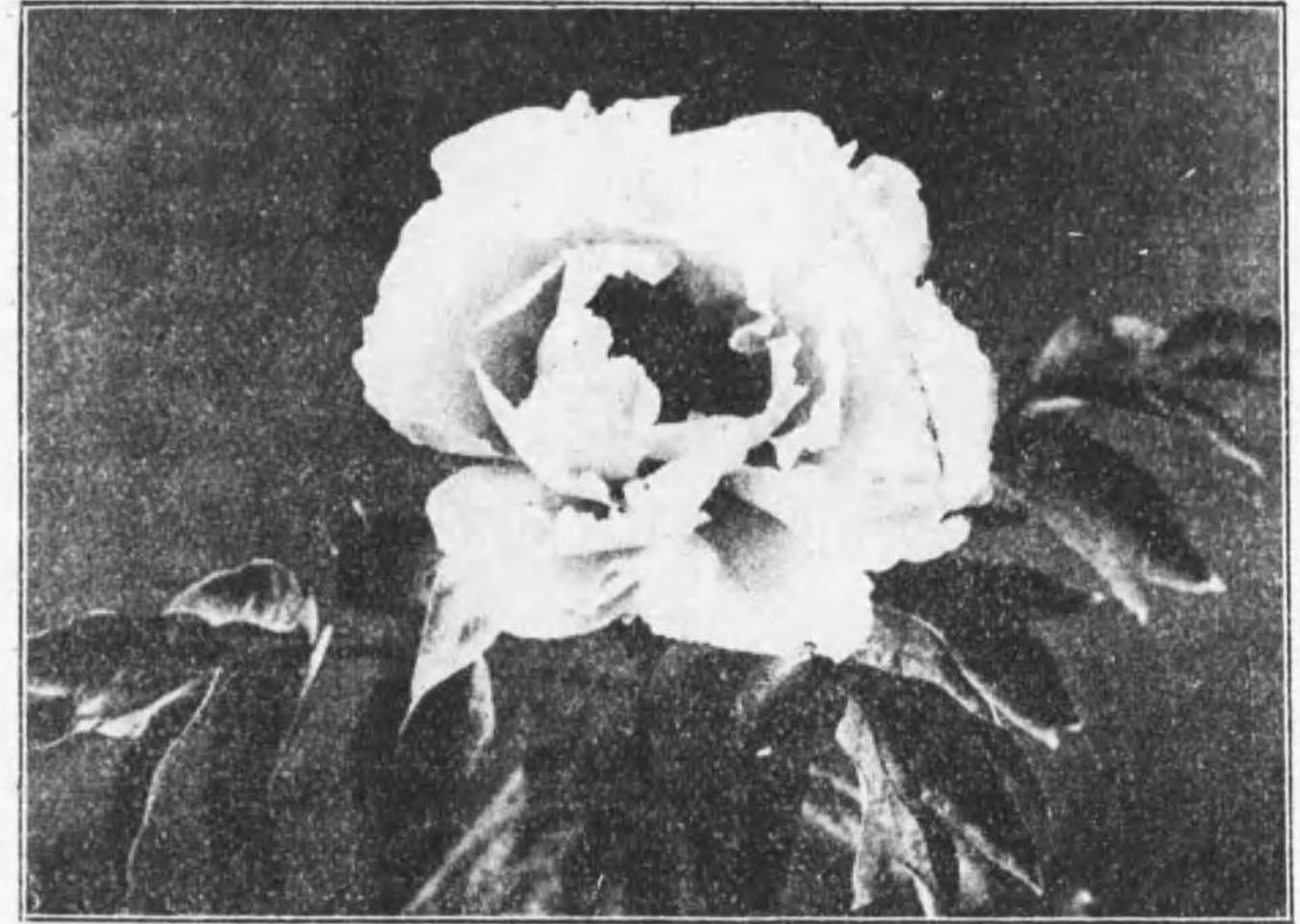
中に存し、葉と花莖とが地上に現はるるものである。三四月頃に新葉を地上に抽き、開舒したものは三裂、五裂の複葉となり、各小葉は廣披針形、長橢圓形等を爲し、色に紅色、紅紫色、斑入り等があり、又、白毛を蒙るものもある。花は六月上中旬に花莖の分岐した頃に各々一花宛着生し、一重、八重、千重を初めとし、雄蕊の長短、形状の變化したものの、白、紅、絞り等の花色を有し、更に其の濃淡や斑點の付き方に異つたものがあり、尙ほ細部に互つては種々の形容を現はすものである。

〔種類〕 芍薬は本邦へは往

古支那から渡來したもので、元祿、寶永の頃には盛んに培育せられた事があるので、其の品種も數百種に及んで居る。其の後幾多の變遷を経て來たのであるが、就中著名なるものとしては、

白色……富士峰(大輪)・生見玉(千重)・青蟠龍(鞠咲)・月世界(紅交り大輪)・雪の山(盛上咲)・錦の森紅絞
大輪)・重獅子(紅絞千重)・雪の旭(三段咲)・青龍錦(青絞八重)・千歳錦(紅絞萬重)。
紅色……紅三階濃厚)・墨の一(濃墨)・獅子遊(抱咲大輪)・千代鶴(千重・淡紅)・錦襪(更紗絞八重)。

第百八十二圖 芍薬(千代鶴)



等がある。
又、歐洲諸國で栽培せらるるものは「オフイ
シナリス (P. officinalis, I. Common Peony)」に由
來するもので、本邦産のものよりも開花期が
早く、葉が多くに分れ、幾分葉縁が上向する傾
きがあり、先端が圓味を帯びて光澤に乏しい。
尚ほ子房に軟毛を多く生ずる特徴を有して
居る。花には一重・八重・淡紅・本紅等があり、雄
薬の變化に依つて種々の栽培品種を生じ、近
時多數の輸入を見て居る。
尚ほ現今では右二種の交雜に依つて生じ
た新品種も尠くない。

〔栽培〕 芍薬は日常りが充分で排水の良好な場所が宜敷いが、成る可く有機資に
富んだ沃土が地下の適潤を保つのに相應はしく、特に芍薬園として設くる事もある
が、或は境栽として仕立つる事もある。

普通は株分けにて育成して行くもので、九月末頃に一株四五芽を有するものを二
尺位の株間に植ゑ込むもので、植穴には堆肥・糠・過燐酸石灰等を施し、土を少しく置い
て其の上に埋め、更に二寸位土を被ふて置くのである。植込みが遅れると新根が寒
さに犯さるので、十一月中旬迄に行ふ可きである。嚴寒前に馬糞を少しく與へ、防
寒用として粗殻を以て植穴上を覆ふて置く。春の發芽が良好であり、更に發芽前に
薄い液肥を一回與へるが宜敷い。花は一莖一花とすれば美大であるから、他の分岐
したものは除却するが宜敷く、開花期に近づいたらば支柱を立てて莖を風の爲めに
折れない様にし、努めて灌水する事を怠らず、又牡丹と同様に覆ひをすれば雨に犯さ
るる事が尠くて、可なり永く保つ事が出来るのである。花後は直ちに切り去つて結
實せしめない方が草勢の減殺さるる事尠く、尚ほ落花後に稀薄な液肥を與へて置く
と株全體の爲めに宜敷い。其の他、夏季には根元に敷藁か刈草を施して乾燥を防ぎ、
日被ひを爲すと株の張り方が良好である。又、冬季に馬糞を施し、或は寒肥として人

糞尿と過燐酸石灰を與ふるのも甚だ効果がある。
芍薬は四五年目に掘り上げて植ゑ替へを行ひ、同時に根の整理と分株繁殖とを行ふのが宜敷く、大抵九月の末頃が適期である。尙ほ新種の育成は播種法に依るもので、九月の末に成熟した種子を採收して床蒔とすれば、翌春三月頃には發芽を始める。夫れを秋期に充分肥沃にした苗床に移植し、更に翌秋も同様に移植を行つて順次擴大して肥培に努むれば、四年目からは花を見る様になり、爾後其の中から優良なものを選出する様になれば宜敷いのである。

四 きんぎよさう (金魚草) (玄參科)

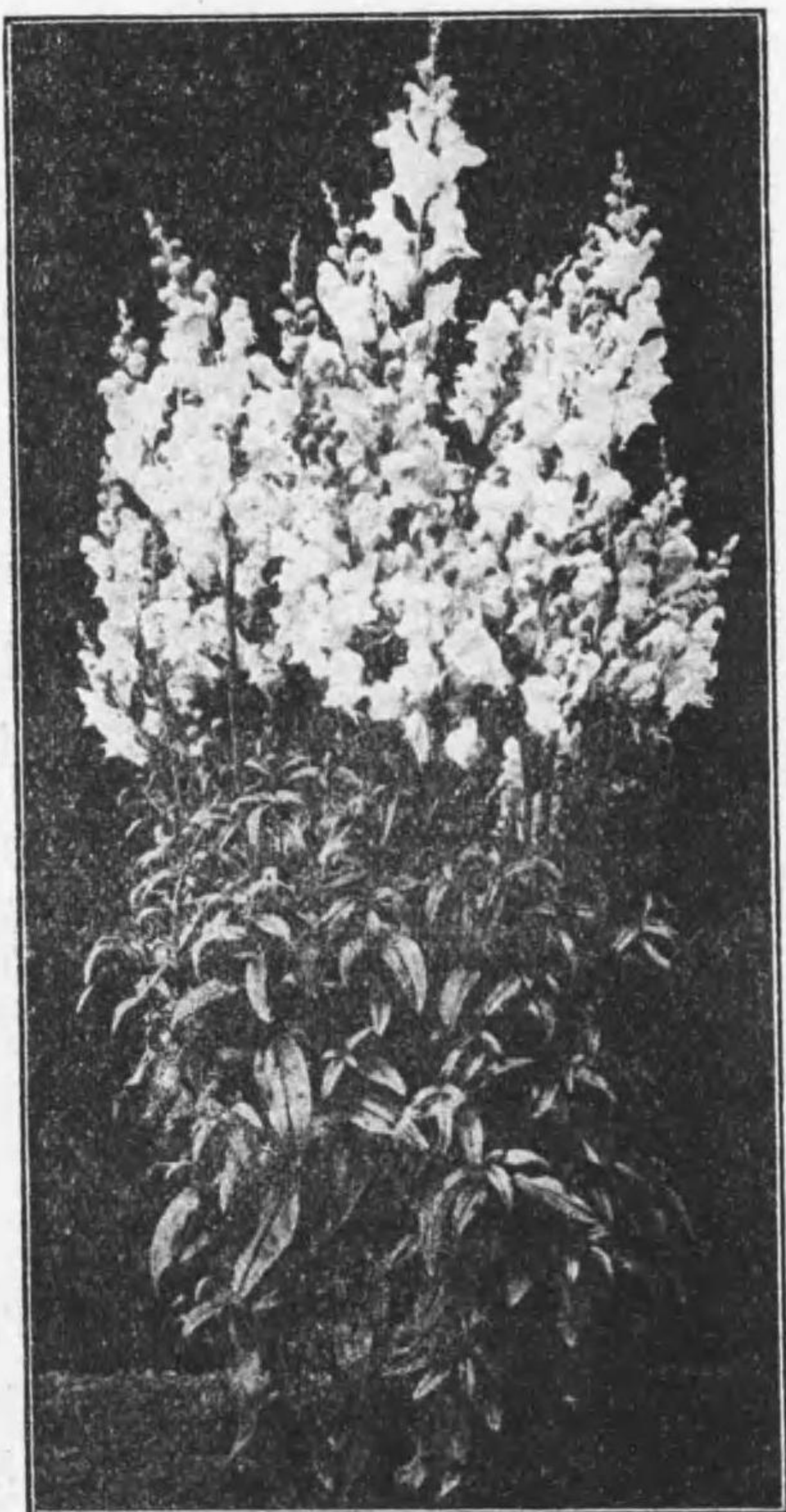
(學名) *Antirrhinum magus, L.* (英名) Snap dragon.

〔解説〕 元來は宿根性の草本であるが、園藝上では秋播を行つて二年草として取扱ふ事が多い。高さは二尺位に達し、葉は披針形、又は長橢圓形を爲し、全縁平滑で對生である。花は晩春から秋に至る迄可なり永い間開花するもので、穗狀に着生し、花冠は長い筒狀の大輪で、不規則に彎曲反轉を爲し、假面狀を呈するものである。色は甚だ變化性に富み、紅、黃、白を始めとし、暗紫、紅色、白、黃色、紅黃の斑入り等があり、一花内

にありても數色の配合せられて、其の變化も甚だ多く、一重が普通であるが八重も生じ、矮性種もある。

此の植物は原産は地中海沿岸地方であるが、獨逸のバウル氏が遺傳學研究の實驗

圖三十八百第
草魚金



材料としたので、普ねく知らるる様になり、従つて獨逸にありては最も多くの品種を有して居る。

〔栽培〕 種子に

依るのが普通で、秋

の彼岸頃に苗床に丁寧な播種し、濕氣を常に保つ様にし、本葉の二三枚出た頃に一度他の床に移し、冬季は霜覆を施し置き、翌春に之を花壇に植ゑ出すのである。さうすると大抵四五月頃には開花を見る。若し春の彼岸に播いたものであると、六七月頃から晩秋にかけて花を開くのである。又、挿木で繁殖せしむるには、六月頃に枝を切

つて床地に挿し、充分發根してから花壇又は鉢に植ゑる様にすると、早いものは秋には花を着くるに至るものである。肥料としては開花前に稀薄な液肥を數回與へ、又開花後にも少しく與へて置くことの爲めに宜敷い。

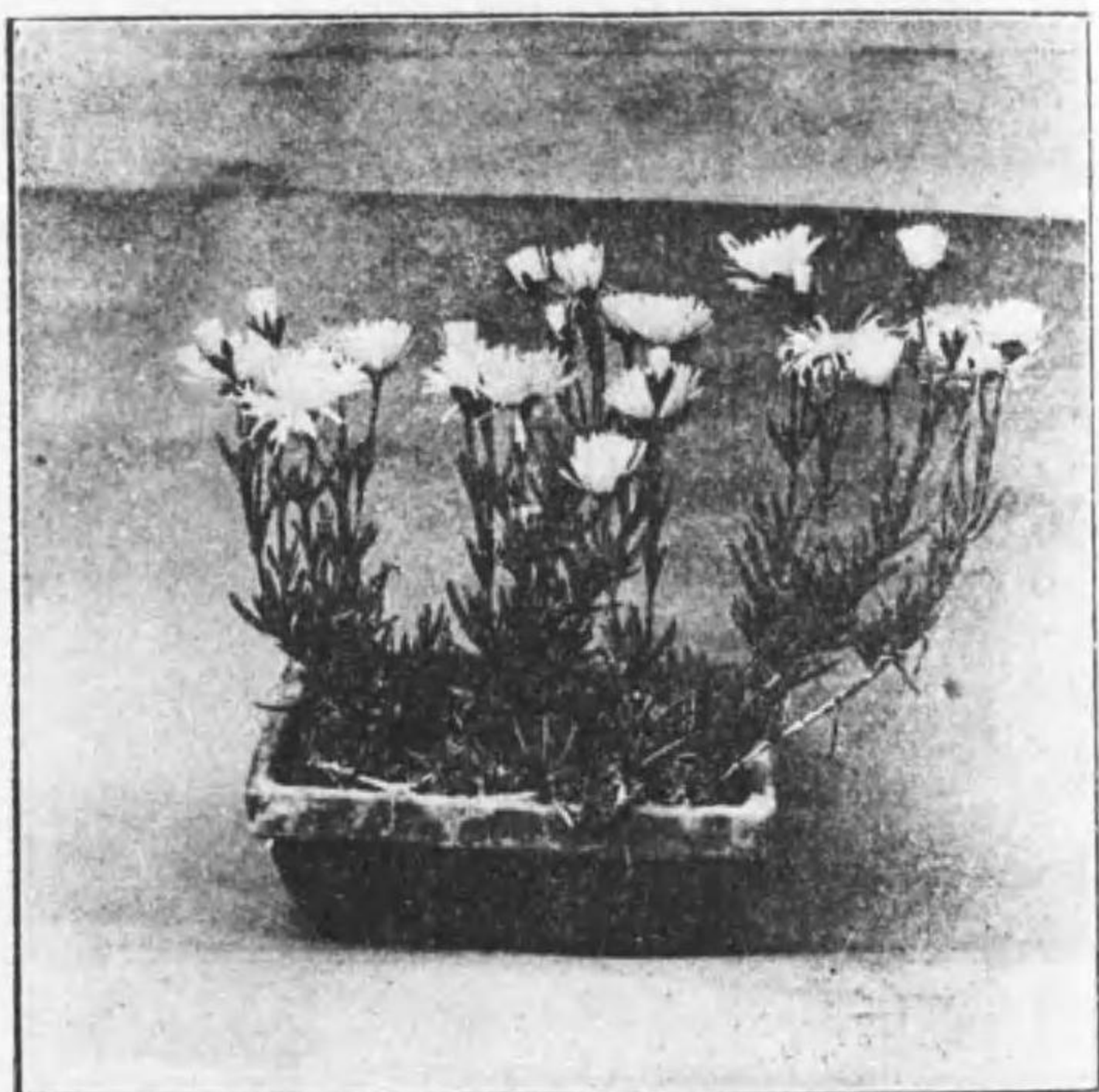
五 まつばぎく(松葉菊) (蕃杏科)

(學名) *Mesembryanthemum tenuifolium*, L. (英名) Midday Flower.

〔解説〕 多年生の草本で丈低く、四五寸に過ぎないもので、莖の下方は稍々灌木狀で木質化し、匍匐性を呈するものである。葉は線形多肉で對生し、葉腋からは多數の枝を生じ、其の頂上に晩春の頃から夏季に互つて菊花に似た桃色、又は白色の花を開くのであるが、夫れが日中のみ開いて夜は閉ぢ、數日間繰り返すもので、全體の開花期間は五ヶ月位續くもので、花壇植としても、鉢植(殊に釣鉢)としても宜敷い。種類としては通常種の外、葉形の細小なる小葉松葉菊があつて、花は小さいが紅紫樺等の色を有し、花壇の縁植と爲すのに宜敷く、又大葉松葉菊は肥大なる葉を有し、花の色は黄色が多い。

〔栽培〕 専ら挿木に依つて繁殖せらるるもので、新梢を春夏の頃に二三節に切り、

圖四十八百第
菊葉松



六 びぢよざくら(美女櫻) (馬鞭草科)

(學名) *Verbena Phlogiflora*, Cham. (英名) Verbena.

〔解説〕 南米ブラジルの産で一名ハナガサとも稱へ、莖は直立して枝を多く分ち、四角柱を爲して居る。葉は對生で長橢圓、又は披針狀三角形で先端が尖り、葉縁には鋸齒を有し、軟毛がある。花は小形であるが管狀の萼片の先きに櫻花狀の五裂した

之れを砂土を盛つた平鉢に挿すが宜敷く、適當な灌水と日覆とを施せば容易に發根するものである。又、春秋に株分けを行ふこともある。注意としては冬季防寒の設備が必要で、木框内か低温室で保護して置けば宜敷く、肥料は春の發芽前、及び開花の前後に稀薄なる液肥を施すのが普通である。

花冠を開き、一個處に十數個群叢して生じ、一大毬花を形成するものである。晩春から晩秋に及んで花期が甚だ長く、就中五六月が最も美觀を呈し、色には紅紫白・青絞・覆輪等種々のものがあり、寄植花壇として色彩を適當に配置して植ゆる時はなかなか美觀を現はすものである。

第 百 八 十 五 圖
美 女 櫻 (ナベ-バ)



〔種類〕 通常栽培せられて居るものの外、次の三種も亦觀賞上の價值を有するものである。
一 矮性バーベナ (*V. Chamae-dryfolia*, Juss.) 莖が細くて曲り、基部は匍匐し、葉は長橢圓形で無柄であり、花穂は短かくて扁平であり、形が不規則で紅色が普通である。

二 大形バーベナ (*V. incisa*, Hook.) 葉の切れ方が深くて毛を多く生じ、莖は可なり高く上昇するものである。花穂は扁平で下部には毛を有し、大形で紅紫色を普通とする。

三 香バーベナ (*V. tencrroides*, Gill et Hook.) 花が白色で芳香を有するのが特徴であり、花穂は甚だ長く、葉の縁邊が外方に曲る性質がある。

〔栽培〕 播種は秋九月頃が宜敷く、冬迄に充分に苗床で育成し、防寒の設備を爲して寒を過ごさせ、翌年四月頃に花壇に植ゑ出すもので、植ゑ込む距離は六七寸位が適當である。又挿木に依つても容易に繁殖の出来るもので、八月頃に枝を一旦刈つて更に新梢を出ださしめ、夫れを挿穂として用ふれば結果が宜敷く、殊に木框を用ふれば好結果が得られる。尙ほ莖の下部からは根を發生し、或は匍匐して地面に根を鉤し易いものであるから、之れを分離して育成すれば、草丈が低く保てて、且つ斷えず花を開くので面白い。肥料としては稀薄な液肥を植ゑ込んで根の漸く伸長し始めた頃、及び開花前後に與ふると宜敷い。

七 のこぎりさう (鋸草) (菊科)

(學名) *Achillea millefolium*, L. (英名) Common yarrow

〔解説〕 本邦産の鋸草は觀賞用と爲すには花も小さく、且つ色彩も美麗とは云へ

ないが洋種鋸草は高さ二三尺に達し、莖は多数叢生して分岐を爲し、細形の葉に鋸齒を爲す事著るしく、葉面も皺曲を示すものである。花は七月から九月頃迄開き、各枝の頂端に於て繖形狀に多数着生するもので、紫紅色 (Red yellow) や薔薇色 (Pink yellow) がある。尚ほ黄花鋸草 (A. Filipendula, Lam. Fernleafyellow) は前者よりも丈高くして四五尺に及び、莖に毛を多く生じ、花は著るしく密生して大球状を呈し、黄色を示すものである。

圖六十八百第
草鋸



がある。尚ほ黄花鋸草 (A. Filipendula, Lam. Fernleafyellow) は前者よりも丈高くして四五尺に及び、莖に毛を多く生じ、花は著るしく密生して大球状を呈し、黄色を示すものである。

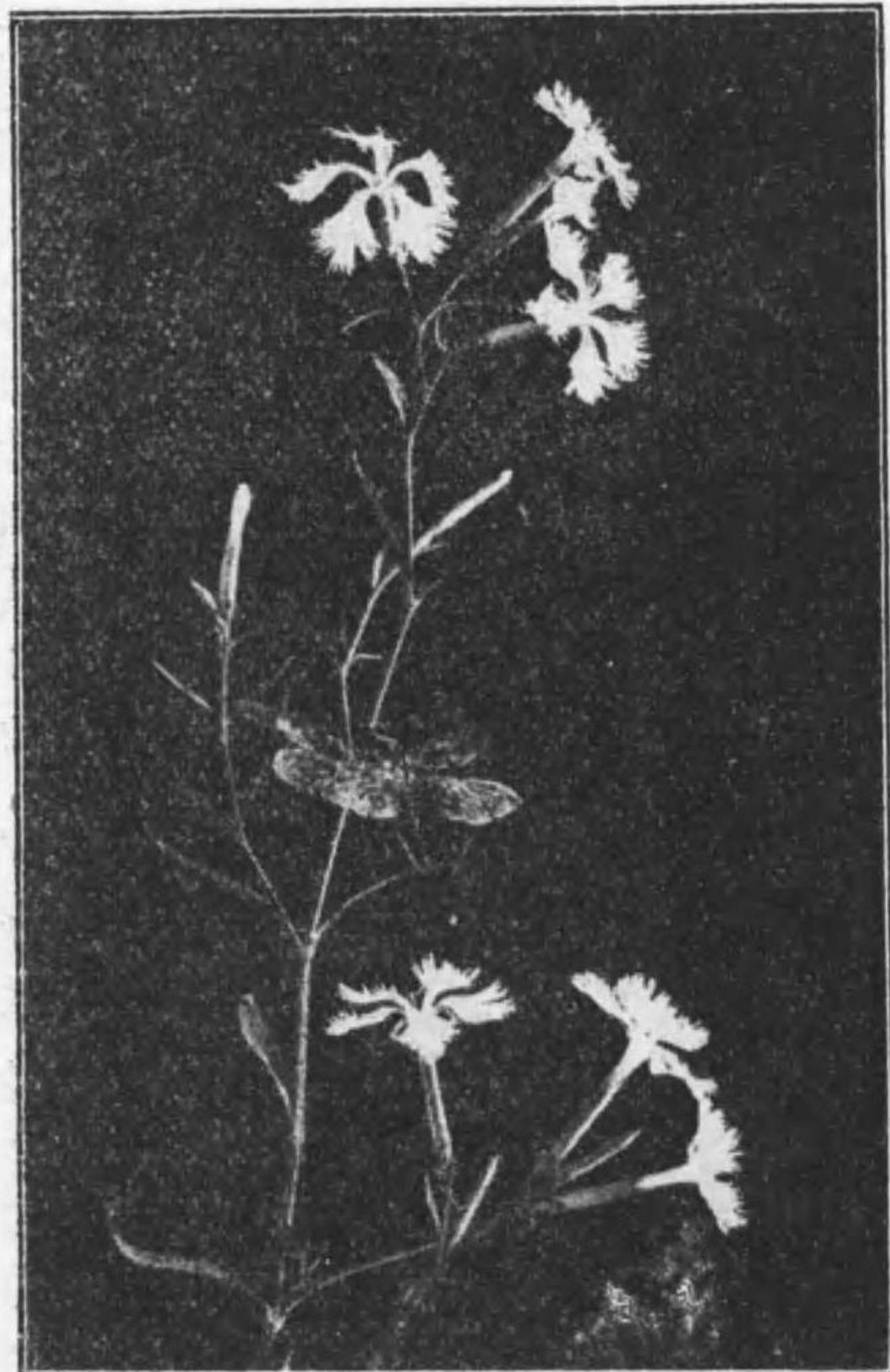
育を爲し、秋期迄には充分に根も張り、翌春には美花を着くるに至るものである。然し普通には株分けが多く用ひられ、春期親株を掘り起して適當に株を分離し、之れを花壇に植ゑ込むもので、場所としては境栽園とか曲線の自然的な處が相應はしく、植

付後、稀薄な液肥を一二回與へて置けば生育、着花が宜敷い。此の花は單に園地で眺むる許りで無く、切花としても可なり多くの需要がある。

八 石竹類 (Dianthus) (石竹科)

〔解説及び種類〕 石竹類は多くは宿根草で二百五十餘種にも達し、就中現今最も賞用せられて居るのは「カ

圖七十八百第
竹石



する事無く、瓣端が粗くて淺裂し、苞が甚だ長い點に於て區別を見るのである。

ーネーションで、其の他撫子、石竹等の色々の種類も亦廣く栽植を見るものである。而して普通唱へる撫子 (罌麥) と石竹とは其の異なる點は、前者は花瓣が離生して瓣端が細く深裂し、且つ苞が短いに對し、後者は花瓣が離生

一 カーネーション麝香撫子 (*D. Caryophyllus*, L. Carnation or Clove Pink.) 莖の高さ二三尺に達し、下部は木質状となり、全體平滑で、白粉を少しく帯び、節は甚だ高まつて居る。葉は帯白綠色で厚く、中央に縦溝を有する線形で、先端は硬くて光つて居る。

圖八十八百第
ンヨシーネーカ



花は花壇にありては五六月頃
に開き、淡紫色を基礎とするも
のであるが、白色、黄色、紫色、紅色
及び各種の中間色も甚だ多い。
又、瓣には一重、八重の外、種々花
形の變化したものがあり、萼を
包む苞は短かく、芳香が頗る高
いので麝香撫子の名さへ附け
られて居るのである。而して花色の一色のものをセルフ (*Solo*)、一花中に他色の一種
條斑となれるものをフレイキス (*Flakes*)、一花中に二三種の條斑のあるものをビザ
ルス (*Bizarres*)、覆輪となつて居るものをピコティーム (*Pichtees*) 等と呼んで居る。
尙ほ形質を主として園藝上から分つて見ると、

(イ) ボーダー、カーネーション (Border Carnation) 性强健で比較的寒氣にも耐ふるので、花壇植
と爲すのに宜敷く、大抵六七月頃に開花するもので夏咲種 (*Summer Carnation*) と稱へられ、花
短かくて割合に垂下する事が無く、切花としても適して居るが、花の大きさや香氣等に於ては到
底他の種類に及ばない。

(ロ) マルメーション、カーネーション (*Malmaison Carnation*) 花形豊大で直径三四寸に及び、芳香に富
み、莖能く伸びて着花も宜敷く四五月頃に室内で開花せしむるに適當した一季咲のものであ
るが、性質の弱いのが缺點である。

(ハ) 木立カーネーション (*Tree Carnation or Perpetal Carnation*) 四季咲で花期が永く、莖は木立性で
永年同一株で生命を保ち、續々分岐して開花を續けて行くもので、花形や芳香に於ては前者に
劣るが、冬期温室内で培養するに最も適當して居り、又、切花用としても宜敷いものである。

二 石竹—唐撫子 (*D. Chinensis*, L. Chinese or Indian Pink) 丈夫な宿根草であるが普
通には二年草として取扱はれ、花壇用及び切花用として多く役立つものである。莖
の高さは一尺位に伸び、根元から多數叢生するのが特徴である。花は五月頃から咲
き初め、秋の末頃迄咲き續けるもので、一重と八重とがあり、瓣端は淺く裂け、花色は淡
紅が本體であるが、栽培に依つて花形や花色に種々のものを生じて居る。

三 伊勢撫子 (*D. Chinensis*, L. var. *laciniatus*, Koorn) 草丈は一尺餘に及び、莖葉に白粉
を帯ぶることなく、頗る細幹で必らず支柱を要し、花は大輪で七寸餘に達するものが

ある。

四 瞿麥なでしこ河原撫子大和撫子(D. Superbus, L.) 本邦の原野に能く自生する宿根草で、莖は二三尺に伸び、節高く膨れ、對生した線狀の葉を生じ、七八月頃に花を開き、瓣は其の質が薄くして深裂して居る。園地に栽植するには植込みの間や岩石園等に相應はしいものである。

五 亞米利加撫子(D. barbatus, L. Sweet-William) 草丈一二尺に達し、莖は四稜となり、上部で分岐を爲し、多數の花を頂上に於て傘狀に着ける。葉は頗る幅廣く、暗綠色を呈するものである。五六月頃に開花し、白紫紅薔薇色等種々の變化したものが生じて居る。

尙ほ石竹類には雛撫子常撫子深山撫子高根撫子濱撫子細葉濱撫子小撫子不二撫子矮撫子等擧げて來れば數多あるもので、全く屬を異にするシレネに迄蟲取撫子の名を冠して居る。

〔栽培〕「カーネーション」を花壇に育成する爲には、秋蒔として床地で苗を仕立て、冬季は霜除を爲して、傷まない様にし、早春に及んで花壇に移植するのである。土壤は一般に稍や重いのが宜敷く、株間は一尺位隔てて植ゑ、花を多く咲かしむる爲めに

摘心して枝梢の數を多くするのが花壇の美觀には適して居る。然し餘り花の數が多ければ花が小さくなるものである。尙ほ腋芽を注意して摘除するのが美大の花を開かしむるには必要である。肥料は開花迄に二三回液肥を與ふれば宜敷い。冬季は充分に防寒の設備が必要で、殊に濕氣を少くして乾き目にして置くが宜敷い。

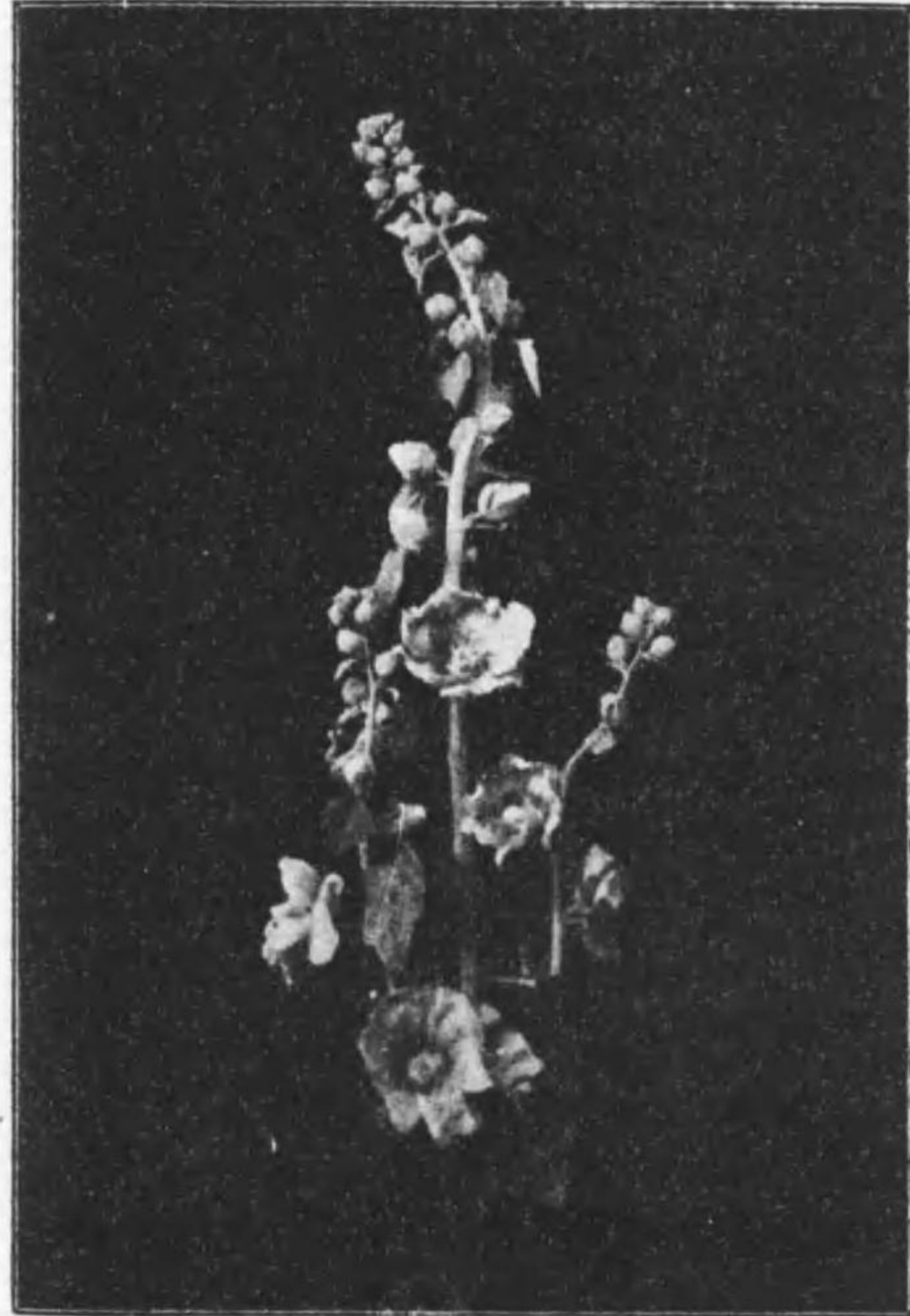
「カーネーション」は普通挿木に依つて繁殖せらるる事が多く、挿芽は開花中の莖の中位に出て居る側芽を使用するが旺盛で花着きも宜敷いとせられて居る。而して下方の節の部分を小刀で斜に切り、一對の葉を除き、砂箱に斜に挿し、濕氣を與へて日蔭の場所に、多くは溫室内或は木框内置いて發根せしむるのである。發根したものは二寸鉢に移し、更に其の後は鉢又は園地に移すのである。又、壓條に依りても繁殖するもので、枝の地面に近いものを曲げて、節の下部を少しく傷つけて地中に埋め、彈ね上らない様に又木で止めて置くのである。發根したらば親木から切り離して鉢に取り、更に花壇に植ゑ出して宜敷い。

近時カーネーションの栽培には大型の溫室が用ひられ、又、餘り高温は要しないので、硝子障子を用ひた木框利用の栽培法が盛んで、専ら切花目的に行はれるものである。

其他の石竹類にありては大抵秋季に苗床に播種し、發芽後に一旦假植を行ひ、冬季は霜除を施し、春に及んで園地に植ゑ出すのが普通である。尙ほ宿根性のもののであるから株を充分に張らせ、翌年は其株から新芽を生せしめても開花を見るのである。

九 たちあふひ (立葵、蜀葵) (錦葵科)

(學名) *Althaea rosea* Cav. (英名) Hollyhock.



圖九十八百第
葵 立

〔解説〕 支那の原産で、本邦へは寛永年中に渡來したもので、莖は直立して高さ六七尺に及び、一株から數莖を生じ、毛を多く有する。葉は心臟形を爲して粗大であり、五乃至七裂して居る。花は五六月頃に花梗の短い三四寸の大花を下方から咲き始

めて順次上方に向つて行くので、一莖の咲き終る迄には可なり長い日數を要するものである。色は紅を原色とするのであるが、紫紅、暗紅、白淡紅、底紅、黃色等種々のものを生じ、單瓣許りでなく八重や半八重もある。初夏の花として花壇に雄大なる美觀を

圖十九百第
葵 錦



現はし、殊に境栽花壇の後方に群植や列植と爲して眺むるに宜敷いものである。

〔栽培〕 一、二年草として取扱はるる事が多く、通常播種に依つて育成せらるるもので、秋ならば十月初め頃に床地に播下せられ、冬季中は霜覆を施し、春に及んで施肥を爲した後、之

を花壇に植ゑ出すのであるが、簡便な事は春に苗床に播き、發芽したらば一回床替へを行ひ、本葉が五六枚出でた時に花壇に植ゑ込むが宜敷い。土壤は稍々粘質で濕つた方が適して居り、植穴には堆肥と過磷酸石灰とを施し、風に倒れ易いので成る可く

風當りの尠い場所を選びて栽植するが得策である。
其の他注意としては葉に蟲が付き易く、忽ちの間に蝕ひ盡すものであるから、常に其の驅除を怠らぬ様にし、且つ稀薄な硫酸鉛溶液を葉に撒布して置くこと被害が尠いのである。

〔附〕

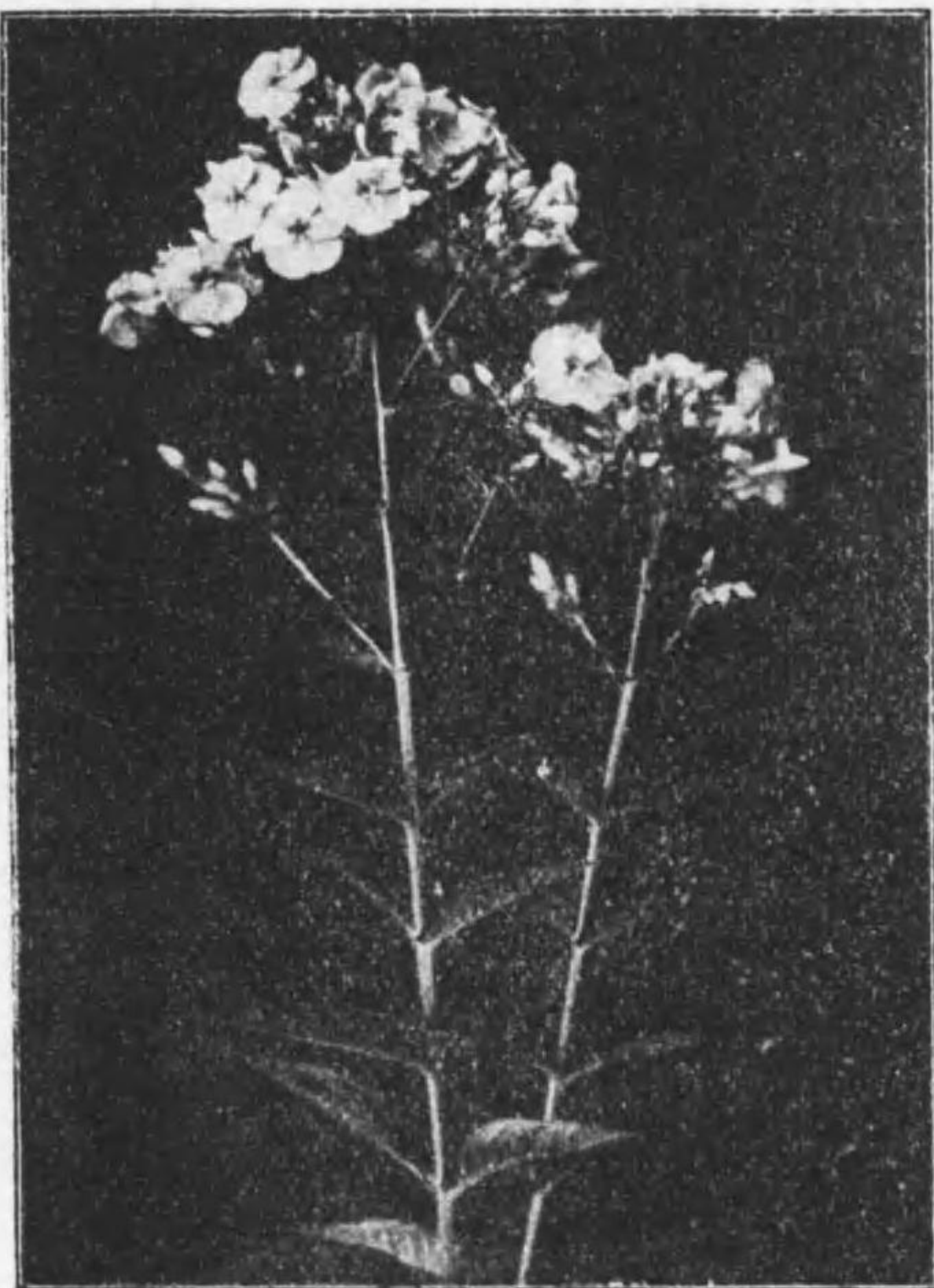
うすべにたちあふひ・せにあふひ(A. officinalis, Linn. Marsh Narrow.) 莖は直立して三四尺に達する多年草で、立葵に酷似した莖葉を有するのであるが、一般に小さく、花は莖の上部の葉腋に一個乃至數個を着け、花徑は約一寸位で紅紫色を普通とする。前者に比較すると幾分淋しく、唯だ花壇の配合上用ふるに過ぎないものである。栽培方法は立葵と略ぼ同様で宜敷い。

一〇 くさけふちくたう(草夾竹桃) (花忍科)

(學名) Phlox paniculata, L. (英名) Summer Perennial phlox.

〔解説〕 宿根性の「フロックス」で俗に「オイランサウ」とも呼び、北米の原産である。

圖一十九百第
桃 竹 夾 草



莖は三尺餘の高さに達し、頗る強剛で直立し、叢生を爲すものである。葉は卵狀披針形で對生を爲し、花は夏から秋に互りて莖頭に球狀を爲して多數簇生し、花序を摘除して行けば順次枝を生じて開花して行くものである。色には紅紫白絞り、其の他濃淡種々のものがあり、花壇植として甚だ相應しく、又、切花としても用ひらるるものである。

〔栽培〕 花壇に植ゑ込むには株分けに依るが最も宜敷く、餘り寒くない地方ならば秋に掘り上げて株を幾つかに分ち、肥沃で稍々濕り氣のある場所が適して居り、花壇ならば草丈と色の配合を能く考へて植ゑ込む可きである。株間は二尺位に距て、堆肥、人糞尿、糠等を植ゑ込みの際に施して置けば發根が良好で、且つ翌春の生育が旺盛である。植付けは早春でも宜敷く、三年目位には掘り上げて新株のみとする方が花色が鮮や

かで、花の着き方も良好で、花群が大きいのである。又、種子に依る場合は春三四月頃に苗床に播下し、苗の一二寸に成長した頃に花壇に植ゑ出し、一二次稀薄な液肥を施すもので、此の方法に依つたものは七月頃から開花し始め、十月頃迄續々と美花を現はすものである。尙ほ挿木でも繁殖し得らるるもので、多くは六七月頃に行はれ、其年の中に充分發根生育せしめて株を張らせ、翌年に美大なる花を着けしむるものである。

〔附一〕

ドラモンドフロックス (Ph. Drummondii, Hook. Drummond Phlox) 之れは北米合衆國産の一二年草で、通常單に「フロックス」と稱するのは此の種類である。草丈が一尺餘に達し、直立して上部に於て四方に分岐し、軟毛を密生して居る。葉は廣披針形で毛を生じ互生である。花は各莖枝の頂上に簇生し、概形は草夾竹桃に似て居る。花瓣には大形で全縁の平滑な圓咲 (rotunda) と星狀を爲して著るしく切れ込みのある星咲 (Stellata) の二變種があり、色には紅紫、薔薇、白斑等種々あるが未だ黄色は見出されて居ない。

一イデンモラド、スクツロク 圖二十九百第



生のもので古い莖は木質となつて漸次灰色を呈して來る。葉は對生して密生を爲

栽培法としては秋九月頃に床地に播き、發芽後暫くして二三寸の距離に床替へを行ひ、灌水と稀薄な液肥とをあたへて苗の生育を促し、十月下旬頃に更に四寸に五寸位の距離に假植を爲し、霜除を行つて冬越しを爲さしめ、早春に一、二回液肥をあたへ置き、四月初めに花壇に本式に植ゑ出すもので、五六寸の距離を保たしむれば宜敷からう。

〔附二〕

モスフロックス (Ph. Subulata L. Moss Pink or Moss Phlox) 之れは匍匐性で莖は地上に密生し節々から發根を爲して行き、宿根

し、線狀披針形で線毛を有して居る。夫れで之れを取扱ふ場所には指頭を屢々刺戟するのである。花は五、六月頃に葉腋から二寸許りの高さに見はれ、七八分の小花ではあるが、淡青藍色紅色淡紅色白色等があり、且つ地面に沿ふて群がり咲くので美はしく、花壇の縁取りと爲すのに冬季も常緑である爲めに甚だ宜敷い。

之れを植ゑ付くるのは春が適期で、花壇の縁邊とか、建物の周圍等に植ゑ込み、冬期花卉の淋しくなつた場合にも美觀を呈し、又、高山園には丈が高くならずに岩の間を這つて廻るので相應はしいものである。株を分けるには地面に接して發根した新しい枝を切り取つて暫く床地に養成し、然る後花壇に植ゑ出すが安全である。

一一 すゐれん(睡蓮)

(睡蓮科)

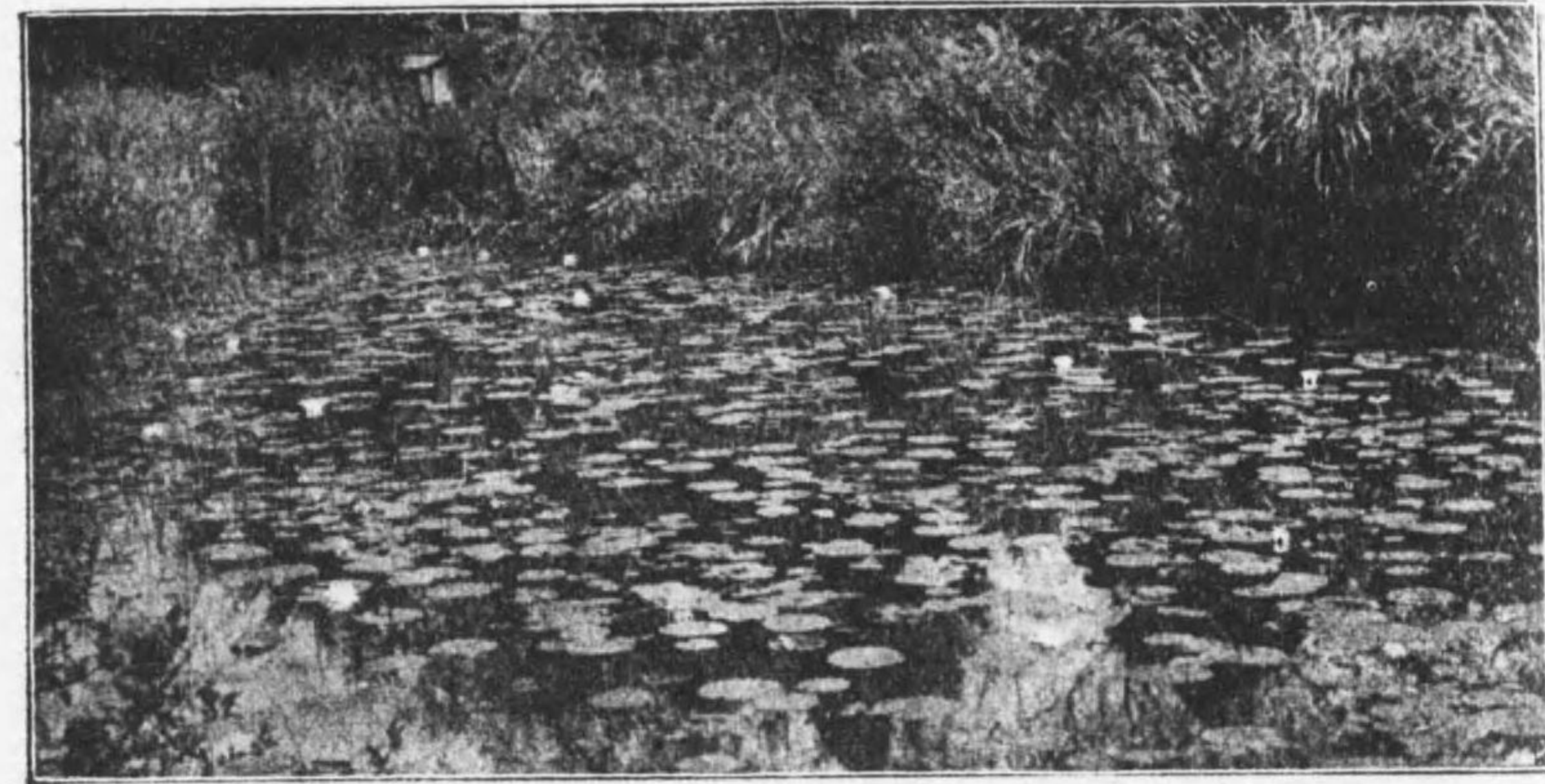
(學名) *Nymphaea* sp. (英名) Water lily or Pond lily.

〔解説〕 夏季と水邊とは最も關係が深く、殊に水中の女神の名を得た「ニンフエア」(*Nymphaea*)なる語は炎暑の下に一掬の清涼劑たるの感を深ふするものである。宿根性の水生植物で、根莖は四五尺の泥土中に生育し、葉は多くは水平に浮び、圓形又は卵形で、鋸齒のあるものと否とがある。而して何れも基脚には深い缺刻を有して

居る。花は六月頃から開花し始め、九月頃迄續くもので、種類に依つて一日の中に其の開花時間が定まつて居り、黄紅藍等種々ある。而して長い根莖を有するものは大抵耐冬性で、球莖を備へるものは不耐冬性の様である。

〔種類〕 主なるものの名前丈け擧げることとしよう。

- (一) ひつじぐる (*N. tetragona*, Georg. Pigny waterlily)
- (二) 白花睡蓮 (*N. alba*, Presl. European white waterlily)
- (三) 芳香睡蓮 (*N. odorata*, Ait. American waterlily)
- (四) 塊莖睡蓮 (*N. odorata*, Paine, Magnolia Waterlily)
- (五) 墨其古睡蓮 (*N. Mexicana*, Zucc. Mexican waterlily)
- (以上耐冬性)
- (六) ザンシバル睡蓮 (*N. Zanzibarensis*, Casp. Zanzibar waterlily)



ス キ レ ヌ 圖三十九百第

(七) ケープ睡蓮 (*N. Capensis*, Thunb. Cape Waterlily)

(八) 夜咲睡蓮 (*N. Lotus*, L. White Lotus)

(九) 赤色睡蓮 (*N. rubra*, Roxbg. Red waterlily)

(一〇) 大鬼蓮 (*Victoria regia*, Lindl. Royal water lily)

(以上不耐冬性)

尙ほ以上のものの變種や雜交に依つて生じたものも數多く、其の多くは温熱帶の産で、現今では四十種を算すとの事である。

〔栽培〕

睡蓮の栽培は池沼が宜敷く、又鉢に植ゑる事もある。耐冬性のものは春秋何れでも宜敷いが、不耐冬性のものは中春に植込む可きである。池は充分に日當りの良好な事が肝要で、植込前に水を切りて整地を行ひ、植土には堆肥、油粕、鰾粕、骨粉等を入れ、之れに根莖を埋め込みて後、水を入れ、七八寸に水深があれば理想的である。若し水が深過ぎるとか、小形の種類であれば鉢に植ゑて池に入れ、適當の臺を下に敷いて高さを加減すれば宜敷い。而して鉢植のものは毎年植ゑ替へて鉢土も新たにする必要があり、不耐冬性のものは冬季中鉢に上げて温室等に收容し、耐冬性の池植のものにありては四年目に一度掘り上げて根の整理が必要である。若し實生を行

ふ場合には、種子は水中で成熟するから布袋等で受け入れる様にし、之れを直ちに肥土を入れた平鉢の底を塞いだものに播下するもので、春迄水中に貯へて置く事もあつる。其の後は乾燥せしめず、又腐敗せしめない様に時々水を更新し、發芽を促がすものである。大凡一寸位の葉を生じて來らば三寸鉢に移し、之れを水を盛つた大鉢の中か、或は池の中に入れ、前同様の取扱ひを爲すのである。

一一一 菊類 (*Chrysanthemum*)

(菊科)

〔解説〕

現今、本邦で最も廣く愛養して居る菊なるものは、元來支那から傳來したものであるが、其の我が國での栽培起原は遠く一千有餘年にも及び、頗る古いもので、従つて其の品種や變種等も頗しい數に上つて居る。

〔類別〕

觀賞用として栽培せらるる本邦の菊を開花期に依つて分つと夏菊、秋菊、寒菊の三つとする事が出来るが、就中秋菊は其の中心となり、單に菊と云へば必らず秋菊を以て代表する迄に重きをなし、花の形姿や色彩等にも優秀なるものが作出せられて居り、夏菊や寒菊に於ては早咲、晚咲と云ふに過ぎないで、美觀的變化は甚だ尠いのである。又秋菊を花の大きさから分つと大菊、中菊、小菊、さては帚狀を爲す嵯峨菊、

伊勢菊等がある。

一 一文字菊(廣慰斗御紋章菊)

一重の大輪咲で、花径は七八寸から一尺餘に及ぶ

ものがある。

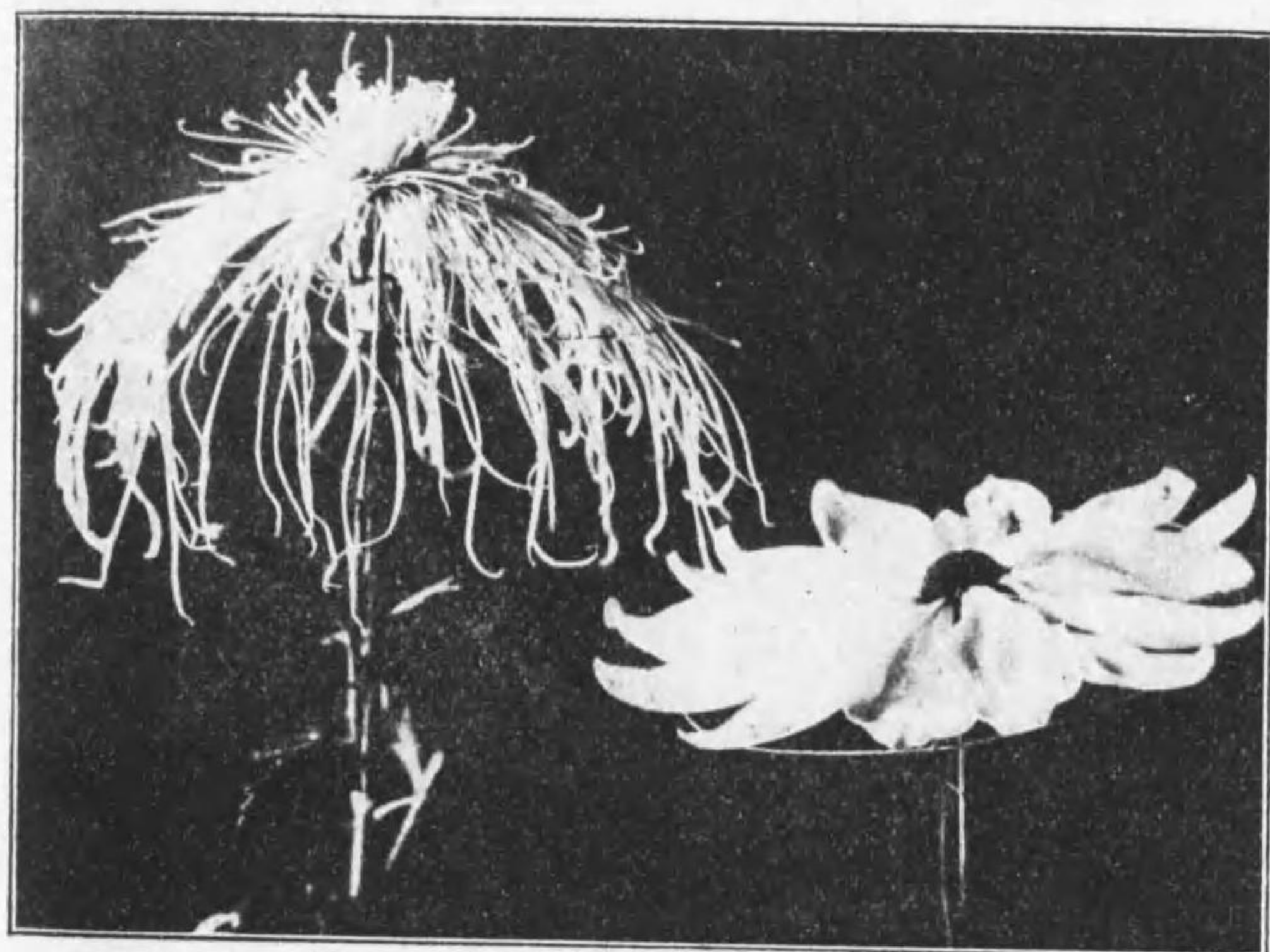
花瓣の数は少なく、凡そ十五六枚から二十三枚に過ぎない。然し此の菊は花径や瓣數よりも、瓣の幅が廣くて表裏何れにも屈曲皺縮を生ずる事無く、一平面に擴がつて隙間の無いのを優品とする。莖は丈高く、葉も亦厚くして大きい、其の數は少なく、十五六枚位が止まりである。

二 大菊

花径が一尺以上のもので、一重と八重とがあり、其の花の形に依て種々のものがあるが、何れも花瓣に變化は尠く正態で花の大なるを眺む可きものである。

(イ)厚物……八重で瓣の兩縁が上面に巻いて、

管細(左) 字文一(右) 菊 大 圖四十九百第



ンカーアを爲し、全體の瓣が厚く盛り上げたもの。

(ロ)太管……瓣が太い管状となつて、外瓣は長く垂れ、内瓣は卷縮するもの。

(ハ)細管……管瓣が細くて、多くは下垂して居るもの。

(ニ)間管……前二者の中間の太さのもの。

(ホ)針管……細管の一層細くて針の様になつて居るもの。

(ヘ)管走り……管瓣の外方に向つて走り出でた様な有様を呈するもの。

三 中菊

之れは花の大きが中庸であると云ふ許りで無く、必ず三種の瓣(管瓣匙瓣平瓣)を具へ、其の中の平瓣が開花の始めから終期迄の間に種々の運動(狂ふと云ふ)を起すもので、管瓣と匙瓣とは外部に水平に開いて底臺と爲つて居る。普通に瓣中の花心を保つ間が十日間、花心を現はす迄が十日間、夫れから各々特有の狂ひを爲して花心を包藏する迄が十日間とせられて居る。而して其の狂ひの終つた時に於ける花形に種々の名が附けられて居る。

(イ)丸抱……平瓣が順次に花の中心に向つて圓形を描き乍ら重り合ひ、終に花心を包藏するもの。

(ロ)追抱……一枚の平瓣が斜に倒れた様に狂ひ初めると、他の瓣も之れに従つて順次に斜上に進み、花心を包み終つて圓錐状を呈するものである。

(ハ)亂抱……平瓣が一定の順序なく狂ふて花心を包むもの。

(ニ) 稜折抱……平瓣の中途から折れ曲つて端然と立ち、花心を包むもの。
 (ホ) 自然抱……平瓣が大菊の巻き方の様に、咲き初めから内側に曲つて花心を包んで行くもの。

(ハ) 露心抱……平瓣が内面に卷縮するが爲めに、花心を隠しきれず、露はした儘のもの、
 (ト) 管抱……平瓣を缺き、管瓣匙瓣が狂ひを爲すもの。

尙ほ莖には丈の高くなるもの、矮性のものがあり、葉には正葉、長葉、深切、蓬葉、圓葉、打込葉、葵葉等があつて、種々變化を生じて居るものである。

四 小菊 莖も葉も小さく、頗る分岐性に富み、花も小型で其の數多く、一重と八重とがあり、尙ほ其の咲き方は普通のものの外、

(イ) セ々子咲……短い丸味を帯びた小舌状花冠が密集して、小球状を爲すもの。

(ロ) 刺咲……花形が薊状で瓣の細くて房状を爲すもの。

(ハ) 貝咲……花冠が平たくて小貝を配列した様に重なり合ひ、恰も貝細工に似た様な花形を示すもの。

五 肥後菊 一文字菊に似た大菊であるが、瓣が甚だ粗着で幅狭く、爲めに瓣の間が透いて居る。

六 丁字菊 筒状花が非常に發達した色彩を帯びた中菊で、瑞香花に甚だ能く似たものである。

七 嵯峨菊 莖は丈高く伸び、花瓣が細形で線状を爲し、其の長さ三四寸に達し、八重の亂れ咲きであるが、各瓣は次第に捻れて立ち上り、恰かも筭を倒まに立てた花形を呈するものである。

八 伊勢菊 花形は嵯峨菊と酷似して絲咲の筭状を呈するものであるが、瓣が立ち上るのみでなく、外方のものは四方に幾分垂れ下つて妙味を現はすものである。

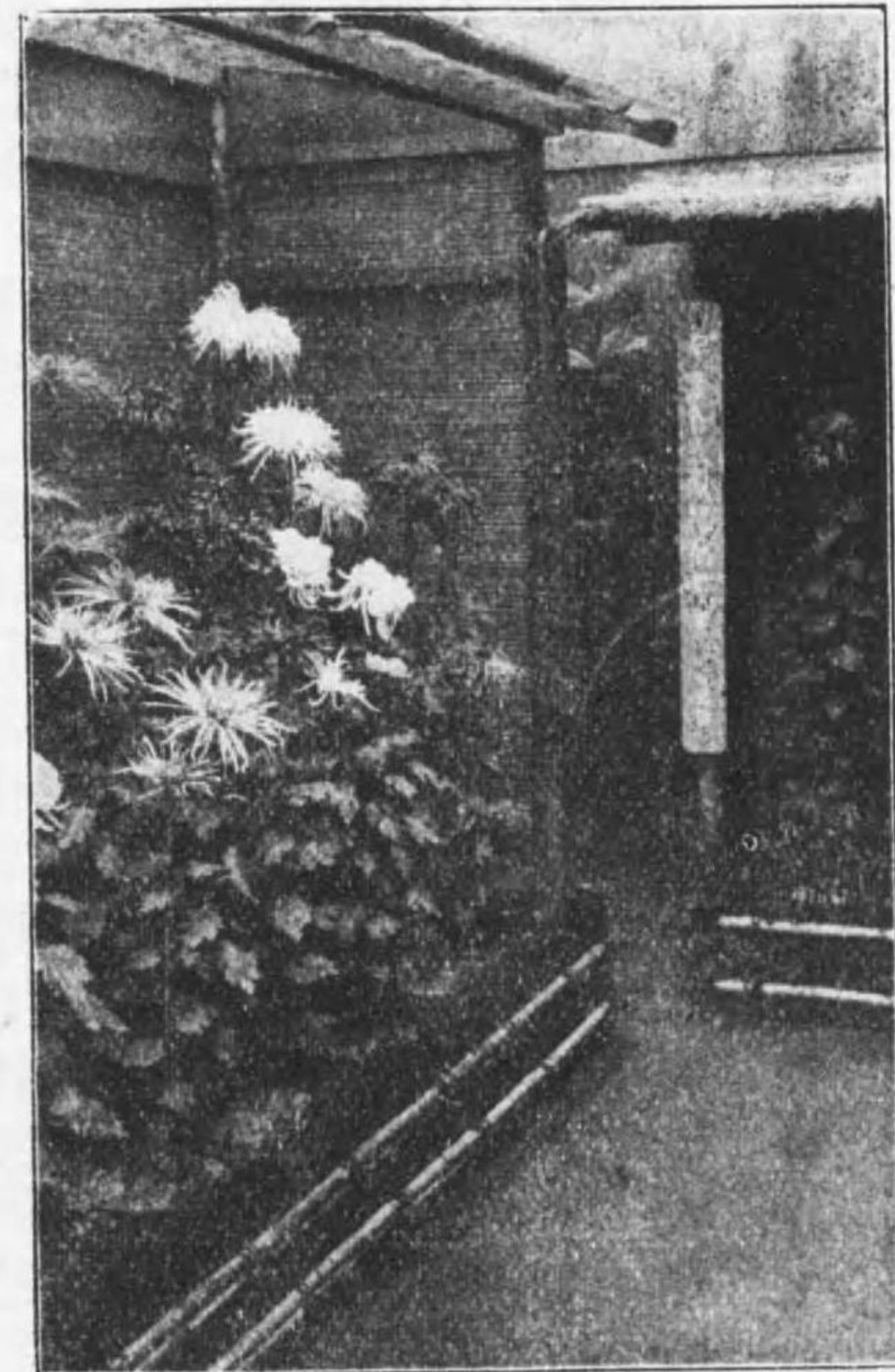
以上の外、夏菊(小菊で六七月頃に咲くもの)、寒菊(小菊で十二月頃に開くもの)、野菊及び山菊(小菊の一重で莖が長く、分岐性に富んで、多くは懸崖仕立とせらるるもの)、四季咲菊(四月から十一月頃迄絶えず開花するもの)等がある。

〔栽培〕 菊の栽培は通常分株に依るもので、播種、挿木、壓條及び接木等も亦、特に必要のある千輪咲の様なものには十一月末頃に分株し、中菊で枝の多數を望む場合は冬至頃に分株を行ふのであるが、手数が省けて便利に行はるるものは春の彼岸頃に親株の根元に多數發生した嫩芽を分離して植ゑ付くるのである。

苗床は日當りが能く成る可く温暖な場所を選び、幅三四尺で長さ適宜に定む可く、豫め町嚙に四五寸の深さに耕起して土塊を碎き、地面を均らした後、苗を四五寸の距

離に植ゑ込むのである。苗は親株から生じた嫩芽中で伸び過ぎず、僅かに三四寸位で地上に葉を出した位のものが宜敷く、冬期に植ゑ込むものは北方を遮つた傾斜の屋根を拵へて霜除けを爲し、尙ほ日光は充分に當らしめ、且つ乾燥したならば時々灌水

圖五十九百第
壇花菊な洒瀟



五寸の距離に深さ二寸位に斜に植ゑ付けるが宜敷い。此の場合には床地に堆肥人糞尿灰等を少しく混用して置くに伸び方が良好である。

菊を苗床から園地に定植するのは五月上旬(八十八夜前後)を好期とするもので、花

壇の位置は南面した場所か、西風を避け得る所が宜敷く、又、北向は花期を永く保つには有効である。株間は二尺五寸で植穴は直径一尺五寸深さ一尺位掘り、底に砂利を少しく入れて排水を良好ならしめ、其の上に基肥として油粕、糠、過燐酸石灰等を入れ、其の上に培養土を入れ、暫く落ち付かした後に苗を一穴に三本宛を巴形に淺植と爲して行くのである。此の場合に花色の配合と伸びの大小の性質に依つて前後を定め置く事が大切である。又、開花期の早晩も考慮すべきもので、餘り其の差の甚だしいものは調和を害するから成る可く一花壇中に混じらない様に心懸く可きである。其の後は追肥として油粕の稀薄液を土用中に二三回、又、九月頃に花肥として一回施すのが普通である。

一 大菊厚物仕立 普通一株に三又は五花を着ける事が多く、何れも大輪に咲かしまむるのが目的である。莖が長く伸びると下葉が枯れて來るものであるから之を伸ばさない様に土用前後に根元から四五寸の處で切斷し、必要の枝數丈だけ残して他は悉く摘除し、其の後一週に一回位薄い追肥を施して強勢に伸長せしめ、一尺位に伸びた時に篠竹の眞直なものを用ひて支柱を立てる。

二 大菊管物及び一文字菊仕立 前の厚物と仕立方は略ぼ同様であるが、一株一

本立とするのが普通で、花壇には互の目に七條と爲し奥に至るに従つて順次高くなる様に仕立てる。尙ほ花は何れも大きくて瓣の垂れ下る事が多いから、花座ハナウケ(圓形の厚紙又は針金の輪)を花の開かない内に支柱に結び付け、花姿を丈夫に保たしむるのである。

三 中菊篠作り 之れは前から見て三、四、五、六、五となる様に二十三枝立て其の各



第 九 百 六 十 六 圖
大 菊 (上厚物・下問管)

頂に一花を着けしむるもので、一個所に一本では困難であるから、豫め三本巴狀に植込んで、其の中から適當に採擇するのである。摘心は本葉が五六葉となつた時に三四葉を残して行ひ、其の後は各葉腋から出る芽の中で最上の二芽を残して育てる。

順次、芽が伸長して四五枝になれば最上の二芽を發育せしめて他を摘除して行くの

である。而して土用迄に芽心を終り、豫定數以上に枝を立てて豫備として置くのである。支柱にする篠竹は眞直で清潔に洗つたものを用ひ、最後の摘心後、芽の伸長して來てから第一回の枝配りとして竹を立て、長い枝は遠くの竹に結んで全體の高さを考へるのである。稍々枝が伸びて高低の差が出來た頃に前の支柱を解いて第二回、第三回の枝配りを行ふのである。前から見て三、四、五、六と順次に高くし、最後の五を後添へとして稍々低く配列する。而して各花の距離は四寸が普通で各列に於ては中央を高くして左右を少し低くする。枝頭には大抵蕾が三個生するのであるから、其中頂端のものを除き、他の二つを残し置き、最後に一花と爲し、同時に最終の結立てを行ふて愈々仕上げを爲すのである。

四 大作り(千輪咲) 之には枝の伸びが宜敷く、花の揃つて澤山に着生する品種を

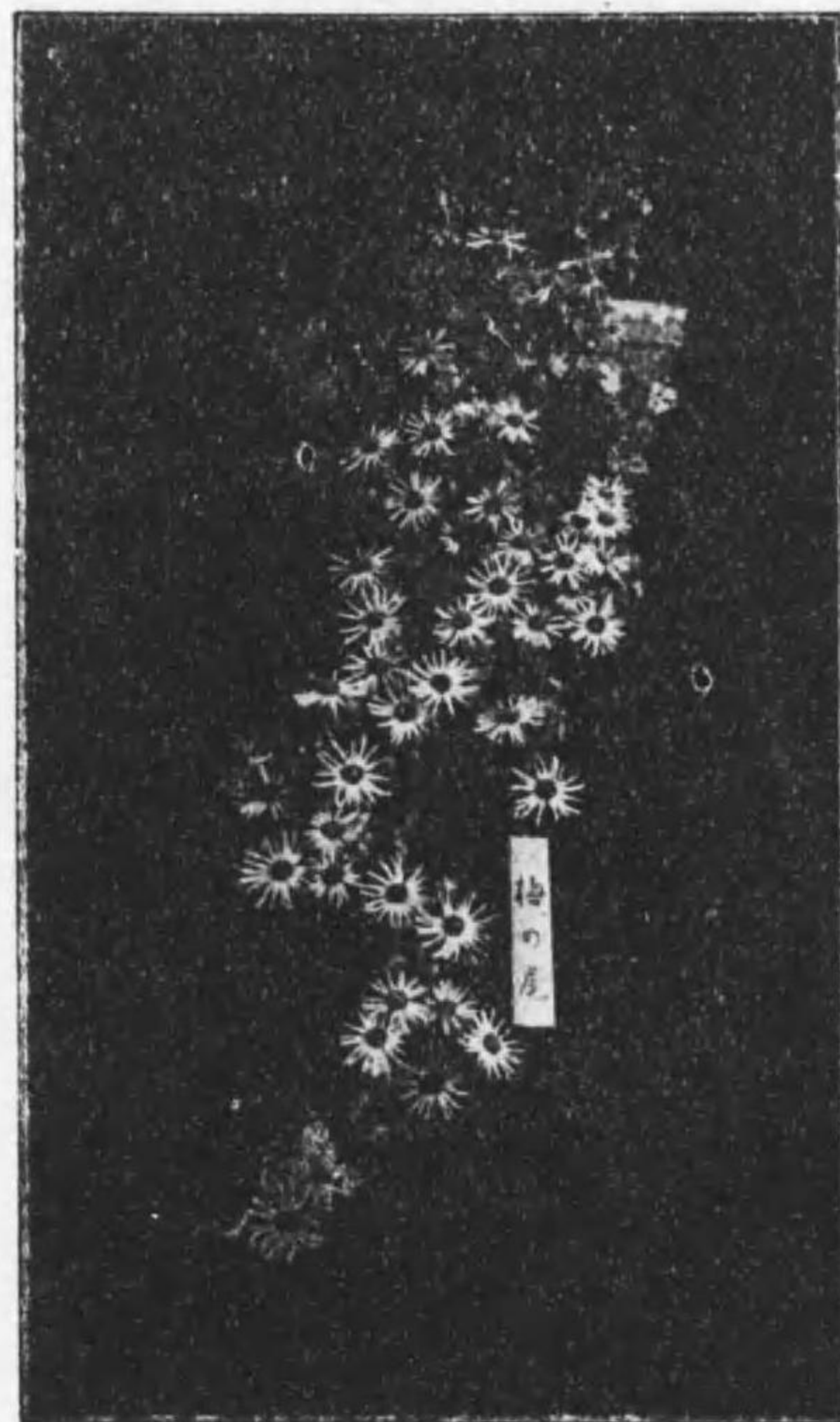
選ぶ可きで、秋十一月頃に成る可く早く肥大した苗を探り、肥料の充分な土壤に鉢植と爲し、溫暖な場所で生育を盛んならしめ、一尺位になつた時に第一回の摘心を爲し、冬期中は充分に保護して發育を促し、春の彼岸迄に尺以上五六枝と爲して置く。之れを彼岸頃に日當りの良い場所に深さ二尺、徑四尺位の穴を掘り、底に砂を少しく入れ、其の上に培養土と土とを層々に入れ、此の中に鉢から出して植ゑ込み、風除けを設

け稀薄な肥料と水とを潤澤に與へ、枝の發生に従つて摘心し、土用迄に大凡七八回行ふと枝は數百に達するのである。之に開花前迄に竹を添へ置き、最後には山形小判形、船座形等の結立てを行ふものである。何しろ枝が澤山である爲め、莖幹の案配に屈繞せしむる熟練を要する事が多大で、菊花栽培中で一番人目を惹くものである。

五 簾作り 之は嵯峨菊や伊勢菊等の房状を呈するものに行はるる方法で、苗の五六寸の時に四寸位の處から摘心して二本の枝を出だし、之れが伸びたら五尺位の篠竹を一本中央に立てて夫れに左右から引纏めて一幹の如くに密着せしめ、更に五六寸に伸びたらば同様に夫れを分枝の四寸位に摘心して二本宛出ださしめ、順次摘心しては中央の支柱に引纏めて箒形と爲して行き、土用前迄に葉枝が一本の支柱の周圍に工合能く配置さるる様にし、花も亦一やうに十二三輪、螺旋形に段々に上向して咲き上つて居るやうにする。出來上りは誠に優美で清楚な風情を表はすものである。

六 文人作り 之れにはピラミット式にするのと懸崖式にするのとあるが、茲では懸崖式を述ぶる事としよう。夫れには主として山菊か野菊を用ふるが、野趣幽態を帯びて居て宜しく、一般に小菊が花着きも多くて相應はしいものである。春の彼

第百九十七圖 文人作りの尾 (尾の樽)



岸頃に分芽した苗を素焼の五寸鉢に一本宛植ゑ、日當りが良好で風通しのよい場所に置き、本葉の六七葉出た時に四五枝残して摘心し、上から三枝を伸長せしめ、之れが又五六葉生じた時に最下の枝は三葉次は四葉を残して摘心し、最上部の枝は其の儘伸ばして眞とするのである。

夫れから各枝共に再び三本宛の芽を出ださしめ、徑六寸乃至一尺、高さ一尺位の深鉢に植ゑ込み、之れを約三十度位の傾斜ある竹棚に結付し、斜向して伸長せしむるが宜敷く、灌水と追肥とに注意し、枝は扁平形に伸

びると共に側方にも枝を充分密に配置して行き、十月上旬頃に花蕾の開かんとする頃を見圖らつて支柱の結付を除き、臺の上から懸垂せしむると、自體の重さで自然に垂下し、蕾を着けた枝の先のみが振り返つて上向きと爲り、開花には丁度良い恰好となるのである。

七 小菊の叢生仕立 小菊は花壇の縁植と爲すか、寄植として大株に仕立つるが宜敷く、植穴には培養土を入れて充分肥沃ならしめ、苗が六七寸に伸びた時に四五寸の長さに摘心し、以後枝の出るに従つて二三次摘心し、全體を饅頭形に作り上ぐる事が肝要で、大體の形が整つたらば自由に分岐せしめ、開花前に尙ほ一度凸凹の甚だしいのを摘心して直す様にすれば宜敷い。

八 夏菊の仕立 夏菊は多く切花とせらるるもので、株分けは秋の彼岸が宜敷く、之れを肥沃にした園地に畦幅一尺五寸株間五六寸の千鳥植と爲し、根着いてから翌春迄に二三次施肥し、三四寸の長さに一回摘心を行ひ、以後は多數の芽が出るから思ふ本數を立て、夫れを自由に伸長せしむるもので、傍芽は除却して一莖一花に仕立つる様にすれば六七月の頃に見事な花を開くに至るものである。尙ほ花蕾指頭大になつた時に稍々多量の肥料を施すと開花が充分で、花葉共に鮮やかな色澤を保つものである。

以上の外、花壇に於ては開花期に近づくに日光の直射と雨風とを防ぐ目的で屋形(被覆物)を作るのが普通で、夫れには丸太で骨を切組んで、屋根には礫砂引の障子又は油障子を載せ、左右及び後方は葎簧張りとし、又前方には手摺りとして青竹を高さ

一尺五寸位の所に横に置き、更に足元は萩か黒文字で低い腰張りを行ふが宜敷く、此等は花の命數を永く保たしむる爲と、觀者をして幽邃の念を起さしむるのに効果のあるものである。

尙ほ鉢栽培や不時開花法など種々菊に就て述ぶ可き事もあるが、此の邊で止めて置かう。

〔附一〕

はまぎく (Ch. nipponicum, Hort. Nippon Oxeye Daisy) 莖は灌木状を呈し、高さ三尺餘に及び、枝を四方に分岐する多年草である。葉は長橢圓狀の籠形を爲し、縁邊には粗鋸齒を有し、平滑である。花は十月頃に枝端に純白で黄心の頭狀花を着ける。本邦では東北地方に多く、鉢植として觀賞せらるるものである。繁殖方法としては春發芽前に若枝を挿木するもので、一年間養成せられた苗は翌春に鉢上げが出来、土壤は成る可く、肥沃で砂勝ちのものを用ひ、毎春植替へを行ふが宜敷く、灌水を充分にし、且つ冬季は室内に入るるか或は鉢の儘土中に埋めて霜覆を施して置く可きである。

〔附一〕

ふらんすぎく (Ch. leucanthemum, Linn. Oxeye Daisy) 花壇にも切花にも賞用せらる



第百九十八圖 オクセイデージー

る多年生の丈夫なもので、株は横に多く擴がり、一度植ゑ込んで置けば數年間其の儘で開花するものである。高さは二尺前後で葉は下部のものは長い葉柄を有し、長筧形で粗鋸齒を有するものであるが、上部の葉は披針形で狭まり、淺い缺刻を有して居る。花は六月頃に直徑二寸前後の純白頭狀花を開くものである。繁殖には株分けが簡單で、實生も春秋に行つて宜敷く、土地は相當に肥沃で、灌水と施肥とを時々行へば別に六ヶ敷い手入法は要らないのである。

〔附二〕

シヤスターデージー (Shasta Daisy) 之は「バーバンク」(Burbank) 氏が前記の「ふらんすぎく」はまぎく及び歐洲産の二小菊等の雜種から得たもので、耐寒力のある大輪花で葉は長橢圓で厚く、粗毛を有して居り、切花として最も宜敷く、又、花壇殊に通路に添ふて縁植に適したものである。栽培方法は「ふらんす菊」に準すれば宜敷い。

第三章 一二年草類

一年草の花弁は播種した其の年の中に開花結實して、自然に枯凋に至るもので、其の生存は一年限りのものであるが、期間が短い丈けに旺盛に生育し、潑瀾として開花し、頗る煥發的な美觀を花園に現出するものが尠くない。夫れで此の種のものには順送りに播種に依つて育成した苗を花壇に植ゑ込む様にすれば、花壇をして常に開花の時期たらしむる事が出来るものである。

二年草と稱するものは實は一年草の耐冬性のものとも云ふ事が出来るもので、秋

季に播種したものが、其の年の中に相當に發芽生育を爲した儘越冬し、翌春に及べば急に發育して開花を見るもので、其の多くは早春の花壇を飾る花卉類が甚だ多いのであるが、又、五六月頃迄も開花して花壇を賑はすものも尠くない。而して地方に依り、栽培方法に依りて一年草も二年に互る事があり、二年草も春蒔として一年草同様に取扱ふ事も往々ある。

一 さんしきすみれ(三色堇) (堇菜科)

(學名) *Viola tricolor*, L. (英名) Common pansy, or Pansy.

〔解説〕 歐洲原産の矮性な越年草で、葉は初めは心臟形であるが、枝の上部に及ぶと長卵形又は披針形となるものである。而して大きくて羽狀に裂けた托葉があり、無毛である。早春草丈の低いにも不拘徑一寸位の五瓣花を澤山着くるもので初夏に及ぶものである。花瓣は大き各相等しからず、且つ色には通常、紫、白、黄の三種を具へて居るので三色堇の名を唱へるのであるが、培養品には單色のものもある。初夏になれば丈は七八寸に及ぶものである。

〔栽培〕 元來から云へば宿根草であるが、二年草として取扱ふ事が多く、冷濕の場

所を好み、乾燥を忌むから、種子は一年中何時播いても差支へはないが、最も美觀を呈するのは早春であるから、通例八月中旬から九月上旬頃迄の間に苗床又は鉢に種子

圖九十九百第 三色堇(ツンパ)



を播き、薄く土を覆ふて鎮壓した後、薄く藁を覆ひ、灌水して濕氣を保たして置けば、大抵二週間許りで發芽を爲すのである。發芽後は藁を除いて乾燥しない様に灌水に注意し、本葉が三四枚生じてから一度床替へを行ふのが普通で、肥沃にした床地に三四寸の距離に植込むか三寸鉢に移植を爲すのである。秋末に及んで、之れに霜除けを施し、水分の

不足しない様に注意して灌水を行つて居れば、早いものは二月末頃から開花し始める。花壇へは三月下旬頃に植ゑ出すが安全で、成る可く根を切らない様にし、又、土を多く附けて取扱へば、開花して居るものでも移植し得らるるのである。

花壇には豫め堆肥や馬糞等を入れて肥料分のみならず、保水と保温に注意して置けば良好な花が續々と生ずる様になり、草丈の伸びたものは摘心して枝を横に張らせる様にし、成る可く花の数を多くするが宜敷い。鉢植のものは三寸鉢から五寸鉢に移植して充分に肥培した方が花も大きく出来、且つ數多く生じ、候く觀賞の出来るものである。殊に早咲の目的には年内に鉢に植ゑたものを冷床の中に入れ、温度、濕氣、換氣を適當に注意して行ふもので、餘り高温は却つて徒長を促がす事となるから避けねばならない。

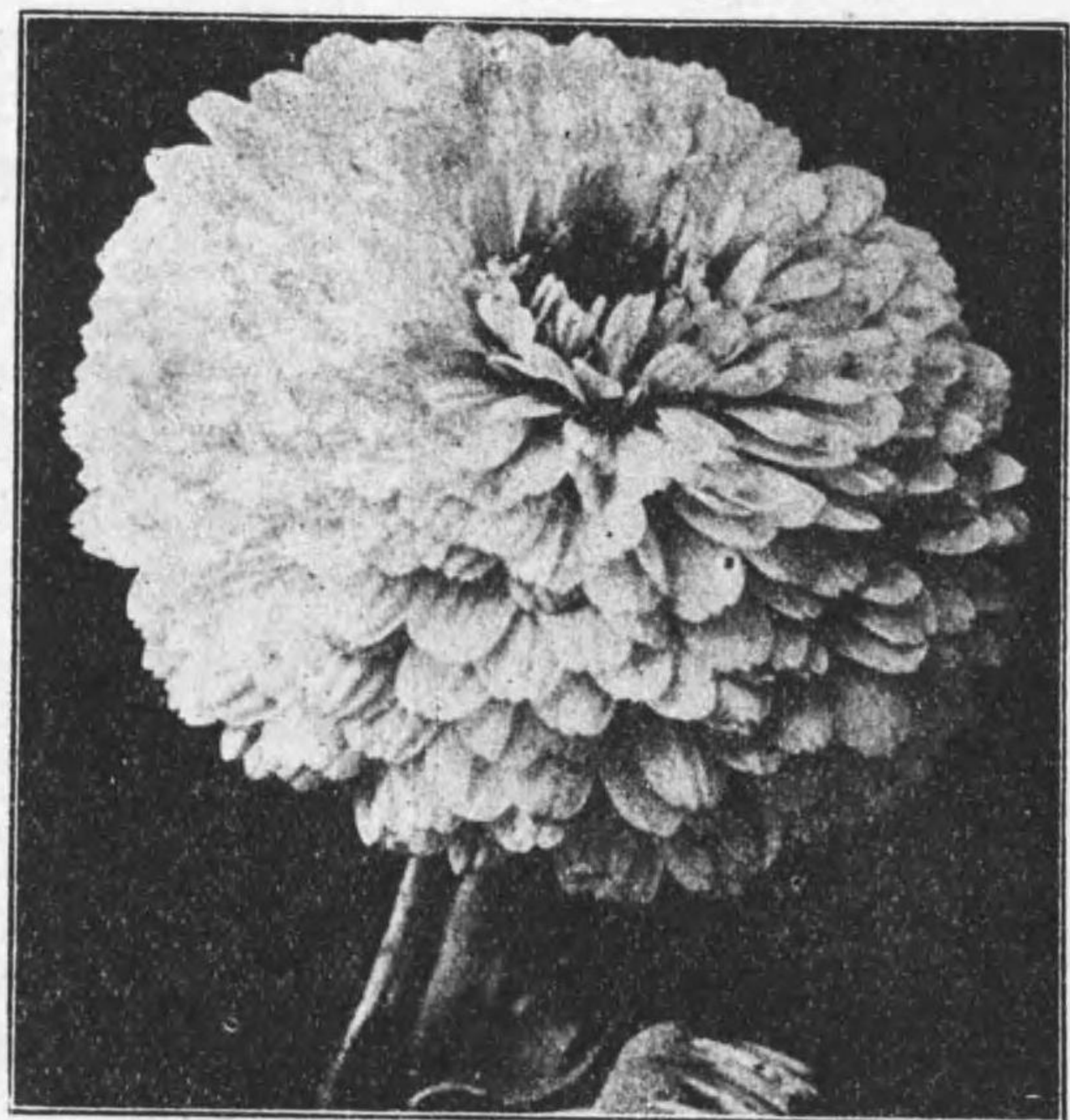
尙ほ種子を採る場合には、今迄下向いて居た蒴果が黄色を帯びて將に破れんとし上方に向つた時に直ちに摘み取つて、紙に包んで置くか、箱等に入れて種子の飛散を防ぎ、乾燥せしめて貯藏するのである。

一 一 たうきんせん (唐金蓋) (菊科)

(學名) *Callendula officinalis*, L. (英名) Pot Marigold.

〔解説〕 南歐原産の高さ一二尺に達する一二年草で、葉は長橢圓形又は匙形を爲し全縁で厚く、莖葉には粗毛を生じて居る。多數の分岐を爲して、其の頂に黄色又は

第百二圖 金蓋花 (オレヂギク)



稗色の頭狀花を着け、一重と八重とがあり、其の大なるものには徑二寸に及ぶ事がある。丈が低くて枝が横に張る事が多い爲めに、花壇の縁取や寄植等に用ひて宜敷く、特徴としては日中に開いて夕方閉ぢるものである。

尙ほ之れよりも草丈が低く、且つ葉縁に光鋭な鋸齒を有し、花も幾分小さくて優姿を示す、きんせんくわ (金蓋花) (*C. arvensis*, L.) がある。

〔栽培〕 主として種子に依つて繁殖するもので、通常九月頃に床蒔を爲し、發芽後、二三寸の高さになつたならば一度四五寸の株間に移植を行ひ、冬季は霜覆を施して置く、早春から開花し始め、結實せしめずに順次凋花を摘除して行くと、新枝を生じて夏の頃迄花期を續くるものである。又、春に播種したものは夏秋の候に花を開くもので、前と同様に床播と爲し

一度床替へを爲すが宜敷く、肥料は移植後と開花前と二回許り液肥を施せば宜敷い。尚ほ秋に蒔いたのを鉢に移し、温暖な室内か木框内で生育せしむると冬期の中から開花を見る事が出来る。

三 わすれなぐさ(勿忘草) (紫草科)

(學名) *Myosotis scorpioides*, L. (英名) Forget-me-not.

圖一百二第 (スチリヨミ)草忘勿



〔解説〕 元來は多年生の性質を有して居るが、園藝上では主に一二年草として取扱ふもので、草丈は五寸乃至一尺位に過ずして、地面に近く多數の枝葉を生じ、葉は細長い楕圓形で粗毛を蒙つて居る。之れが丁度鼠の耳に似て居ると云ふ處から、希臘語の *Mus*(鼠) *otis*(耳)を結合して學名の起りとなつたのである。

莖葉の間から花軸を長く抽出し、之れに聚繖状の可憐な小輪花を粗着し、仲春から初秋にかけて美觀を呈するもので、花色は鮮藍色を呈するものである。之れが眞の勿忘草であるが、普通に最も多く栽培せられて居る種類としては、大體前者に似て居るもので、丈か低くて五六寸に達し、藍色で香氣を有し、花を密に着生する *M. alpestris*, Schmidt (Alpine Forget-me-not) が主で、其他紅色、白色、鮮藍色を呈する種類もある。

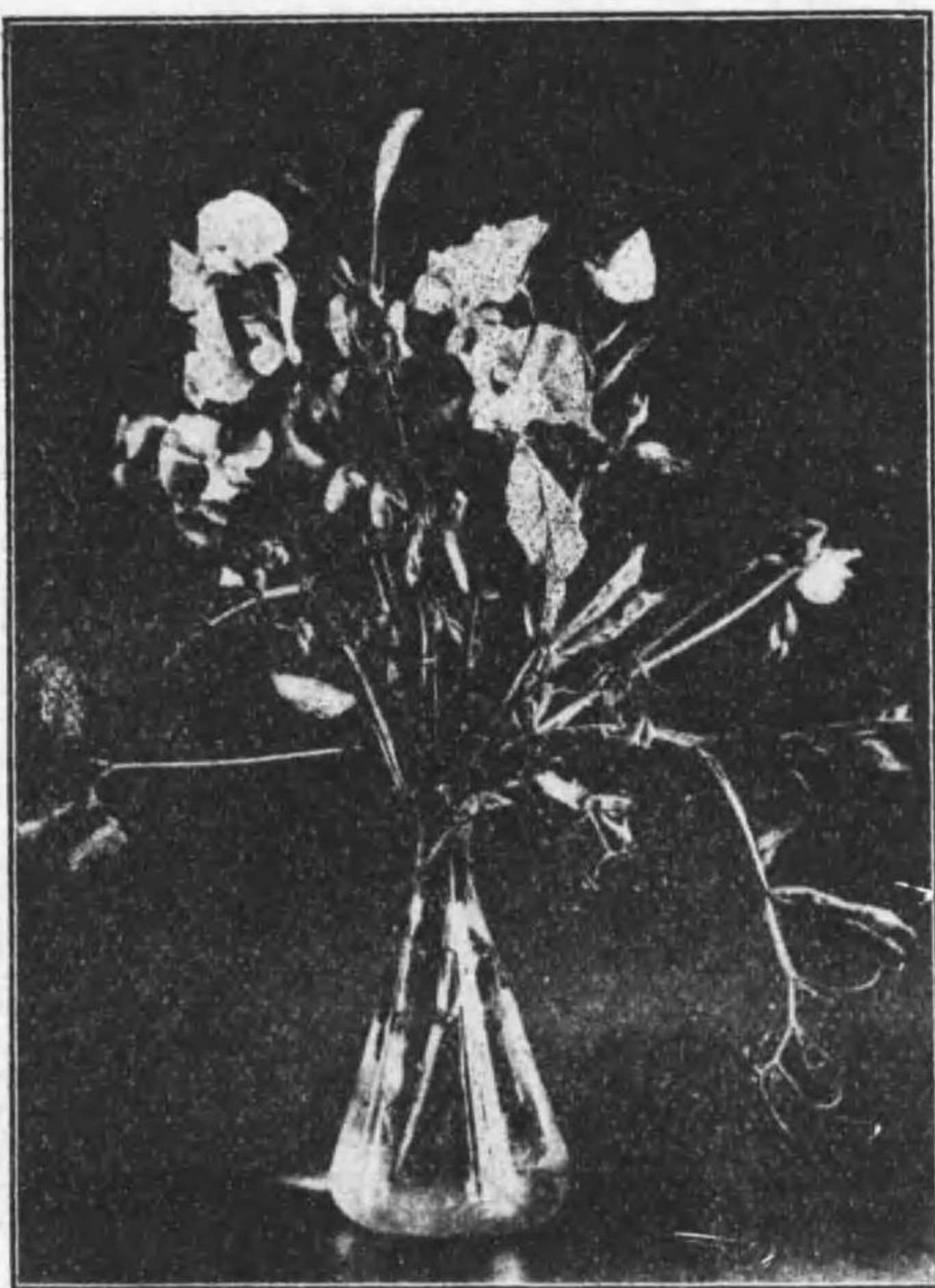
〔栽培〕

通常、秋季に鉢に蒔付くるもので、稍々生育してから移植して順次大きくし、冬期は木框(冷床)の中で霜覆を施して育成すれば能く成長し、四月頃に之れを花壇に植ゑ出すか、或は其の儘觀賞しても面白いものである。又、春季に苗床に播き、一度移植した後、花壇に植ゑ込んでも宜敷い。尚ほ嫩枝を用ひて夏季には挿木繁殖も出來稍々株が繁つたものは分株しても宜敷く、圃場などで種子の自然に落下して翌春に自生したものを苗として利用する事もある。早く咲かして冬眺めやうとするには八月頃に播下すれば宜敷いのである。肥料としては發芽後暫くしてから液肥を與へ、開花の前後に同様に液肥の施用を行へば生育、開花が良好である。本草の性質として濕氣を好むものであるから、灌水は頻繁に行つた方が枝張りが充分になり開花を好くするものである。

四 スウィートピー(麝香連理草) (荳科)

(學名) *Lathyrus odoratus*, L. (英名) Sweet Pea.

スーピトーイウス 圖二百二第



葉腋から長い花軸を抽出し、夫れに二個乃至五個の花を着け、豌豆に酷似して芳香がある。而して花形及び花色には種々の變つたものを生じて居る。

〔種類〕 種々分類の方法があるが、之れを性狀と花形とから分つて見ると、

(甲)蔓性種 (Climbing type)

(一)露地栽培種 (Garden type)

(イ)平瓣型 (Open form) ……旗瓣が平面狀を爲して居るもの

(ロ)抱へ瓣型 (Hooded form) ……旗瓣の兩縁が内外面の何れかに抱へて居るもの

(ハ)縮み瓣型 (Waved form or Spencer's type) ……旗瓣が波狀の皺曲を爲して居るもの

(ニ)重瓣型 (Duplex) ……八重咲のもの

(二)温室栽培種又は冬咲種 (Winter-flowering type)

(イ)平瓣型 (Open form)

(ロ)抱へ瓣型 (Hooded form)

(ハ)縮み瓣型 (Waved form or Spencer's type)

(乙)矮性種 (Dwarf type or Cupid)

(イ)平瓣型 (Open form)

(ロ)抱へ瓣型 (Hooded form)

となり、尙ほ其の程度には品種と生育の狀況とに依つて大變な異動を生じ、色彩にあつては紅白、紫、黒(暗紫)覆輪紋り等があり、尙ほ其の濃淡には種々のものがある。

〔栽培〕 播種期は秋又は春であるが、普通には秋播で、其の方が開花が早くして、且つ花期が長く続くものである。移植を厭ふものであるから、目的の園地に播付するか、鉢とか苗床に播下したものならば、成る可く幼苗の中に花壇に移植する事が必要である。土地は日光が充分に當り、風通しが良く、土質は深く、少し重い方が適して居り、單に眺める目的ならば六七寸の距離に肥培して九月下旬に蒔くのであるが、切花を主として栽培する場合には一尺位隔てた方が良好なものが得られる。冬の間は霜覆を施すか、或は根元に糞殻か切藁を置いて温かく保護を爲し、翌春に及んで生育が漸く盛んとなつたらば液肥(人糞尿又は油粕汁)を二三回施すのであるが、之れに過燐酸石灰や藁灰等を其の間に時々與へると、花色が鮮やかで、且つ花着きも多くなるものである。而して蔓性種にありては攀縁せしむべき枝付の竹を立て、或は針金を横に數段張つて夫れに藁を結付して頼らしめるのである。花が終へたらば結實せしめずに摘除するが花期を永くするのに効果がある。

尚ほ温室で冬季に花を咲かせる爲めには冬咲種を早いのは八月下旬から、晚いのは十月中旬迄の間に蒔き、充分の肥培と温度の調節とを行つて行けば宜敷いもので、温度は開花頃には初め五十度位から後には六十度にも上れば結構である。

五 ルーピナス(昇り藤・立藤) (荳科)

(學名) *Lupinus Polyphyllus*, Lindl. (英名) Washington Lupine.

〔解説〕

元來は多年草であるが、園藝上では二年草として取扱はるるもので、直立して叢生を爲し、高さは二尺から五尺に及ぶものである。葉は長柄で掌狀被葉を爲し、十數個の披針狀小葉を有し、其の多くは莖の下部に着生して居る。而して葉の表面は平滑であるが、裏面には絹狀の毛が生じて居る。五六月頃に長い花軸の周に蝶形の花を多く互生し、濃

スナピール 圖三百二第



藍色を普通とするが、赤、緋、白、絞り等がある。

尚ほ此のルーピナス屬には一年草で芳香ある黄色輪生のものがあり、矮性のもの

旗瓣の變色を現はすもの、小葉の形狀の種々異つたものなどがある。

〔栽培〕 繁殖としては播種に依る事が多く、大抵秋播で本葉が生じて來たらば床替へを行つて二三寸の距離に植ゑ込み、冬季は霜除けを施し、三四月頃になつてから花壇に植ゑ出すのである。土地は成る可く肥沃な方が宜敷く、尙ほ基肥及び補肥を充分に與へる方が生育が宜敷い。

六 きんれんくわ (金蓮花) (金蓮花科)

(學名) *Tropaeolum majus*, L. (英名) *Common Nasturtium*.

〔解説〕 南米産の一年生蔓草で外形は甚だしく柔か味を帯び、葉は楕狀で波形の浅い縁邊有し、丁度蓮の小さい形をして居る。花は各葉腋に一花宛着き、花瓣の下には長い距を有し、其の概形が兜狀を爲して居る處から希臘語の戰捷記念標に因んで楕形の葉と共に學名の起る因を爲したものである。園藝上には丈の高きもの、矮性種八重咲、縮み咲、等種々生じ、花色には黄、橙を初めとして鮮紅、紫紅、紅、等があり、葉にも普通の綠葉の外、暗紅、黄色葉、さては斑入葉等も生じて居る。

尙ほ前者よりも小形で叢生を爲す *T. minus*, L. (*Bush Nasturtium*) なるものがある。

〔栽培〕 春三四月頃に床地に播下し、二三寸に伸びた頃に花壇に植ゑ出すのが普通で初夏から秋にかけて可なり永く開花するものである。花壇にありては成る可く矮性種を前方にし、丈の高い種類を後方に植ゑる様にし、尙ほ蔓性のものにおいては支柱を立てて後方か、或は垣根に仕立つるが適當であらう。性質は丈夫で栽培し易いものであるから、秋に苗床に播いて冬の間木框内で丁寧に保護を行ふ時は、早春から花を見る事が出来る。鉢植としても矮性蔓性何れも面白く、土地は餘り窒素肥料を施して肥し過ぎす事なく、燐酸性の肥料を與へる方が花が大きくて光澤も宜敷いのである。

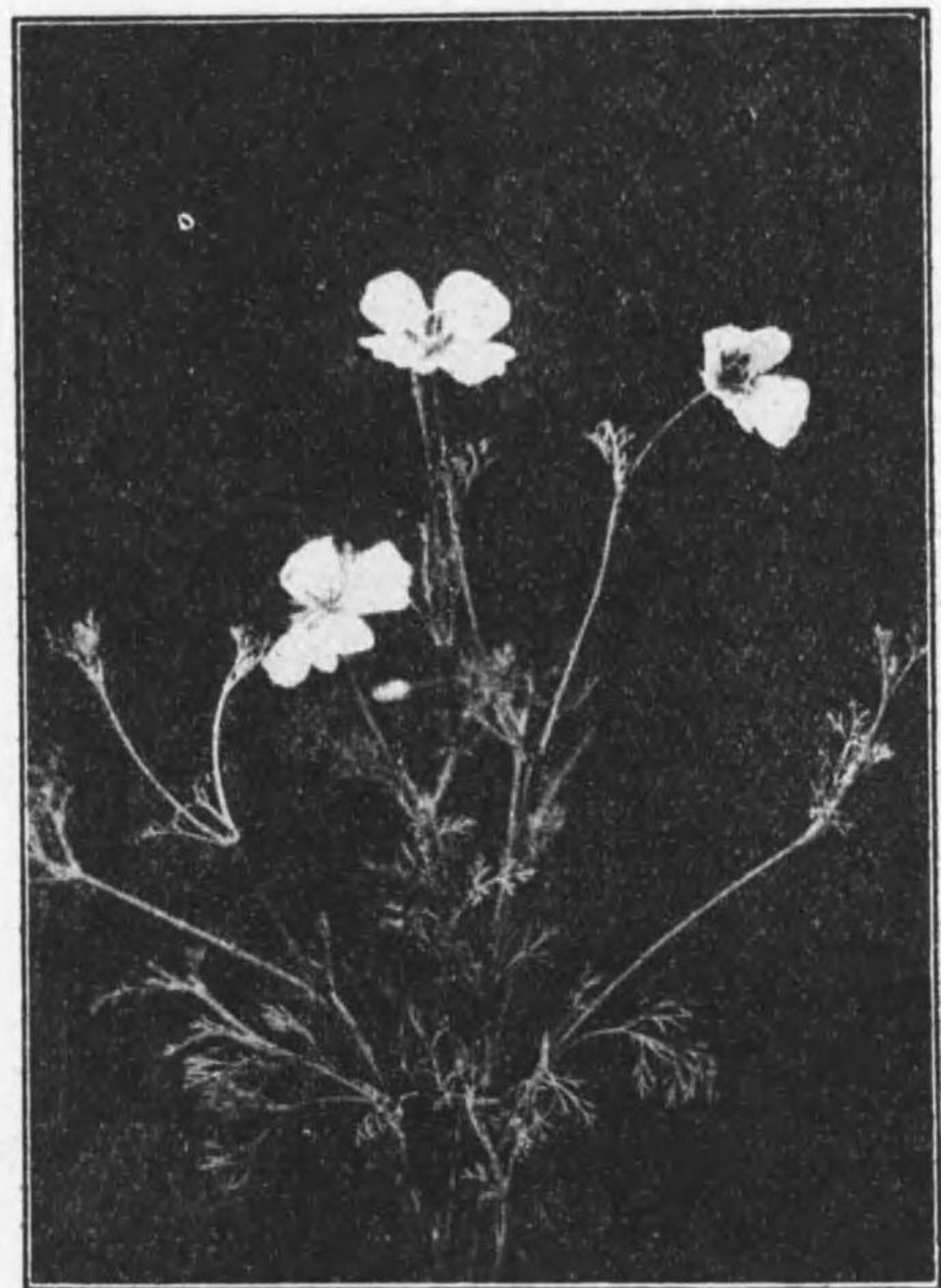
七 はなびしさう (花菱草) (罌粟科)

(學名) *Escholtzia Californica* Cham. (英名) *California Poppy*.

〔解説〕 普通一二年草として取扱はれて居るカリフォルニア産のもので、高さ一二尺に及び、葉は絲狀に細裂して互生し、帶白綠色を呈して居る。地上から斜方に放出した枝の上部が分れて五六月頃に其の頂上に一花宛花を着くるもので、四瓣二萼で皿狀を呈し、直徑二寸餘に及ぶものであり、而して日中丈け開くのである。米國では

甚だ多く野生を爲し、黄色を普通とするが、栽培に依て濃淡種々のものを生じ、又變種として赤、桃、橙、白等があり、瓣に單瓣種の外、重瓣種があり、葉にも細葉種を生じて居る。

草 菱 花 圖 四 百 二 第



頃に播下すれば、八九月頃に開花を見る事が出来る。

八 やぐるまさう(矢車草) (菊科)

(學名) *Centaurea Cyanus*, L. (英名) Corn Flower

草 車 矢 圖 五 百 二 第



〔解説〕 草丈二尺許りに及ぶ一年草で、綿様の毛を莖葉共に蒙り、葉は細長くて尖り、上部のものは全縁で下方のものには鋸齒がある。花は七月から九月頃に開き、頭

状花序で花冠は總べて筒状を爲し、殊に周圍のものは大形である。花色には紫藍、紅、白等があり、矮性種もある。

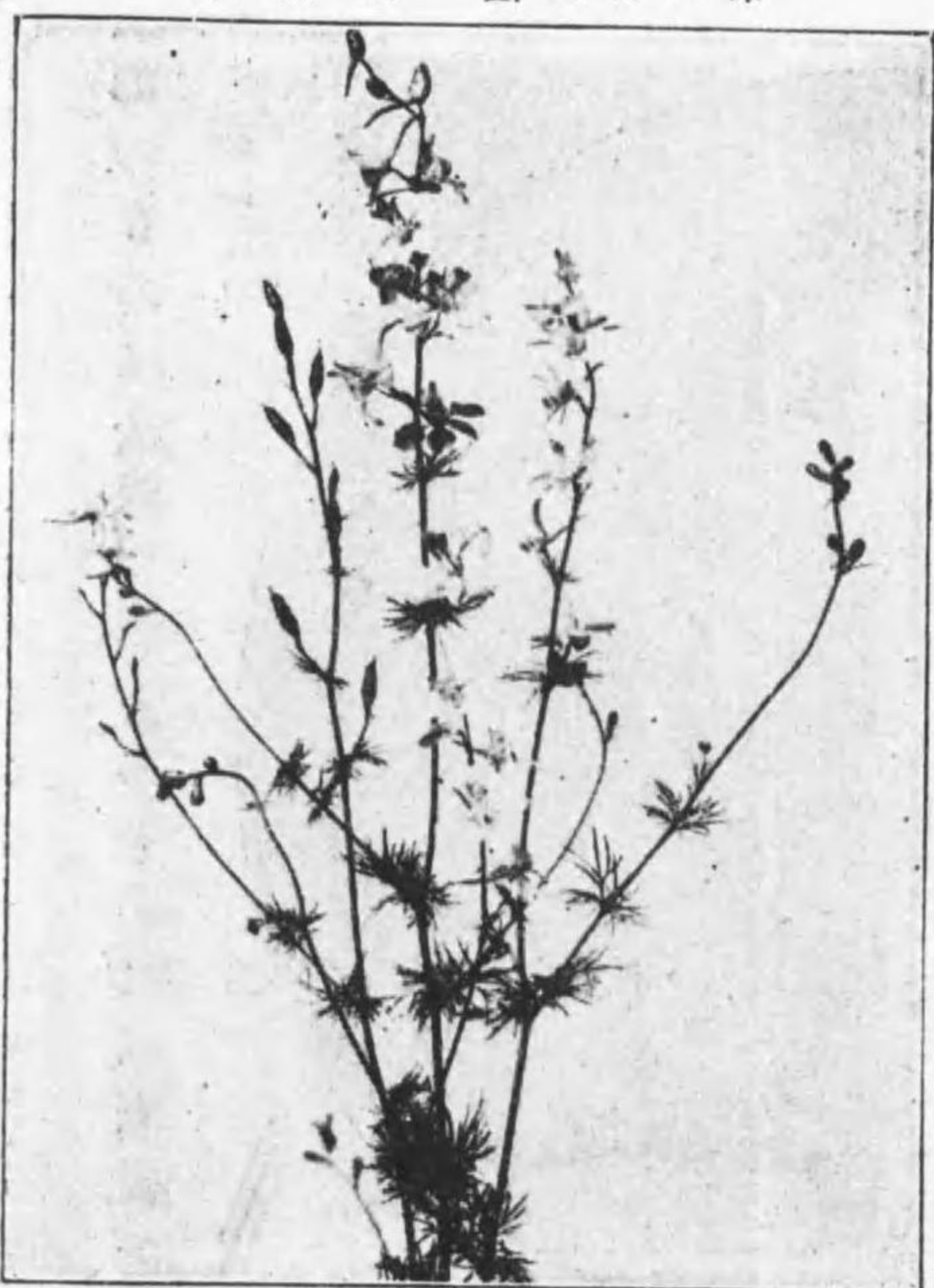
尚ほ芳香に富む。○*矢車草* (C. moschat, L. *Sweetsultan*) 及び舌状花が絲狀に五裂して一見薊の花に似た○*薊矢車草* (C. americana Nutt. *Basketflower*) 等の種類もある。

〔栽培〕 他の二年草と同じ様に秋の彼岸頃に床播を行ふて一度床替へを爲し、冬季は霜

除を施し置き、翌春三四月頃に花壇に植ゑ出すのが普通である。開花迄に液肥を一
二回施すと生育が良好で分岐も多く、花も大きいものを生ずるもので、單に花壇で眺
むる許りで無く、切花としても需要の甚だ多いものである。

九 ひゑんさう (飛燕草又は千鳥草) (毛茛科)

(學名) Delphinium agacis, L. (英名) Rocket Larkspur.



草燕飛 圖六百二第

〔解説〕 草丈二尺位になる直立
した一年草で、葉は細裂して絲狀と
なり、莖の上部で分岐した枝の先端
に飛鳥に似た穂狀花を五六月の頃
に着くるもので、長い距を具へて居
る。花の色には藍紫、白、紅等があり、
八重や矮性種も近來は生じて居る。
〔栽培〕 通常春秋二季の彼岸頃
に床地に種子を播下するもので、發

芽後二三葉を生じた頃に床替へを行つて三四寸の距離に植ゑ込み、秋蒔のものは十
一月頃に霜除を施し、翌春三四月に至つて花壇に植ゑ出せば、五六月には花を見る事
が出来、春蒔であれば冬季の霜除を爲す手間は省けるのであるが、少しく開花が遅れ
て七月頃になるのである。

一〇 けし (罌粟) (罌粟科)

(學名) Papaver orientale, L.
(英名) Oriental Poppy



粟 罌 圖七百二第

上に開き、四瓣二萼が普通であるが、時としては六瓣のもの、又、八重咲、縫ひ咲、裂け咲等
があつて、頗る美大なる姿を現はし、色も本來は深紅色で基部に黒紅色を帯びて居るの

〔解説〕 觀賞用に栽培するのはおに
げしで高さ三四尺に達し、二年草で多く
の粗毛を有し、葉は無柄で莖を抱き、羽狀
で缺刻又は鋸齒を有し、淡綠色を呈する
ものである。花は六月頃に長い花梗の

が常であるが、白色、赤色、紫色、絞り、覆輪等種々のものも生じて居る。

ひなげし(虞美人草) *Papaver rhoeas*, L. var. *genuinum*, Davau. Corn poppy. は前者より

も草立花形共に小さくて優さし味を帯びて居り、莖葉共に毛が多く、殊に花梗上の毛

は外方に向つて開いて居る。

開花は五月頃で前者よりも早

く、花には單瓣と重瓣とがあり、

色にも紅、紫、白、絞り、覆輪等種々

存するのである。

〔栽培〕二者共に移植を厭ふ

ものであるから種子を播付け

と爲す事が多く、移植するなら

ば成る可く幼苗の中に行ふ可きである。秋九月下旬頃に、園地に播下すると、其の年

の内に相當の大きさになるから、繁粗に應じて間引きを行ふ事が必要で、冬季中は根元

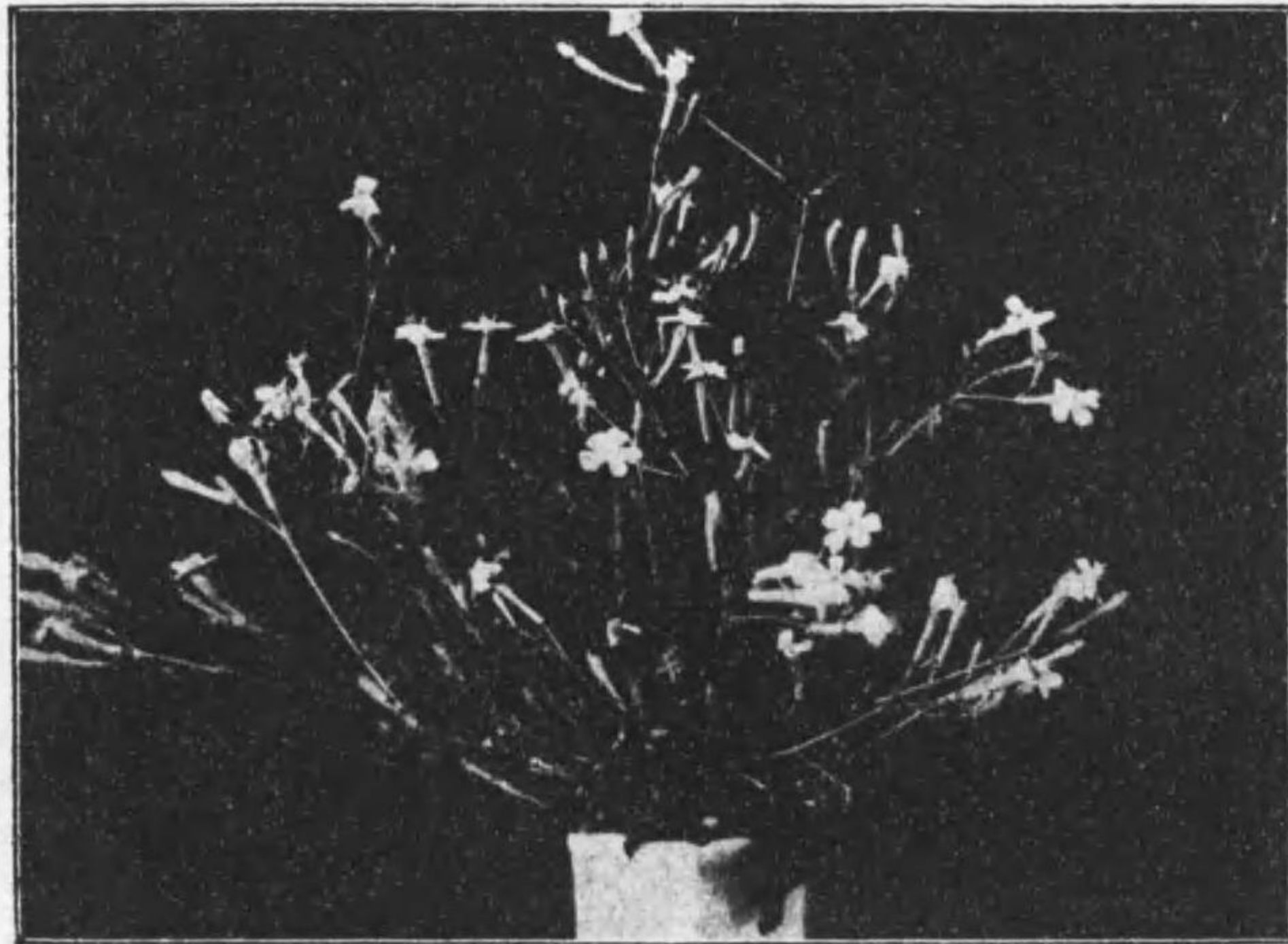
の凍らぬ様に粗殻などを置くが宜敷い。翌春苗の一二寸頃に於ては罌粟では一尺

四五寸、虞美人草では六七寸の距離に一本宛残す様にし、開花の頃迄に一二回稀薄な

草人美虞 圖八百二第



子撫取蟲 圖九百二第



液肥を施す時は、生育も良好で美大の花を開くものである。採實の目的以外のものは落花後、切り去るが後の爲めに宜敷く、その他注意としては開花の頃に蚜蟲、金龜蟲等が害を及ぼすものであるから、之れには煙草エキス、硫酸ニコチン等を以て驅除

する必要がある、又は風に倒されない様に根元を丈夫にして置く可きである。

一一 シレネ (Silene) (石竹科)

〔解説〕シレネ屬中で現今園藝品として取扱はれて居るのは次の二種である。

一 蟲取撫子又は小町草 (*St. Armeria*, L.) 草丈

二尺許りに達し、卵圓披針形の葉を對生し、上部

の節からは褐色の粘液を分泌する。花は五月

から七月にかけて咲くもので、紅、桃、白で、分岐し

た枝の頂上に聚繖花序を爲して咲き誇る爲め

に花壇の美觀のみならず、切花としても可なり

利用せらるるものである。

二 おほまんでま (*S. Pandula*, L.) 前者に比較して丈け少々低く、地面を匍ふ傾向があり、莖葉には毛茸を被むり、葉は廣楕圓形で對生を爲して居る。花は五、六月頃に葉脈に單生して開き、桃色と白色とが多く、膨大した筒狀の萼から五瓣花を抽出するのである。

又、此種の變種に草櫻 (*S. P.* var. *Compacta*) と稱するものがあつて、極めて矮性のもので早春に開くので、春花壇の縁取りや毛氈花壇に用ひらるる事が甚だ多いのである。
〔栽培〕 秋の彼岸頃に播種するのが普通であるが、時としては春三月頃に播いて夏秋の候に開花せしむる事もある。種子は先づ苗床に下して、發芽後本葉が三枚許り出でたらば一旦移植を爲し、翌春に及んで之れを本園に植ゑ込むが宜敷い。元來が強健なものであるから冬季でも丁寧な防寒設備などを要する事なく、開花迄に三回位施肥を行へば充分である。

一一 まつむしさう (松蟲草) (山蘿蔔科)

(學名) *Scabiosa Japonica*, Miq.

〔解説〕

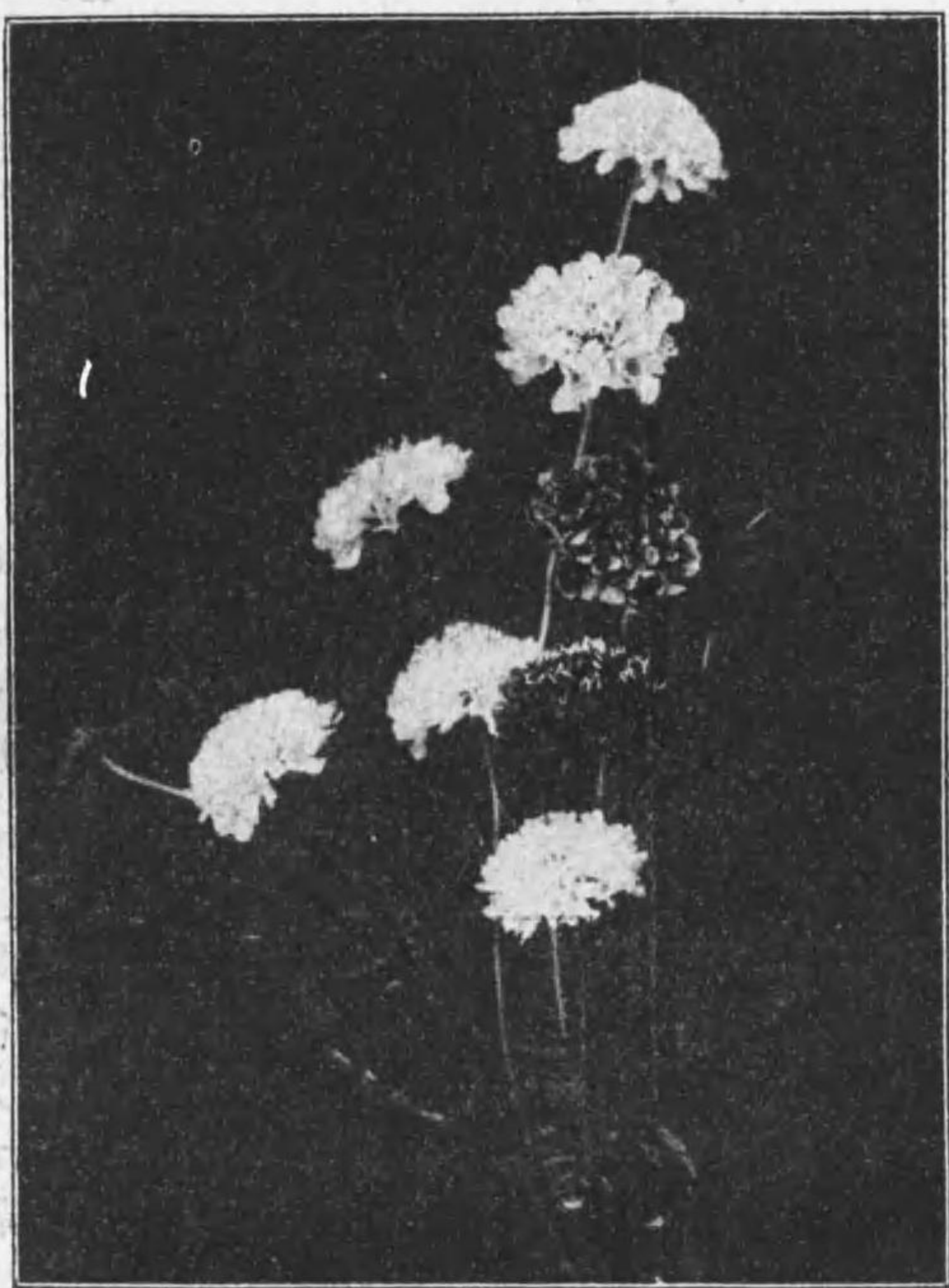
松蟲草は普通山野にも自生するものであるが、栽培に依つて改良せられたものは花色鮮かで紅、淡紅、黒紅、白色等を呈し、八重の毬狀を爲して居る。莖の基部は少々木質様で葉縁には鋸齒がある。尙ほ洋種には (*S. atropurpurea*, Desf.) & (*S. Cauc-*

asica, M. B.) 等があつて、花壇用や切花用として現今では盛んに栽培せらるるに至つたものである。

〔栽培〕

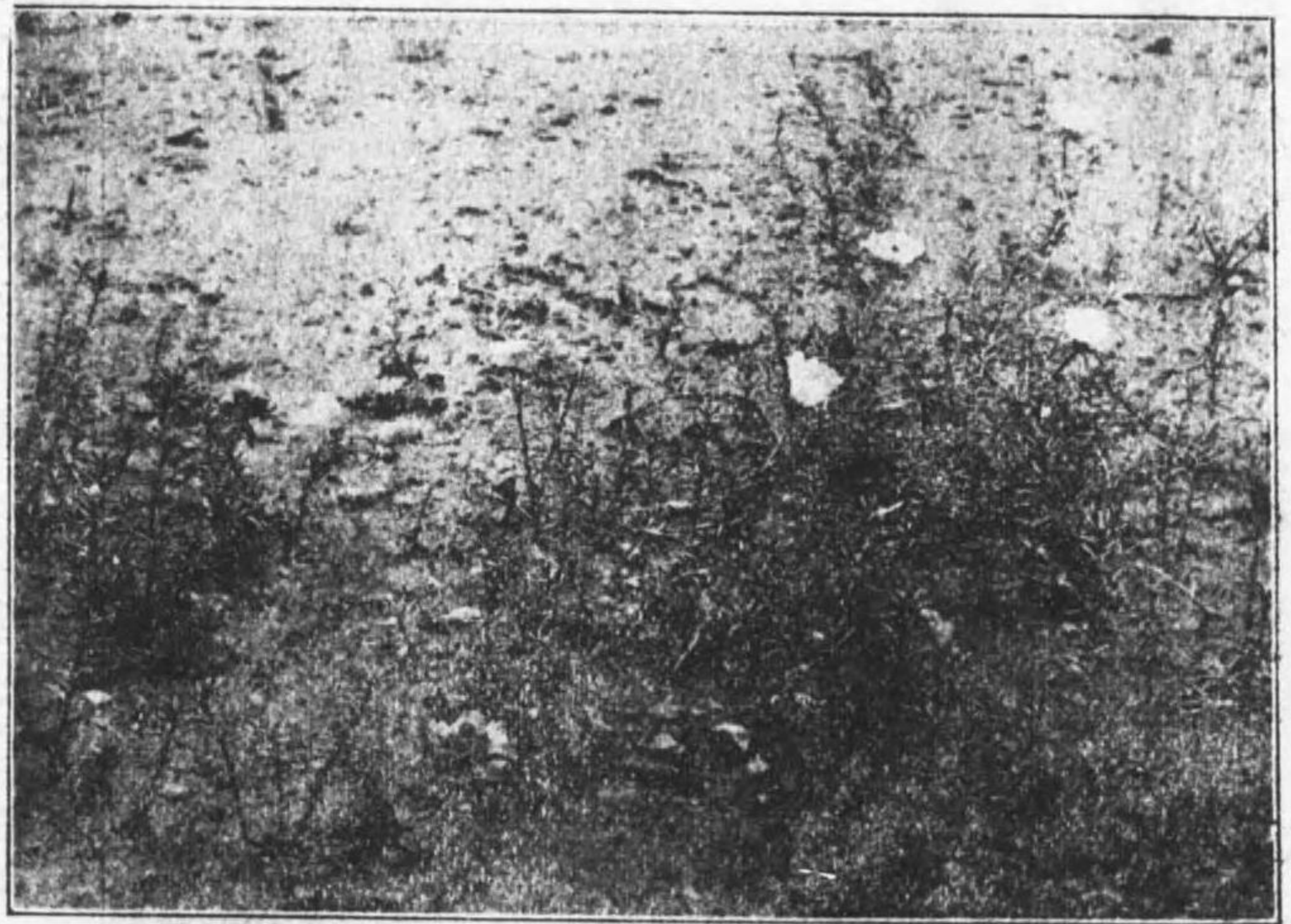
普通は秋の彼岸頃に床地に播種するもので、發芽後、稀薄な液肥を與へ、一度床替へを行ひ、翌春に園地に植ゑ込めば、早いのは五月頃から開花して夏の間美觀を呈するもの

草蟲松圖十百二第



である。花の終へたものを花軸の儘剪除して行くこと其の跡から順次新梢を生じて開花を續けて行くものである。又、春に播下したものは夏頃から咲き初め、秋に迄及

丹牡葉松 圖一十百二第



ぶものである。尙ほ床播とせずして、直ちに園地に直播を爲し、發芽後には適當に間引を行ふても宜敷い。

一三 まつばぼたん (松葉牡丹)

(馬齒莧科)

(學名) *Portulaca grandiflora*, Hook.

(英名) Sun Plant or Purslane.

〔解説〕

南米原産の一年草で莖葉共に多肉で多数分岐して地上を這ひ又は斜上し草丈僅かに四五寸に過ぎない。夏日、花徑一寸内外の花を開き紫紅樺黄白絞り等幾多の色彩があり單瓣を主とするのであるが、八重も亦生じ、必ず日中に於てのみ開き、夜は閉づるのである。矮性で横に張るもので針状の細葉と比較的大きな花との對照が面白く、花壇の縁や砂敷の中に點々と不規則に栽植するのが適して居り、又圓形の花壇内に

各色取り交せて毛氈花壇式に拵へるのも宜敷い。

〔栽培〕

極めて栽培の容易なもので、種子は四月頃に苗床に播いて後、本園に移植するか、或は直ちに園地に播下して適宜に間引を行ふか、何れにしても、差支へなく、又挿木でも容易に繁殖の出来るものであるから、莖葉の伸びたものを指頭で摘み取つて挿して置けば、直ちに發根して分岐を初め、開花を見るに至るものである。注意としては日當りが良好で、少しく乾燥する多孔質の土質を有する場所が好ましいのである。尙ほ種子の採收が困難なもので、少しく早い目に採收して乾燥追熟せしむるか、或は既に種子の多数落下した場合には、栽培地の上層土を掻き集めて保存し置き翌春其の儘播下しても差支へない。

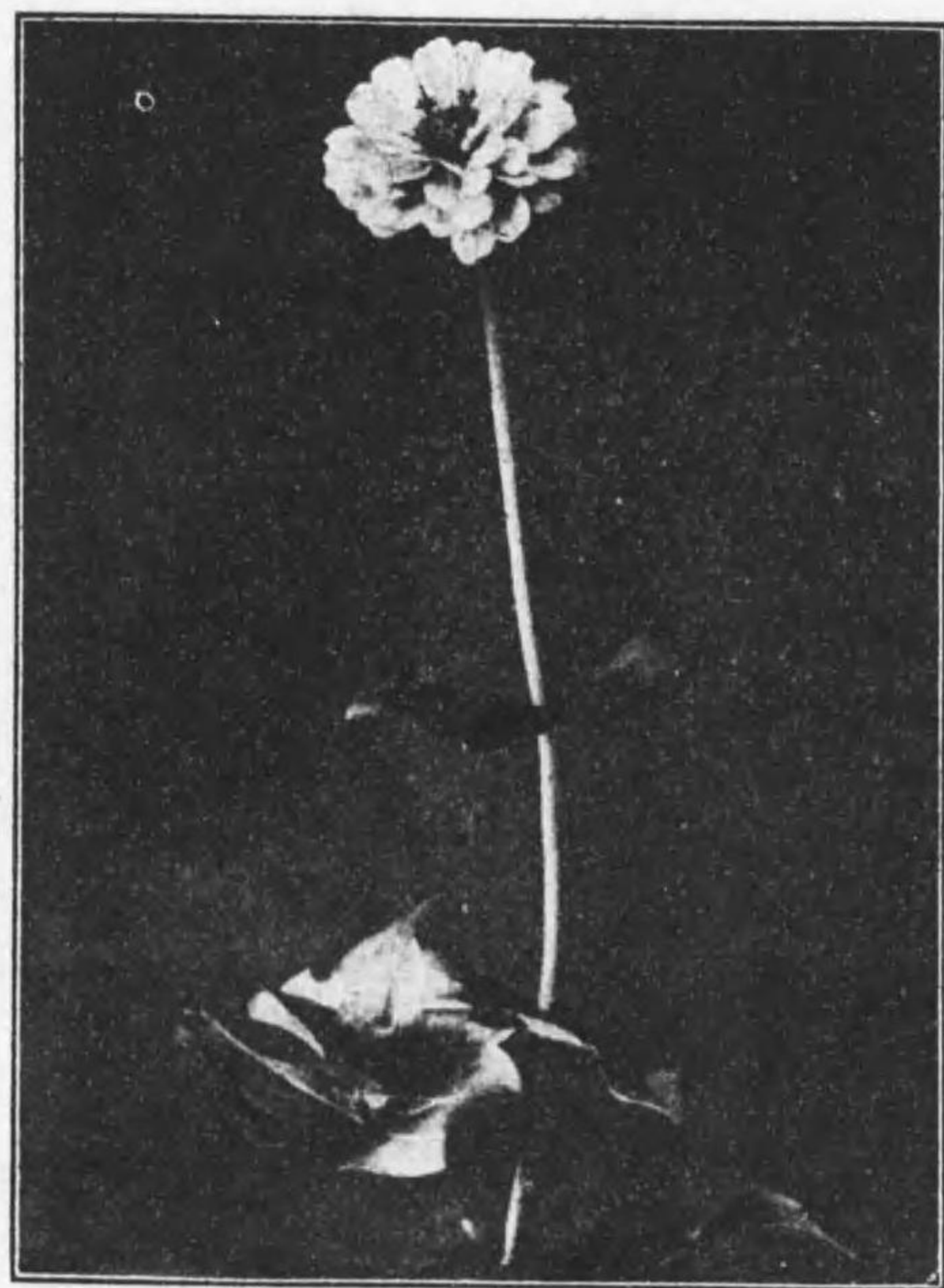
一四 ひやくにちさう (百日草) (菊科)

(學名) *Zinnia elegans*, Jacq. (英名) Common Zinnia.

〔解説〕

墨西哥原産の一年草で、草丈は二三尺に及び、直立した莖には毛を有して稍や粗剛の感を生せしめ、葉は卵形又は橢圓形で對生を爲し、莖を包んで居る。花は七月から十月に及び、長い花軸上に頭状花を生じ、紫、紅、白、黄等種々の色彩を示し、花徑

草日百 圖二十百二第



の大なるものは四寸にも及ぶことがある、重瓣花も生ずるのである。又近來は新種として莖が細くて匍匐性を帯びたオレンヂ、ジンニア (Z. Hageana, Regel. 英名 Orange Zinnia) なるものが栽培せらるるが、之れは花徑は小さくて一寸位に適さないが、八重で鮮明なる橙黄色を呈し、頗る優美なものである爲めに、花壇に多く植ゑられ、又切花として愛用せらるるに至つたものである。

〔栽培〕 早春に種子を苗床に播下し、稍々伸長した頃に一包植ゑ替へを行ひ、次ぎに園地に植ゑ出す方が枝の分岐が多くて生育も良好である。肥料としては油

粕の腐汁を數回施し、餘り伸び過ぎて倒伏の恐れがあれば灰か過燐酸石灰を與ふるに宜敷い。尙ほ播種の時期に依つて開花を色々にする事が出来、花色としては九月末から十月に亙つて咲くものが最も冴えて美はしいのである。

紅日千 圖三十百二第



一五 せんにちさう (千日草又は千日紅) (莧科)

(學名) Gomphrena globosa, L. (英名) Globe Amaranth.

〔解説〕 亞米利加産の一年草で高さ一尺五六寸に達し、莖節は太く、長橢圓形の葉を對生し、軟毛を供へて居る。莖の下部に於て多數の枝を分ち、各枝の頂端に球狀花穂を着ける。花は紫紅、濃紅、紅、白等の各色を有し、夏の初めから秋末に及ぶもので、普通種の外に矮生のものや細葉性のものがある。

〔栽培〕 通常、苗床へ春の彼岸頃に種子を播下し、一度床替へを行ひ、高さ三四寸に達したらば、花壇に植ゑ出すもので、大抵六七寸の距離に植ゑたらば宜敷いのである。

土地は肥沃で日當の良好な場所を選む可く、花の終へた枝を順次剪除すると、新梢を分岐して可なり永く花期を持続するものである。花壇に於て多數の花が妍を競ふので美觀を呈し、又切花としても永く萎れずに保てるので賞用せらるるのである。然し一花としての價値は上品とは云へないのである。

一六 てんにんぎく (天人菊) (菊科)

(學名) *Gaillardia Pulehella*, Gay (英名) *Rose-ring Gaillardia*

〔解説〕 亞米利加産の一年草で高さ二尺餘に達し、枝を分岐する事多く、莖には毛を有して居る。葉は長橢圓形、又は披針形で多少鋸齒を有し、稍々軟かくて葉柄を缺き、互生である。花は八月頃から十月頃迄に漸次開花するもので花徑三四寸に及び、何れも枝先に單生して頗る美はしく舌狀花の上部は黃紅色で下部は紫紅色を呈するものが普通であるが、種々變化した色彩を帶ぶるもの、及び舌狀花を失ふて紫色の筒狀花のみとなつたものもある。花徑が大きくて且つ美麗であり、花期も永きに亙るので、花壇に栽植する許りで無く、切花用としても重寶がらるるものである。

尙ほ近來は宿根性の天人菊 (*G. aristata* Parsh. *Common Perennial Gaillardia*) が栽培せらる

るのであるが、之は葉が前者よりも稍々厚くて細く、枝の分岐毎に着花して行くので花期が甚だ永く續き、七月から十月に及ぶのである。

花は前者よりも大きく色も種々で筒狀花の發達して八重狀を呈するものもある。

〔栽培〕 栽植の場所としては日

當りが良好で排水の佳良な地が宜敷く、普通秋蒔と爲すもので晩秋に開花を望むものは春蒔とするが宜敷い。大抵は苗床に播下し一回床替へを行つて後、園地に植ゑ出すが枝張りを多くするため、肥料は開花迄に二回許り液肥を與へ、開花中に一回位施せば充分であらう。

菊人天 圖四十百二第



又、八九月頃に嫩枝を探つて挿木と爲す事も出來、宿根性のものは春期に株を分け、繁殖せしめても宜敷いのである。尙ほ開花後のものを順次花梗の基部から剪除

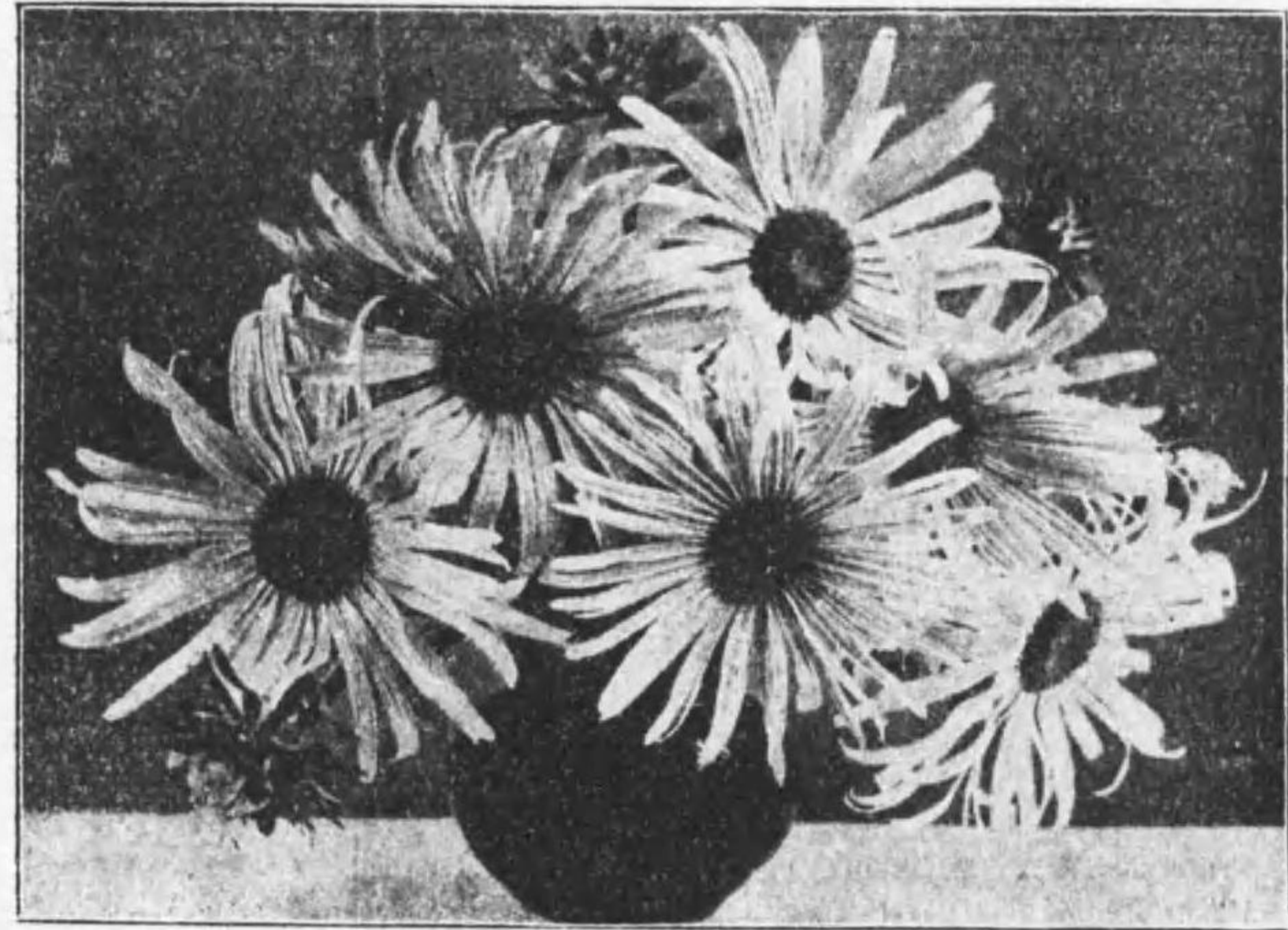
して行くと、新たに葉脈から分岐して着花を見るに至り、美観を呈する期間が永くなるものである。

一七 えぞぎく (翠菊) (菊科)

(學名) Callistephus chinensis, Nees.

(英名) China-aster.

(一チーユビトーコスウサ)ータスアルゲンシ 圖五十百二第



〔解説〕 支那が原産の一年草で、高さ二三尺に達し、直立して分岐する事が多く、莖には粗毛を有して居る。葉は下部のものには葉柄があるが上部に於ては之を缺き、卵形又は廣紡錘状で鈍鋸齒を有し、互生を爲して居る。花は六月末から咲き初め、九月頃に及ぶもので、栽培に依りて花形、花色、草勢等に種々の變化を生じて居る。

〔種類〕

(甲)花形上の區分

- 一、扁平瓣 (イ) 内方に曲り、球状のもの (ロ) 外方に開くもの
- 二、管状瓣 (イ) 内瓣短く、外瓣長きもの (ロ) 瓣が何れも伸びて管状のもの

(乙)形態上の區分

- 一、直立性………總べての枝直立す
- 二、半直立性………莖の下方より少しく分岐す
- 三、分岐性………分岐する事多く、圓錐形を爲す
- 四、擴張性………分岐する事多く、四方に擴がる

次に園藝上の品種を少しく述べて見ること

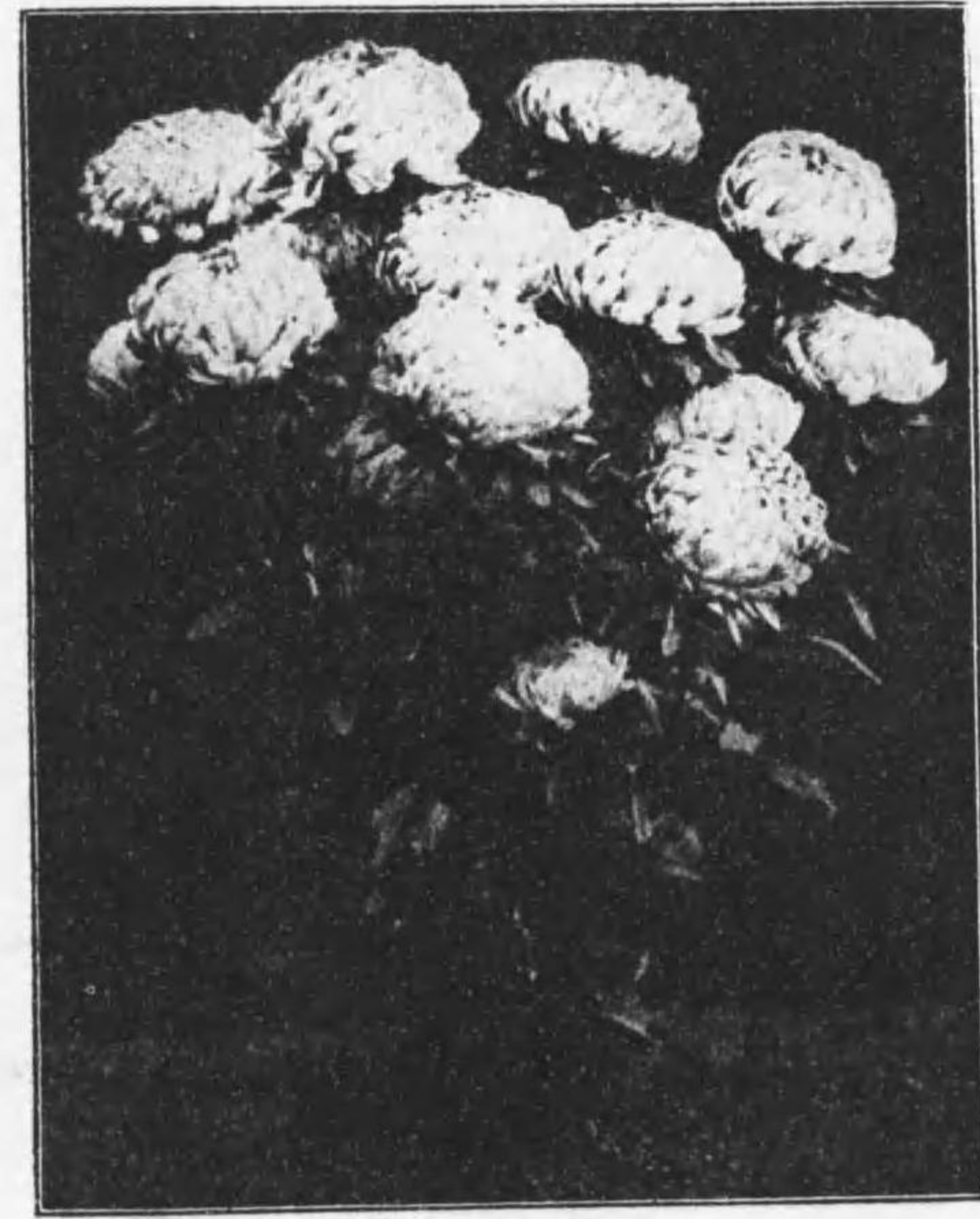
一 コメット (Comet) 之れは直立性で、狹長なる花を着け、瓣は裏面に反轉するものが特徴である。輪は近時大きくて見事なるものが出来、早生種、中生種、晩生種があり、花色には種々のものが存して居る。

二 ビクトリア (Victoria) 之れも直立性のもので、丈けの高くなるものと矮生のものがある。瓣の先端は反轉して居り、開花期は中生種で、花色には種々のものがある。

尙ほ之に酷似したもので、瓣が内方に彎曲し、花全體が球状を呈するものに「トラツプオート」(Tuffaw)なるものがある。

三 クウイーン、オブゼ、マーケット (Queen of the Market) 之れは枝が擴張性で最も早生種である。花は餘り大きい方ではないが、早生で丈夫である爲めに、切花用として重要視せらるるのである。

一タスア、チンレフ、トンアイヤジ 圖六十百二第



の變化したものを生じ、花形にも、草勢にも種々異つたものを見受くるのである。

〔栽培〕 元來が淺根性のものであるから、土質は有機質を多少含有して肥沃の土壌で、餘り乾燥地で無い方が好ましい。種子は開花せしむる目的の如何に依りて播

下す可き時期を異にするもので、通常は春三月下旬頃から五月の終り頃迄の間に順次蒔き下して行く。七月下旬から十月上旬頃迄開花を續けて見らるのである。

床地に蒔いた種子が發芽して、本葉を二三葉生ずるに至つたならば、之を一度床替へを爲して根の發生を多くならしめ、更に四五寸位に伸びた時に園地に植ゑ出すのが普通である。植込みの距離は七八寸が適當で、花壇用としては成る可く矮性種を選むが宜敷く、尙ほ一株の枝數を制限して大輪花の揃つたものを咲かせるが宜しい。

若し切花を目的として栽培する場合には、畦幅二尺の短冊形の畑地に七八寸の間隔で千鳥植とするが宜敷いとせられて居る。手入れとしては園地に定植の時に充分肥培して置き、其の後二三回液肥を施し、尙ほ餘り乾燥に過ぎる様な場合には根元に藁等を薄く敷き、灌水も時々行ふ必要がある。

早生種を早く咲かしむる爲めには二月頃に温室内で種子を鉢蒔きと爲し、發芽後小鉢に移植し、三月頃には冷床に移して生育せしめ、外氣の温暖になるのを待つて園地に植ゑ出すのである。晩生種は一般に丈夫であるから素人の栽培に適して居り、之を鉢で育成する場合には成る可く矮性種を選び、鉢土には充分に肥沃で腐熟した培養土を用ひ、又乾燥に過ぎない様に適度の灌水を必要とする。

一八 つくばねあさがほ (筑波根朝顔) (茄科)

(學名) *Petunia violacea*, Lindl. (英名) Violet-Flowered Petunia.

〔解説〕

之れは南米の原産で莖が細く高さ一二尺であるが時としては蔓性となつて數尺に及ぶ事がある。葉は廣楕圓形又は卵形で葉柄が極めて短いものである。花は五月頃から咲き初めて秋迄續くもので、其の期間が甚だ永く、花筒は廣くて漏斗狀を爲し、單瓣で徑四五寸に及び、又先端が皺襞を爲したものの、八重狀となるもの、瓣の裂けたものなどがあり、色には紫紅色、堇青色、白色及び是等の絞り覆輪等がある。



ヤニユチハ 圖七十百二第

大花種 (*P. axillaris*, Bsp. Large white petunia) 之れは普通種よりも直立して丈が高け

く、葉は大形で厚く、花は白色で香氣を有し、且つ大形のものである。

雜交種 (*P. hybrida*, Hort. Common petunia.) 之れは園藝的に雜交に依つて生じたもので丈は低くて枝を多く分ち、花形大きくて各種の色彩を有するものである。

〔栽培〕 栽植の場所は肥沃で、日光の餘り強く直射する處よりも幾分避けた方が花の着き工合が良好である。種子は春三月頃に床地に播下するのが普通で、一旦三四寸の間隔に床替へを行ひ、更に其後園地に定植するが宜敷い。若し伸び過ぎて草勢の調和を害する様な場合は適當な處から剪枝を行ひ、支柱を與ふる事も屢々ある。又剪り取つたものは挿木として育成する事が出来、殊に鉢栽培の場合には挿枝より仕立てたものが適して居る。其他の手入れは他の一二年草と同様で宜敷い。

一九 きんけいぎく (金雞菊) 及び

はるしやぎく (菊科)

〔解説〕

一 きんけいぎく (*Coreopsis Drummondii*, Torr. et Gray. Goldenwave.) 北米原産の一年草で、高さ一二尺に達し、葉は三個乃至七個の羽狀複葉で各片は廣楕圓形を爲し、六月

初めから七月頃迄開くもので、花梗の長い直径一寸餘の頭状花を數多生じ、色としては黄色と暗紫色とが普通である。

二 はるしやぎく (*C. tinctoria*, Nutt. *Calliopsis*.) 之れも北米原産の一年草で、高さ二



菊雞金 圖八十百二第

三尺に達し分岐する事が多く、前者よりも葉が細くて分裂し、丈も高いものである。花径は前者よりも稍々小さく、舌状花の先端は三裂を爲し、花色は周が黄色で内部分は褐紫色を呈するものが多い。而して花期は七八月の候で、前者よりも稍々遅るるを常とする。此の種類で矮性で枝を多く分ち、

球状を呈するもの及び花色の全く褐紫色を呈するものがある。

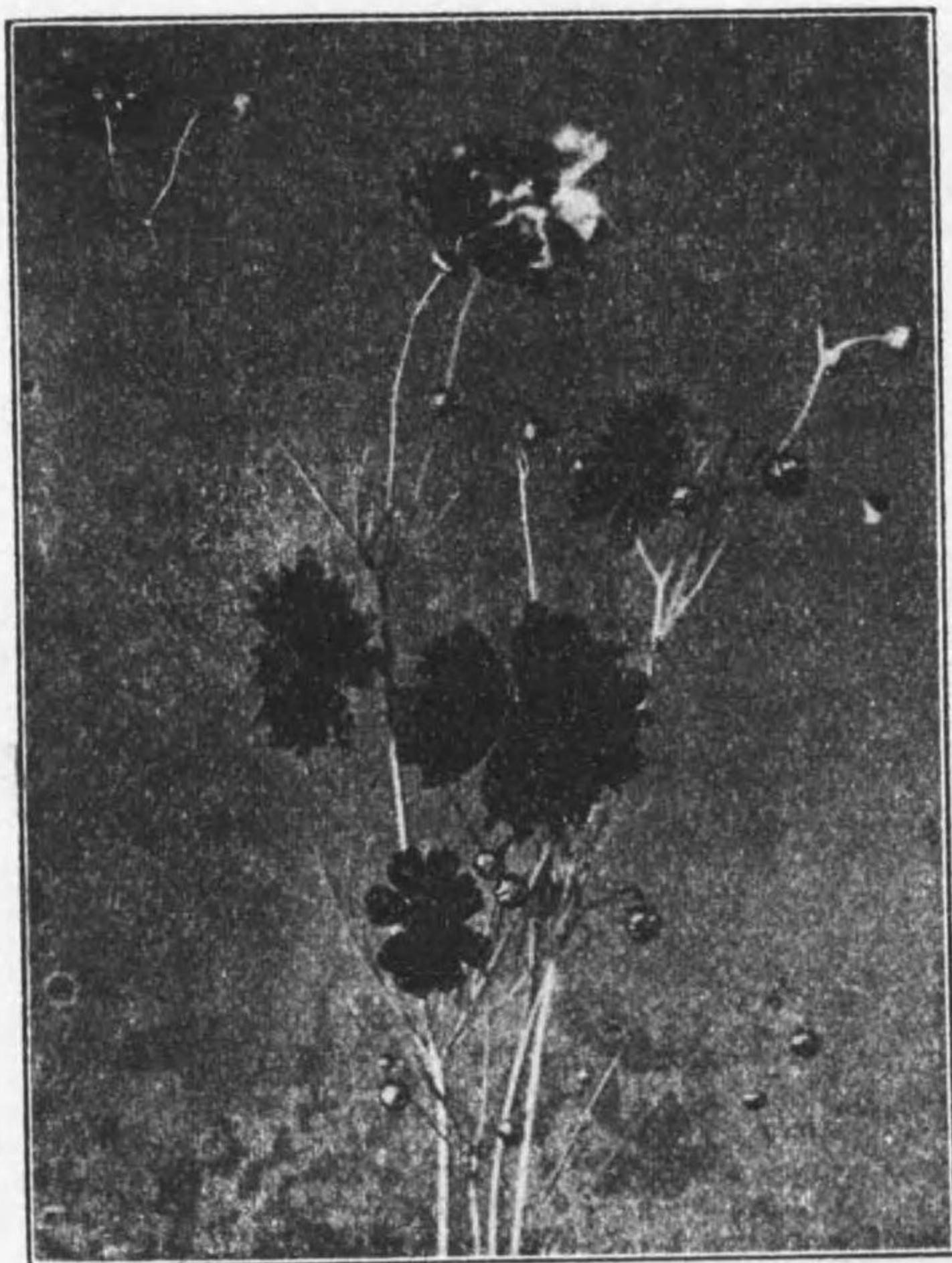
三 おほはるしやぎく (*C. lanceolata*, Linn. *Tanacetum Coreopsis*.) 之れは多年草で高さ三尺位に達し、下部から多數に分岐を爲すもので、葉には短毛を有し、花色は黄色で、種子

に翼を生じて居るのが特徴である。花形は前者に酷似して径一寸乃至二寸に及び、六七月頃に開くものであるが、倒れ易いものと株の姿が優美で無いのが缺點で、花壇植よりも寧ろ切花として重用せらるるものである。

〔栽培〕 普通は春三四月頃に苗

床に播下するのであるが、秋九十月頃に播き下しても宜敷く、發芽後、大抵三四寸位に苗が伸長した頃に園地に植ゑ出すものである。園地には堆肥と灰とを施して肥沃ならしめたものに植ゑ込み、更に根付いた頃に液肥を與ふると生育開花が良好である。開花の頃になると風の爲めに吹き倒さるる恐れがあるの

くぎやしるは 圖九、十百二第



で根元に僅かに土寄せを行ひ、又、多數栽植の場合には四方に杭を打ち、之れに紐を張り廻して倒伏を防ぐ事もある。尙ほ「おほはるしやぎく」にありては春秋何れに蒔

くも差支へなく、其の後は花後に莖を刈り取つて置けば、根株丈け残存して毎年美花を着くるものである。

一一〇 むぎわらぎく (麥稈菊) (菊科)

(學名) Helichrysum bracteatum Andr. (英名) Straw flower.



〔解説〕 之れは普通の草花とは趣きを異にして舌状花を缺ぎ、花の外部が堅くなつて乾燥し、膜質不透明の苞を以て現はされ、丁度貝殻の様な觸感を呈するもので、色には黄樺赤、白、其他種々の色彩があり、直徑一寸乃至二寸位で、内方に彎曲する。而して濕氣を含めば閉ぢ、乾燥すれば開き、初夏から秋に互りて開花するもので

菊科 麥 圖二百二第

あるが、之れを刈取つて乾燥して置けば冬期に於ても裝飾として用ふる事が出来る。草丈は二三尺で上部に於て僅かに分岐し、長橢圓形の葉が平滑なる莖に互生して居る。

〔栽培〕 通常、秋の被岸頃に苗床に播下するのであるが、寒冷なる地方では春の彼岸頃に播くも差支へなく、苗の二三寸に伸長した頃に園地に移植するもので、土地は日當りが好くて肥沃な壤土が望ましい。各株の間隔は六七寸に保ち、肥料としては下肥又は油粕の稀薄液を二三回與ふれば宜敷く、若し切つて貯へて置く場合には、初期に咲いた花の三四輪満開した頃に切り取つて陰乾しと爲し、塵の懸らぬ様に貯へ置くが宜敷い。又、開花したものを順次切り去つて行くと、後から新花を生じて花期を永く續くるものである。

一一一 ひまはり (向日葵) (菊科)

(學名) Helianthus annuus, L. (英名) Common Sunflower.

〔解説〕 原産は墨其古の一年草であるが、本邦へは古くから渡來し、高さ六七尺に及び莖には粗毛を有し、長い葉柄を具へた心臟形の廣い葉を互生する。七八月頃に